学位請求論文

中国新石器時代の農耕文化の考古学的研究

ー黄河・長江流域における農耕具と加工調理具を中心にしてー

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期考古学専攻

D1012501

槙林　啓介

学位請求論文

中国新石器時代の農耕文化の考古学的研究

ー黄河・長江流域における農耕具と加工調理具を中心にしてー

2003年

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期考古学専攻

槙林　啓介

凡　例

1　本論文に用いた図中の実測図は、主として各々の報告書の実測図や写真にもとづき、筆者がトレースした図を用いた。

2　遺構表記は、中国考古学で用いる下記略記号によった。

住居址…F　　灰坑（ピット、貯蔵穴）…H　　墓…M

3　遺物にかかわる用語は、中国考古学で用いる用語をそのまま用いた。

4　註は、基本的に各章本文あとの棒線以下に記した。ただし、第四章に限り、各節が独立しているため、各節本文あとの棒線以下に記した。

目　次

凡　例……i
目　次……ii
図目次……vii
表目次……ix

序　章　中国新石器時代の農耕文化における考古学的研究の現状と課題
－目的と方法－……1
第一節　本論文の課題と方法－問題の所在－……2
第二節　中国新石器時代研究の現状と問題の所在……4
1．新石器時代研究略史と現状……4
2．区系類型論とその問題点－本論文における時間軸設定の方法－……6
第三節　生業研究－おもに生業体系の研究をめぐって－……7

第一章　農耕具研究と加工調理具研究の現状と問題の所在……18
第一節　農耕具研究の現状と問題の所在……19
1．農耕研究－穀物遺存体と農耕区分－……19
2．農耕具研究－耕作具と収穫具研究の諸問題－……21
3．穀物と農耕研究……25
3．1．イネと稲作の研究－おもにイネ栽培化について－……25
3．2．雑穀（アワ・ヒエ・キビ）と雑穀作（畑作）の研究……26
4．課題の提示－農耕具組成と農耕形態－……27
第二節　加工調理具研究の現状と問題の所在……28
1．加工調理具をめぐって－収穫後の過程－……28
2．課題の提示－加工調理具と食文化体系－……33

第二章　農耕具の考古学的研究－農耕具組成からみた農耕形態の類型化－……43
はじめに……44
第一節　問題の所在と目的……44
1．研究略史と問題の所在……44
2．方法……46

第二節　各流域の農耕具とその組成……46
1．黄河下流域……46
2．黄河中流域……50
3．渭水流域……55
4．漢水上中流域……58
5．長江中流域……60
6．長江下流域……61
第三節　農耕具組成の時期的変遷と農耕形態……63
1．地域別農耕具組成の画期とその特徴……63
1．1．黄河下流域……64
1．2．黄河中流域……66
1．3．渭水流域……69
1．4．漢水上中流域……71
1．5．長江中流域……71
1．6．長江下流域……74
2．農耕具組成からみた農耕形態区分……76
2．1．黄河流域……77
2．2．長江中流域……79
2．3．長江下流域……79
2．4．漢水上中流域……80
第四節　まとめ……80
おわりに……81

第三章　加工具の考古学的研究－磨盤・臼などの分類と地域性－……90
はじめに……91
第一節　研究史と問題の所在……91
第二節　分類と出土分布の特徴……94
1．分類の設定……94
2．各類と出土分布の特徴……95
第三節　地域ごとの検討……98
1．黄河中流域……98
2．黄河下流域……100
3．渭水流域……100

4．漢水上中流域……103
5．長江流域……105
第四節　まとめ……106
1．用途をめぐる問題－磨盤・臼などと穀物加工について－……106
2．磨盤・臼などからみた地域性……107
3．総括……108
おわりに－課題にかえて－……109

第四章　調理具の考古学的研究－蒸具とその組成からみた食文化体系－……113
はじめに……114
第一節　甑の出現と展開－有孔型甑と筒型甑－……114
はじめに……114
1．甑の研究史……115
2．甑の分類……116
2．1．甑の分類……116
2．2．有孔型甑……119
2．3．筒型甑……127
2．4．有孔型甑と筒型甑……127
3．出現期の蒸具……127
4．地域ごとの時期的様相……129
4．1．黄河下流域……129
4．2．黄河中流域……130
4．3．渭水流域……132
4．4．長江下流域……134
4．5．長江中流域……136
4．6．漢水上中流域……138
4．7．ほかの地域……138
5．小結……140
第二節　甗の出現と展開－一体型甗と結合型甗－……144
はじめに……144
1．甗の研究史と問題の所在……144
1．1．甗の呼称をめぐって……144
1．2．新石器時代の甗の研究史と問題の所在……145

２．甗の分類……147
２．１．分類の問題と方法……147
２．２．分類……147
２．３．一体型甗と結合型甗……149
３．一体型甗の出現と展開……149
３．１．長江下流域……150
３．２．黄河下流域・黄淮平原……152
３．３．一体型甗の出現と展開……153
４．結合型甗の出現と展開……154
４．１．長江下流域……154
４．２．黄河下流域……156
４．２．１．大汶口文化後期－長江下流域との関係－……156
４．２．２．山東龍山文化期……157
４．３．黄河中流域……161
４．４．結合型甗の出現と展開……170
５．小結……172
５．１．一体型甗と結合型甗……172
５．２．良渚文化期・大汶口文化後期における結合型甗展開の意義
－黄淮平原を介した関係－……172
５．３．龍山文化期併行の結合型甗展開の意義
－結合型甗文化圏の成立－……173
おわりに－課題にかえて－……174
第三節　蒸具からみた食文化体系とその変容－蒸具の多種化－……179
はじめに……179
１．蒸具研究略史と目的……179
１．１．研究略史……179
１．２．目的……180
１．３．甑と甗の研究……181
２．蒸具の分類……182
３．各地域の蒸具とその組成……185
３．１．黄河下流域……185
３．２．黄河中流域……186
３．３．渭水流域……188

３．４．長江下流域……189
３．５．長江中流域……191
３．６．漢水上中流域……192
４．蒸具組成からみた蒸具利用の変容……193
４．１．各蒸具の出土分布の特徴……193
４．２．蒸具組成の類型と画期……196
４．３．蒸具組成の画期の特徴……197
５．小結……200
おわりに－課題にかえて－……201

終　章　中国新石器時代の農耕文化の形成と変容……206
第一節　食文化体系とその変容……207
１．加工調理具の地域的特徴－農耕初現期の食文化体系－……207
２．食文化体系の変容……208
第二節　農耕文化の形成と変容……211
１．農耕文化の類型化……211
１．１．食文化体系と農耕形態の比較……211
１．２．農耕文化の類型化……212
２．農耕文化の形成と変容……212
２．１．形成－穀物遺存体との比較－……212
２．２．変容－文化的多様性の形成－……215
第三節　農耕文化からみた新石器時代社会－展望－……216

おわりに－課題にかえて－……219

図表出典一覧……222
加工具出土遺跡一覧……234
蒸具出土遺跡一覧……242

図 目 次

序　章

第１図　中国新石器時代の農耕文化にかかわる構造と体系……3

第一章

第１図　雑穀の加工調理の過程……30

第二章

第１図　遺跡分布図……47
第２図　黄河下流域の農耕具組成の変遷……65
第３図　黄河中流域の農耕具組成の変遷……67
第４図　渭水流域の農耕具組成の変遷……70
第５図　漢水上中流域の農耕具組成の変遷……72
第６図　長江中流域の農耕具組成の変遷……73
第７図　長江下流域の農耕具組成の変遷……75
第８図　農耕具組成からみた農耕形態区分……76

第三章

第１図　磨盤・臼などの分類……95
第２図　Ａ類の出土分布……97
第３図　Ｂ～Ｆ類の出土分布……97
第４図　黄河中流域磨盤・臼などの変遷……99
第５図　黄河下流域磨盤・臼などの変遷……101
第６図　渭水流域磨盤・臼などの変遷……102
第７図　漢水上中流域磨盤・臼などの変遷……104
第８図　長江流域の磨盤・臼など……105

第四章

第１図　甑の分類……117
第２図　有孔型甑蒸気孔位置分類　有孔型甑蒸気孔形態分類……117

第３図　有孔型甑蒸気孔位置Ⅱ類の出土分布……120
第４図　有孔型甑蒸気孔位置Ⅲ類の出土分布……120
第５図　有孔型甑蒸気孔形態Ａ１類の出土分布……122
第６図　有孔型甑蒸気孔形態Ａ２類の出土分布……122
第７図　有孔型甑蒸気孔形態Ｂ１類の出土分布……122
第８図　有孔型甑蒸気孔形態Ｂ２類の出土分布……122
第９図　有孔型甑蒸気孔形態Ｃ１類の出土分布……122
第10図　有孔型甑蒸気孔形態Ｃ２類の出土分布……122
第11図　有孔型甑蒸気孔形態Ｄ１類の出土分布……125
第12図　有孔型甑蒸気孔形態Ｄ２類の出土分布……125
第13図　有孔型甑蒸気孔形態Ｅ・Ｆ・Ｇ類の出土分布……125
第14図　有孔型甑蒸気孔形態Ｈ類の出土分布……125
第15図　有孔型甑蒸気孔形態Ｉ類の出土分布……125
第16図　有孔型甑蒸気孔形態Ｊ類の出土分布……125
第17図　筒型甑の出土分布……127
第18図　新石器時代前期の甑……128
第19図　黄河下流域甑の変遷……129
第20図　黄河中流域甑の変遷……131
第21図　渭水流域甑の変遷……133
第22図　長江下流域甑の変遷……135
第23図　長江中流域甑の変遷……137
第24図　漢水上中流域甑の変遷……139
第25図　甗の分類……148
第26図　一体型甗の出土分布（崧沢文化期）……150
第27図　一体型甗の出土分布（良渚文化期・大汶口文化晩期）……150
第28図　一体型甗（長江下流域・黄河下流域・黄淮平原）……151
第29図　一体型甗の出現と展開……153
第30図　結合型甗の出土分布（良渚文化期・大汶口文化晩期）……154
第31図　結合型甗の出土分布（龍山文化期併行）……154
第32図　長江下流域・黄河下流域・黄淮平原の結合型甗……155
第33図　黄河下流域の結合型甗……160
第34図　黄河中流域（河南北部）の結合型甗……162

第35図　黄河中流域（河南中部）の結合型甗……165
第36図　黄河中流域（黄淮平原）の結合型甗……167
第37図　黄河中流域（山西中南部）の結合型甗……169
第38図　結合型甗の出現と展開……171
第39図　甑と甗の分類……183
第40図　蒸具の分類……183
第41図　黄河下流域蒸具の変遷……185
第42図　黄河中流域蒸具の変遷……187
第43図　渭水流域蒸具の変遷……189
第44図　長江下流域蒸具の変遷……190
第45図　長江中流域蒸具の変遷……192
第46図　漢水上中流域蒸具の変遷……192
第47図　新石器時代蒸具の拡がり……194
第48図　有孔型甑の拡がり（蒸気孔形態D類と蒸気孔位置Ⅱ類）……194
第49図　新石器時代後期の蒸具の様相……195

終　章
第1図　出土イネの年代的分布……213

表　目　次

第一章
第1表　黄河・長江流域の新石器時代編年……34

第四章
第1表　蒸具の分類……183
第2表　地域ごとの蒸具の画期……196

序章　中国新石器時代の農耕文化における考古学的研究の現状と課題

－目的と方法－

第一節　本論文の課題と方法－問題の所在－

本論文の目的は、中国新石器時代、とくに黄河・長江流域における農耕文化を農耕具と加工調理具から明らかにすることにある。

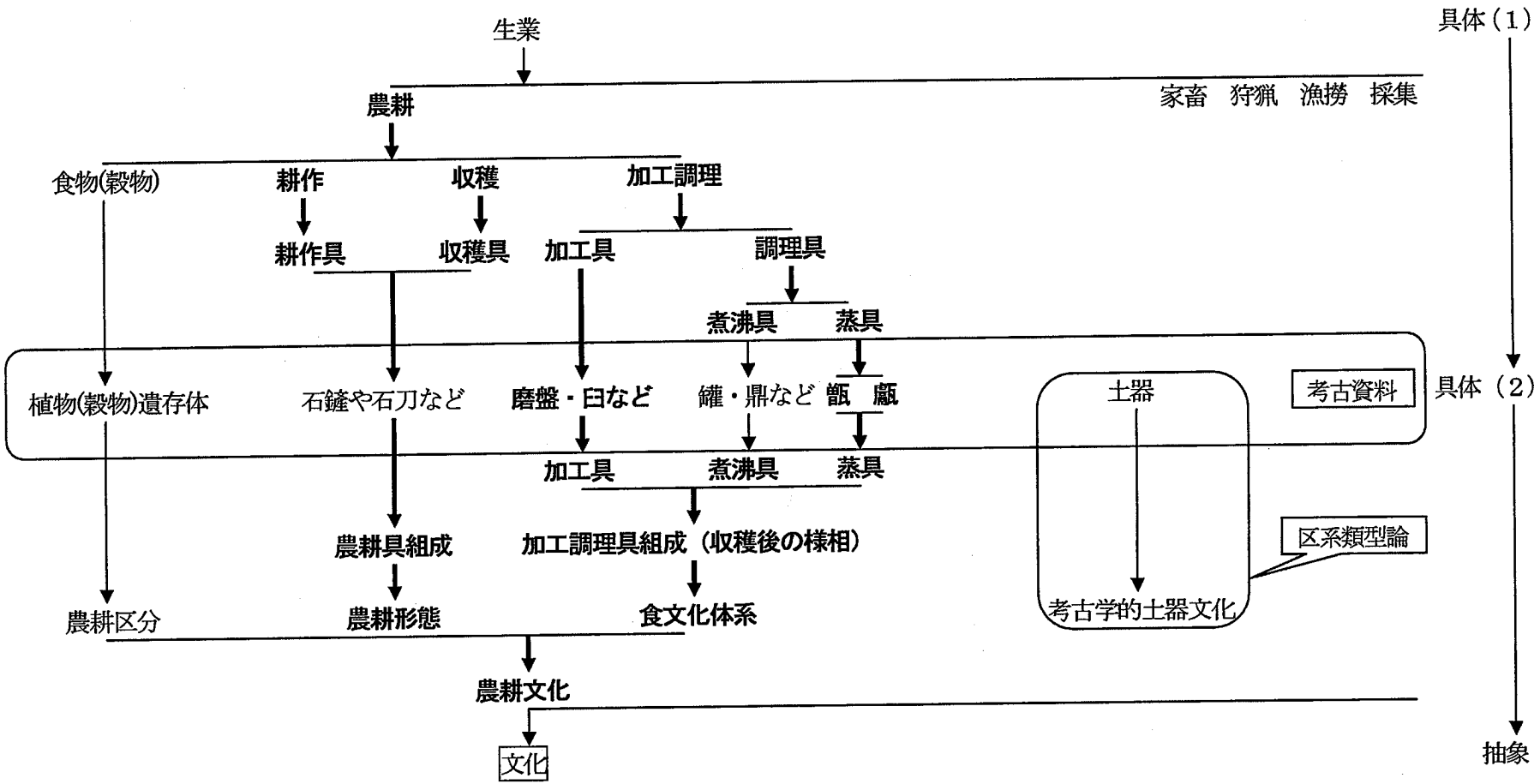
農耕には、栽培植物（穀物）のほかに、実際の作業である耕作、収穫がある。一般にここまでを農耕ということが多い。しかし、農耕をめぐる文化的要素には収穫後の様相も重要である。具体的には脱穀、精白などの加工、煮たり、焼いたりする調理の過程である。栽培することと食することは、行為としては異なるが、生活そのものからみると一連の文化としてみることができる。本論文の農耕文化とは、栽培だけでなく、栽培から食するまでの、つまり耕作・収穫から調理までの一連の過程として用いる。

栽培の過程を示すと、耕起、播種、管理（中耕）、収穫となる。耕起の過程に限定することなく、耕起から中耕までを耕作とし、そのときに用いる道具を耕作具とする。鋤、鍬、犂が相当する。新石器時代の資料では、耕起、播種、管理の作業のどれに用いられたか類推するのは困難である。実際、耕作具はすべての過程に用いる万能具でもある。収穫には収穫具を用い、鎌や穂摘具（石刀類）[1]がこれに相当する。

収穫された穀物は、加工、調理され、最終的に食される。収穫後の過程には、脱粒、（選別）、脱穀、（選別）、精白、製粉、調理があり、この諸過程で使用する道具を加工具、調理具とする。加工具には臼・杵、磨盤・磨棒など、調理具には煮沸具や蒸具などがある。

さて、中国新石器時代の農耕は黄河流域と長江流域では栽培穀物が異なることで区分され、これが基本的な農耕区分とされてきた。しかし、時として黄河流域の雑穀作（畑作）、長江流域の稲作として対置的に議論されるところとなり、農耕の分野からの共通性や関係性についての視点はあまり論じられてこなかった。両河流域はそれぞれ、新石器時代の文化が完結していなかったことは周知のことである。その点でさらに両河流域を跨いだ関係についても明らかにしていく必要がある。

こうした視点に立ったとき、これまでの研究到達点から二つの問題が見出せる。ひとつは、栽培穀物から区分された黄河流域と長江流域について、農耕具



第１図　中国新石器時代の農耕文化にかかわる構造と体系（ゴシック体太字と太線矢印は、本論文に関係するもの。）

からの再検討が停滞していることである。いまひとつは、稲作・雑穀作と収穫後の様相との関係について追求がないことである。これは、とくに食文化体系に関わる分野であり、食物の具体的利用やそのための道具、さらには文化的な背景を問題にした視点である。

このふたつの問題は、栽培から食するまでの一連の過程を研究の視点の背景にもったもので、本論文では両者を一体化して、農耕文化としての総体的な問題にしようと企図するものである。さらに、そのことにもとづき両者の関係の変化を検討することで、新石器時代の農耕文化の変化についても議論できるものになる。

つまり、本論文の目的は、農耕をめぐる考古資料を農耕文化の一要素として位置づけ、検討することで、新石器時代の農耕文化の特徴を見出そうというものである。そこで、第一章では、農耕具および加工調理具の研究の現状と問題の所在を明らかにし、第二章では、農耕具組成の分析から、耕作から収穫までの農耕形態を類型化し、第三章では加工具、第四章では調理具、とくに蒸具の分析をすすめ、食文化体系を明らかにしたい。そして、それらをうけて終章では農耕形態と食文化体系を比較検討しながら、黄河・長江流域の新石器時代の農耕文化について論じていくことにする。

第１図は、本論文にかかわる内容を中国新石器時代の農耕文化に関わる構造と体系として図示したものである。ゴシック太文字と太線矢印が本論文に関わる分野である。

次節では、こうした課題が生じた背景を述べ、本論文の新石器時代研究における位置を明確にしておく。

第二節　中国新石器時代研究の現状と問題の所在

１．新石器時代研究略史と現状

ここでは、新石器時代の研究史の現状を整理しながら、問題の所在と本論文の位置について記していくことにする。

新石器時代の概念は、もともと磨製石器や土器の出現を重視するものであっ

たが、中国の場合、農耕の出現をもって新石器時代の始まりとみなす考え方が一般的である[2]。すでに早く 1923 年、アンダーソンは、『中華遠古之文化』[3]のなかで新石器時代の用語をすでに用いている。また、解放後の 1955 年、尹達は『中国新石器時代』[4]において、社会発展論的視点からその歴史像を初めて体系的に論じた。狩猟採集社会から農耕社会へ、母系制社会から父系制社会へという一系統の発展図式は、文化大革命の終焉に到るまで、新石器時代観を強く規制していた。

1960～70 年代の文明論の流れは、中国考古学にも影響を与える。その代表が、夏鼐の「中国文明的起源」[5]であろう[6]。殷周を文明段階とし、その前代の新石器時代に中国文明の萌芽があるはず、という研究の方向性を示したものだった。

1980 年代以降は、発掘調査の急増により資料も増加し、省単位で研究が行われるようになった[7]。また、増加した資料は、社会や文化についての研究にも大きく変化を与えている。これは、城址遺跡の都市論[8]、稲作長江起源説などにより、高度な社会が存在したことを積極的に想定することになる。また、資料からの研究成果は、新石器時代における社会発展、進化、複雑化を論じ始めている。たとえば、渡辺芳郎[9]や宮本一夫[10]は墓と副葬品から社会階層化を論じ、岡村秀典は集落構造の変化から集団社会の形成[11]を述べる。こうした研究は、趙輝[12]、張弛[13]の研究にも応用され、また文化を「因素」、つまり要素に分解し、それらの関係性や系統を実証的に分析することで帰納法的に解明していく方法論も提唱されている。

とくに 1990 年代後半以降はこうした傾向がさらに進み、国際合同の調査や研究[14]、または中国人研究者の欧米留学によって、「新考古学」など、さまざまな理論を応用した研究[15]をみるまでに到った。

また、地域ごとに細分化される研究の中で、蘇秉琦の区系類型論[16]を基礎に佟柱臣[17]や厳文明[18]らが提示した地域区分間の関係、さらにその地域区分に厳密には含まれなかった地域の研究にも目が向けられるようになってきた[19]。なかでも、欒豊実[20]や樊力[21]の研究は、地域と地域との間の遺跡と出土遺物の内容を分析することで、文化関係の方向や強弱を論じようとしたものである。従来は、多元論が提唱されつつも、中原一元論の影響が残っていたが、こうし

た地域史的研究を丹念に行う論考は新しい試みとして評価されよう。

こうした現状は、これまでの、おもに土器によって構築されてきた新石器時代の考古学的領域とその地域性や時代性に対し、再考を与える動向と捉えることができる。ただし、土器以外の考古学的文化を体系的に検討し、そこから新石器時代の歴史的解釈を試みる研究はまだ少ないように思う。

2．区系類型論とその問題点－本論文における時間軸設定の方法

中国考古学における文化や類型は、土器を用いて類型化した空間かつ時間のまとまりであり、今日もなお編年研究の基本的な概念である。これは、蘇秉琦や裴文中らによって、萌芽をみた類型学を基礎として、その後、区系類型論[22]として理論的に成り立つ。区系類型論の現状と問題は、岡村秀典や大貫静夫が指摘するとおりである[23]。ここでは、本論文とかかわる問題を明らかにしておきたい。

蘇秉琦らが提示した時点での区型類型論の本来の目的は、「中国の古代文化は中原を中心に一元的に発達してきたものではなく、それは大きく６地区にわけられ、それぞれの区の文化は相互に影響しながら独自の系統をもって多元的に発展してきたことを主張し」[24]たものであった。これにより、多元論的な発想が主流になり、各地域の編年や文化内容について明らかにする研究が増加する。しかし、増加する資料は地域の独自性をクローズアップさせるため、文化設定もまた独自的な要素を指標にして行われるようになった。前項で述べた地域単位の研究の現状である。

こうした現状において、区系類型論の文化や類型が何を示しているのかについて問題点を指摘したい。大貫が指摘するように、文化や類型は「土器、石器、あるいは住居、墓葬などの総体的なまとまりとして設定されているはずであるが、実態としてはその代表としての土器群によって議論され」[25]ている。つまり、言い換えると、設定された文化や類型は実質、日本考古学でいう土器群の「～式」や「～様式」に相当し[26]、他の文化的要素も個々に分析したうえで、総合的に検討、設定されたものではないのである。さらに、現状は、石器、住居、墓葬を論じるときには、あらかじめ「～文化的～」と題し「～文化」の文

化的要素として結論づけられる。つまり、「～式」土器文化圏なのか、総体的な文化なのかが個々の研究者間で混同される現状がある。つまるところ、「～文化」はいつのまにかひとつの文化的なまとまりとして概念的に誤解される。ところが、実際は、考古資料の型式学的なまとまりが文化や類型の空間的領域を超えて存在していることもある。文化や類型が土器群を基本に設定されたものであり、他の文化的要素までも文化や類型の時空的まとまりに一致するとは限らない。

以上のように、区系類型論は、時間と空間に軸を作るための基礎的な役割をも担うはずであるが、文化論を論じるための理論として置き換わってしまった感がある。そこには論理的な飛躍がある。区系類型論の落とし穴である時間軸と空間軸との定義が確立しておらず、その考古学的内容をあいまいにしている。そうした区系類型論は、ある時はそれを時間軸と認識し、ある時は空間軸と認識して、文化内容が研究されていることから、その文化内容の定義自体も結果的にあいまいなものになっているのである。

では、時間と空間に軸を作るための方法はどうすればいいのだろうか。中国考古学の類型学を基にした区系類型論がそれであるのも事実である。しかし、この矛盾に対して、別の概念や方法を創出することで解決できる現状でもないことは明白である[27]。区系類型論がもとめる文化的な区分と、土器群を基にした時空軸設定としての区分とを概念的に、明確に区別して用いることが現状において求められる。

よって、本論文では、空間に関しては地域名を用い、時間軸に関してはこれまで設定されてきた文化や類型の後に「期」の語を付け、基準を明確にしたい。ただし、文化的な問題を議論する場合、これまでの研究において、総体的な文化としても同時に認められるならば、「～文化」と表記しそのまま用いる。

第三節　生業研究－おもに生業体系の研究をめぐって－

ここでは、生業研究の現状を述べ、本論文との位置関係を述べておく。

生業は、以下のように分類できよう。農耕（穀物栽培）、家畜、狩猟、漁撈、採集である。

従来までの生業に関する研究は、各生業に相当する考古資料を整理し、地域単位に把握する方法によるものであった。また、陳文華らによる網羅的な集成[28]は、生業にかかわる遺物について全体的に把握されるまでには到ったものの、生業における具体的な関係や特性までは論じられることはなかった。

ところが近年、それらを包括して生業体系を解明しようとする研究を、ようやくみることができるようになった。その先駆的な研究に、任式楠の論考[29]がある。氏は、各地域の植物遺存体を集成し、新石器時代が穀物だけでなく多様な食糧に依存していたことを初めて明らかにした。また、梶山勝[30]は、長江下流域を対象にして、農作物（稲、畑作物）、農具（耕起具、収穫具）、調理具、さらに自然環境にいたるまで分析を行い、体系的に生業について論じている。また、中村慎一[31]は、同じく長江下流域を対象にし、「農耕社会」がどの時点で成立したかを明らかにするために、栽培システムの進化をみることで歴史的解釈を試みた。これは、生業と社会進化を結び付けて議論した画期的なものであった。ただし、両者の研究によって、小地域（長江下流域）の状況は把握されたものの、中国全域での地域の位置づけや地域間の関係にまで論じられることはなかった。

こうしたなか、甲元真之[32]は、自然遺物を対象にすることで農耕、家畜、狩猟、漁撈、採集の比重を分析し、生業体系を以下のように類型化した。「紀元前3000年紀段階での中国の経済類型は、長江流域の稲作栽培を中心として家畜飼育に比重をかけない選別的な類型、アワ作を穀物栽培の中心に据えながらも、多様な穀物を組合せ、多種にわたる家畜を飼育し、数種の狩猟動物を食糧にする黄河流域に展開した多角的な類型、生産経済以前の狩猟、漁撈、採集といった自然依存を根底にし、補助的な食糧として多様な穀物栽培と家畜飼育を行う、東北アジアに見られる網羅的な類型に」分けた。同時に地域ごとの時間的変化をも検討し、とくに長江流域では、家畜であるブタの減少に対し、シカ科のなかでもニホンジカなどを選別的に狩猟することは、稲作の特徴としてあげられ、稲作に比重が傾斜していくと解釈した。生業を体系的に解明するために、各生業を相対的に比較する方法によったことは注目される。

こうした先学の研究の基本的な枠組みは、栽培穀物によって区分された農耕区分、つまり黄河流域の雑穀作地帯と長江流域の稲作をもとにしたもので、そ

の具体的な内容を種々の方法論によって解明しようとしたものであった。ところが、この枠組みを超えた関係については、まだ十分に議論されているとは言い難い。ただし、自然遺物からこの問題を論じる場合には、これまで議論されてきた分布論以外は有効な考古学的方法は模索段階である。今後、科学的方法など他分野からのアプローチも要求される[33]。

同時に、こうした研究到達点を今一度、土器や石器といった考古資料に翻って再検討することも求められる。本論文は、生業の主軸である農耕を対象にして、この問題を解明する研究のひとつとするものである。

このことを目的にしつつ、次章では、分析の具体的な対象それぞれについて、研究現状と問題の所在を明確にしたい。

上記のように農耕に関しては次章で述べるので、最後に家畜、狩猟漁撈の研究の現状を略述し本章を終えることにする。

家畜については、ヨーロッパ新石器時代の農耕概念に、家畜も内包されているが、中国新石器時代では、明確な概念規定があったわけではない。しかし、ブタやヒツジの動物遺存体は家畜を伴う農耕があったことをすぐに想起させるところとなる。また、陝西省半坡遺跡の環濠集落中央の円形状柱穴遺構は、家畜の飼育場とも想定されている。浙江省河姆渡遺跡出土の平底鉢には、ブタとされるモチーフが描かれるものがある。

古くから家畜については、論じられてきたものの[34]、遺存体など具体的な考古資料を用いた家畜の研究は意外に新しい[35]。家畜に関する考古資料は、新石器時代においては動物遺存体以外あまりないことが関心を低くしている。しかし、科学的考古学調査の初期段階から、動物遺存体の報告と鑑定がなされてきた蓄積があることは評価されるべきであり、家畜認定の科学的方法の確立も含めて見直し段階にきているようである[36]。さらに、家畜研究には、西アジアや中央ユーラシアからの農耕の伝播、遊牧民と中国との関係を論じることも意義としてある[37]。

狩猟についての研究はほとんど進展していないのが実情である。狩猟具の鏃類の資料数は膨大であるが、体系的な型式学的検討はない[38]。動物遺存体からの研究をみるのみである[39]。一方、漁撈については、1950 年代に、切目をもつ石器を錘と想定した陳達農らの論考[40]以降、1970 年代に入るまでは関心が

示されることはなかった[41]。漁撈については、対象魚、漁撈具、漁法を体系的に纏めた甲元真之の一連の業績がある[42]。

---

1 穂摘具は、クワ、スキのように定着した一般的呼称がない。考古学的呼称の「石刀（日本考古学では、石包丁）」は、Stone knife の訳語であり、用途を表す名称としては適当ではない。

2 小澤正人　西江清高　谷豊信『中国の考古学』1999 年 同成社
飯島武次『中国考古学概論』2003 年 同成社

3 安特生「中国遠古之文化」『地質彙報』第 5 号 1923 年

4 尹達『中国新石器時代』1955 年 三聯書店

5 夏鼐「中国文明的起源」『文物』第 8 期 1985 年

6 このほかに以下の論考がある。
安志敏「試論文明的起源」『考古』第 5 期 1987 年
厳文明「略論中国文明的起源」『文物』第 1 期 1992 年

7 各地域の考古学的文化に関する主な研究には、以下がある。
（黄河下流域）
山東省博物館「談談大汶口文化」『文物集刊』1　1980 年 文物出版社
銭鋒「新沂花庁墓地的発現及其意義」『中国考古学会第八次年会論文集』1991 年 文物出版社
李権生「山東半島の先史文化の編年及び魯中南の関係(上)」『考古学研究』第 38 巻第 3 号 1991 年
李権生「山東半島の先史文化の編年及び魯中南の関係(下)」『考古学研究』第 38 巻第 4 号 1992 年
李権生「山東竜山文化の編年と類型－土器を中心として－」『史林』75 巻 6 号 1992 年
李権生「論山東龍山文化陶器的分期及地域性」『考古学集刊』9　1995 年 科学出版社
何徳亮「山東龍山文化的類型与分期」『考古』第 4 期 1996 年

欒豊実「海岱龍山文化的分期和類型」『海岱地区考古研究』1997年 山東大学出版社
欒豊実「試論後李文化」『海岱地区考古研究』1997年 山東大学出版社
欒豊実「大汶口文化的分期和類型」『海岱地区考古研究』1997年 山東大学出版社
欒豊実「北辛文化研究」『考古学報』第3期 1998年
張江凱「略論北辛文化及其関問題」『考古学研究』2000年 科学出版社
（黄河中流域）
梁思永「小屯、龍山与仰韶」『梁思永考古文集』1959年 科学出版社
安志敏「裴李崗、磁山和仰韶」『考古』第4期 1979年
徐殿魁「龍山文化陶寺類型初探」『中原文物』第2期 1982年
丁清賢「磁山・下潘汪・大司空」『史前研究』第1期 1983年
高天麟・張岱海・高煒「龍山文化陶寺類型的年代与分期」『史前研究』第3期 1984年
張岱海・高天麟・高煒「晋南廟底溝二期文化試探」『史前研究』第1期 1984年
張岱海「陶寺文化与龍山時代」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』1989年 文物出版社
孫祖初「秦王寨文化研究」『華夏考古』第3期 1991年
張忠培・喬梁「後崗一期文化研究」『考古学報』第3期 1992年
欒豊実「龍山文化王油坊類型初論」『考古』第10期 1992年
宋健忠「山西龍山時代考古遺存的類型与分期」『文物季刊』第2期 1993年
李権生「後崗文化の編年と類型」『考古学研究』第40巻第3号 1993年
韓建業・楊新改「王湾三期文化研究」『考古学報』第1期 1997年
張素琳「試論垣曲古城東関廟底溝二期文化」『跋渉集　北京大学歴史系考古専業七五届卒業生論文集』1998年 北京図書館出版社
董琦「陶寺遺存与陶寺文化」『華夏考古』第1期 1998年
靳松安「廟底溝遺址第二期遺存再分析」『江漢考古』第4期 2000年
張素琳「浅淡山西廟底溝二期文化及相関問題」『中国歴史博物館考古部紀念文集』2000年 科学出版社
佟偉華「試論山西垣曲盆地龍山文化遺存的年代与分期」『中国歴史博物館考古部紀念文集』2000年 科学出版社

（渭水流域）
梁星彭「試論陝西廟底溝二期文化」『考古学報』第 4 期 1987 年
呉加安「渭河流域前仰韶文化与仰韶文化半坡類型的関係」『中国考古学論叢』1993 年 科学出版社
梁星彭「試論客省庄二期文化」『考古学報』第 4 期 1994 年
秦小麗「試論客省庄文化的分期」『考古』第 3 期 1995 年
楊亜長「華渭文化区」『華夏考古』第 1 期 2002 年
樊力「論屈家嶺文化青龍泉二期類型」『考古』第 11 期 1998 年
（長江下流域）
黄宣佩「略論崧沢文化分期」『中国考古学会第三次年会論文集』1981 年 文物出版社
陳晶「馬家浜文化両个類型的分析」『中国考古学会第三次年会論文集』1981 年 文物出版社
欒豊実「良渚文化的分期与年代」『中原文物』第 3 期 1992 年
黄宣佩「上海福泉山遺跡と良渚文化の編年」『日中文化研究-良渚文化－中国文明の曙光－』11 1996 年 勉誠社
宋建「良渚から馬橋へ」『日中文化研究－良渚文化』11 1996 年 勉誠出版
丁品「崧沢から良渚へ」『日中文化研究－良渚文化』11 1996 年 勉誠出版
欒豊実「良渚文化的分期与分区」『東方文明之光』1996 年 海南国際新聞出版中心
宋建「論良渚文明的興衰過程」『良渚文化研究』1999 年 科学出版社
方向明「馬家浜－良渚文化若干問題的探討－」『紀念浙江省文物考古研究所建所二十周年論文集』1999 年 西冷印社
李新偉「良渚文化的分期研究」『考古学集刊』12 1999 年
（長江中流域）
何介鈞「試論大溪文化」『中国考古学会第二次年会論文集』1982 年 文物出版社
李文傑「大溪文化的類型和分期」『考古学報』第 2 期 1986 年
張緒球「石家河文化的分期分布和類型」『考古学報』第 4 期 1991 年
余西雲「長江中游新石器時代的陶鼎研究」『華夏考古』第 2 期 1994 年
尹検順「論鄂西与洞庭湖区新石器時代早期文化序列及相互関係」『江漢考古』第 2 期 1998 年

[8] 宮本一夫「新石器時代の城址遺跡と中国の都市国家」『日本中国考古学会会報』第3号 1993年 日本中国考古学会

岡村秀典「長江中流域における城郭集落の形成」『日本中国考古学会会報』第7号 1997年

任式楠「中国史前城址考察」『考古』第1期 1998年

[9] 渡辺芳郎「葬送儀礼と階層性ー良渚文化の玉器副葬を例として」『日本中国考古学会会報』第四号 1994年 日本中国考古学会

渡辺芳郎「中国長江下流域における玉器副葬」『日本考古学』第1号 1994年 日本中国考古学会

渡辺芳郎「墓地における階層性の形成ー大汶口・山東竜山文化を中心としてー」『考古学雑誌』第80巻第2号 1995年 日本考古学会

渡辺芳郎「長江下流域の新石器時代墓地における頭位方向」『日本中国考古学会会報』第7号 1997年 日本中国考古学会

[10] 宮本一夫「長江下流域新石器時代の地域集団」『日中文化研究ー長江文明II』第10号 1996年 勉誠出版

宮本一夫「長江中・下流域の新石器時代研究」『日本中国考古学会会報』第7号 1997年

宮本一夫『中国西北疆史の考古学的研究』2000年 中国書店

[11] 岡村秀典「仰韶文化の集落構造」『史淵』第128輯 1991年

岡村秀典「中原龍山文化の居住形態」『日本中国考古学会会報』第4号 1994年

岡村秀典「遼河流域新石器文化の居住形態」『東北アジアの考古学的研究』1995年 同朋舎

[12] 趙輝「長江中游地区新石器時代墓地研究」『考古学研究』四 2000年 科学出版社

[13] 張弛「大溪、北陰陽営和薛家崗石、玉器工業」『考古学研究』四 2000年 科学出版社

[14] 主な国際合同調査研究の成果には、以下がある。

遼寧省文物考古研究所・中国考古学研究会『東北亜考古学研究ー中日合作研究報告書』1997年 文物出版社

草鞋山水田考古隊「草鞋山遺址 1992年ー1995年発掘調査概報」『シンポジウム稲

作起源を探る』1996年

北京大学考古系・浙江省文物考古研究所・日本上智大学「浙江桐郷普安橋遺址発掘簡報」『文物』第4期 1998年

中美両城地区連合考古隊「山東日照市両城地区的考古調査」『考古』第4期 1997年

中美両城地区連合考古隊「山東日照地区系統区域調査的新収穫」『考古』第 5 期 2002年

15陳星燦・劉莉・李潤・Henry T.Wright ・Arlene Miller Rosen「中国文明腹地的社会複雑化進程－伊洛河地区的聚落形態研究」『考古学報』第2期 2003年

16蘇秉琦・殷瑋璋「関于考古学文化的区系類型論問題」『文物』第5期 1981年

17佟柱臣「中国新石器時代的多中心発展論和発展不均衡論－論中国新石器時代文化発展的規律和中国文明的起源」『文物』第2期 1986年

18厳文明「中国史前文化的統一性与多様性」『文物』第3期 1987年

19李文傑「試論青龍泉文化与屈家嶺文化、廟底溝二期文化的関係」『中国考古学会第二次年会論文集』1980年 文物出版社

牟永抗「試論良渚文化和大汶口文化的関係」『中国考古学会第七次年会論文集』1989年 文物出版社

何徳亮・孫波「試論魯南蘇北地区的大汶口文化」『中国考古学会第九次年会論文集』1993年 文物出版社

韓建業「試論豫東南地区龍山時代的考古学文化」『考古学研究』三 1997年 科学出版社

孫広清「河南境内的大汶口文化和屈家嶺文化」『中原文物』第2期 2000年

肖燕・春夏「皖北、豫東地区大汶口文化的分期与性質」『華夏考古』第3期 2001年

張強禄「馬家窯文化与仰韶文化的関係」『考古』第1期 2003年

20欒豊実「論大汶口文化和崧沢、良渚文化的関係」『中国考古学会第九次年会論文集』1993年 文物出版社

欒豊実「論城子崖類型与後崗類型的関係」『考古』第5期 1994年

欒豊実「試論仰韶時代東方与中原的関係」『考古』第4期 1996年

欒豊実「良渚文化的北漸」『中原文物』第3期 1996年

欒豊実「論陸庄新石器時代遺存的文化性質和年代」『考古』第2期 2000年

[21] 樊力「丹江流域新石器時代遺存試析」『江漢考古』第4期 1997年
樊力「豫西南地区新石器文化的発展序列及其与鄰近地区的関係」『考古学報』第2期 2000年

[22] 蘇秉琦・殷瑋璋「関于考古学文化的区系類型論問題」『文物』第5期 1981年

[23] 岡村秀典「区系類型論とマルクス主義考古学」『展望考古学』1995年 考古学研究会
大貫静夫「中国における土器研究史」『考古学雑誌』第82巻第4号 1997年

[24] 前掲註23に同じ。

[25] 大貫静夫「中国における土器研究史」『考古学雑誌』第82巻第4号 1997年

[26] 前掲註25に同じ。
徳留大輔「中国新石器時代河南中部地域の土器から見た地域間交流（上）（下）」『古代文化』第55巻第6・7号 2003年

[27] 調査遺跡の増加や発掘資料の増加により、より小地域単位で考古学的資料が再検討され、地域的な独自性を抽出できるようになったことから、他地域と区別できるようになってきた。この動向によって、区系類型論だけでは定義できない考古学的事象をあらたに定義し直す動きが出てきている。これまでの各考古学的文化を格上げするのである。区系類型論では、もともと類型は文化の下位概念であり、類型を文化に変えることで、更に考古学的文化区分が増え、細分化に対応できるようにしたのである。類型を文化にする動向の背景は、資料が増え、地域的独自性がクローズアップされるようになったことからである。しかし、その地域性をどのように抽出するかの方法論に関しては、さほど議論があるわけではない。

[28] 陳文華らは、1981年より『農業考古』誌上で、「中国農業考古資料索引」と題し、農耕関係遺物の網羅的集成を行っている。

[29] 任式楠「我国新石器－銅石器併用時代農作物和其他食用植物遺存」『史前考古』第3・4期 1986年

[30] 梶山勝「長江下流域新石器時代の稲作と畑作に関する一試論」『古文化談叢』20（下）1989年

[31] 中村慎一「長江下流域新石器文化の研究－栽培システムの進化を中心に－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第5号 1986年

[32]甲元真之「長江と黄河－中国初期農耕文化の比較研究－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 1992年

甲元真之「東アジア先史時代穀物出土遺跡地名表」『環東中国海沿岸地域の先史文化』2 1999年

甲元真之「東アジア先史時代植物遺存体集成」『環東中国海沿岸地域の先史文化』3 2000年

甲元真之『中国新石器時代の生業と文化』2001年 中国書店

[33]袁靖「中国新石器時代における家畜起源の問題」『日本中国考古学会会報』第十号 2000年

張雪蓮・王金霞・洗自強・仇士華「古人類食物結構研究」『考古』第2期 2003年

[34]加茂儀一「家畜の起源」『古代史講座』第二巻 1962年 学生社

鐘遐「従河姆渡遺址出土猪骨和陶猪試論我国養猪的起源」『文物』第8期 1976年

横田禎昭「新石器時代中国の家畜－羊の問題をめぐって－」『史学研究』第 124 号 1974年

[35]前掲註33に同じ。

甲元真之「新石器時代狩猟動物と家畜」『中国新石器時代の生業と文化』2001年 中国書店

岡村秀典「中国古代における墓の動物供犠」『東方学報』第七十四冊 2002年

[36]前掲註33に同じ。

[37]横田禎昭「中国新石器時代の家畜－羊の問題をめぐって－」『史学研究』第 124 号 1974年

原宗子「陝北黄土高原の環境と農耕・牧畜」『黄土高原とオルドス』別冊3 1997年 勉誠出版

[38]張宏彦「東アジア大陸の石器文化からみた日本の縄文文化－石鏃を中心として－」（『考古学論攷』第17冊 1993年）があるが、列島の石鏃との関係を念頭においたものであり、また対象地域が東北アジアに限られる。

[39]甲元真之『中国新石器時代の生業と文化』2001年 中国書店

大貫静夫「環渤海初期雑穀農耕文化の展開－動植物相からみた生業の変遷を中心にして－」『東北アジアの考古学的研究』1995年 同朋社

[40]陳達農「我対“網墜”的秣見」『考古通訊』第1期 1957年

陳達農・張雲・金鎮「再談“網墜”」『考古通訊』第5期 1957年

[41]宋兆麟「帯索標－鋒利的漁猟工具」『中国考古学会第一次年会論文集』1979 年 文物出版社

邢湘臣「我国古代幾種特殊的漁法」『農業考古』第1期 1986年

呉詩池「従考古資料看我国史前的漁業生産」『農業考古』第1期 1987年

劉俊勇「我国東北新石器時代漁業生産初探」『考古与文物』第2期 1991年

王吉懐「黄河流域新石器時代漁猟経済的考察」『華夏考古』第2期 1992年

渡部誠「中国古代の釣針」岡崎敬先生退官記念事業会編『東アジアの歴史と考古(上)』1987年 同朋舎

[42]甲元真之「中国先史時代の漁撈」『考古論集』1993年 潮見浩先生退官記念事業会

甲元真之「黄河流域の先史時代漁撈技術」『日本中国考古学会会報』第4号 1994年

甲元真之「黄渤海沿岸地域の先史漁撈文化」『先史学考古学論究』Ⅱ 1997年

甲元真之「環東中国海沿岸地域の先史時代漁撈具集成」『環東中国海沿岸地域の先史文化』1998年

甲元真之「先史時代の漁撈活動」『中国新石器時代の生業と文化』2001年 中国書店

第一章　農耕具研究と加工調理具研究の現状と問題の所在

第一節　農耕具研究の現状と問題の所在

1．農耕研究－穀物遺存体と農耕区分－

ここではとくに前章第三節で触れた農耕区分を中心に、研究史を整理しながら、研究経緯と問題点を指摘する。

黄河流域はアワ・キビ・ヒエ・イネなどを栽培する雑穀作（畑作）地域、そして長江流域は稲作地域であることは周知のこととなっている。ほかには、農耕（雑穀作）を主体とした狩猟採集を行う東北地方、狩猟採集を行う華南地方がある[1]。これが現在の農耕区分の枠組みである。

新石器時代に農耕が存在したことが明らかになったのは、1921年、河南省澠池仰韶村遺跡でのアンダーソンによる調査である。土器片[2]付着の籾痕から、稲作の存在が推定されたのである[3]。このころ、C. W. Bishop は、河南省仰韶村遺跡や山西省荊村遺跡の事例から、農耕の存在を指摘しただけでなく、それが焼畑であったことを推測した[4]。これは、1933年に発表されたもので、新石器時代農耕について具体的に検討したものとしておそらく初めてのものであろう。さらに、解放後の陝西省半坡遺跡の調査は、アワの遺存体とともに、農耕具も豊富に出土したことから、農耕の具体的な内容が知られるところとなった[5]。

長江流域では、1930年の浙江省古蕩（老和山）遺跡の調査により、新石器時代の遺跡がわかっており、さらに50年代以降、イネ遺存体が出土し始め[6]、稲作が行われていたことが確実となった。また、1973年の同省河姆渡遺跡の調査は、数千点におよぶ農耕具や工具、また大量の動植物遺存体が出土しており、稲作文化の内容がより把握できるようになった。

こうした考古資料の充実と前後して、農耕論が展開されるようになり、黄河流域と長江流域の農耕を比較することで、新石器時代の農耕について大枠が形成された。この枠組みは、1933年のワグナーの『中国農書』や1939年のR.バックの『支那農業論』をもとに、和島誠一[7]、横田禎昭[8]、安志敏[9]らが考古資料を用いて体系的に論じたことによる[10]。この視点から、集成や論考も提示されるようになり[11]、黄河流域と長江流域に分けてみていくことが一般化する

ようになってきたのである。

また黄河流域でのイネ遺存体の出土や土器に付いた籾殻圧痕から、イネの具体的な栽培についての議論も1970年代までにすでに展開している[12]。和島や松崎寿和[13]らは、低地水稲は歴史時代から存在したとしながらも、集落が小規模で分散的であることから、自然灌漑に依存していたと考え、水稲耕作を想定した。一方、横田は、仰韶村遺跡の石器組成は、「水稲耕作地帯の石器組成タイプではなく、アワ作タイプであることからも、水稲耕作の可能性は低い」とし、水稲は北上したと想定できるが、「その進出は好条件の場所のみの非常に局地的なもの」と論じている[14]。出土穀物遺存体を主要な分析対象として黄河流域の稲作を論じるのではなく、農耕具とその組成から具体的な農耕形態を想定する方法は、こんにちに、より重要な視点と方法を提供するものとして再評価すべきと考える。

1980年代以降は、さらに多くの調査が進み、各地で農耕に関する具体的な考古資料が増加する。また、その成果をうけて、農耕および農耕文化についても研究が活発化する。その契機になったのが、1981年の『農業考古』の創刊であろう[15]。その発行により、各地の農耕をめぐる問題が整理されるようになった。また、考古学を問わず、歴史学や農学の立場から、中国の農耕・農業を体系化した成果も出るようになった。その特徴には、各時代の農耕を社会発展史のなかに位置づけようとしたものが多い[16]。これらの研究は、新石器時代の農耕を中国農業発展史の初段階として位置づけ、農耕技術は原初的から高度化へ、または「鍬耕農耕[17]」から「犂耕農耕」へと解釈したものであった。

同じ頃、陳文華らが進めてきた農耕関係遺物の集成[18]は、穀物遺存体から農耕具や加工具、調理具までも網羅的に集成したものとして高く評価できる。しかし、考古学的研究の実際は、省単位の編年研究の増加と同様、農耕や農耕具の研究も地域の内容を把握することに力点が置かれることになる。

1990年代のなかばごろから、長江流域で最古級のイネ遺存体が出土するようになると、農耕研究は稲作起源論が主流となる。稲作起源論については後述するが、ここで指摘しておきたいのは、なおも黄河流域の農耕論の停滞と1980年代の農耕区分の枠組みへの終着である。両河流域を対象にした研究の視点は、依然両河流域が対置的なままである。もっとも、その前提は栽培作物の相違が

基本にあり、その後の中国史のなかでも現在にいたるまで、普遍的なものであることも確かである[19]。しかし、それは栽培作物の相違であって、農耕文化までも対置的区分のみではないことは、中国新石器時代研究においてこれから課題とすべきことと考える。また、二大別されたこれらの領域は、栽培穀物以外の農耕における要素から、さらに細分できるはずである。

この点、宮本一夫は、黄河中流域と渭水流域を対象にして、農耕具の副葬状況から地域差があったことを指摘している[20]。氏の論考自体は、社会組織こそが農耕社会の実態を示すという立場から、その発展過程を論じたものであったが、農耕具の副葬から農耕と集団・社会の関係に地域差があることを想定した視点は看過すべきでない。また、小柳美樹は、河姆渡文化の土器に描かれる蚕から、養蚕を含めた稲作を想定し、そして民族例を参照しながら具体的説明を行った[21]。稲作文化の多様な内容まで踏み込んだものである。

以上がこんにちまでの農耕研究の現状であるが、今後の方向性として若干の提起をしておきたい。ひとつには、イネと稲作について研究が進んでいることに対して、雑穀の基礎的研究と、雑穀作の文化的社会的側面からの研究も併行して行うべきことである。後者については、宮本が触れたように、地域によって雑穀作の形態や社会におけるあり方は異なることが予想される。前者についてはまだ問題が山積するが、本節３にて詳述する。いまひとつは、農耕文化における地域間の関係である。稲作地帯と雑穀作地帯とはそれぞれに完結した世界ではない。相互の関係を土器や玉器などの研究からだけでなく、社会を形成する基盤である農耕の側面からも検討する必要がある。本論文ではこの問題について検討する。

２．農耕具研究－耕作具と収穫具研究の諸問題－

ここでは農耕具を耕作具と収穫具に分けて、それらの研究史と問題の所在についてみていくことにする。

耕作具とされる主な考古資料には、石鏟、石鋤、骨耜などがある。また、長江下流域には、三角形石器や耘田器と呼ばれる、犂と想定されている遺物がある。これら耕作具研究には、全国的な集成と分類研究があり、また地域ごとの

整理から一応の把握がなされている。ただし、技術発展を見出そうとしたものが多いのが現状である。とくに、研究史的に重要なことは、「鍬耕農耕」から「犂耕農耕」への変化を論じることで、それが社会発展を引き起こしたという仮説・論理である[22]。1930年代の徐中舒[23]などの踏み犂に関する研究があり、新出の考古資料を氏の歴史解釈に当てはめて考えることが続いた。犂の出現は生産効率をあげるため、社会発展論に結びつきやすかったといえる。

また、田崎博之は、耕作具は、「農作業の準備段階で耕土を掘り起こし砕くことで種子の発芽や幼苗の育成に適した状態に整え、中耕・除草、灌漑施設の整備など耕地を維持管理し、さらに耕地を拓く際にも用いられる」[24]ものとしたうえで、「農具の中の主器であり、農耕スタイルを技術的な側面で象徴するものである」[25]と述べ、耕作具の農耕における技術的な側面としての性格を重視した。それが、農耕形態を特徴づけるものとみて、耕作具の分析を中心に長江下流域の水稲農耕の特質を論じている。

同時に考古学的な基礎研究も行われている。もともとは、陝西省半坡遺跡や浙江省河姆渡遺跡など出土遺物の豊富な遺跡の資料を用いて、具体的な農耕具が紹介されることから始まる[26]。1980年代になると、石鏟や石鋤などを個別に取り上げて、考古学的な分析と歴史的な位置づけが行われるようになった。しかし、この場合、中国全域を対象にしているにもかかわらず、形態の差異を時間的に一系統の変化にのみ置いてしまう傾向があった[27]。つまり、相対的な地域性が問題にされることがなく、一元的な解釈に収斂させてしまったのである。しかし、最近の動向は、省単位、小地域単位での研究が増えてきており、地域内での評価がなされるようになってきた[28]。このことから、次の課題として挙げられるのは、地域間の比較と地域間の相対的な位置づけであると考える。

ただし、方法論的な問題はまだ残る。分類研究の不十分さである。例えば、石鏟はスキにもクワにも想定されている耕作具である。柄を装着したままの石鏟の出土例がない以上、スキかクワかは判別できない。また、地域差があるのならば、一例を以って普遍化することもできないだろう。このように用途を想定することは困難ではあるが、いずれにしても、機能と形態との関係は、考古学的に分析することができる。これに関しては、長江下流域の石器研究が期待される。長江下流域は、崧沢文化期から農耕具とされる器種が増加する地域で

ある。すなわち、耘田器、破土器、三角形石器などであるが、これらの用途は各説あり定説化したものはない。用途を推し量るには、機能を明らかにする必要があり、その方法のひとつである使用痕分析を用いた中村慎一らの研究がある[29]。研究は現在も継続中のようで、成果が期待される。

収穫具には、「刀」と「鎌」が相当する。前者は、穂摘具と考えられるもので、中国では、これを「刀」と呼称しており、石刀は日本考古学の用語では石包丁にあたる。本来ならば包丁と言い換えなければならないが、ここではそのまま用いる。

周知のように、中国で石刀を農具と考えたのはアンダーソンである。その後、安志敏が 1955 年に初めて全国の資料を総括的に論じた[30]。氏は、石刀を「有孔或両側帯打欠口的石刀」、「鎌形石刀」、「有柄石刀」に分けた。順に、所謂石刀、石鎌に当たる。最後の「有柄石刀」には長江下流域の破土器、東北地方の有柄刀子が含まれている。また、「有孔或両側帯打欠口的石刀」には、両端を打ち欠いたもの、長方形、半月形の三種類あるとしている。

その後、石毛直道、下條信行、寺沢薫などの日本人研究者による、分類、出土分布、時期的変遷、そして日本列島への伝播についての積極的な論考が多数ある[31]。特に寺沢の研究により、新石器時代から戦国時代までの刀類を集成したのち、形式の分布の時間的な変遷を明らかにし、中国全土の状況が分かるまでになった。また、甲元真之も集成を行い、土製の刀類は黄河中流域、渭水流域に分布の中心があり、貝製のものは黄河流域と渭水流域の全流域に出土し、貝製のものは、イシガイ科の淡水産二枚貝が多用されることを指摘した[32]。

鎌は、黄河流域の裴李崗文化期に鋸歯刃をもつ石鎌が既に存在し、一時期減少するが廟底溝二期文化期ごろから貝鎌、龍山文化期では石鎌が再び盛行する。また、長江流域にはもともと存在しておらず、黄河流域から長江中流域や長江下流域へと拡がることがわかっている。出土の中心は黄河流域にあり、雑穀作の農耕具であると言える。

裴李崗文化期と廟底溝二期文化期以降の鎌の相違については、検討の余地がある。形態的には鋸歯刃の有無を除けば有効な分類研究は今のところない。廟底溝二期文化期以降では、貝鎌と貝刀が盛行し、貝鎌には鋸歯刃のものがある。この点に注目した甲元真之は、廟底溝二期文化から出現する貝製鎌を珪酸分の

多いムギ類の根刈に使用したと想定している[33]。これはかつて曽野寿彦が、鎌類を西方からのムギ類伝播に伴ったものとしたことを深めたもの[34]であり、さらに甲元はヒツジの導入も含めて論じようとしている。ムギ類は、コムギ製粉具が存在しないことから、オオムギを想定している。しかし、オオムギとコムギの選択がなぜ行われたのかその要因には説明が必要であり、その点においてさらに検討する必要がある。ただ、廟底溝二期文化期からの収穫具やその組成の変化を黄河流域のみならず西方地域との動態のなかで考えていく必要性はあると考えられる。

このように収穫具の研究は、寺沢薫の基礎的研究にみる到達点から、さらに文化動態を念頭に今後検討していくことが求められよう。

さらに農耕具の用語に関して重要な問題が残る。用語と用途が一致していない場合があるのである。この問題は、黄展岳など多くの研究者がすでに問題提起しているし[35]。また、日本考古学においても、白木原和美や乙益重隆なども指摘するところである[36]、しかし、考古資料と機能と用途との間の用語の較差を解消する方法は提示されることはなかった。これは、使用痕分析などによって、機能を明らかにし、他の文化的要素との関係を調べなければ、確実な用途まで論じることができないという方法論の難しさが背景にあることが大きい。一方で資料は増加しつづけ、何を基準にして名称設定をしているのかも分らなくなってきているのが実状であろう。発掘調査報告書をみると、基本的には安志敏の分類が基本的な基準[37]となっているようであるが、省単位で調査研究が進む現状のなか、いまいちど報告段階での用語と考古資料の乖離を再検討し、改善すべきである。

しかし、資料数は今や膨大で、個々の資料を検討したとしても、細分された時間的併行関係が従来から進んでいない現状では、例えば前述の寺沢が行った研究を深化させることは期待できない。小地域内あるいは、ある一定の地域的な「まとまり」を抽出し、それを対象地域として検討する方向を提示しておきたい。すなわち、第二章で行う農耕形態区分は、その「まとまり」を抽出する研究としても位置づけている。

3．穀物と農耕研究

3．1．イネと稲作の研究－おもにイネ栽培化について－

ここでは、稲作起源の問題についてみていくことにする。イネの起源地については、古くはインドか中国が候補として考えられていた[38]。その後、画期的な学説を提示し、長く定説となったのは、渡部忠世の研究成果であった。土器やレンガなどに付着した籾痕の長径と幅径との比率を測り、バビロフ説を適用して、導き出した「アッサム－雲南起源説」である[39]。これは、照葉樹林文化論[40]も後押しして、植物学的にも文化人類学的にも定説として認められたものとなった。

ところが、長江流域に最古級のイネ遺存体の出土が増えるという考古学の成果[41]をうけ、近年、起源地の候補がこれまでの雲南地域から長江流域に移ってきた[42]。これをうけ、海外の農学者らも現地調査を行うようになった[43]。なかでも注目されるのはDNAを分析対象にした研究であろう。佐藤洋一郎らは、野生種から栽培種になった時点で、ジャポニカとインディカに分化したとする定説に対して、野生種にすでに、ジャポニカとインディカがあることをつきとめ、それぞれが栽培化されたことを想定している[44]。雲南地方の稲作の開始は考古学的にみて BC３千年紀を遡ることはない。このように、現在は、イネの起源地は、長江流域が有力な候補のひとつとなるまでに到っている[45]。

これをもとにして甲元真之は、イネの栽培化の過程について興味深い仮説[46]を提示している。稲作栽培の始まりには、①多年草の野生ジャポニカが一年草ジャポニカに変化すること、②胚乳が増大することの二つの条件が揃うことが前提になるとまず想定した。①の契機には生態環境の悪化、つまりヤンガードリアス期における急速な気候変動が関係するとした。②の胚乳の増大には、植物の開花から結実までの生育期間が制限されることが条件であり、後氷期に四季の変化が明確になったことで夏季の間に結実する必要に迫られ、乗じて胚乳も増大したと考えた。つまり、植物側の環境適応戦略の結果が人間に注目されることになり、栽培化の一歩を踏んだとするのである。

最近、長江中流域の湖南省玉蟾岩遺跡で BC12000 年ごろまで遡るとされる

イネ籾が発見されている。しかし、この年代には疑問が根強くある。イネの種子やプラントオパールなどの出土がそのまま稲作の証拠にならない。イネ野生種、もしくはコンタミネーションの可能性もある。中村慎一は、湖南省吊桶環遺跡、同省玉蟾岩遺跡のプラントオパールの検出をもって栽培化あるいはイネの食用を述べることはできないとし、また包含層内の炭化物だけでなく、出土籾の年代測定をすべきとしている[47]。確かに科学的分析は一時期より格段に進化したが、中村の指摘のように栽培化は人間の文化的な行為の結果であり、その痕跡である自然遺物以外の考古学資料も、文化的なコンテクストを念頭に分析試料の選別と分析結果の解釈を行うべきであろう。

３．２．雑穀（アワ・ヒエ・キビ）と雑穀作（畑作）研究

アワ、ヒエ、キビの祖先種や起源地については、ほとんどわかっていない。たとえば、アワ（*Setaria italica*）の祖先は、エノコログサ（*S. viridis*(L.) P. Beauv.）であることは、木原均と岸本艶の研究[48]によって細胞遺伝学的研究ですでに証明されているが、起源地は分かっていない。祖先野生種の分布や変種の多様性から、中央アジアやアフガニスタンなども候補地として鼎立している[49]。現在、中国が有力な起源地候補となっているのは、黄河流域の河南省賈湖遺跡出土のアワ遺存体などが世界的に最も古いことに拠った説である。植物学も考古学の成果に依存するところが大きい。キビやヒエにいたっては、中国が起源地のひとつではあるが、科学的にはまだ証明されたわけでない[50]。

DNA を用いた分析方法が進化した昨今においても、雑穀に関する研究は総じて進展をみせていない。中国内ではこんにち、アワ、ヒエ、キビなどが主要な穀物ではなくなったことから、研究対象にあがらないのが実状であろう。また、周知のように、新中国は改革開放路線が本格化するまでは、海外研究者も中国内で自由に調査研究できる体制ではなかった。雑穀をテーマにする各分野の研究者は、中国以外の地域、たとえばインドやアフリカでフィールドワークをせざるを得ず、雑穀や雑穀作について東アジア的な視野で十分に議論することができない状況が長く続いた。前述のアワの起源地の各説は、中国をフィールドにできなかった研究者らがアジア、アフリカで調査した結果によるものである。

同時に、長江流域がイネの起源地候補として挙がったことで、中国自身も活発に稲作研究を行い始めたことと対照的に、黄河流域や東北地方の生業の基盤である雑穀作については、考古学的にもほとんど研究の深化をみないままである。1930年代に最初に河南省でアワが出土してから、出土分布域は黄河流域に限られ、年代もBC6000年が上限のままで考古学的現状に変化がないことも関心を低くしていると思われる。しかし、BC8000年ごろの年代が与えられている河北省南庄頭遺跡では、土器と磨盤・磨棒が出土しており、雑穀作の可能性が考えられ[51]、雑穀遺存体の出土も期待される。

ところで、歴史学は、生産から社会発展や「中国文明」を論じてきたはずであったが、雑穀が社会形成に与えた影響については、徐中舒[52]や天野元之助[53]の業績があるものの、その後、ほとんど具体的検討がされることはなかったことも指摘しておきたい。

雑穀作についての文献史料が寡少であることもその要因であろう。『本草綱目』、『済民要術』、『氾勝之書』などに、穀物や農法の説明がみえるが、すでにコムギが主食となっていること、犂が主要な耕作具となっていることから、新石器時代に直接当てはめることはできない。また、戦国時代に碾磑が伝来することも、穀物利用、つまり製粉や精白の過程に大きな影響を与え、他の穀物の粉食のバリエーションも増えたと考えられる。このことは、古文献や民族例[54]から新石器時代の雑穀作文化を検討するときにも留意しなければならないことである。

4．課題の提示－農耕具組成と農耕形態－

これまでみてきた研究現状と問題を再度整理する。黄河流域と長江流域の農耕区分は、主に栽培穀物を指標にしたものであること、各農耕具は小地域内研究の段階にあることがわかった。そして、その両方に共通する課題として、地域間関係の具体的解明を指摘できる。このことを念頭に置くと、農耕の栽培穀物以外の要素、つまり農耕具から再検討することが求められることになる。

これは、農耕の技術的な体系に関わる農耕形態を明らかにすることで、アプローチできることに繋がる。言い換えると、農耕形態は、農耕の諸過程に使用

される道具の組合せ、つまり農耕具組成を分析することで類型化できる[55]。これらのことは、第二章で詳しくみていくことにする。

第二節　加工調理具研究の現状と問題の所在－食文化体系－

1．加工調理具をめぐって－収穫後の過程－

新石器時代の考古学研究において、穀物など植物性食物をどのように加工調理したかについて、言及されることはなかった。土器の底部に火を受けた痕跡があることから、煮沸具が存在することはわかっていたが、それらを利用して食したという理解に留まる。また、甑も出土しており、蒸しても食べていたであろうが、これについては、ほとんど関心が示されることはなかった。また、磨盤と磨棒は、穀物を脱穀するかあるいは、製粉する道具として考えられているが、多様な穀物を栽培する新石器時代における文化的な説明については、いまだ十分とは言い難いし、果たして穀物を加工する道具か否か検討の余地も残されている。考古学研究の現状と問題について、これ以上は各章に譲るとして、ここでは収穫後の諸過程の具体的内容と問題を述べることにする。

収穫後の主な過程は、脱粒、脱穀、精白[56]、そして調理に分類できる。脱粒は、穂から籾を落とし、脱穀は、籾殻を取り除く作業であり、木杵などがこの工程の道具にあたる。あるいは竪杵と木臼を用いて脱穀する。こうした道具は、穀物利用には必然的なものであると同時に、ほとんどが木や竹など有機物で製作されているため、遺跡には残りにくい。新石器時代では、江蘇省圩墩遺跡に竪杵が出土しており、当時も用いられていたことはわかっているが、出土遺跡はまだ少ない。

脱穀された穀物は、次に精白が行われる。コメの場合、脱穀したものを玄米と呼び、このままでも食することができる。もちろん、外皮にあたる糠をとる精白（精米）の作業をし、白米としても食する。製粉するには、玄米、白米どちらの段階でも行うことができる。

一方、アワやキビなどは、脱穀したままでは食することができない。でんぷん質（胚乳）の周りには硬い外皮があり、それを取り除く作業が必要となる。

その作業がつまり、精白に相当する。コメのように杵と臼によって、アワを精白する。ただし、困難な作業で非常に効率が悪いようである[57]。

以上のように、イネと雑穀とでは、種子の構造の違いから、精白の性格が異なることを指摘しておく。

さて、調理、とくに粉食と製粉と穀物の関係を述べておきたい。結論からいえば、その関係には必然性はないことを指摘しておきたい。必然性があるものは、コムギだけである。外皮が胚乳に食い込んでいるため、その構造上、精白が困難であり、仮に精白しても外皮が残っていたりして、美味しくなく消化にも悪い。また、粒のまま食すると、人間の胃腸ではコムギの蛋白質をうまく消化することができない[58]。製粉し、水で練ることによって、蛋白質であるグルアジンとグルテニンが弾力性のあるグルテンになり消化しやすくなるとともに、調理法も多様化する。種子の構造と人間の生理的な要因もあって、必然的に製粉にして粉食するのに適した穀物なのである。ちなみに、同じムギ類であるオオムギは、粉末にしても粘り気がないので粉食には適さず、ふつう粒食する[59]。

阪本寧男は、文献や民族例から穀物利用を次のように分類している[60]。

A.食用にする。

1)穀粒をそのまま利用する場合（粒食）。調理法には、炊飯、餅、粒粥、焼飯、炒粒(ポップ)などがある。

2)穀粒を臼または適当な用具を用いて碾き割って利用する場合（碾き割り食）。調理法には、碾き割り粥、団子などがある。

3)臼や石皿を用いて製粉して利用する場合（粉食）。調理法には、粉粥、パン、麺類、団子、炒り粉、クッキー、シトギなど多様性がある。粉食の場合には、個々の調理法のバリエーションはさらに多くなる。（例えば、パンには、粉を練って固めたものを油で揚げる揚げパン、蒸してふかしたふかしパン、粉を練ってそのまま焼いたチャパティ、半発酵のナン、発酵させて焼いたヨーロッパ式のパンがある。）

B.穀粒から飲料をつくる。

1)非アルコール飲料をつくる場合。

2)発酵させてアルコール飲料をつくる場合。

阪本の分類をもとに、脱穀から調理までの過程を穀物別に整理すると以下のようになろう。また、製粉と粉食がどのような関係にあるかを明確にするために、製粉が行われる過程を明示する。

（イネ、アワ、キビなど）

脱穀→精白（臼と杵）→調理

粒食（石臼で搗く）

碾き割り食（石臼で磨る）

粉食（石臼で磨る）製粉

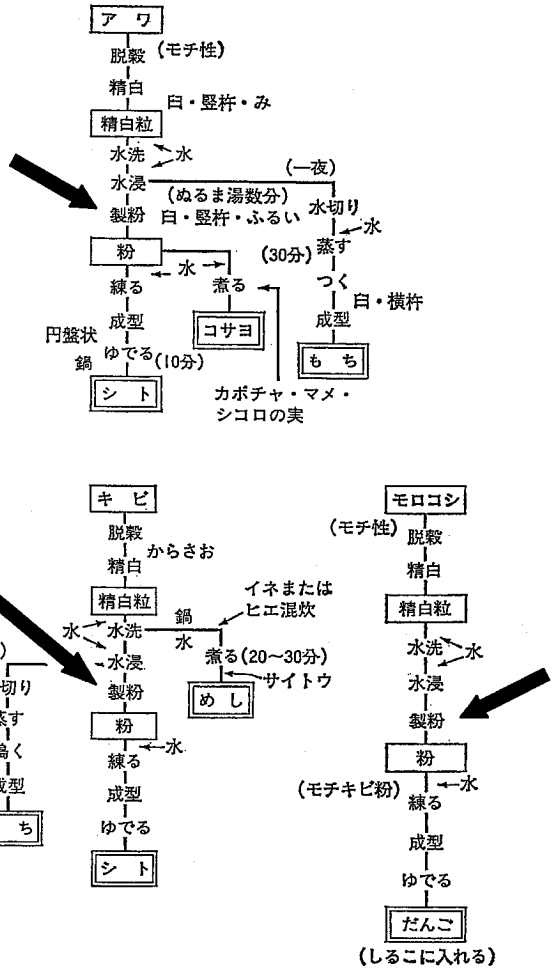
飲料

（コムギ）

脱穀→精白（石臼で磨る）製粉→調理

粉食

以上の二つの過程を比較すると、製粉の位置が異なることがわかる。コムギは外皮を取り除くことが難しいことと、粉食に適していることから、精白して精白粒を製粉することはしない。精白の段階で製粉して、糠を取り除くのである。これに対して、他の穀物の製粉の過程は、精白粒を製粉する。第１図は、木俣美樹男らが北海道沙流川流域で調査した雑穀の調理法を図示したものに、製粉の箇所を矢印で強調したものである。めし、シト、もちのどの調理法をとっても精白粒から始まり、シ



第１図　雑穀の加工調理の過程

木俣美樹男ら「北海道沙流川流域における雑穀の栽培と調理」（『季刊人類学』17巻1号1986年）を、一部改変。

トの場合に精白粒を製粉することがわかる。

つまり、コムギを除く穀物は、粒食、碾き割り食、粉食いずれにしても食することができ、いずれも精白粒を用いる。粉食は調理の種類であり、製粉は調理の過程の中に位置する。

ただし、以上に論じたことは、精白技術が一定以上ある事例のことである。つまり、「臼と杵」、「石臼」の存在する場合である。「石臼」は下石の上の上石が周り、その摩擦で作用する所謂ロータリーカーン、もしくは碾磑と呼ばれるものである。これらの存在を以って、製粉は精白粒から行うということを、普遍化して考えることができる。新石器時代では、ロータリーカーンはまだなく、直接当てはめることはできないが、製粉は、収穫後の過程のなかで、加工にも調理にも相当する作業であることを指摘しておく。

ところで中国新石器時代の場合、磨盤・磨棒が脱穀や製粉の道具と考えられている。とくに後者の製粉具については、形態が西アジアのサドルカーンと類似し、伝播した可能性もあることから、用途も類似あるいは同一と想定されている。しかし、仮に伝播したとしても、対象物がコムギではなく、アワ、ヒエ、キビなどである以上、製粉具と想定するには、さらに議論する余地がある。伝播の内容において、モノだけが伝播したのではなく、「穀物を磨盤（サドルカーン）によって製粉して粉食にする」文化が伝播したことを論じることができるならば、成り立ってこよう。あるいは、「磨盤（サドルカーン）は製粉の道具である」ことを論じなければならない。確かに、これらは考古学的には論証することは困難な課題である。しかし、アワ、ヒエ、キビの製粉具と粉食を結びつけるには、さらに検討を要する。

次に調理についてみてみよう。新石器時代には、煮るための煮沸具、蒸すための蒸具が主にある。このほか調理法には、焼くがあり、「箅子」が焼く道具に相当するとの指摘がある。しかし、穀物は主に煮る、蒸す、あるいは炊くことが調理法において中心であったと考える。

本論文では、黄河流域の雑穀と長江流域のイネという異なる農耕を行う世界を検討しており、それが調理にどのように反映しているか、明らかにする目的を設定している。両河流域は南北で農耕が異なるが交流関係はあり、調理具からの分析も進める必要がある。

それでは、煮沸具と蒸具の研究について、具体的にみてみよう。煮沸具は、判明している各地域の新石器文化の出現期からすでに存在していることがわかっている[61]。一般に煮沸具とされるものには、罐、釜、鼎、鬲、斝などがある。しかし、これらは時代や地域の差によって相当異なった器形に同一の名称を用いているため、混乱と誤解を生じることも少なくない。これは、今日の日常容器の名称をそのまま用いたり、古代青銅器の器形名称を類似した器形の土器に当てはめて用いたりしているためである[62]。いずれにしても、罐、釜、鼎、鬲、斝などは、煮沸の機能をもつことには変わりなく、個々で検討する課題はあるものの、煮沸具とすることには大過ないだろう。

研究の多くには、鼎や鬲などの一器種あるいは器種間の変化を論じるもの[63]、支脚と煮沸具との関係から論じたもの[64]、煮沸具から地域的特性や地域間関係を論じたもの[65]などがある。また、煮沸具から調理法さらには調理体系にまで解釈を踏み込んだものもある。古くには岡崎敬が、釜形土器から鍋形土器への変化と、甑の消長を比較することで調理法が変化したことを論じている[66]。また、趙清や陳国慶は煮沸具組成とその変化を論じた。趙清[67]は、黄河流域を四区に分け、煮沸具組成と地域間の共通性を論じ、さらに煮沸具の変化に三段階あることを明らかにした。また、陳国慶[68]は、長江下流域を対象にして器種・器形の変化を通史的に整理し、釜形土器から鼎形土器へと変化することを述べている。問題点としては、前述した器形と器名の定義が地域によって異なるまま使用していること、煮沸具の変化が何を表しているのかについて、述べることはなかったことが挙げられる。しかし、これらは、土器（煮沸具）から調理具体系さらには食文化体系まで論じようとした先駆的な論文と位置づけられる。

また、日本考古学では、深澤芳樹[69]や小林正史ら[70]が、ススなどの土器付着物を対象にして使用法や対象物を解明しようとした研究がある。ススの付着や内面付着の有機物の研究などは、使用の具体や対象物の特定につながる。こうした視点からの研究も今後の課題とすべきであるが、現状では一次資料を扱える中国内研究者にゆだねるしか手立てはない。

重要な調理具には蒸具もある。蒸具には、甑のほか甗が考古学的には把握されているものの、煮沸具とは対照的にほとんど関心が示されていない。研究史については、第四章で詳述しているためここでは触れないが、煮沸具との関係、

さらには食文化体系を論じる際の展望をふたつ記しておきたい。

ひとつは、調理法の多様化についてである。煮沸具に対して蒸具は蒸すための専用の道具であることは言うまでもない。だからこそ、蒸具の出現は、蒸す調理法の出現を意味する。煮沸、つまり煮るだけから、さらに別の調理法が増えることになる。いまひとつには煮沸具との関係である。また、甑は煮沸具と組み合せて使用するもので、対応する煮沸具の関係も同時に検討することで、蒸具体系についても言及できる。こうした視点から、新石器時代の穀物利用の変化を論じることができるのではないだろうか。

しかし、課題はまだ残る。蒸具の基礎的研究が進んでいないことに加え、甑と報告されているものが果たして蒸具なのか考古学的な検証過程がない。日本考古学では長く弥生時代の有孔土器が蒸具かどうか、論争がつづいている。山内清男や森本六爾らが蒸具と考えたのち、岩崎卓也はセットになる煮沸具の有無から、堅田直は焼成後の穿孔から、さらに佐原真は煮沸具の重なった部分にもススが付着することから、それぞれ蒸具説を疑問視した。また、木下正史は、転用品の可能性と煮沸具との数量的比較から、さらに蒸具説を否定した[71]。一方、最近では杉井健が蒸具説の立場をとっている[72]。中国新石器時代の甑と報告されるもので、同様に再検討が必要なものがある。

このように煮沸具や蒸具に相当する考古資料そのものの基礎研究において、多くの課題を残しているのである。

2．課題の提示－加工調理具と食文化体系－

加工具と調理具は、穀物収穫後の諸過程で使用する道具であるため、食文化体系に関わる要素といえよう。穀物の性格から加工や調理の方法にはバリエーションがあるし、調理法にいたっては同じ穀物であっても、地域や時代によって差異や変化があると予想できる。しかし、従来の研究では、個々を対象にすることはあっても、食文化体系を背景に論じようとしたことはなかった。諸過程は、それぞれに独立するものではなく、一連の過程である。食文化体系を明らかにすることで、諸過程を農耕文化の文化的コンテクストのなかで考えることができると考える。また、新石器時代が農耕を基盤にした時代であると同時

に、異なる穀物を栽培する社会が併存することを意識すると、農耕具だけでなく、収穫後の具体的な内容をも検討することで、農耕文化の地域性や地域間の関係性、さらに時期的な変化からより一層、農耕文化の変化の一側面を論じることができるのではないだろうか。これらについては、第三章、第四章で検討することにする。

次章からの具体的検討において、その前提となる、とくに時間軸と空間軸について記しておきたい。第 1 表は、黄河・長江流域の新石器時代編年である。時間軸は、この区系類型論による成果を踏まえて、これまでの文化や類型を時期的前後関係の指標として用いる。その場合、～期と表記する。時間的併行関係においては、まだ細部においてまとまった研究はなく、諸研究の成果をふまえて用いることにする。

第1表　黄河・長江流域の新石器時代編年

<table>
<tr><td>BC</td><td colspan="2">渭水流域</td><td colspan="3">黄河中流域
山西地域 河南中部 河南北部</td><td colspan="2">黄河下流域</td><td colspan="2">長江下流域</td><td colspan="2">長江中流域</td><td colspan="2">漢水上中流域</td></tr>
<tr><td>2000</td><td colspan="2"></td><td colspan="3"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2" rowspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>2500</td><td colspan="2">客省庄二期</td><td colspan="3">中原龍山
陶寺　王湾三期　後岡二期</td><td colspan="2">山東龍山</td><td colspan="2">石家河</td><td colspan="2">石家河</td></tr>
<tr><td>3000</td><td colspan="2">廟底溝二期</td><td colspan="3">廟底溝二期併行</td><td rowspan="3">大汶口</td><td>後期</td><td colspan="2" rowspan="3">良渚</td><td colspan="2">屈家嶺</td><td colspan="2">屈家嶺</td></tr>
<tr><td>3500</td><td rowspan="3">仰韶</td><td>西王村</td><td rowspan="3">仰韶</td><td colspan="2">後期
(秦王寨)</td><td>中期</td><td rowspan="3">大溪</td><td>後期</td><td rowspan="3">仰韶</td><td>西王村</td></tr>
<tr><td>4000</td><td>廟底溝</td><td colspan="2">中期
(閻村)</td><td>前期</td><td colspan="2">崧沢</td><td>中期</td><td>廟底溝</td></tr>
<tr><td>5000</td><td>半坡</td><td colspan="2">前期
(後岡)</td><td colspan="2">北辛</td><td colspan="2">馬家浜
河姆渡</td><td>前期</td><td>半坡</td></tr>
<tr><td>6000</td><td colspan="2">白家村</td><td colspan="3">裴李崗・磁山</td><td colspan="2">後李</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">城背溪
皂市下層</td><td colspan="2">李家村</td></tr>
<tr><td>7000</td><td colspan="12" rowspan="4"></td><td colspan="2" rowspan="2">彭頭山</td></tr>
<tr><td>8000</td></tr>
<tr><td>9000</td></tr>
<tr><td>10000</td></tr>
</table>

注）小澤正人・谷豊信・西江清高『中国の考古学』（1999年　同成社）を参考にして、筆者作成。

空間軸は、地域研究の増加により、地域細分が進みつつあるが、黄河流域と長江流域の広い領域では、一定の基準のもとに論じることができない。また、分析対象が多岐にわたること、調査報告に必要な情報のレベルが地域間で一定でないことから、考古学的土器文化の領域から次のように設定した。すなわち、山東省域を中心とする黄河下流域、河南省域、河北省南部、山西省を中心とする黄河中流域、秦嶺山脈以北で陝西盆地を中心とする渭水流域、江蘇省南部、上海、浙江省南部、安徽省南部を中心とする長江下流域、湖北省、湖南省を中心とする長江中流域、秦嶺山脈以南の陝西省域を中心とする漢水上中流域の6地域である。黄河中流域はさらに細分すべきであるが、他地域との関係を明らかにするため、ここでは一括し、以後改めて黄河中流域内での小地域間関係について考えることにしたい。いずれにせよ、この区分は作業段階の便宜的なものとし、各章の分析によって、地域細分が必要な場合はその都度言及することにする。

---

1 新疆ウイグル自治区などの西域、チベット自治区などがあるが、農耕についての詳細は分からないことが多い。チベット自治区卡若遺跡では、彩陶、磨製石器とともに大量の炭化したアワ遺存体や動物遺存体が出土しており、すでに農耕を主体とした時代であったとされる(文物出版社編『新中国考古五十年』1999年　文物出版社)。

2 佐藤敏也「中国仰韶出土の籾」(『考古学ジャーナル』1970年)によると、実際は土器片ではなく、紅焼土塊らしい。

3 仰韶村遺跡の時代に、稲作があったのか、あるいは水稲耕作なのかなどの議論については、横田禎昭「中国農耕文化の原初形態」(『史学研究』第120号 1974年)に詳しく載っている。

4 C. W. Bishop ; "The Neolithic Age in North China" *Antiquity* vol7,No.28,1933

5 中国社会科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館編『西安半坡』1963年

6 崧沢遺跡など(上海市文物保管委員会「上海市青浦県崧沢遺址的試掘」『考古学報』第2期 1962年)

7 和島誠一「東アジア農耕社会における二つの型」『古代史講座』第二巻 1962年 学

生社

[8] 横田禎昭「中国農耕文化の原初形態」『史学研究』第 120 号 1974 年

横田禎昭「中国新石器時代の初期農耕文化」『世界の農耕起源』1986 年 雄山閣

[9] 安志敏「中国的史前農業」『考古学報』第 4 期 1988 年

[10] この他の主な論考には以下がある。

田村晃一「東アジアにおける農耕の起源と発達」『東アジア世界における日本古代史講座』第 1 巻 1980 年 学生社

町田章「中国の初期農耕文化」『歴史公論』1 号 1982 年

[11] 以下の論考は、黄河流域と長江流域を分け、生産（農耕）から社会形成を論じている。

宮本一夫「中原と辺境の形成－黄河流域と東アジアの農耕文化－」『食糧生産社会の考古学』1999 年 朝倉書店

小柳美樹「稲と神々の源流－中国新石器文化と稲作農耕－」『食糧生産社会の考古学』1999 年 朝倉書店

生業（農耕）区分を前提とした集成として、羅二虎編『中国新石器時代資料集成』(1995 年 東南アジア伝統農業読書会・京都大学東南アジア研究センター)がある。

[12] 黄河流域にイネの出土例が増加するようになり、長江流域から伝播したと考えられている。また、日本列島への伝播を東アジア的視点からみると、岡崎敬が伝播ルートをいくつか想定している。中国大陸における伝播の問題は、「長江流域から黄河流域へ」という理解の段階である。しかし、その研究方向には、その広がりの時期的変化を環境変動と結びつけて考えるものが主流であり、文化的な動態と結び付けて解明しようとしたものは少なく低調である。ルートの解明に関しては、考古学的に土器文化の地域間関係を理解しても方法論的には、イネの出土分布の変化とは論理的に関係するものではないため、そのこと自体が伝播ルートの解明には繋がらない。しかし、イネがひとりで拡がることはなく、必ず人間を介しているために、具体的ルートについても考えていく必要はある。岡崎が提示したような、想定できるルートを大陸においても考え、「長江流域から黄河流域へ」という大きな理解から、さらに深化すべき課題として存在する。

[13] 松崎寿和『新黄土地帯』1960 年 雄山閣

[14]横田禎昭「中国農耕文化の原初形態」『史学研究』第 120 号 1970 年

[15]農業関係を専門に取り上げる雑誌で、分野を限った専門誌は中国考古学界においても特異である。最近は、北京大学に古代文明研究中心が設立され、『古代文明』という名で雑誌が発刊されているが、研究対象をしぼった雑誌は、現在も『農業考古』のみである。

[16]全国農業区画委員会　中国農業資源与区画要覧編委会編『中国農業資源与区画要覧』1987 年　測絵出版社・工商出版社。

郭文韜編『中国農業科技発展史略』1988 年 中国科学技術出版社。

梁家勉編『中国農業科学技術史稿』1989 年 農業出版社。

陳文華編『中国古代農業科技史図譜』1991 年 農業出版社。

中国農業博物館資料室編『中国農史文目録索引』1992 年 農業出版社。

呉存浩『中国農業史』1996 年 警官教育出版社。

王仁湘編『中華史前飲食史』1997 年 青島出版社。

張春輝編『中国古代農業機械発明史』1998 年 精華大学出版社。

周昕『中国農具史網畳図譜』1998 年 中国建材工業出版社。

[17]中国語の鍬は、日本語では鋤のことである。日本に入ってきたのち語意が逆転したらしい(白木原和美「クワやスキについての研究ノート」『歴史評論』第 118 号　1960 年)。

[18]陳文華らは、「中国農業考古資料索引」と題し、『農業考古』(1981 年当初は、『農史研究』に掲載。)に連載で集成を行い、1994 年に単行本(陳文華編『中国農業考古図録』1994 年江西科学技術出版社)として纏められた。

[19]全国農業区画委員会　全国農業資源与区画要覧編委会編『全国農業資源与区画要覧』1987 年　測絵出版社・工商出版社

[20]宮本一夫「中原と辺境の形成－黄河流域と東アジアの農耕文化－」『食糧生産社会の考古学』1999 年 朝倉書店

[21]小柳美樹「稲と神々の源流－中国新石器文化と稲作農耕－」『食糧生産社会の考古学』1999 年　朝倉書店

[22]宋兆麟「我国古代踏犂考」『農業考古』第 1 期 1981 年

余扶危・葉万松「試論我国犂耕農業的起源」『農業考古』第 1 期 1981 年

王星光「中国伝統耕犂的発生、発展及演変」『農業考古』第1期 1989年

陳国慶・徐光輝「中国東北地区石鋤初論」『農業考古』第2期 1989年

李再華「耕犂起源一説」『江西文物』第1期 1991年

[23]徐中舒「耒耜考」『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』第二本 1930年

関野雄「新耒耜考余論」『東洋文化研究所紀要』第20冊 1960年

[24]田崎博之「農具からみた長江下流域の農耕文化と弥生文化」『東アジアから九州へ』1997年 西日本新聞社

[25]前掲註24に同じ。

[26]中国社会科学院考古研究所　西安半坡博物館『西安半坡』1963年

宋兆麟「河姆渡遺址出土骨耜的研究」『考古』第2期

黄渭金「河姆渡文化“骨耜”新探」『文物』第1期 1996年

[27]閻万石「石耜考」『考古与文物』第1期 1983年

傅憲国「試論中国新石器時代的石鉞」『考古』第9期 1985年

劉壮己「中国古代的石耜」『農業考古』第1期 1991年

黄克映「裴李崗、磁山文化長条形石鏟辨」『華夏考古』第4期 1992年

王吉杯「凸形石器考」『農業考古』第3期 1995年

[28]陳国慶・徐光輝「中国東北地区石鋤初論」『農業考古』第2期 1989年

李京華「登封王城崗夏文化城址出土的部分石質生産工具試探」『農業考古』第1期 1991年

栗建安・范祚其「福建福安地区的有肩石器」『考古』第10期 1995年

小柳美樹「石犂・破土器・耘田器」『日本中国考古学会会報』第七号 1997年

任式楠「関于良渚文化双翼形石器的討論」『江漢考古』第1期 2000年

王栄波「耜形端刃器的起源、定名和用途」『考古学報』第2期 2002年

[29]中村慎一「良渚文化石器に関する日中共同調査」『中国考古学』第2号 2002年 日本中国考古学会

[30]安志敏「中国古代的石刀」『考古学報』10冊 1955年

楊肇清「試析鋸刃石鎌」『中原文物』第2期 1981年

王仁湘「論我国新石器時代的蚌製生産工具」『農具』1期 1987年

王吉懐「試論新石器時代的鎌和刀」『農業考古』第2期 1988年

王仁湘「黄河流域新石器時代的骨制生産工具」『中国考古学論叢』1993年

[31]石毛直道「日本稲作の系譜（上）－穂摘み具について－」『史林』第51巻第5号 1968年

石毛直道「日本稲作の系譜（下）－石包丁について－」『史林』第51巻第6号 1968年

下條信行「東アジアにおける外湾刃石包丁の展開－中国・朝鮮・日本－」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980年

佐川正敏「中国の石包丁」『考古学ジャーナル』260号 1986年

寺沢薫「中国古代収穫具の基礎的研究」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』1995年

[32]甲元真之『中国新石器時代の生業と文化』2001年 中国書店

[33]前掲註32に同じ。

[34]曾野壽彦「中国古代の石鎌について」『中国古代史の諸問題』1954年 東京大学出版会

[35]黄展岳「古代農具統一定名小議」『農業考古』第1期 1981年

李恒賢「江西古農具定名初探」『農業考古』第2期 1981年

紀仲慶「略論古代石器的用途和定名問題」『南京博物院学刊』第6期 1983年

[36]白木原和美「クワやスキについての研究ノート」『歴史評論』第118号 1960年

川原嘉久治「農具などの名称に関して」『研究紀要』3 1986年

乙益重隆「日本古代のスキとクワの呼称と用字について」『児島隆人先生喜寿記念論集古文化論叢』1991年

渡部景俊「農具とくに鍬とその部分名称について」『民具マンスリー』第30巻第4号 1997年

[37]素材（石製、土製、貝製）、製作方法（打製、磨製）、形状（長方形、半月形）、刃部の形状（直線刃、外湾刃、内湾刃）、打ち欠きの有無、穿孔の個数

[38]ドゥ カンドル『栽培植物の起源』加茂儀一訳 1953年 岩波書店（初出は1883年）

N.I.バビロフ『栽培植物発祥地の研究』中村英司訳 1980年 八坂書房（初出は1920年）

Edman and Soderberg「中国五千年前陶器上稲米遺跡之発見」『中国地質学会志』

8巻4期 1929年

北村四郎「中国栽培植物の起源」『東方学報』第十九冊 1950年

丁穎「中国栽培稲谷的起源」『農業学報』第3期 1957年

丁穎編「江漢平原新石器時代紅焼土中的稲穀殻考査」『考古学報』第4期 1959年

丁穎『中国水稲栽培学』1961年 人民出版社

[39]渡部忠世『稲の道』1977年 日本放送協会

[40]上山春平編『照葉樹林文化』1969年 中公新書

[41]湖南省彭頭山遺跡、江蘇省羅家角遺跡、河南省賈湖遺跡など。

[42]厳文明「中国稲作農業的起源」『農業考古』第1・2期 1982年

王在徳「論中国的農業起源与伝播」『農業考古』第2期 1987年

[43]高谷好一『コメをどう捉えるか』1990年 日本放送出版協会

藤原宏志「長江中下流域における稲作遺跡調査」『福岡からアジアへ3環濠集落の源流を探る』1995年 西日本新聞社

森島啓子「アジアの野生イネーその変異と栽培化」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』1995年

和佐野喜久生「東アジアの古代稲と稲作起源」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』1995年

佐藤洋一郎『ＤＮＡが語る稲作文明』1996年 日本放送出版協会

藤原宏志「江南デルタにおける初期農耕」『福岡からアジアへ5弥生文化の二つの道』1996年 西日本新聞社

藤原宏志『稲作の起源を探る』1998年 岩波書店

森島啓子『野生イネへの旅』2001年 裳書房

[44]佐藤洋一郎『DNAが語る稲作文明』1996年 日本放送出版協会

佐藤洋一郎『稲作の日本史』2002年 角川書店

[45]野生種については、長江流域での発見例はなく、華南や東南アジアに多い。野生種自体、品種が多く、栽培祖先種の研究は始まったばかりである。

[46]甲元真之「東アジアにおける農耕の起源と拡散」『中国新石器時代の生業と文化』2001年 中国書店

[47]中村慎一『稲の考古学』2002年 同成社

[48]木原均　岸本艶「あわトえのころぐさノ雑種」『植物学雑誌』56巻 1942年

[49]河瀬真琴「インド亜大陸の雑穀とその系譜」『インド亜大陸の雑穀文化』1991年 学会出版センター

[50]阪本寧男『雑穀のきた道』1988年 日本放送出版協会

[51]中村慎一「中国における稲作と粟作の起源」『日本人と日本文化』3　1998年

[52]徐中舒「耒耜考」『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』第二本 1930年

[53]天野元之助『中国農業史研究増補版』1979年 御茶の水書房

[54]民族学・民俗学的研究は雲南や台湾などの民族例に依拠せざるをえない。しかし、焼畑農耕であることや地形や気候など環境が異なることから、その民俗をすぐさま新石器時代に援用することはできないと考える。

[55]甲元真之「朝鮮の初期農耕文化」『考古学研究』第20巻第1号 1973年

[56]中国語の論文では、「脱穀」の用語が用いられる。この場合、籾殻を除去する脱穀と外皮を除去する精白の両方の意があるようで、論文によってどちらの意味で使用されるか判断しにくい。中国研究者の間では、精白の意と捉えるほうが多いようである。

[57]コメと異なり、粒が細かすぎて粒どうしの摩擦では外皮がきれいに剥けない。現代ではコメ用の電動精白機があるが、これでキビを精白する場合、粒の大きさが違うコメを適量入れる。これにより摩擦係数を増やし、効率よく精白を行うのである。ちなみに、精白したキビには、コメが混ざっているため、篩にかけて分別する。以上の見解は、広島県東広島市在住で農業を営む島田美代子さんに協力を得え、キビの耕作・収穫・加工・調理の諸過程を調査した結果からである。

[58]長尾精一編『小麦の科学』1995年 朝倉書店

[59]篠田統『中国食物史の研究』1978年 八坂書房

[60]阪本寧男『雑穀のきた道』1988年 日本放送出版協会

[61]中国社会科学院考古研究所編『新中国考古発現与研究』1984年
今村佳子「中国先史時代の文化類型と動態」『古文化談叢』36　1996年

[62]飯島武次『中国考古学概論』2003年 同成社

[63]浜田耕作「鼎と鬲に就いて」『東亜考古学研究』1930年 岡書院
裴文中「中国古代陶鬲及陶鼎之研究」『現代学報』第一巻2・3期合刊4・5期合刊

1947年

廖永民「試析豫中地区原始時代的陶鼎」『中原文物』第1期 1988年

何介鈞「中国古代陶鬲研究」『中国考古学第七次年会論文集』1989年

柯昊「斝、鬲淵源試探」『北方文物』第4期 1990年

李権生「中国先史時代の鼎類土器の展開」『考古学雑誌』第79巻第1号 1993年

余西雲「長江中流新石器時代的陶鼎研究」『華夏考古』第2期 1994年

蒋志龍「釜形斝研究」『考古与文物』第4期 1995年

高天麟「黄河流域龍山時代陶鬲研究」『考古学報』第4期 1996年

陳文玲「中国史前的釜鼎文化」『南方文物』第3期 1996年

張忠培「黄河流域空足器的興起」『華夏考古』第1期 1997年

[64]厳文明「中国古代的陶支脚」『文物』第6期 1982年

馬洪路「華東地区新石器時代的陶支座」『考古与文物』第2期 1983年

蘆徳佩「浅談大渓文化敵陶支座」『史前研究』第4期 1984年

[65]厳文明「中国古代文化三系統説」『日本中国考古学会』第4号 1994年

今村佳子「中国新石器時代の土器からみた文化動態」『先史学考古学論究』Ⅳ 2003年

[66]岡崎敬「中国古代におけるかまどについて－釜甑形式より鍋形式への変遷を中心として－」『東洋史研究』第14巻第1・2号 1955年

[67]趙清「黄河流域新石器時代炊器之演変」『中原文物』第1期 1988年

[68]陳国慶「長江下流地区史前文化的炊器研究」『考古学文化論集』2 1989年 文物出版社

[69]深澤芳樹「おこげのあと」『文化財論叢Ⅱ』1995年 同朋出版

[70]小林正史・柳瀬昭彦「コゲとススからみた弥生時代の米の調理法」『日本考古学』5号 2002年

[71]佐原真「煮るか蒸すか」『飲食史林』第7号 1987年

[72]杉井健「甑形土器の基礎的研究」『持兼山論叢』1994年

第二章　農耕具の考古学的研究

－農耕具組成からみた農耕形態の類型化－

はじめに

本章では、中国新石器時代の農耕形態の類型化とその変化を農耕具組成から明らかにする。それにより、栽培穀物によって区分された農耕区分に対して、農耕具からの再検討を行う。

第一節　問題の所在と目的

1．研究略史と問題の所在

現在のところ、中国新石器時代の農耕は淮河及び秦嶺山脈を境にした黄河流域を雑穀作（畑作）地帯、長江流域を稲作地帯と考えられている[1]。

発掘調査の増加と土器文化編年などが整ってくる1970年代まで、具体的な農耕を論じた研究はあまりされることはなかった。そのなかで収穫具である石刀を分類し、系譜を明らかにした安志敏の研究[2]は、特筆できる。

1980年代に入り、各地の文化類型と編年が設定されるようになったことから、生産用具の文化類型単位、あるいは行政区分の省単位での様相が把握されるようになる[3]。これにより、地域毎の遺物の在り方が明示されるようになった。しかし、ふつう、文化類型ごとに、生産用具と生産工具とに分類したのち、列挙されるに留まることが多い。それが新石器時代内での、どのような過程の中に存在しているかという、全体の議論までは明らかにされることはなかった。

農耕具そのものの研究になると、伝統的な文献史学や金石・甲骨文研究の成果を援用したり、あるいは進化論的な立場から、遺物の用途・機能を論じたもの[4]が主で、農耕の段階説へ論点が終着している。遺物そのものを取り扱って考古学的に分析した研究は、先の安志敏の石刀の論考をみるのみである。

これに対して、イネ、アワなど穀物遺存体の出土の増加とともに、農耕経済論や進化論的立場から農耕形態をさぐる研究もある。前者は、イネをめぐる問題、特に稲作起源論[5]において長江流域で盛んである。

農耕を汎中国的に論じた研究には、出土穀物と農耕具の種類をまとめた研究[6]、稲作起源とその伝播を論じた研究[7]などがある。その内容は中国を一元化して扱ったもので、自然遺物によって捉えられた生業圏と他の考古学的遺物とが、どのような状況にあるのか論じられることなく、また、そうした意味で類型化されることもなかった。

農耕研究は自然遺物への関心の高まりのもとに、栽培植物と農耕という方向性が深化されているものの、具体的な遺物をとおした農耕具や農耕形態の研究は立ち遅れているように思える。各文化の様相は把握されるようになっても、それが実際の農耕形態とどう関係していくのかもあまり知られていない。行政区分や文化類型を越えた農耕具組成の研究は未だないことから、それぞれの様相が文化類型や地域を越えた新石器時代のなかでどのような位置にあるのか明らかにしなければならない。

また、淮河を境にしてイネとアワ・ヒエ・キビという、基本的な栽培植物が異なることが、遺物のうえでどのような違いを生じるのか、具体的な農耕具を通して考古学的に区分ができるのか見ていく必要もあろう。

ところで、蘇秉琦の区系類型論[8]のもとでの各地域の文化変遷の確立に加え、各文化間の相互関係が一元論から多元論という動態論のなかで論じられるようになった。この区系類型論に代表される中国新石器時代の研究は、土器を代表させて構築されてきた。土器の器形を代表させたある時間的空間的な大きなまとまりを「文化」とし、その時期的区分あるいは地域性を「類型」とした[9]。この考えを軸に進められてきた「文化研究」は、大貫静夫が指摘するようにおよそ土器研究そのものを指している[10]。しかし、このことは、中国考古学で「文化」と称した場合、様々な文化・社会的要素の総合としての文化という意味に誤解を招いてきている。

こうした研究の現状を考慮しつつ、それぞれの「文化」や地域で明らかになりつつある遺物などから得られた具体的な農耕具や農耕具組成が、新石器時代の文化類型[11]のなかでどのような状態にあるのか見なければならない。

対象とする黄河と長江の両流域は、近年、各地域の編年が加速度的に整理され、地域間の併行関係もある程度比較できるようになった[12]。文化類型を越えた広範囲にわたる文化類型間の関係まで論じることができるように

なったわけである。

2．方法

農耕具には、耕作具・収穫具といった栽培に直接的に関わる道具がある。また、収穫した穀物は加工具によって加工される。つまり、農耕具は、耕作具と収穫具に分類でき、さらに加工具を加えると、生産から消費までの一連のあり方を把握することができる[13]。加工具については、第三章で詳しく述べるが、加工具が農耕に関する道具のひとつとして捉えられてきた研究史を重視し、本章でも取り上げることにする。

こうした視点から、まず各流域の農耕具と農耕具組成の変遷を整理する。さらに各流域の農耕具の様相を明らかにした上で、黄河と長江の両流域を対象に農耕具組成を類型化し、農耕形態について論じることにする。

第二節　各流域の農耕具とその組成

黄河下流域、黄河中流域、渭水流域、漢水上中流域、長江中流域、長江下流域の６つの流域に区分し、流域ごとの農耕具を見ていくことにする。農耕具の抽出には、良好な文化層と遺物が検出されている遺跡を扱い、副葬品は基本的には分析に用いないことにする[14]。

なお、分析対象とした遺跡の位置は、第１図に示した。

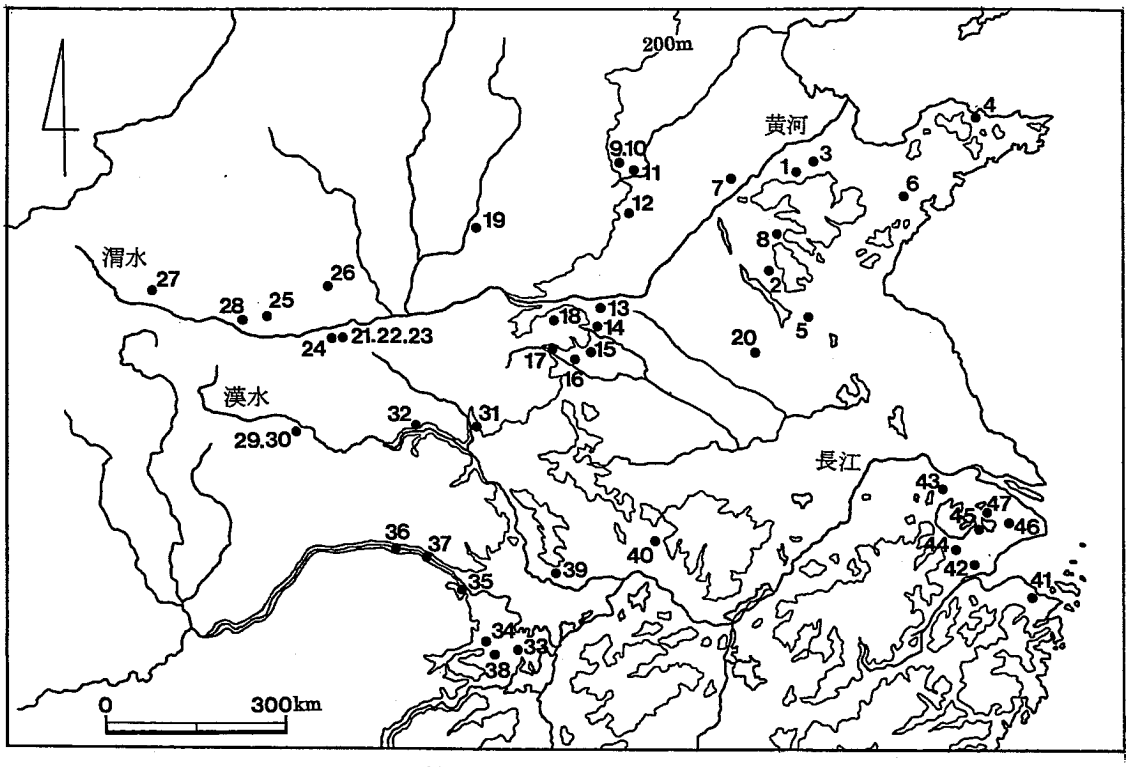
1．黄河下流域

黄河下流域の主な遺跡と出土遺物から農耕具について把握する。

小荊山遺跡（第１図１）[15]は、山東省章丘県に所在する。文化層はすべて後李文化期に属する。

耕作具には石鏟があり、形態は長方形を呈す。収穫具には、貝刀が出土している。加工具には磨盤と磨棒があり、住居址床面から共伴して出土してい

る。ブタやイヌの家畜動物のほか、アオウオ、ソウギョなどの淡水魚の魚骨が多く出土している。



第1図　遺跡分布図

[黄河下流域] 1. 小荊山遺跡 2. 北辛遺跡 3. 苑城遺跡 4. 白石村遺跡 5. 大墩子遺跡 6. 三里河遺跡 7. 尚庄遺跡 8. 尹家城遺跡

[黄河中流域] 9. 磁山遺跡 10. 趙窯遺跡 11. 下潘王遺跡 12. 後岡遺跡 13. 大河村遺跡 14. 裴李崗遺跡 15. 石固遺跡 16. 水泉遺跡 17. 中山寨遺跡 18. 王城崗遺跡 19. 陶寺遺跡 20. 王油坊遺跡

[渭水流域] 21. 白家村遺跡 22. 姜寨遺跡 23. 康家遺跡 24. 半坡遺跡 25. 双庵遺跡 26. 李家溝遺跡 27. 大地灣遺跡 28. 北首嶺遺跡

[漢水上中流域] 29. 李家村遺跡 30. 何家灣遺跡 31. 下王崗遺跡 32. 青龍泉遺跡

[長江中流域] 33. 彭頭山遺跡 34. 皂市遺跡 35. 城背溪遺跡 36. 朝天嘴遺跡 37. 中堡島遺跡 38. 胡家屋場遺跡 39. 屈家嶺遺跡 40. 栗山崗遺跡

[長江下流域] 41. 河姆渡遺跡 42. 羅家角遺跡 43. 圩墩遺跡 44. 錢山漾遺跡 45. 龍南遺跡 46. 広富林遺跡 47. 草鞋山遺跡

北辛遺跡（第１図２）[16]は、山東省滕県から東南に 25km の薛河北岸に位置する。付近は平原と丘陵の交接地帯で、遺跡は海抜 300m 以下の平坦な地勢に立地する。４層の堆積が確認され、２層から４層までが北辛文化層に属する。２層上面からは大汶口文化前期に属する柱穴１基、窯跡１基、墓葬１基が検出されている。北辛文化期の遺構は窯跡２基、甕棺葬２基が検出されるのみであるが、遺物は豊富に出土する。

耕作具には、石鏟、貝鏟、収穫具には、打製および磨製石刀、磨製石鎌、貝鎌、加工具には、磨盤、磨棒が挙げられる。石鏟は舌状のものと長条形のものがある。石刀は不定形で打製と磨製とがある。また、鎌形の石刀があるが形態的に石鎌とあまり大差無いようである。いずれも破損しているが、長さは 10cm 程度と思われる。貝鎌は、柄の装着のために端部が鉤状になり直径数㎜の穿孔を施す。磨盤は、大きさは長さ 40～65cm、幅 19～31cm ほどで、平面形が草履形、長三角形、長方形のものがある。なかほどが擦れて窪み、鞍形となる。裏側に２本の足がつくものが１点ある。出土した７点の磨棒は、すべて折れているが端部は擦り減っておらず、復元して 20cm 以上あると思われる。植物遺存体は検出されていないが、鉢形土器の底部にアワの圧痕が確認されている。

大汶口文化期の出土遺物には農耕具は出土していない。

苑城遺跡（第１図３）[17]は、山東省鄒平県苑城村に所在し、北に小清河、西に孝婦河の流れる平原に立地する。1981 年に試掘、1985 年に調査されている。文化層は、北辛文化期に属する。

耕作具には石鏟、加工具には磨盤、磨棒が出土しているが、すべて破片である。しかし、農耕具が報告されている北辛文化期の遺跡は少なく、石鏟などの形態がわかる貴重な遺跡である。遺物の出土数は少ないがその特徴をあげると、石鏟が大型であるということ、磨盤、磨棒の出土数が相対的に多いことである。石鏟は、すべて北辛遺跡でもみられた舌状のものと類似する。

白石村遺跡（第１図４）[18]は、山東省の黄海に面した煙台市の西南の台地上に位置する。文化層は、下層が１期、上層が２期に分期される。１期、

2期ともに山東半島基部の北辛文化期に併行するが、相違点も多く北辛文化の一類型に類型化する場合もある。

耕作具には、打製石鏟、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鏟は扁平な梯形を呈し、研磨はほとんど施されていない。1点のみの出土で詳細はわからないが、他に例が見られないため、山東半島先端部の地域性と考えられる。磨盤は、長さ 55cm×幅 29cm の船底形のものである。その他の遺物に石製網錘、骨鏃、釣針、骨錐などがある。自然遺物に、クロダイ、マダイ、スズキ、フグなど海洋性の魚類が多く出土することから、海洋性魚撈が行われていたことがわかる。

白石村遺跡などの沿岸部の生業では海洋性漁撈の比重が高いことが想定できる。

大墩子遺跡（第1図5）[19]は、江蘇省北部の山東省と接する邳県四戸鎮に所在する。遺跡は、平原の一端にある直径約 250m、比高差 4.3mの円丘上に立地する。1962 年に発見され、63 年に1次調査、66 年に2次調査が南京博物院により行われている。墓地が2次調査も合わせて 344 基検出され遺跡の主体をなしている。

包含層、灰坑出土遺物から、農耕具を抽出した。報告では、時期は大汶口文化前期に属する。耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、貝刀、貝鎌、骨鎌、加工具には、磨棒がある。石鏟は、非常に大型のものがあり、最大で長さ 50cm×幅 25cm の長方形のものがある。骨鎌は、基部が膨らみ穿孔される。農耕具ではないが、土錘が遺物のなかで豊富な出土をみせ注目される。

三里河遺跡（第1図6）[20]は、山東省胶県三里河村に所在し、南河北岸の台地上に立地する。付近は山東半島中央部の平原となだらかな丘陵の続く地域で、多くの河川が胶州湾にそそぐ。文化層の堆積は、大汶口文化後期から龍山文化後期前半まで継続しており、その過渡的状況が確認できる。

大汶口文化後期の耕作具には、石鏟、鹿角鋤、収穫具には、石刀、貝刀、貝鎌、鹿角鎌がある。鹿角鋤の刃部には、使用痕がみられる。石刀は長方形のものである。龍山文化期の耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀がある。

石鏟は、打製の長方形と水滴形がある。打製のものは、未製品ではなく刃部には使用痕がみられる。このことから打製と磨製の両者が存在したことになる。自然遺物には、海産の貝が両期をとおして豊富で、クロダイ、ボラ、イワシなどの海洋性の魚類がある。そのほかにイノシシ、シフゾウが出土する。

尚庄遺跡（第１図７）[21]は、山東省茌平県茌平村に位置する。遺跡は、黄河の沖積平原にあり比高差約３ｍの土崗上に立地する。大汶口文化期の墓地と龍山文化期の集落がある。文化層の時期は、大汶口文化後期に属する。

収穫具には、貝刀がある。龍山文化期の耕作具には、角鋤、収穫具には、石刀、貝刀、貝鎌がある。石鏟は、石鉞と報告されている。石刀、貝刀は長方形と半月形のものとがある。貝刀は、石刀の形態を似せて製作されたと考えられている。

尹家城遺跡（第１図８）[22]は、山東省泗水県尹家城に所在し、泗河支流の河岸の台地に立地する。文化層は、下層から順に、大汶口文化期、龍山文化期、岳石文化期、商周代に分期されている。

大汶口文化期は、墓１基のみで、包含層出土遺物には農耕具はない。龍山文化期の遺構には、住居址 20 基、灰坑 245 基、墓 65 基、炉址などが検出され、遺物も非常に豊富に出土する。

山東龍山文化期の耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、石鎌、貝刀、貝鎌がある。石鏟は、長方形を呈している。刃のある角鋤とされるものも出土する。

岳石文化期では、住居址 11 基のみの検出であるが、遺物は龍山文化期と同様豊富である。この時期、石鏃が新たに出現する。石鏃は、長方形を呈した扁平な石器に方形の孔をもつもので、岳石文化のみに見られる特徴的な耕作具である。

２．黄河中流域

次に、黄河中流域の主な遺跡と出土遺物から農耕具を把握する。

裴李崗遺跡（第１図 14）[23]は、河南省新鄭県裴李崗村に所在する。一帯は伏牛山脈と黄淮平原の境界の台地で、遺跡は双洎河北側の河床から 25m の台地上に立地する。文化層は厚くなく、裴李崗文化層のみの単純遺跡である。磁山文化の内容と類似する点が多いが、特徴的な盂、靴形支脚がないなど相違点のあることから、別の文化として区別されている。

裴李崗文化期の耕作具には、石鏟、収穫具には、石鎌、石刀、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鏟は細長く扁平で、両端は弧状の刃部をなすものが主体である。また、平面靴底形のもの、有肩のものもある。いずれも刃部は弧状か尖状を呈している。石鎌は、平面三角形を呈し、刃部は細かな鋸歯がつき、基部は幅広になり抉りをもつものもある。磨盤は端部の一方が幅広で、もう一方は細まった靴底形のものが多くみられる。また、底に四足がつくことが特徴として挙げられる。磨棒は、棒状の磨り石で磨盤の幅と同じ長さに中央が凹む。磨盤にあてがって使用した結果である。

磁山遺跡（第１図９）[24]は、河北省武安県磁山村に所在する。遺跡は、太行山脈の鼓山山麓に流れる洛河南岸の河床より約 25m 高位の台地上に立地する。文化層は、２期に分期され、上層は商代、下層は磁山文化期である。下層はさらに第１文化層、第２文化層に細分される。第１文化層では灰坑、溝、第２文化層では住居址、灰坑が検出された。80 基の灰坑（貯蔵穴）には、炭化した穀物が 30cm から２ｍの厚さで堆積していた。長さ 1.1m、幅 0.9m、深さ 3.65m の灰坑Ｈ346 では、約１ｍの穀物の堆積がみられる。また、灰坑Ｈ65 出土の炭化物が、アワ（Setaria italica）と同定されている。

耕作具には、石鏟、貝鏟、収穫具には、石刀、石鎌、貝刀、骨刀がある。出土石器のなかで打製石器の占める割合が磨製石器の３分の１にも達する。打製石鏟は、長方形か梯形をしており、形態だけでは石斧と区別しにくいものがある。磨製石鏟は、裴李崗遺跡出土のものと類似する。石鎌は直刃で、基部の形態ははっきりとしないが明確な縄縛の為の加工はないようである。磨盤は平面靴形や長方形を呈したもので、足が３つあるいは４つ施されている。

後岡遺跡（第１図 12）[25]は、河南省安陽市西北 1.5km の恒河南岸の比高差４ｍの微高地に立地する。仰韶文化後岡類型期と龍山文化期の文化層がある。

仰韶文化後岡類型期の耕作具は、石鏟、収穫具には、石刀がある。石鏟、石刀はともに打製と磨製のものがあり、石刀は両側に抉りを入れた長方形のものである。

龍山文化期（後岡二期文化期）については、1979 年の調査に詳しい報告がある。耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、石鎌、貝刀、貝鎌がある。石鏟は、平面長方形あるいは裾が広がるものがあり、器体上部に孔をもつものもある。有孔のものは、黄河下流域（山東龍山文化期）での石鉞の形態と酷似し、刃部は両刃に丁寧に作出されたものである。石刀は磨製の長方形をしたもので有孔と無孔のものとがある。貝刀は、長方形のものと半月形の外湾刃のものがある。磨盤は、図が掲載されていないが、長さ 42cm×幅 30cm の長方形をしたもので、一面のみに研磨痕がみられる。穀物遺存体には、1979 年の調査で、灰坑出土の甑から腐食したアワがみつかっている。

趙窯遺跡（第１図 10）[26]は、河北省武安県趙窯村に所在する。周囲は丘陵や河川が縦横する盆地で、遺跡は盆地中央の洛河西岸の台地上に立地する。２つの文化層は仰韶文化期、商周文化期で、仰韶文化期は、下層、上層と分層されているがどちらも後岡類型期に属する。

仰韶文化期の耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、石鎌、貝刀がある。石鏟は大型で方形のもの、上端が凹状に窪むものがみられる。石刀は、平面形が長方形、楕円形、半月形とある。

大河村遺跡（第１図 13）[27]は、河南省鄭州市大河村に所在する。付近は遺跡が密集する地域で新石器時代の遺跡だけでも 25 カ所確認されている。遺跡一帯は、黄河が黄堆平原に注ぐ扇頂にあたるゆるやかな平原である。文化層は６期あり、仰韶文化期から龍山文化期への過渡期の状況も、1971 年の調査で初めて把握された。６期に区分された文化層は、第１期から第４期

までが仰韶文化期で、第５・６期が廟底溝二期文化期・龍山文化期である。

仰韶文化期の遺物は、仰韶文化後期の第４期のみ報告がある。耕作具に石鏟、骨鑿、収穫具に石鎌、石刀、貝刀が挙げられる。石鏟は長方形のものと有肩のものがあり、第５・６期の石鏟と形態的に同じである。報告されている石鎌は長方形の平背直刃の石刀と非常に似たものである。孔が擦り切りにより穿孔されている石刀が出現する。第５・６期では、耕作具に石鏟、収穫具に、石刀、貝刀、貝鎌がある。石刀、貝刀ともに孔を２つもつ、長方形で平背直刃のもので、形態的に同一である。

中山寨遺跡（第１図 17）[28]は、河南省汝州市紙坊郷に所在する。汝河の北岸のなだらかな地形に立地し、付近は約１ｍで湧水するほど地下水位が高いところである。堆積は 1.5ｍほどで厚くはなく、切り合いなどから文化層は５期に分期され、第１期が裴李崗文化期、第２・３期が仰韶文化廟底溝類型期、第４期が仰韶文化後期（秦王寨類型期）、第５期が大河村類型（廟底溝二期文化期併行）に比定されている。

第１期の耕作具には、石鏟、収穫具には、石鎌、加工具には、磨盤、磨棒がある。裴李崗文化期に典型的な農耕具の組成である鋸歯刃の石鎌、石鏟、磨盤、磨棒がそろって出土する。しかし、他の遺跡の墓とは異なり、出土した４基の墓にこれらの遺物が副葬されることはない。

第２・３期の仰韶文化廟底溝類型期（中期）の耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、石鎌、貝刀、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鏟は、１期の形態とは異なり長方形を呈したものである。石鎌は、鋸歯状の刃部を残したものがみられるが、収穫具は石刀が主体を占めるようになる。石刀は打製の楕円あるいは長方形の平背直刃のもので、多くは両側に抉りをもつ。第４期の仰韶文化後期の耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、陶刀がある。第５期の遺物は少なく骨鑿、紡錘車のみである。

王城崗遺跡（第１図 18）[29]は、河南省登封県告成鎮に所在する。告成鎮は淮河の支流のひとつである潁河により形成された河谷盆地にあり、遺跡は潁河支流五渡河の西岸の崗上に立地する。周囲より 1～2ｍ高く、遺跡総面

積は１万㎡以上とされる。文化層は長期に渡って形成されており、遺構の切り合いから裴李崗文化期、龍山文化期、二里頭文化期、二里崗文化期、商代後期、周文化に区分され、龍山文化期は５期、二里頭文化期は４期、二里崗文化期は上下層に細分されている。王城崗龍山文化期のうち、１・２期は龍山文化中期末、３・４・５期は龍山文化後期に比定されている。龍山文化２期から城壁が築造され始めている。東西の二城にわかれ、東城は残存 65m×残存 30m、西城は 92m×残存 82.2m の規模である。調査区は、城壁内を中心的に設定されている。龍山文化期の遺構は灰坑に限られるが、２期に奠基坑が 13 基検出されている。

裴李崗文化期の遺構、遺物は少なく、農耕具は出土していない。

龍山文化期の耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、石鎌、陶刀、貝刀、貝鎌がある。石鏟は、平面が長方形のもの、有肩のものがあるが、そのほとんどに１つないし２つの孔をもつ。また、その孔を縦に横切るように浅い溝をもつものがあり、柄を縦に装着したことがわかる。石刀は、王城崗龍山文化の５期を通じて長方形の平背直刃のものが主体を占める。石鎌とされているものは、破片が多く器体基部に柄との装着をしめす加工はないが、わずかに鋸歯状の刃部をもつものもある。王城崗龍山文化４期に属する灰坑出土の鼎のなかに約 500ｇの炭化したアワがある。

陶寺遺跡（第１図 19）[30]は、山西省、汾河中流の襄汾県の東北約 15km に位置する。遺跡は、塔儿山の西面する緩やかな丘陵上に立地する。龍山文化陶寺類型に属する。

耕作具には、石鏟、骨鏟、収穫具には、石刀、貝刀がある。石鏟は、長方形のものと有肩で弧刃のものとがある。

王油坊遺跡（第１図 20）[31]は、河南省永城県の東 30km に位置する。付近は古黄河と淮河とが流れ、遺跡は沖積平野の小丘上に立地する。周囲には堌堆と呼ばれる小丘があり、ほかに造律台遺跡、黒堌堆遺跡など、この小丘上に立地する遺跡が多い。文化層は下、中、上層に分層されている。王油坊類型の標式遺跡である。

耕作具には、貝鏟、角鋤、収穫具には、石刀、貝刀がある。石鏟と報告される石器が２点出土するが、１点は刃先のみでもう１点は石器の上部に穿孔のあとがみられ、平面形と合わせてみると石鉞と考えられる[32]。角鋤は、柄の長さが約 55cm あり、刃部には使用の痕跡がある。貝刀は、長さが 10～13cm ほどの外湾刃のもので、無孔のものと２孔穿孔のものとがある。また、管状土錘が遺跡全期を通じて豊富に出土する。王油坊類型は、黄河中流域のなかでも山東半島や淮河流域に近い。王油坊遺跡では、貝鏟や石鉞がみられることや漁撈具である骨角製ヤス、網錘、鏃の出土が多く、合わせて巻き貝、二枚貝あるいは魚骨が豊富にみられることなど山東龍山文化の影響をうかがわせる。

３．渭水流域

渭水流域の主な遺跡と出土遺物から農耕具について把握する。

白家村遺跡（第１図 21）[33]は、陝西省臨潼県の北約 25km に所在し、渭水南岸の台地上に立地する。文化層は白家村文化の前期、後期に分期されている。

耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、貝刀、貝鎌、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鏟は扁平で長方形を呈し、刃は尖状と弧状のものとがある。貝刀は、複数の孔をもち鋸歯状の刃のものである。磨盤は、破片のみであるが、平面形を復元すると長方形を呈し、中ほどが窪むものとされる。

大地湾遺跡（第１図 27）[34]は、甘粛省秦安県の閻家河と清水河の合流する南岸の河岸段丘上に立地する。文化層には、大地湾一期文化期、仰韶文化前期（半坡類型）、中期、後期の４期がある。大地湾一期文化期の農耕具には、石刀が確認されるのみである。

仰韶文化前期の耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、陶刀がある。石鏟は長条形のものと有肩のものとがある。石刀は長方形で、両端に抉りをもつものと有孔のものとがある。有孔のもので孔を擦り切りにより穿孔している

ものもみられる。陶刀は、出土数が石刀 17 点に対し、209 点と非常に多い。

北首嶺遺跡（第１図 28）[35]は、陝西省宝鶏市北首嶺に所在する。関中盆地西部の渭水北岸の河岸段丘に立地し、一帯は 10～15mの黄土が堆積する沖積平原である。仰韶文化半坡類型期の２回の調査で住居 50 軒、灰坑 75 基、窯址４基、排水溝２条、墓 451 基が検出されている。住居址は環状にならび、その外側を墓群が取り囲んでいる。環濠は検出されていないが、環濠集落である陝西省姜寨遺跡１期の遺構配置と共通する。住居址内から遺物が多く出土し、なかでも磨盤と磨棒の共伴例が多い。

耕作具には、石鏟、骨鏟、角製鋤、収穫具には、石刀、陶刀、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鏟は舌状を呈す。石刀は長方形で有孔のもの、陶刀は長方形で両側に抉りをもつものがある。動物遺存体の鑑定報告があり、ブタ、イヌ、ニワトリが家畜として考えられる。

李家溝遺跡（第１図 26）[36]は、陝西省銅川市李家溝に所在し、付近は関中盆地の北側の山麓沿いで、遺跡は石川河東岸の川岸段丘上に立地する。文化層は３期に分期され、１期が仰韶文化半坡類型期、２期が仰韶文化廟底溝類型期、３期が仰韶文化後期である。

１期の耕作具には、石鏟、収穫具には、長方形の石刀がある。２・３期は１期と変化ないが、陶刀が加わる。

半坡遺跡（第１図 24）[37]は、陝西省西安市半坡村に所在し、灌河東岸の台地上に立地する。遺跡は環濠に囲まれた住居群とその外側の墓地の配置からなる。４層からなる約３ｍの文化層は前期・後期に大別され、文化層は仰韶文化半坡類型と類型化されている。

耕作具には、石鏟、石鋤、収穫具には、石刀、陶刀、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鋤は、刃部が尖状の棒状のものである。石刀、陶刀ともに長方形で両側に抉りのあるものと有孔のものとがある。磨盤は大型で長方形を呈したものである。

姜寨遺跡（第１図 22）[38]は、陝西省臨潼県姜寨村に所在する。付近は渭水に流れ込む河川が多く、遺跡は渭水南側の石甕寺水東岸の台地に立地する。遺跡は、仰韶文化期から客省庄二期文化期までほぼ継続して営まれた集落遺跡である。文化層は、１期が仰韶文化半坡類型期、２期が仰韶文化史家類型期、３期が仰韶文化廟底溝類型期、４期が西王村類型期、５期が客省庄二期文化期の５期に分期されている。

１期は、環濠集落と墓地により構成され、環濠は直径約 150m で内側に住居群と広場が配置される。１期の耕作具では、石鏟、収穫具には、石刀、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鏟は舌状もしくは逆三角形を呈し、なかには器身上部に縦方向の溝があるものがある。柄が石器と平行に装着されていたことがわかる。石刀は長方形と紡錘形があり、長方形のものには両側に抉りをもつものがある。磨盤は、ほぼ長方形を呈し、鞍形、皿形のものがある。

２期、３期は集落の中心が移動したためか、遺構、遺物が極端に少ない。そのため、農耕具の状況は把握できない。

４期の耕作具には、石鏟、骨鏟、収穫具には、石刀、陶刀がある。石刀と陶刀は、長方形で両側抉りのものと有孔のものがあり、陶刀は鉢や罐の破片を再利用したものである。５期の耕作具には、石鏟、石鋤、収穫具には、石刀、陶刀がある。石鋤は長さ約 15cm×幅約４cm の長条形をしたものである。

また、２期出土の鉢にキビが残存していた。

康家遺跡（第１図 23）[39]は、陝西省臨潼県相橋郷新李村に所在する。遺跡は渭水の南側約 4.5km の平原に位置する。方形の平地式住居址と複数の部屋をもつ平地式住居址、灰坑などからなる集落遺跡である。客省庄二期文化期の内容が現在あまり把握されていないなか、遺構、遺物ともに貴重な資料を提示する遺跡である。

耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、石鎌、貝刀がある。石刀は、磨製で長方形のもので両側にえぐりのあるものと有孔のものとがある。

双庵遺跡（第１図 25）[40]は、陝西省岐山県双庵村に所在する。客省庄二期文化期の住居址、窯址、墓などが発掘されている。康家遺跡と並んで当期

の数少ない集落遺跡のひとつである。

耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、陶刀がある。石鏟は長方形をしており、打製と磨製とがある。石刀は長方形で、両側に抉りのあるものと有孔のものとがある。

4．漢水上中流域

漢水上中流域の主な遺跡と出土遺物から農耕具について把握する。

李家村遺跡（第1図29）[41]は、陝西省西郷県葛石郷李家村に所在し、漢水支流牧馬河右岸の河床から2～3mの第一河岸段丘に立地する。遺跡は3層の文化層があり、最下層の李家村文化期では、住居址1軒、灰坑41基、窯址1基、墓3基が調査されている。石器は、磨製89点、打製134点、その他23点と打製石器が5割以上を占める。

耕作具には、石鏟、収穫具には、石刀、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鏟は、磨製と打製とがある。石刀は打製で、片面に剥離面を残した楕円形のものである。磨盤は大型で、ほぼ長方形をしたものである。

何家湾遺跡（第1図30）[42]は、西郷県板橋郷何家湾に所在し、漢水支流牧馬河の第二河岸段丘に立地する。李家村文化期、仰韶文化半坡類型期、仰韶文化廟底溝類型期、龍山文化期[43]の4期に分期される。

李家村文化期の耕作具には、石鏟がある。収穫具、加工具は出土していない。仰韶文化半坡類型期の耕作具には、石鏟、石鋤、収穫具には、石刀、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鋤は打製で、なで肩の有肩のものである。石刀は、磨製で長方形を呈するが形がはっきりしない。

仰韶文化廟底溝類型期の耕作具には、石鏟、石鋤がある。半坡類型期のものと変化ない。龍山文化期では農耕具は出土していない。

下王崗遺跡（第1図31）[44]は、河南省淅川県下王崗村に所在し、漢水支流の丹江沿岸の台地上に立地する。台地のほぼ全域にわたり調査され、文化

層は下層から仰韶文化期、屈家嶺文化期、龍山文化期[45]（石家河文化期）、二里頭文化期、西周文化期が分期されている。仰韶文化期は、3期にさらに細分されている。1期は仰韶文化半坡類型期、2期は仰韶文化廟底溝類型期である。3期は仰韶文化後期で、屈家嶺文化の豆、鼎などがみられることから過渡期と考えられている[46]。

仰韶文化期の耕作具には、石鏟、石耜、骨鏟、収穫具には、石刀、石鎌、加工具には、磨盤、磨棒がある。石鏟は長方形を呈し、有孔のものと無孔のものとがある。石刀は磨製で、楕円形のものである。石鎌は細かな鋸歯状の刃をもつ。磨盤は大型で長方形を呈し、中ほどが擦れて窪んでいる。屈家嶺文化期の収穫具には、石刀、石鎌がある。石鎌は、直刃あるいは内湾刃のものがある。龍山文化期（石家河文化期）の収穫具には石刀、石鎌に、貝刀が加わる。イネ遺存体も出土している。

青龍泉遺跡（第1図32）[47]は、湖北省鄖県青龍泉に位置し、漢水北岸の河床から約 18mの河岸段丘上に立地する。文化層の時期には仰韶文化期、屈家嶺文化期、青龍泉三期文化期（石家河文化期）がある。屈家嶺文化期には、平地式住居址が連結した所謂長屋式住居が出土している。

仰韶文化期の耕作具には石鏟、収穫具には石刀がある。石刀は長方形のもので精緻なつくりである。使用痕が刃部に平行につくものが多い。

屈家嶺文化期の耕作具には打製石鋤、収穫具には石刀がある。打製石鋤はすべて有肩のものである。周縁を加工し成形する。また、片面に礫面を広く残すものがある。また、住居址出土の紅焼土から多くのイネ籾の圧痕が検出されている。

石家河文化期の耕作具には石鋤、収穫具には石刀がある。屈家嶺文化期のものと変化ない。屈家嶺文化期への移行にみられる打製石鋤などの打製石器が急増する。この打製石器は長江中流域に特徴的な石器であり、屈家嶺文化期に漢水上中流域にまで分布域が拡がる。

5．長江中流域

長江中流域の主な遺跡と出土遺物から農耕具について把握する。

彭頭山遺跡（第１図 33）[48]は、湖南省沣県大坪郷に所在し、沣陽平原の微高地に立地する。出土の焼土塊には多くの稲籾殻と稲藁の痕跡があり、土器の胎土にも籾殻が混入していた。年代は B.C7000～5500 と報告されている。

遺物は豊富に出土しているが、耕作具や収穫具に相当する遺物はない。土器は罐と鉢が基本的な器種であり、罐が煮沸具と考えられる。

石門皀市遺跡（第１図 34）[49]は、湖南省石門県に所在する。彭頭山文化期には時期的に少し遅れる皀市下層文化期に属す。この皀市下層文化は、湖南省北部に主に分布する。

耕作具や収穫具に相当する遺物は出土していない。他の皀市下層文化の遺跡でもまだ出土をみないが、木製農耕具の使用の可能性が考えられる。

胡家屋場遺跡（第１図 38）[50]は、湖南省臨澧県に所在する。文化層は皀市下層文化に属する。胎土中にイネ籾が混入していた支脚が出土している。

農耕具に相当する遺物の出土はない。

城背溪遺跡（第１図 35）[51]は湖北省宜都県に所在する城背溪文化の標式遺跡である。彭頭山文化や皀市下層文化の分布する洞庭湖西側地域に対して、城背溪文化の遺跡は湖北省西部に主に分布する。

耕作具、収穫具の出土はない。石斧類のほか、石英製の打製スクレイパー類が出土している[52]。城背溪文化の遺跡には、ほかに同省朝天嘴遺跡[53]や同省孫家河遺跡[54]などがあるが、いずれも耕作具、収穫具はみられない。

中堡島遺跡（第１図 37）[55]は、湖北省宜昌県三斗坪鎮に所在する。長江に浮かぶ東西約 1000m・南北 300～400m の中洲に立地する。文化層の時期

には、大渓文化期、屈家嶺文化期、二里頭文化期がある。大渓文化に属する6層からは、アオウオやハクレンなどの大型魚類を大量に含む、厚さ 10～30 cmの魚骨層を検出している。

大渓文化期の耕作具には打製石鋤、収穫具には石刀がある。加工具には棒状の端部に使用痕がつく石杵が出土しているが、穀物利用に限定するよりも多目的な道具と考えられる。

続く屈家嶺文化期でも、農耕具組成は変わらない。耕作具には、打製石鋤、収穫具には、石刀がある。二里頭文化では打製石鋤は出土していないが、石刀は存続する。遺物の中で石器が非常に豊富で、しかもその多くは打製品である。大渓文化層で 3424 点、屈家嶺文化層で 850 点、二里頭文化層で 145 点出土する。しかし、大渓文化三期の文化層から、磨製石器の量が増加し、また石器は時期を追うごとに定型化する傾向にある。

屈家嶺遺跡（第1図 39）[56]は、湖北省京山県に所在する。屈家嶺文化の標式遺跡である。遺跡は、早・後期に区分されるがどちらも屈家嶺文化期に属する。

耕作具には打製石鋤、収穫具には石刀、石鎌が出土する。石刀は、磨製の長方形有孔石刀である。

栗山崗遺跡（第1図 40）[57]は湖北省麻城県に所在し、周囲が平原の微高地に立地する。前期遺存は墓地を中心にし、後期遺存は焼土面や積石遺構を伴う集落址である。どちらも石家河文化期に属する。

耕作具の出土はないが収穫具である石刀と石鎌がある。石刀は、単孔の長方形と半月形とがある。半月形のものは直刃である。煮沸具の鼎は夾砂陶で、釜形と罐形とがある。

6．長江下流域

最後に、長江下流域の主な遺跡の出土遺物から農耕具について把握する。

河姆渡遺跡（第１図 41）[58]は、浙江省余姚県に所在し、杭州湾南岸の四明山と慈渓山の間の幅狭い河川平原に立地する。付近は南から伸びる丘陵と姚江がつくる沖積平野の接するところである。文化層は４期に分期される。第三・四文化層をもって河姆渡文化と設定されている。四層以下は、青灰色の海成の粘土層である。

耕作具には、骨耜、木耜がある。骨耜はウシの肩甲骨を用いたもので、木耜は長さ 16 ㎝、幅 5.3 ㎝、厚さ 1.5 ㎝の身と方柱状の柄を持つものである。第二文化層出土の木耜は、長さ 36 ㎝、幅 16.5 ㎝、厚さ 1.5 ㎝で、上方に２つの長方形の孔がつく。また、この時期より２孔長方形石刀が出土するようになる。煮沸具には、釜がある。釜の肩部には一周する突帯がめぐり、底は丸底である。支脚と組み合わせて使用される。

羅家角遺跡（第１図 42）[59]は、浙江省桐郷県羅家角村に所在する。嘉興平原の中ほどにあり、海抜５ｍの低地である。四層と三層が馬家浜文化前期に属する。

耕作具には、骨耜がある。収穫具には、石刀と石鎌が出土する。石刀は不定形である。石鎌には、柄にわずかにくびれがみられる。いずれも長江下流域では、最古の収穫具である。調理具には突帯がめぐる釜と甑があり、河姆渡文化の釜と類似する。

圩墩遺跡（第１図 43）[60]は、常州市圩墩村の微高地に立地し、遺跡の範囲は約 20 万㎡と相当広く分布する。下層は馬家浜文化期、中層は馬家浜文化期から崧沢文化期への過渡期、上層は崧沢文化期である。

下層の耕作具には、木耜がある。わずかに身が残る程度であるが、両面を削り扁平に成形され刃部は薄い。収穫具には、打製の長方形石刀が１点出土する。ラッパ形木器と報告される木器が１点出土する。上部はすぼまり一周する溝がある。下部はラッパ状に開いており、底部には使用の痕跡が残る。木杵と考えられる。

龍南遺跡（第１図 45）[61]は、江蘇省呉江県梅堰鎮に所在する。遺跡は太

湖東辺の低地にあり、現在は水田である。第一期は崧沢文化期から良渚文化過渡期、第二・三期は良渚文化期で、崧沢文化期から良渚文化期への変化の状況がわかる遺跡である。

第一期には遺構の検出はなく、収穫具の三角形石刀のみ出土する。第二期は、住居址、貯蔵穴、墓地の良好な遺構が検出されている。耕作具には破土器がある。これは有柄石斧と報告されているが、破土器と形態的に非常に類似するものであり、破土器と考える。収穫具には石鎌がある。

第三期も住居址、灰坑、河道、墓地が検出され、良渚文化期を通して集落を形成していた。耕作具には、石犂、耘田器がある。収穫具には、石鎌、靴形刀がある。また、粳稲、籾稲のイネ遺存体が出土している。

銭山漾遺跡（第１図 44）[62]は、湖州市より南に７kmに位置する。太湖周辺の河川による沖積平野に立地する。下層は良渚文化期に相当する。

耕作具には木耜、石犂、耘田器、収穫具には石刀、石鎌がある。石刀は長方形と半月形で、石鎌は柄部が比較的長い特徴的なものである。このほか、全長 118.5 cmの木杵が１点出土している。

広富林遺跡（第１図 46）[63]は、上海市に所在する。地下水位の高い沖積平原に立地する。灰坑と墓地が発掘されており、それらの時期は良渚文化期に属する。

耕作具には、石犂、耘田器、破土器がある。石犂は、ほぼ正三角形を呈し３孔をもつ。収穫具には、石刀と石鎌がある。石刀は、直刃で単孔の半月形のものである。

第三節　農耕具組成の時期的変遷と農耕形態

１．地域別農耕具組成の画期とその特徴

第二節でみてきた各流域での農耕具と農耕具組成について、時期的な変遷を考察するとそれぞれの流域でいくつかの画期を見出すことができる。本節

では、画期とその特徴についてみていくことにする。

1．1．黄河下流域（第2図）

黄河下流域では、以下の3期に画期が見出せる。

後李文化期・北辛文化期

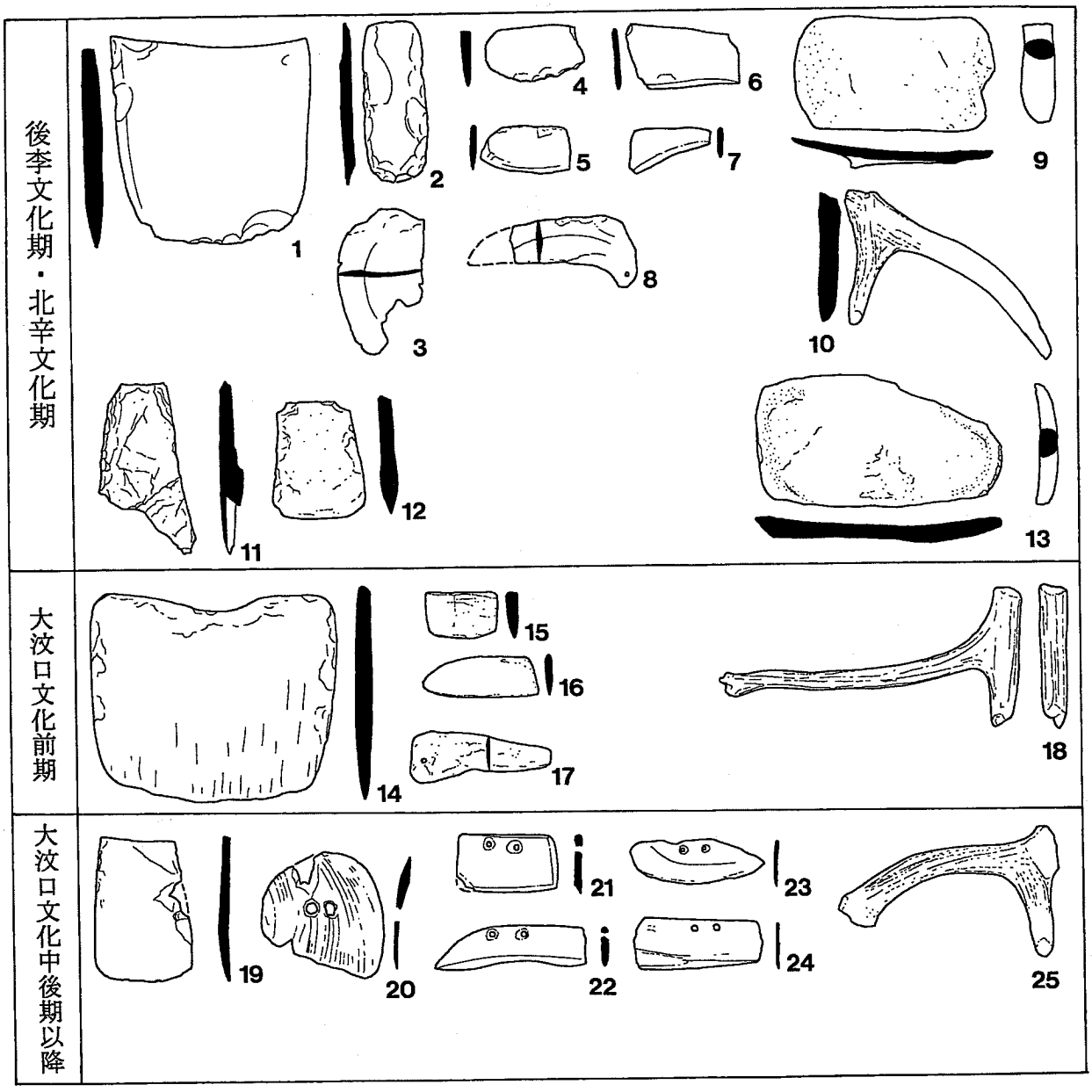
耕作具は、石鏟、貝鏟である。貝鏟には長軸に直交して、平行に2つ孔を持つものもある。収穫具は、北辛遺跡で石刀、石鎌、貝鎌があるが、他の遺跡においても出土数は基本的に多くない。また、黄河下流域で石刀が出土する遺跡は他に孫家山遺跡のみである。貝刀・貝鎌は、ハマグリなど大型の海産の二枚貝が使用される。加工具には、磨盤と磨棒がセットで備わる。底が船底形をしたものが多いが、裴李崗文化にみられる有足のものもある。磨盤と磨棒に関しても出土は少なく、北辛遺跡・苑城遺跡・小荊山遺跡で出土をみるのみである。

大汶口文化前期

北辛文化期につづいて、大汶口文化期でも耕作具は石鏟である。収穫具には、北辛文化では長方形の石刀のみであったが、半月形の石刀が加わる。また、貝刀や貝鎌が普遍的に使用されるようになる。こうした北辛文化期からの状態が続くことに対し、加工具である磨盤の形態が変化する。灌雲大伊山遺跡で磨盤とされる破片が出土している。残存長 24 ㎝、幅 20 ㎝の楕円形をしており、中央に幅 5.6 ㎝、深さ 1.6 ㎝の溝がある。北辛文化のものと比べて形態的に異なっている。また、足の付く磨盤も出土しなくなる。

大汶口文化中後期以降

耕作具の、石鏟に大きな変化が生じる。大墩子遺跡にみられた舌状あるいは方形の石鏟は、大汶口文化中後期以降出土しなくなる。これに代わって、尹家城遺跡出土の石鏟に代表される長方形を呈した石鏟と有肩石鏟に変化する。石刀は、この期になると長方形・半月形・不定形とさまざまな形態の



第２図　黄河下流域の農耕具組成の変遷

北辛遺跡（1.2.石鏃　3.貝鏃　4.5.石刀　6.7.石鎌　8.貝鎌　9.磨盤・磨棒　10.角鋤）

白石村遺跡（11.12.石鏃　13.磨盤・磨棒）

大墩子遺跡（14.石鏃　15.16.石刀　17.骨鎌　18.角鋤）

尹家城遺跡（19.石鏃　20.貝鏃　21.22.石刀　23.24.貝刀　25.角鋤）

（Scale＝1/6　ただし、磨盤・磨棒は1/15）

ものが出現し、分布においても偏りは見られない。磨盤・磨棒は、山東龍山文化期の司馬台遺跡[64]と城子頂遺跡[65]で出土が報告されているが、形態から見ると磨臼と報告される石器と同一である。鞍形すりうすの系譜とは異なる。この時期には農耕具組成で磨盤・磨棒の有無において、大汶口文化前期までとは農耕具の様相は異なる。しかし、大汶口文化中後期以降、基本的に変化しない。山東龍山文化期に後続する岳石文化期に石鑊が加わることは、次の新たな画期となる。

1．2．黄河中流域（第3図）

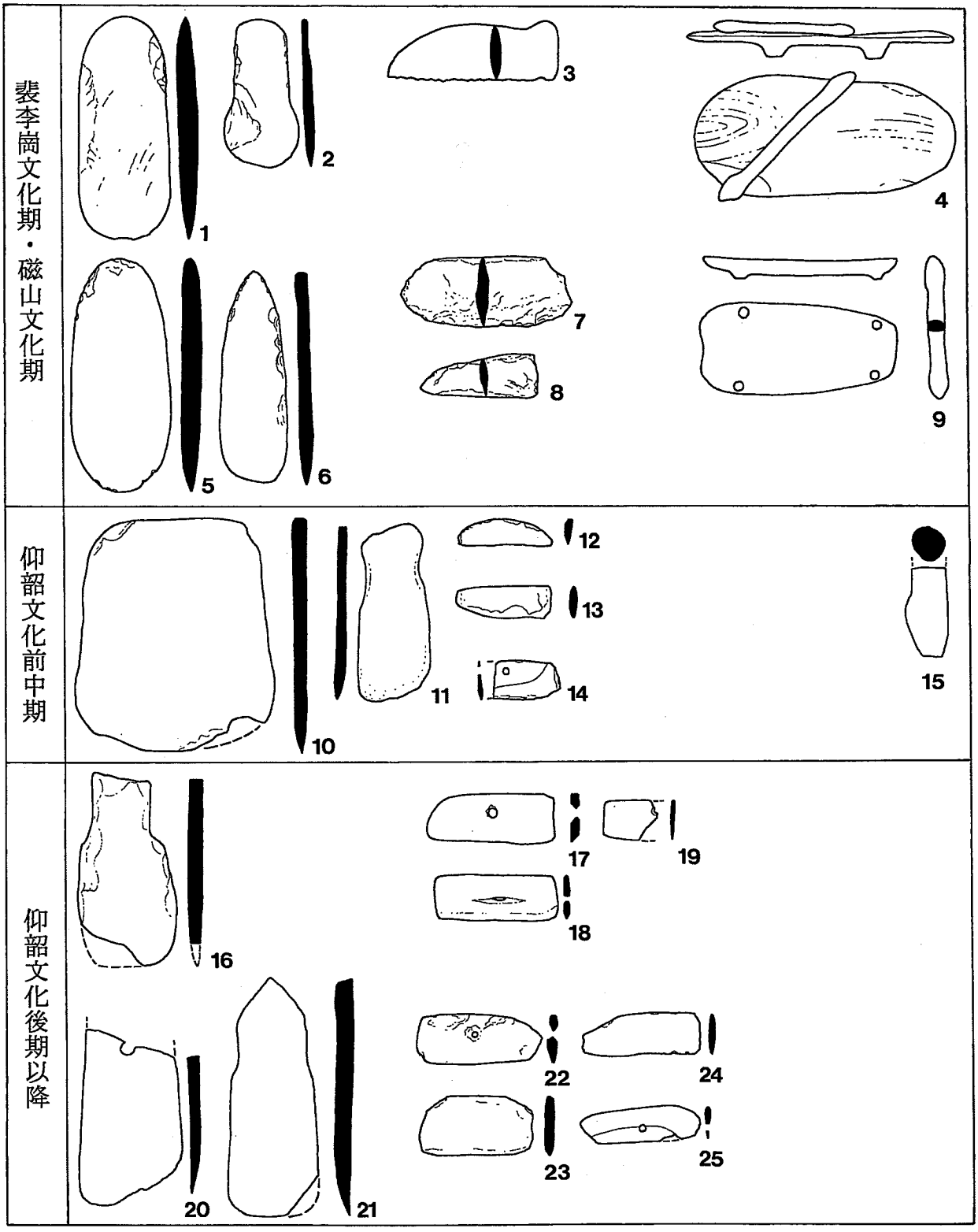
黄河中流域では、以下の3期に画期が見出せる。

裴李崗文化期・磁山文化期

裴李崗文化期併行では、耕作具、収穫具、加工具ともに整った形態を呈していることが特徴的である。耕作具の石鏟は、長条形のものと有肩のものとがある。長条形のものは、刃部は片方だけのものと両端に持つものとがあり、刃部形状は弧状を呈す。有肩のものは柄部、肩部ともに丸みを持ったものである。収穫具には、石鎌、石刀、貝刀がある。石刀は打製で長方形を呈しており、新石器時代で最も古い出土である。石鎌は鋸歯状の刃部をもつ。加工具には磨盤・磨棒がセットとしてある。磨盤は細かく成形されており、足を持つことは特徴的である。これは、鋸歯刃の石鎌同様、裴李崗文化のみに見られるもので極めて地域性の強い形態といえる。

農耕具組成は裴李崗文化や磁山文化の時期に整い、それから基本的に組成は変化する事はない。仰韶文化後半以降、磨盤・磨棒は減少するものの、この地域で新たな農耕具の出現や機能分化は認められない。このことは、裴李崗文化期に雑穀作における農耕具はすでに出揃っていたことになる。

こうした農耕具組成とそれぞれに特徴を持った農耕具は、裴李崗文化期の遺跡に基本的にみられ、裴李崗文化期初現期から成立している。河南省長葛石固遺跡[66]の土器組成と農耕具組成の変化を比べてみる。石固遺跡の文化層は8期に分期され、Ⅰ期からⅣ期までが裴李崗文化、Ⅴ期からⅧ期までが



第３図　黄河中流域の農耕具組成の変遷

裴李崗遺跡（1.2.石鏃　3.石鎌　4.磨盤・磨棒）　磁山遺跡（5.6.石鏃　7.石刀　8.石鎌　9.磨盤・磨棒）

趙窯遺跡（10.11.石鏃　12.13.石刀　14.石鎌　15.磨棒）　大河村遺跡（16.石鏃　17.18.石刀）

王城崗遺跡（20.21.石鏃　22.23.石刀　24.石鎌　25.貝刀）　（Scale＝1/6　ただし、磨盤・磨棒は1/15）

仰韶文化で、裴李崗文化の細分と裴李崗文化から仰韶文化への変遷の状況が把握されている。土器組成は壷、鉢、罐、三足鉢から、遺跡Ⅲ期に碗、豆、鼎が増え、画期がある。一方、農耕関係遺物においては、遺跡Ⅰ期より石斧、石鑿、石鏟、石鎌、磨盤、磨棒が揃っており、形態的にも変化することはない。このことは、裴李崗文化の農耕形態が初期段階から整っていたことを示している。

また裴李崗文化の農耕具について、副葬の仕方に特色があることを述べておく。河南省郟県水泉遺跡[67]では豊富な墓地が検出されている。裴李崗文化層は、切り合いより３期に分期され、うち２期が墓120基など主体となる。本報告には120基の墓すべての報告があり、その内容が把握できる点で重要な遺跡の一つでもある。農耕関係遺物の副葬には、いくつか傾向が見いだせる。墓は、長方形の竪穴土壙墓で通常単人葬である。石鏟が副葬される場合は１点ずつで、ほとんどが石斧や石錛・石鑿と共伴する。また、石鏟は遺体の必ず足元に、石鏟の長軸を墓坑あるいは遺体とほぼ平行におき、副葬される。磨盤・磨棒は、すべてセットで副葬され、土器以外の遺物と副葬されることはほとんどない。このような傾向は、他地域にはない状況で、裴李崗文化の特色といえる。

仰韶文化前中期

裴李崗文化の形態的に整った農耕具とその組成は、仰韶文化期に入り断絶する。耕作具は、石鏟が主体をなすことには変わりないが、形態に連続性はない。代わって、方形あるいは舌状の石鏟が出現する。収穫具でも石鎌は出土が減少し、磨製長方形石刀が出現し主体的になる。石刀には、孔を持つものや両端に抉りを持つものがあるほか、孔を磨り切りによって穿孔するものもみられるようになる。加工具は磨盤・磨棒があるが、楕円形あるいは長方形を呈した鞍形のもので、裴李崗文化期に出土する形態とは異なる。

仰韶文化後期以降

耕作具は石鏟が主体であるが、長方形のものと有肩のものとに大別され、方形のものは出土しなくなる。後岡二期文化期の王城崗遺跡出土の石鏟には、

孔をまたいで縦方向の溝がみとめられ、柄の装着方法[68]が推定できるものがある。この時期までには、磨盤・磨棒は激減する。また、貝製の収穫具が増加し始める。

1．3．渭水流域（第4図）

渭水流域では、以下の3期に画期が見出せる。

白家村文化期

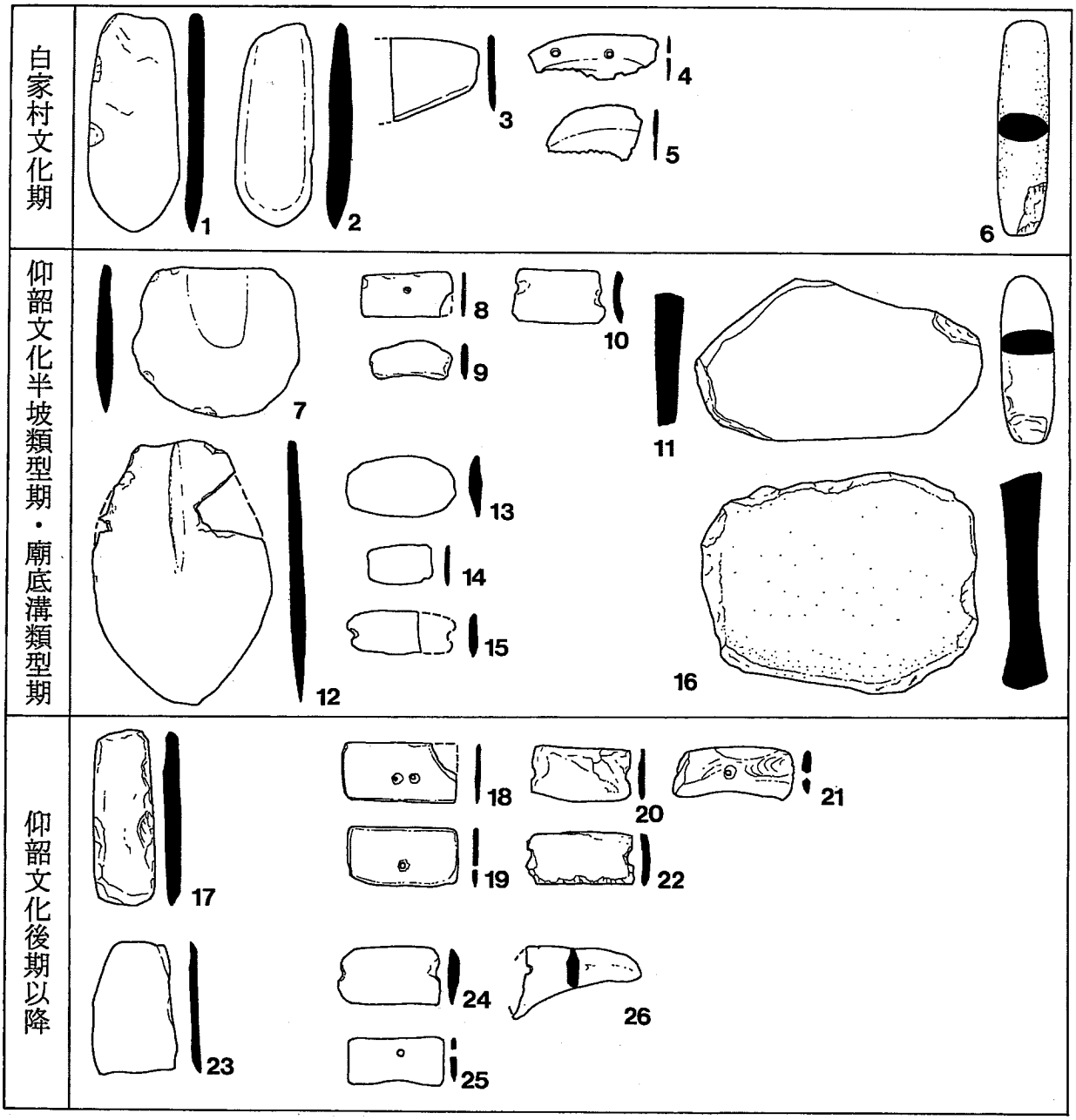
耕作具には石鏟を用い、形態は黄河中流域の裴李崗文化期に出土する石鏟に類似する。しかし、有肩石鏟は出土していない。収穫具で、注目されるのは、貝刀である。複数の孔を持ち刃部は鋸歯状に加工されている。石鎌の出土はまだなく貝製収穫具に鋸歯が付くことは、併行する裴李崗文化との関係において興味深い。加工具に磨盤・磨棒がある。中ほどが凹む鞍形のものであるが、特に整った形態を示すものではない。

仰韶文化半波類型・廟底溝類型期

耕作具の石鏟には、刃部が三角形あるいは弧状を呈した平面舌状のものが加わる。しかし、この舌状の石鏟は、仰韶文化後期以降出土せず、長方形のもののみになる。収穫具は、陶刀の出土が目立つ。石刀と並んで陶刀の出土量が豊富で普遍的に使用されたことが分かる。磨盤・磨棒は、白家村文化期と形態的には変化しない。

仰韶文化後期以降

耕作具の石鏟は、舌状のものから完全に長方形を呈した石鏟に変わり、小型化する傾向にある。収穫具には、石刀、陶刀、貝刀、石鎌があるが、陶刀の出土量が減ることが特徴としてあげられる。仰韶文化後期以降、形態及び組成は、特に変化することはない。



第４図　渭水流域の農耕具組成の変遷

白家村遺跡（1.2.石鏃　3.石刀　4.5.貝刀　6.磨棒）

北首嶺遺跡（7.石鏃　8.9.石刀　10.陶刀　11.磨盤・磨棒）

姜寨遺跡（12.石鏃　13～15.石刀　16.磨盤・磨棒）

双庵遺跡（17.石鏃　18～21.石刀　22.陶刀）

康家遺跡（23.石鏃　24.25.石刀　26.石鎌）

（Scale＝1/6　ただし、磨盤・磨棒は1/15）

１．４．漢水上中流域（第５図）

漢水上中流域では、以下の２期に画期が見出せる。

李家村文化期・仰韶文化期

土器の形態により類型化された李家村類型は農耕具においては、渭水流域の老官台文化と異なることはない。しかし、貝製の収穫具の出土はない。仰韶文化期も同様に、渭水流域の内容と異なることはない。

屈家嶺文化期以降

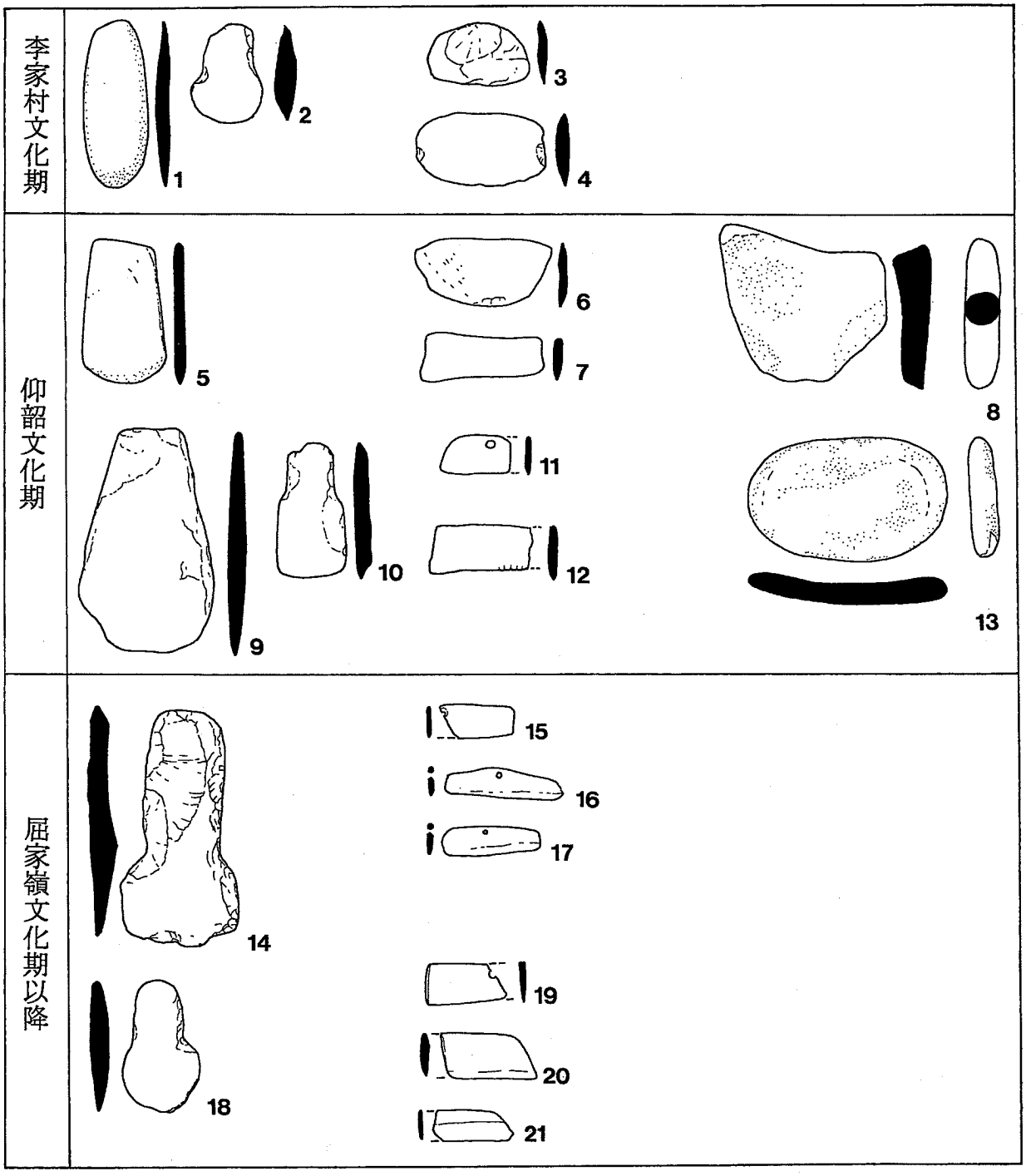
屈家嶺文化期に入ると石鏟が消滅することが注目される。これまで、主体となる耕作具に石鏟を用いていた地域で、屈家嶺文化の北進に伴い姿を消す。これに代わって打製石鋤と称される石器が出現する。その多くは有肩で石鏟とは製作技法から形態に至るまで大きく異なる。打製石鋤が機能的に石鏟に代わるものかどうかは今後の課題だが、石鏟が全く出土しなくなることは大きな意味を持つ。加工具も同様に出土しなくなる。しかし、収穫具においては、このような変化はみられない。

１．５．長江中流域（第６図）

長江中流域では、以下の２期に画期が見出せる。

彭頭山文化期・皂市下層文化期・城背溪文化期

イネの遺存体は出土するものの、確実に耕作具・収穫具とされる遺物はまだ出土していない。石斧、石錛、石鑿などの磨製石器がすでにあるにもかかわらずこれまでに石製農耕具の出土をみないことからすると、耕作具は木製・骨製のものが主体であったと想定できる。遺跡周辺は小河川が多い平地で、林野を開墾し耕地を作るよりも長江下流域の江蘇省草鞋山遺跡[69]同様、低湿地をそのまま利用したと考えられる。



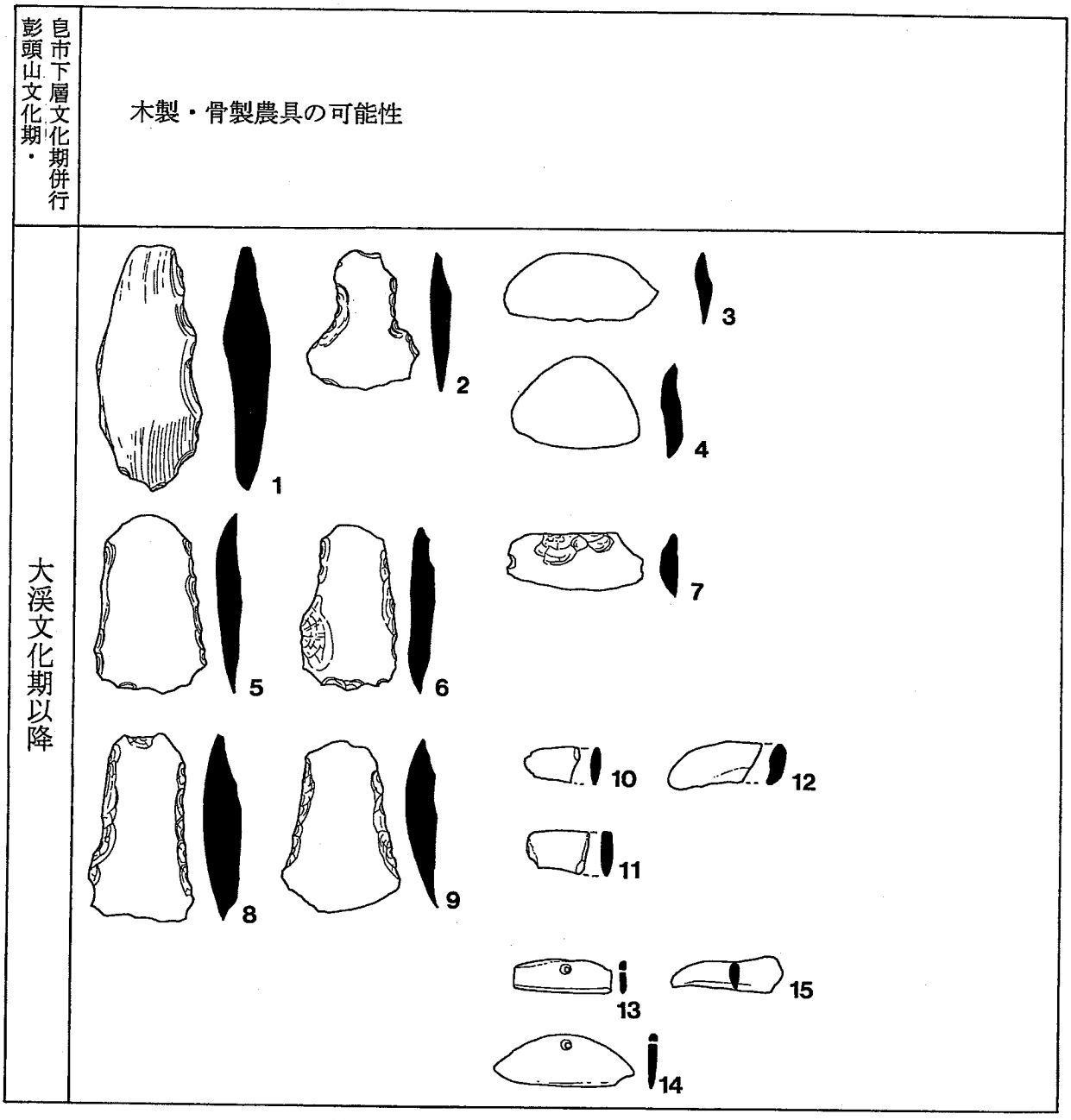
第５図　漢水上中流域の農耕具組成の変遷

李家村遺跡（1.2.石鏃　3.4.石刀）　何家湾遺跡（5.石鏃　6.7.石刀　8.磨盤・磨棒）

下王崗遺跡（9.10.石鏃　11.石刀　12.石鎌）　阮家壩遺跡（13.磨盤・磨棒）

青龍泉遺跡（屈家嶺文化期　14.石鋤　15～17.石刀　石家河文化期　18.石鋤　19～21.石刀）

（Scale＝1/6　ただし、磨盤・磨棒は1/15）



第6図　長江中流域の農耕具組成の変遷

中堡島遺跡（大渓1期　1.2.石鋤　3.4.石刀　大渓4期　5.6.石鋤　7.石刀　屈家嶺文化期　8.9.石鋤）
屈家嶺遺跡（10.11.石刀　12.石鎌）　栗山崗遺跡（13.14.石刀　15.石鎌）　(Scale＝1/6)

大渓文化期以降

耕作具は石鋤が出現する。前段階にはすでに磨製の石斧が存在しているが、この石鋤は打製であり、片面は打ち欠いたときの剥離面があまり研磨されずにそのまま残る。形態には、長条形をしたものや有肩のものがある。収穫具には石刀が出土する。湖北省中堡島遺跡大渓１期の石刀は、不定形のものであり石刀と断定するのに疑問が残る。しかし、同遺跡大渓４期の両端にえぐりを持つ石刀や同省螺蛳山遺跡[70]大渓文化後期から長方形石刀が出土し、黄河流域の影響をうかがわせる。屈家嶺文化期以降も耕作具には、大渓文化期から出現した打製石鋤が存続する。収穫具は、長方形磨製石刀と打製石刀が普遍的に出土するようになる。石家河文化期では半月形石刀が増加し、また、石鎌や貝鎌も出土するようになる。

１．６．長江下流域（第７図）

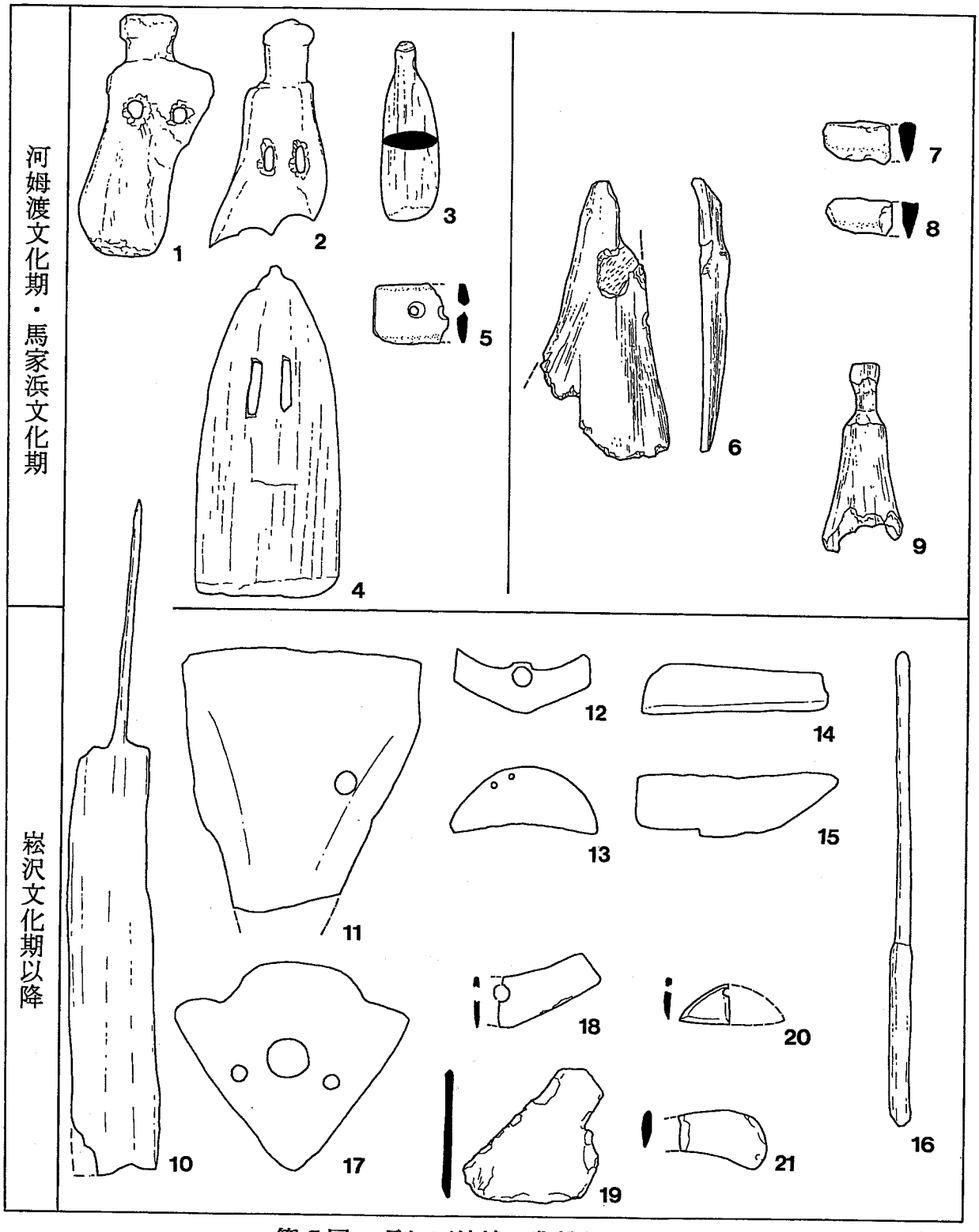
長江下流域では、以下の２期に画期が見出せる。

馬家浜文化期・河姆渡文化期

耕作具は、骨耜・木耜があり普遍的に出土する。骨耜は、ウシの肩甲骨を利用したもので柄には穿孔を施したり、くびれを付けたりしている。収穫具は、浙江省羅家角遺跡下層で石刀・石鎌が出土する。同省河姆渡遺跡２期になると２孔穿孔の長方形石刀が出現する。しかし、この期での収穫具は、今のところこの２遺跡のみの出土で出土数もわずかである。また、江蘇省圩墩遺跡で木製杵や同省草鞋山遺跡[71]で土製杵が出土している。これは竪杵と考えられ、脱穀や精白に用いられたと想定できる。

崧沢文化期以降

耕作具には、馬家浜文化期から存続する骨耜・木耜に加えて、新たな農耕具が出現する。石犂・耘田器・破土器である。石犂は、平面三角形を呈しており犂として使用されたと考えられている[72]。耘田器は、扁平でブーメラン状を呈しており、耜の先に刃先として装着していたと推定できる。破土器



第７図　長江下流域の農耕具組成の変遷

河姆渡遺跡（河姆渡文化期　1.2.骨耜　3.木耜　河姆渡２期　4.木耜5.石刀）

羅家角遺跡（6.骨耜　7.8.石刀）　　圩墩遺跡（9.木杵）

銭山漾遺跡（10.木耜　11.石犂　12.耘田器　13.14.石刀　15.石鎌　16.木杵）

広富林遺跡（17.石犂　18.耘田器　19.破土器　20.石刀　21.石鎌）

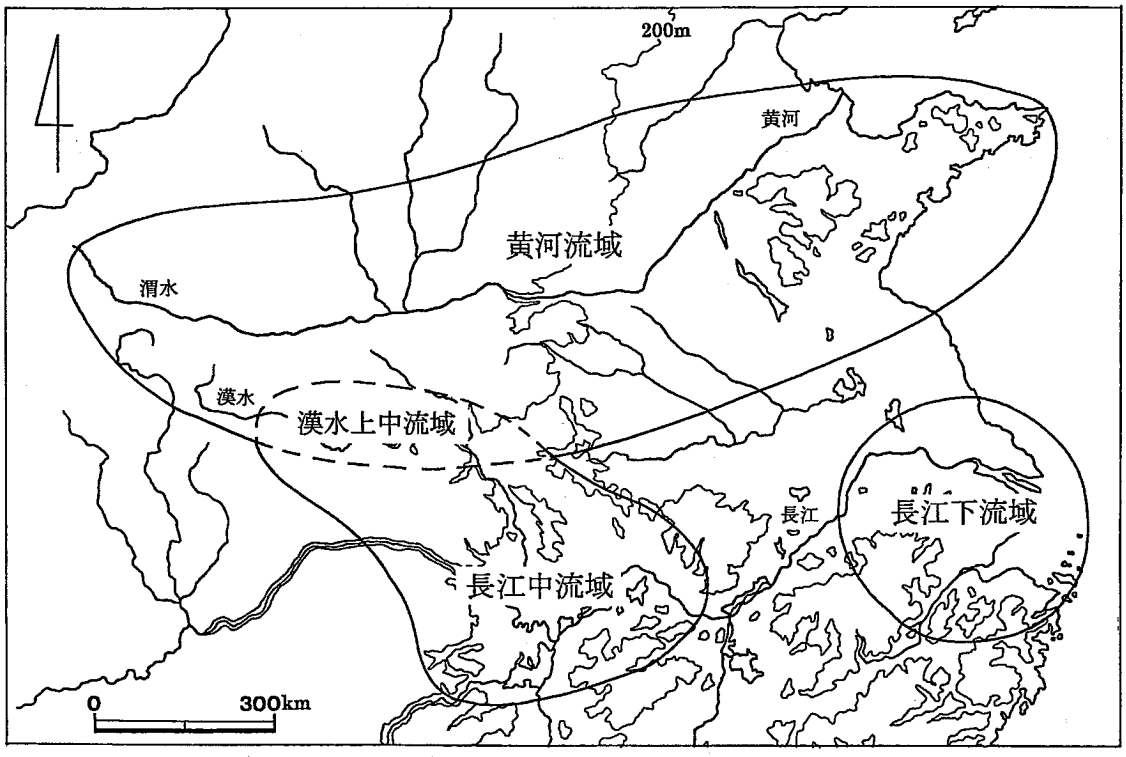
（Scale＝1/6　ただし、木耜10と木杵16は1/15）

は、扁平で三角形を呈し底部に刃部を持つ石器である。使用については、水田などを開くための土掘り具とする説[73]、中耕具とする説[74]また、文字どおり地面を切る道具とする説[75]があるが、いずれにせよ耕作に関する道具である。こうした石犂・耘田器・破土器の出現は、農耕の技術な発展と解され、大きな画期として位置づけられる。収穫具には、石刀と石鎌が使用される。石刀は、２孔と無孔の長方形石刀があり、また、この時期から半月形有孔石刀が出現する。

２．農耕具組成からみた農耕形態区分（第８図）

前項では各流域での農耕具組成の画期とその特徴を明らかにした。これをもとに、両河流域における農耕形態を考察すると、次の４つに大きく区分することができる。第８図に示したように、黄河流域、長江中流域、長江下流域、漢水上流域である。

以下、４地域それぞれの農耕形態の特徴を検討していくことにする。



第８図　農耕具組成からみた農耕形態区分

2．1．黄河流域

黄河流域は山東半島から陝西盆地まで広範囲にわたる地域であるが、この地域は一括することができる。各文化での農耕具組成とその変化を整理すると、耕作具、収穫具、加工具の基本的な組成に地域的な相違はない。

耕作具では、石鏟が普遍的な農耕具である。収穫具では、石刀、石鎌が新石器時代の初期から黄河全流域で出現する。黄河下流域の北辛文化期、同中流域の裴李崗・磁山文化期では、石鎌のほうが主流である。また、貝鎌、貝刀は、黄河中下流域の各地域で存続するが、渭水流域では白家村文化期にのみ見られることや、陶刀は仰韶文化期の渭水流域を中心にして内陸部に出現することなどの地域性がとらえられる。いずれにせよ農耕具組成の収穫具としての機能は同一であり、これらが農耕初現期から存在することに意味がある。加工具では、磨盤、磨棒が裴李崗文化期併行から黄河流域の全域でみられるが、仰韶文化後期から徐々に出土が少なくなり衰退する。しかし、その減少には地域的な時期差があるようである。

長江流域との関係で述べると、刀類や鎌類は長江流域に分布を拡大するが、石鏟と磨盤・磨棒は長江流域に下ることはない。このことは、これらの石器が、アワやヒエといった雑穀作（畑作）と強く結びついているといえる。黄河流域が、アワやヒエの遺存体から雑穀作(畑作)地帯とされるだけでなく、農耕具組成の共通性を明らかにすることで、より考古学的に意味をもって位置付けることができる。今後は、それぞれの農耕具を黄河流域で一括して分析し、その在り方と文化類型を比較することで明らかにすることが課題となってこよう。

以下、黄河流域の各地域について、展望も含め若干の検討を加えておきたい。

黄河下流域は長江下流域に隣接しており、土器[76]、玉鉞、石鉞にみられる長江下流域との交流にもかかわらず、崧沢文化期以降に出現する石犂などの新たな農耕具は流入してこない。一方、イネ遺存体は黄河下流域でも出土しており[77]、イネ自体の出土分布は拡大している。このことは、長江下流域の農耕形態が黄河下流域まで伝播しなかったことがいえる[78]。黄河下流

域がもともとアワ・ヒエ・キビ・コウリャンなどの混作[79]であり、イネもその中に組み込まれたと想定できるのではないだろうか。

龍山文化期に入ると、王湾三期文化、後岡二期文化、陶寺文化、王油坊類型など[80]地域性の強い文化類型がある事が分かっている。このなかで王油坊類型は、山東半島基部に近い黄淮平原の中ほどを中心に分布する。その標識遺跡の王油坊遺跡では、長江下流域にいたる広い範囲に分布域がある揚子江型土錘・管状土錘が豊富に出土する[81]。このことは、生業のひとつである漁撈活動において長江下流域との関係を窺わせる。しかし、農耕具からみると長江下流域の農耕具が拡がることはない。黄淮平原は、大汶口文化期以来、長江流域も含め広範囲な交流が認められる地域であるが、農耕形態からみると黄河流域の領域に入る地域といえる。

渭水流域は、文化の変遷を見ると非常に独自性が強く白家村文化期、仰韶文化期、廟底溝二期文化期、客庄省二期文化期とそれぞれ継続した変遷[82]を示している地域である。仰韶文化期や客省庄二期文化期にしても大きくは同一の要素を持つが、器形や器種構成はほかの地域に無いものがある。このことは、農耕具も例外ではない。白家村文化期併行とされる黄河中流域の裴李崗文化期の農耕具組成でみた特徴のように整った状況はない。

ところで、黄河中流域での農耕具組成は、裴李崗文化期併行に整い、それから基本的な器種構成は変化する事はない。貝鎌や磨盤などの消長はあるものの、新たな農耕具の出現は認められない。これに対して、例えば城址遺跡や武器の発達は、格段に認められる。陶寺遺跡では階層分化を示す大中小の墓があり、王城崗遺跡龍山文化第4期文化層では、城壁を持つ城址遺跡が発掘されている。仰韶文化・龍山文化への変化の過程で社会の階層化が認められるのである。また、城址遺跡や武器の発達から、戦争の存在が指摘されること[83]に対して、農耕具はそれに伴う技術的な進歩を明確に読み取ることはできない。新石器時代前期の裴李崗文化で雑穀栽培に伴う農法と農耕具は整備されたと解釈するほうが妥当である。社会発展の背景である農耕がどのように変化していたのかは、今後の課題であろう。

２．２．長江中流域

彭頭山文化が分布する洞庭湖西側の一帯は、彭頭山遺跡をはじめ多くの遺跡で最古級のイネ遺存体が出土している。また、新石器時代を通して土器の胎土中や住居の壁と考えられる焼土塊中から稲藁の痕跡が必ず見られる。このように稲作が行われていたことは確実とされるなか、逆に耕作具とされる遺物はまだ発見されていない。また、後続する大溪文化期の遺跡から多くの竹や木質の痕跡が出土している[84]。こうしたことを考慮すると初現期には、木製や骨製の耕作具を使用した地域と考えられる。その後、大溪文化期から打製石鋤が耕作具として使用され始める。独自な農耕具は打製石鋤のみということになり、同じ稲作を基本とする長江下流域と比べ大きく異なる。長江下流域から農耕具の影響を受けた証拠はない。また、遺跡出土の遺物構成で農耕具の割合が非常に低く、耕作具や収穫具が全く出土しない遺跡も多いという特徴も指摘できる。

２．３．長江下流域

馬家浜文化期併行の遺跡は、山地から沖積平野に移行する転移帯に立地し、付近は湖沼などの湿地が分布する。初期の稲作はこうした低湿地をそのまま利用していたことがわかっている[85]。馬家浜文化期併行では、骨耜、木耜で行われていた耕起の作業は、崧沢文化期に出現する石犂・破土器・耘田器が加わる。このことは、耕作地が湿地から平原部に拡大したことを推測させる。この石犂・耘田器・破土器といった全く新しい農耕具の起源は、今のところ不明である。形態的にも機能的にも骨耜や木耜と連続性はないが、周辺での出土はなくこの地域で出現したと考えられる。また、これらの農耕具の出現とともに、骨耜や木耜も崧沢文化期以降一気に増える傾向にある。こうしたことは、耕作具の器種の増加が生産力を高め、自ずと社会発展[86]を助長させ、良渚文化にみられるような社会的階層の分化[87]を促進した。

このように農耕の発展と社会の変化・発展が想定されることに対し、耕作具は他の地域に分布を広げることはない。一方、収穫具は逆に黄河流域の影

響を受けている。浙江省羅家角遺跡下層出土の馬家浜文化前期の打製長方形石刀を初現とし、同省河姆渡遺跡出土の磨製の長方形石刀でわかるように、明らかに黄河流域の形態の石刀が入ってくる。さらに崧沢文化期から半月形石刀が出土するようになり、長方形と比べ徐々に増加していく。この傾向は黄河流域の変化とほぼ併行する。また、良渚文化期になると、石鎌が増加する。

2．4．漢水上中流域

屈家嶺文化期から出現した有肩石鋤は、それまでの石鏟にとってかわり、この地域の主要な耕作具となる。さらに、磨盤と磨棒も完全に姿を消す。土地を耕作し、生産物を食するまでの一連の過程が一変し、長江中流域の農耕形態に変化したことを想定できる。農耕具組成がほぼ完全に別の組成に変化する様相を見せる地域はこの地域のみで、特異な地域としてあげられる。こうした大きな変化は、農耕具に限らず他の遺物にもいえることで、土器はもちろんのこと、特に石器においては打製石器が多くなる。ふつう打製石器から磨製石器に変化するのであるが、むしろ打製が多くなる。屈家嶺文化以降、今までの渭水流域の文化圏から外れ、それに伴い長江中流域の文化が席捲し[88]、集団・社会や文化そのものが変化したと想定できる。そのなかで収穫具に変化がないことは、穀物栽培において石刀や石鎌がこの時期の両河流域に共通した基本的な収穫具であったといえる。

第四節　まとめ

中国新石器時代の農耕具とその組成を地域ごとに通史的な把握を行い、その様相を比較することで、農耕具組成からみた新石器時代の農耕形態を概観してきた。第三節で明らかにしてきたことをまとめるとまず、農耕具組成からみると黄河流域、長江中流域、長江下流域、漢水上流域の４つに大きく区分することができる。同じ稲作を生業の基盤としながらも、長江下流域と長江中流域では、農耕具組成が異なるということで区別される。逆に、黄河流

域では、様々な文化類型が存在しながらも、農耕具組成からみると基本的な組成に相違がないという点で、大きくひとつにまとめることができるのである。つまり、これまでの穀物遺存体から区分されてきた黄河流域と長江流域という区分から、さらに具体的な農耕具からの農耕形態区分ができたことになる。

さらに、各区分では農耕具組成に画期があることがわかった。黄河流域は、耕作具の石鏟、収穫具の刀類・鎌類、加工具の磨盤・磨棒を基本的な農耕具組成としている。後に磨盤・磨棒は減少していくことになる。この磨盤・磨棒の形態の変化やその消長と石鏟の形態から、裴李崗文化期併行－仰韶文化前中期併行－仰韶文化期後期併行以降とにほぼ画期が併行する。

長江中流域は、耕作具の打製石鋤、収穫具の刀類・鎌類が基本的な農耕具組成である。出土する農耕具の種類が少ない地域でもある。また、耕作具に木製、骨製の耕作具の可能性が残る。農耕具の極端な変化はないが、打製石鋤と収穫具の出現により、彭頭山文化期・皂市下層文化期併行－大溪文化期以降とに画期がみられる。

長江下流域は、耕作具の骨耜・木耜・石犂・耘田器・破土器、収穫具の刀類・鎌類をもつ。崧沢文化期からの石犂・耘田器・破土器の出現が画期の大きな指標であり、馬家浜文化期併行－崧沢文化期以降とに明確に変化する。

漢水上中流域は、耕作具では石鏟から打製石鋤への変更、加工具では磨盤・磨棒の消滅など、屈家嶺文化期以降に黄河流域の組成から長江中流域の組成へ移行する特異な地域である。

おわりに

中国のそれぞれの地域は陸つづきであり、文化類型単位内だけで文化が生成してきたわけではない。これまでのように、文化類型による区分のみで中国の新石器時代文化が語られるのではなく、社会が成り立つ上で基盤となる生業活動を示す遺物のあり方を、文化類型を越えた視点で考古学的に考察した結果、新たなる領域を見出せ得たと考えている[89]。

今後は、この４つの領域を基本として、農耕形態の地域性をさらに細かく

見ていく必要がある。また、今回は、農耕形態を区分し、中国新石器時代を概観することを中心にしたため、イネ遺存体の出土分布が黄河流域へ拡大していくことに関して農耕具が同様の動きを見せないこと、長江中流域と下流域とは同じ稲作を行いながらも農耕具組成に差が生じる要因、黄河流域での農耕具の連動的な変遷の要因については、今後の課題としたい。

---

1 中国社会科学院考古研究所『新中国的考古発現与研究』1984年　文物出版社
和島誠一「東アジア農耕社会における二つの型」『古代史講座』二 1962年 学生社
横田禎昭「中国新石器時代の初期農耕文化」『世界の農耕起源』1986年雄山閣

2 安志敏「中国古代的石刀」『考古学報』第10期 1955年

3 笵志文「仰韶文化時期的農業工具」『中国農史』第3期 1988年
呉加安「略論黄河流域前仰韶文化時期農業」『農業考古』第2期 1989年
丁清賢「河南新石器時代農業考古的発見与研究」『農業考古』第1期 1990年
呉詩池「総述山東出土的農業生産工具」『農業考古』第1期 1990年
呉耀利「黄河流域新石器時代的稲作農業」『農業考古』第1期 1994年
呉汝祚「太湖文化区的史前農業」『農業考古』第2期 1987年
向安強「論長江中游新石器時代早期遺存的農業」『農業考古』第1期 1991年

4 余扶危　葉万松「試論我国犂耕農業的起源」『農業考古』第1期 1981年
陳文華「試論我国農耕具史上的几个問題」『考古学報』第4期 1981年
宋兆麟「我国的原始農耕具」『農業考古』第1期 1986年
王星光「中国伝統耕犂的発生、発展及演変」『農業考古』第1期 1989年

5 陳文華　渡部武編『中国の稲作起源』1989年

6 安志敏「中国的史前農業」『考古学報』第4期 1988年

7 厳文明「中国稲作農業的起源」『農業考古』第1·2期 1982年

8 蘇秉琦「関於考古学文化的区系類型問題」『文物』第5期 1981年

9 例えば、渭水流域の仰韶文化では、仰韶文化と、その時間的空間的細分に半坡類型、廟底溝類型、西王村類型としている。

[10]大貫静夫「中国における土器型式の研究史」『考古学雑誌』第 82 巻第 4 号 1997 年

[11]本論文では「文化」、「類型」を総称する場合、文化類型と記述する。

[12]任式楠「長江黄河中下游新石器文化的交流」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』1989 年

[13]甲元真之「朝鮮半島の初期農耕文化」『考古学研究』第 20 巻第 1 号 1973 年

[14]副葬品は日常に使用した農耕具でない可能性がある。

[15]章丘市博物館「山東章丘県小荊山遺址調査簡報」『考古』第 6 期 1994 年
山東省文物考古研究所・章丘市博物館「山東章丘市小荊山遺址調査、発掘報告」『華夏考古』第 2 期 1996 年

[16]中国社会科学院考古研究所山東隊・山東省膝県博物館「山東膝県北辛遺址発掘報告」『考古学報』1984 年第 2 期

[17]山東大学歴史系考古専業「山東鄒平県苑城早期新石器文化遺址調査」『考古』第 6 期 1989 年

[18]烟台市文物管理委員会「山東烟台白石村新石器時代遺址発掘簡報」『考古』第 7 期 1992 年

[19]南京博物館「江蘇大墩子遺址第二次発掘」『考古学集刊』1　1981 年
南京博物館「江蘇邳県四戸鎮大墩子遺址探掘報告」『考古学報』1964 年第 2 期

[20]中国社会科学院考古研究所『胶県三里河』1988 年

[21]山東省文物考古研究所「茌平尚莊新石器時代遺址」『考古学報』第 4 期 1985 年
山東省博物館・聊城地区文化局　茌平県文化館「山東茌平県尚莊遺址第一次発掘簡報」『文物』第 4 期 1978 年

[22]山東大学歴史系考古専業教研室編『泗水尹家城』1990 年

[23]開封地区文物管理委員会・新鄭県文物管理委員会「河南新鄭裴李崗新石器時代遺址」『考古』第 2 期 1978 年
開封地区文物管理委員会・新鄭県文物管理委員会・鄭州大学歴史系考古専業「裴李崗遺址一九七八年発掘簡報」『考古』第 3 期 1979 年
中国社会科学院考古研究所河南一隊「1979 年裴李崗遺址発掘簡報」『考古』第 4 期 1982 年

中国社会科学院考古研究所河南一隊「1979年裴李崗遺址発掘報告」『考古学報』第1期 1984年

24 河北省文物管理処・邯鄲市文物保管所「河北武安磁山遺址」『考古学報』第3期 1981年

25 中国社会科学院考古研究所安陽発掘隊「1971 年安陽後崗発掘簡報」『考古』第3期 1972年

中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「安陽後崗新石器時代遺址的発掘」『考古』第6期 1982年

中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1979年安陽後崗遺址発掘報告」『考古学報』第1期 1985年

26 河北省文物研究所・河北文化学院「武安超窰遺址発掘報告」『考古学報』第3期 1992年

27 鄭州市博物館「鄭州大何村仰韶文化的房基遺址」『考古』第6期 1973年

鄭州市博物館「鄭州大何村遺址発掘報告」『考古学報』第3期 1979年

廖永民「大何村遺址的発掘与研究」『中原文物』第3期 1989年

28 臨汝県博物館「河南臨汝中山寨遺址調査簡報」『考古』第6期 1986年

中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南汝州中山寨遺址試掘」『考古』第7期 1986年

中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南汝州中山寨遺址」『考古学報』第1期 1991年

29 河南省文物研究所・中国歴史博物館考古部「登封王城崗遺址的考古部」『文物』第3期 1983年

河南省文物研究所『登封王城崗与陽城』1992年

30 中国社会科学院考古研究所山西工作隊・臨汾地区文化局「1978-1980 年山西襄汾県陶寺墓地発掘簡報」『考古』第1期 1983年

中国社会科学院考古研究所山西工作隊・山西臨汾地区文化局「陶寺遺址 1983－1984年居住址発掘的主要収穫」『考古』第9期 1986年

31 商丘地区文物管理委員会・中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「1977年河南永城王油坊遺址発掘概況」『考古』第1期 1978年

中国社会科学院考古研究所河南二隊・河南商邱地区文物管理委員会「河南永城王油坊遺址発掘報告」『考古学集刊』5 1987年

32 傅憲国「試論中国新石器時代的石鉞」『考古』第9期 1985年

傅憲国は、石鉞が石鏟と報告されることがよくあり、誤解を招いていることを指摘している

33 西安半坡博物館「陝西臨潼白家遺址第一、二次試掘簡報」『史前研究』第1期 1985年

西安半坡博物館「陝西臨潼白家遺址試掘簡報」『史前研究』第2期 1983年

中国社会科学院考古研究所陝西隊「陝西臨潼白家村新石器時代遺址発掘簡報」『考古』第11期 1984年

中国社会科学院考古研究所『臨潼白家村』1994年

34 甘粛省博物館・奏安県博物館・大地湾発掘組「1980年奏安大地湾一北文化遺存発掘簡報」『考古与文物』第2期 1982年

35 中国社会科学院考古研究所宝鶏工作隊「一九七七年宝鶏北首嶺遺址発掘簡報」『考古』第2期 1979年

中国社会科学院考古研究所『宝鶏北首嶺』1983年

36 西安博物館「銅川李家溝新石器時代遺址発掘報告」『考古与文物』第1期 1984年

37 西安半坡博物館「1971年半坡遺址発掘簡記」『考古』第3期 1973年

中国社会科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館『西安半坡』1963年

38 西安半坡博物館・臨潼県文化館「1972 年臨潼姜寨遺址発掘簡報」『考古』第3期 1973年

西安半坡博物館・臨潼県文化館「姜寨遺址第二，三次発掘的主要収穫」『考古』第5期 1975年

西安半坡博物館・臨潼県文化館「臨潼姜寨遺址第四至十一次発掘起要」『考古与文物』第3期 1980年

西安半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼県文化館『姜寨』1988年

39 陝西省考古研究所康家考古隊「陝西臨潼康家遺址発掘簡報」『考古与文物』第5・6期 1988年

[40]西安半波博物館「陝西岐山双庵新石器時代遺址」『考古学集刊 』3　1983年

[41]陝西分院考古研究所「陝西西郷李家村新石器遺址」『考古』第7期 1961年
陝西省社会科学院考古研究所漢水隊「陝西西郷李家村新石器時代遺址一九六一年発掘簡報」『考古』第6期 1962年

[42]陝西分院考古研究所「陝西西郷何家湾新石器時代遺址」『考古』第7期 1961年
陝西省社会科学院考古研究所漢水隊「陝西西郷何家湾新石器時代遺址 1961年発掘簡報」『考古』第6期 1962年
陝西省考古研究所漢水考古隊「陝西西郷何家湾新石器時代遺址首次発掘」『考古与文物』第4期 1981年

[43]報告段階で石家河文化がまだ設定されておらず、この地域の龍山文化期併行の文化は湖北龍山文化と称されていた。

[44]河南省博物館　長江流域規画弁公室文物考古隊河南分隊「河南淅川下王崗遺址的試掘」『文物』第10期 1972年
河南省文物研究所・長江流域規画弁公室考古隊河南分隊『淅川下王崗』1989年

[45]前掲註43に同じ。

[46]住居址は1・2期で半地下式あるいは平地式円形住居であったものが、長屋式住居（相連的排房）に変化する。

[47]中国社会科学院考古研究所『青龍泉与大寺』1991年

[48]湖南省文物研究所・澧県文物管理所「湖南澧県彭頭山新石器時代早期遺址発掘簡報」『文物』第8期 1990年

[49]湖南省博物館「湖南石門県皀市下層新石器遺存」『考古』第1期 1986年

[50]湖南省文物考古研究所「湖南臨澧県胡家屋場新石器時代遺址」『考古学報』第2期 1993年

[51]長弁庫区・紅花套考古工作站・枝城市博物館「城背渓遺址復査記」『江漢考古』第4期 1988年

[52]厳文明「中国史前の稲作農業」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』1995年

[53]国家文物局三峡考古隊「湖北秭帰朝天嘴遺址発掘簡報」『文物』第 2 期 1989年

[54]長弁庫区・紅花套考古工作站・枝城市博物館「城背渓遺址復査記」『江漢考古』

第 4 期 1988 年

[55]湖北省宜昌地区博物館「宜昌中堡島新石器時代遺址」『考古学報』第 1 期　1987 年

[56]中国社会科学院考古研究所『京山屈家嶺』1965 年

[57]武漢大学歴史系考古教研室・黄岡地区博物館・麻城市革命博物館「湖北麻城栗山崗新石器時代遺址」『考古学報』第 4 期 1990 年

[58]浙江省文物管理委員会・浙江省博物館「河姆渡遺址第一期発掘報告」『考古学報』第 1 期 1978 年

河姆渡遺址考古隊「浙江河姆渡遺址第二期発掘的主要収穫」『文物』第 5 期 1980 年

[59]羅家角考古隊「桐郷県羅家角遺址発掘報告」『浙江省文物考古所学刊 1　1981 年

[60]常州博物館「江蘇常州圩墩村新石器時代遺址的調査和発掘」『考古』第 2 期 1974 年

常州博物館「常州圩墩新石器時代遺址第三次発掘簡報」『史前研究』第 2 期 1984 年

[61]蘇州博物館・呉江県文物管理委員会「江蘇呉江龍南新石器時代村落遺址第一、二次発掘簡報」『文物』第 7 期 1990 年

[62]浙江省文物考古管理委員会「呉興銭山様遺址第一、二次発掘報告」『考古学報』第 2 期 1960 年

[63]上海市文物保管委員会「上海市松江県広富林新石器時代遺址試探」『考古』第 9 期 1962 年

[64]煙台市文物管理委員会・海陽県博物館「山東海陽司馬遺址清理簡報」『海岱考古』1989 年

[65]王洪明「山東省海陽県史前遺址調査」『考古』第 12 期 1985 年

[66]河南省文物研究所「長葛石固遺址発掘報告」『華夏考古』第 1 期 1987 年

[67]中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南陝県水泉裴李崗文化遺址」『考古学報』第 1 期 1995 年

[68]李京華「登封王城崗夏文化城址出土的部分石質生産工具試析」『農業考古』第 1

期 1991 年

69 南京博物院「江蘇呉県草鞋山遺址」『文物資料叢刊』3 1980 年

70 湖北省黄崗地区博物館「湖北黄崗螺蛳山遺址墓葬」『考古学報』第 3 期 1987 年

71 南京博物院「江蘇呉県草鞋山遺址」『文物資料叢刊』3 1980 年

72 中村慎一「長江下流域新石器時代の研究」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 5 号 1986 年

73 牟永杭・宋兆麟「江浙的石犂和破土器ー試論我国犂耕的起源」『農業考古』第 2 期 1981 年

74 梶山勝「長江下流域新石器時代の稲作と畑作に関する一試論」『古文化談叢』20(下) 1989 年

75 小柳美樹「石犂・破土器・耘田器」『日中考古学会会報』第 7 号 1997 年

76 西谷大「中国東部沿岸地域の土器構成から見た新石器文化」『考古学雑誌』第 77 巻第 3 号 1992 年

77 松村真紀子「東アジア出土の新石器時代穀物の年代的分布」『季刊考古学』第 37 号 1991 年

78 宮本一夫「朝鮮半島新石器時代の農耕化と縄文農耕」『古代文化』第 55 巻第 7 号 2003 年

79 甲元真之「長江と黄河ー中国初期農耕文化の比較研究ー」『国立歴史民俗博物館研究報告』40 巻 1992 年

80 楊鍚章「黄河中流域的龍山文化」『新中国的考古発現和研究』1984 年

81 甲元真之「中国先史時代の漁撈」『考古論集』1993 年

82 今村佳子「中国先史時代の文化類型と動態」『古文化談叢』第 36 集 1996 年

83 岡村秀典「中国新石器時代の戦争」『古文化談叢』30(下) 1993 年

84 王傑「大溪文化的農業」『農業考古』1987 年第 1 期

85 藤原宏志「草鞋山遺跡における初原的水田稲作」『稲作起源を探るー中国・草鞋山遺跡における古代水田稲作ー』1996 年 日本文化財科学会

86 中村慎一「長江下流域新石器時代の研究」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 5 号 1986 年

[87] 渡辺芳郎「墓地における階層性の形成」『考古学雑誌』80巻2号　1995年
宮本一夫「長江下流域新石器時代の地域集団」『日中文化研究』第10号 1996年

[88] 張緒球「石家河文化的文期分布和類型」『考古学報』1991年第4期

[89] こうした領域が、後の殷周そして春秋戦国時代の領域と比較すると、その素地ともいうべきものが新石器時代に形成された可能性を指摘しておく。つまり、中原(黄河流域)の諸侯国、長江中流域の楚、長江下流域の呉・越の領域と類似するのである。

第三章　加工具の考古学的研究

－磨盤・臼などの分類と地域性－

はじめに

中国新石器時代における磨盤(まばん)や臼と報告される遺物は、基本的には穀物の加工具（製粉具や脱穀具など）と考えられている。黄河流域では、アワ、ヒエ、キビなどを加工調理する道具として、農耕文化の主要な要素としての考古資料となっている。

しかし、アワ、ヒエ、キビなどを磨盤や臼などでどのように加工調理するかについて、脱穀、製粉といった用途論は考古資料からの実証的な論証によって導きだされたというものではなかった。にもかかわらず、磨盤や臼などは農耕文化の道具として位置付けられたのち、そうした用途の道具として型式分類や意義づけがなされてきた。磨盤などを穀物の加工調理具として捉えた場合、その用途だけでは説明がつかないことも多くあることは、磨盤などが研究史上のパラダイムに引きずられた概念を内包しながら取り扱われたことにあり、考古資料として基礎的な分析を経た上での資料となっていないことが原因と考えられる。

本章ではそうした研究史上の問題点をあらためて整理したのち、磨盤や臼などについて機能的側面から分類を行い、まずその時期的変遷と地域性を記すことにしたい。そののち、これまでの農耕の一要素という捉え方を再検討する。つまり、収穫後の道具として検討し、食文化体系について論じる。

第一節　研究史と問題の所在

磨盤については、近年、西谷正[1]や加藤里美[2]が研究史を整理し、その問題点をまとめている。重複するところもあるが、ここで再度概略し、あらためて問題点を指摘したい。西谷もいうように、河南省裴李崗遺跡や河北省磁山遺跡出土の磨盤を天野元之助[3]が saddle quern としたことで、後にこれらが鞍形すりうすとして認識されはじめた。これは、それより以前に有光教一[4]が、朝鮮半島の出土品を、穀物を含む植物性食物の調理具として、すりうすと杵臼に形式分類し、すりうすが西方から伝播したとする一連の関係性を指摘したことと関係をもつ。こうした考え方により、東アジアの鞍形すりうすも農耕と深く関係

した遺物であることとなった。

このことは、中国国内での研究方向においても同様で、1960年代から1970年代にかけて『新中国的考古収獲』[5]、『工農考古基礎知識』[6]などにおいて穀物加工具とされたころに始まる。その後1980年代に曾騏[7]は磨盤を穀物の脱穀具としたのち、そのなかに馬鞍形磨臼[8]が含まれることを指摘した。呉加安[9]は磨盤や臼などをはじめて、形態的に分類を行った。分類は基本的には平面形から行ったものであるが、打製、磨製あるいは有足という属性も同列にあつかってしまったことが問題点として挙げられる。しかし、磨盤や臼の盛衰を穀物だけではなく、堅果類など、ほかの植物性食物利用と関係づけながら説明を行った意義は大きい。その後、陳文も分類を行い、時期的変遷さらに社会的意義までも言及した[10]。陳は、磨盤は製粉具ではなく脱穀具であることを強く主張し、南方からの稲作文化の杵臼の影響によって衰退するとした。この研究においても、形態的特徴が結局重視され、変化の系統も一元的に説明したものだった[11]。

藤本強[12]は、中国新石器時代の磨盤を汎世界的に比較しながら考察を行っている。黄河流域の裴李崗・磁山文化の磨盤を穀物の製粉具とし、仰韶文化期以降それが消滅していき、甑などの蒸具がそのころから出現、増加していくことをあげ、粉食から粒食という食文化の変換があったことを想定している。この見解は現象面からみると説得力があるものであり、磨盤の文化的な意義付けを新石器時代という長いスパンにおいて論究した画期的なものであった。

しかし、磨盤を穀物の製粉具として限定してしまうには、先の曾や呉の研究からも問題のあることが指摘できるほか、磨盤をいわゆる鞍形すりうすの範疇において論を展開したことは、他の地域で出土する磨盤についての説明に、齟齬をきたす恐れが今後でてくると思われる[13]。この点、西谷は裴李崗文化の有足の磨盤もいわゆる鞍形すりうすの類としてとらえることを主張したのち、中央ユーラシアから中国東北地方に広く分布する鞍形すりうすとの関係の中で論じていく研究方向を提示している[14]。

呉や陳につづき、磨盤の形態分類を行ったのは近年では加藤里美[15]の論考がある。そのなかですりうすの地域別研究の必要性を説いているが、分類では呉分類同様、形態的特徴を基準にしており、また用途論の再考を言うものの、機能的な視点が導入されることはなかった[16]。しかし、地域研究からすりうすを

捉え直す方向を主張していることは、中国を一元的な視点ではなく、その遺跡や地域単位の状況を把握し、それら相互の関係と動向から論じていく方法として今後必要になってくると思われる。また、磨盤や臼などが型式学的な分類による手続きなしに認識されていることは、遺物認識において大きな問題であり、より客観的な区別と呼称を与えていく必要がある。

ところで、呉の論考は、その分類において基準が一定でないなど問題点はあるが、磨盤を穀物との関係にのみに言及した従来の見解から、ほかの植物性食物もあわせたなかで、その利用の具体的内容や変遷を論じようとしており、参考になるものである。しかし、全体的に磨盤はやはり、穀物を加工調理した道具としてみる傾向が強い。また分類も形態的特徴を基準としたものであり、前述のように用途が前提となっているためか、機能的側面からの研究は立ち遅れているといえよう。

このことは磨盤や臼などの用語が、実際に何を指しているかさえも曖昧になっていることを指摘できる。例えば、磨盤と砥石の区別についても同様で、長江流域では磨盤と類似するものであっても、砥石と報告されることが少なくない。また、黄河流域の磨盤そのものについても、裴李崗文化の有足の磨盤が特徴的なこともあり、他地域の磨盤と比較検討がなされたうえで、その意義付けが論じられることなどはなかった。こうしたことは、磨盤や臼などの存在から、前述の農耕文化や食文化への解釈をする際にも論証の不十分さを引き起こしており、再考の余地があると思われる。穀物加工の変化を想定する際、馬洪路、呉加安、陳文など[17]は各地域で出土する磨盤や臼を一元的にあつかい、一系統の変化のなかに位置づけようとした。しかし、地域性とされるものまでも時間的前後関係として捉えられてしまった結果、形態の違いが穀物加工法の変化を表していると解釈された可能性があるのである。

そこで、磨盤や臼とされるものを機能的な側面から分類を行い、まずその時期的変遷と地域性を明らかにすることにしたい。対象とする地域は、本来は東北地方、内蒙古そして新疆を含めた範囲で行わなければならないが、本稿は黄河流域と長江流域に限定して、そのなかでのあり方から順次検討していく方法を取りたい。

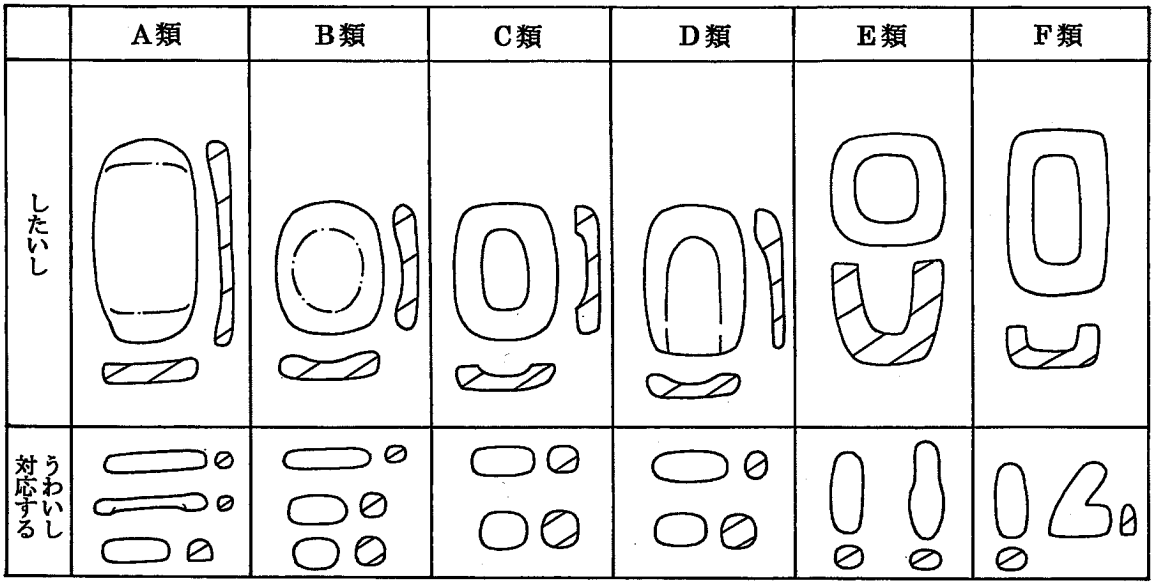
第二節　分類と出土分布の特徴

1．分類の設定（第１図）

前節で指摘したとおり、分類は、磨盤がどのような機能をもつものか明らかにし、その属性を抽出することから始めたい。つまり、磨盤といっても諸氏が強調する鞍形すりうすだけではなく、呉が指摘したように不規則な形状をしたものが多数ある。このなかには石皿状のものもある。下川文化のみならず、新石器時代になっても出土する地域があるが、こうしたものも磨盤として同一に報告されている。ただ、資料的な制約もあり、磨盤や臼そのものから機能を明確に特定していくのは難しい。これらは有光教一[18]が以前に指摘したように単独で用いられる道具ではなく、あくまで「したいし」を下に置いて、磨り潰したり敲いたりする「うわいし」とセットになって使用されるものである。この「うわいし」に該当するのが磨棒や杵と報告される遺物である。有光分類では、搗くと磨るを区別し、杵臼とすりうすとに大別し、すりうすをさらに皿形と鞍形に細分している。石皿は臼のなかに入れ、皿形すりうすとは区別し、杵臼は搗く、すりうすは磨る働きをするものとしている。しかし、石皿と皿形すりうすとの形態的な区別が明確に示されていないのは、誤解を招く。ただし、「うわいし」については、擦痕や打痕がみられる部位を明確に確認することは現時点では困難であり、詳細な報告が望まれる[19]。

本章でも有光の定義を参考にして、「したいし」を「うわいし」に注意しながら、磨盤や臼の機能を形態から区別していくことにする。（第１図）

Ａ類…「うわいし」を前後方向に使用するため、「したいし」は縦長に凹むもの。
Ｂ類…「したいし」の中央のみに「うわいし」を磨りあてるため、中央部分が凹むもの。
Ｃ類…「したいし」の中央に製作段階で凹みをつけたもの。
Ｄ類…「したいし」の凹みがある方向に開いているもの。
Ｅ類…一定の深さの円形もしくは方形の凹みをもつもの。
Ｆ類…一定の深さの長方形の凹みをもつもの。



第１図　磨盤・臼などの分類

２．各類と出土分布の特徴（第２図･第３図）

順次、各類の出土分布とその特徴を記す。

Ａ類は、出土磨盤のなかではもっとも多くまた普遍的なものである。「うわいし」を「したいし」に対して前後に動かすことで対象物を磨り潰したりする。対応する「うわいし」は、長い棒状の磨棒が主流となる。これには、端部が肥厚するもの、横断面が蒲鉾状のものなどがある。前者は「したいし」の幅に合わせて使用し、後者は平坦な一側面のみを使用するものとして想定できる。こうした「うわいし」と対になる「したいし」の平面形は長方形に近いもので、なかにはその中央部が大きく鞍形に凹むいわゆる鞍形すりうすとされるものも含まれる。また、裴李崗文化や磁山文化に特徴的な有足の磨盤もこの類に含まれる[20]。時期的には、新石器時代前期から出土しており、とくに黄河中流域に主体的に分布する。仰韶文化期併行に入ると急速に出土例が減少する。しかし、渭水流域と漢水上流域においては仰韶文化期にも存続、盛行する。また、龍山文化期に入っても完全に消滅することはない。

Ｂ類は、「うわいし」を「したいし」に当てて回転させたり、あるいは押し当てたり敲いたりして使用したものと想定できる。つまり、磨り潰したり砕いた

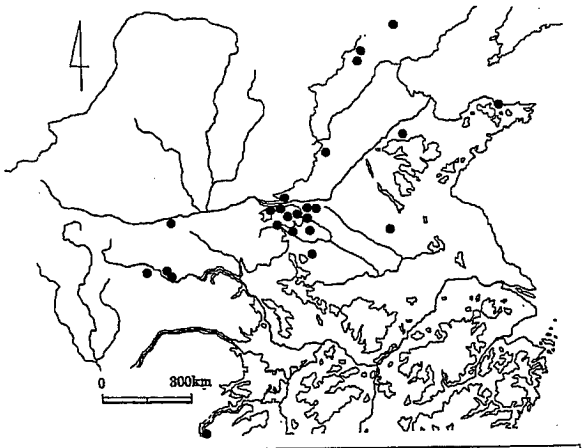
りする道具である。これは従来さほど認識されてこなかったものである。いわゆる石皿にあたる。呉の論考では後期旧石器時代の下川文化の磨盤をこの型式にあてているが、新石器時代におけるこの型式については言及していない。新石器時代前期から後期にいたるまで存続するが、出土の様相は地域によって異なる。新石器時代の最も古い例には、中央部が擂鉢状に凹む河北省南庄頭遺跡出土例（第４図６）がある。時期がややくだると漢水上流域の陝西省阮家壩遺跡（第７図４）にみられる程度であるが、仰韶文化期になると出土例は増加する。そのなかで特筆すべき地域は渭水流域の陝西盆地と漢水流域である。仰韶文化半坡類型期の出土量が多い。次段階になると出土例はほぼ皆無となる。

C 類は、B 類と類似するが、製作段階で使用部をあらかじめ凹ませており、凹みの縁部がはっきりとしているのが特徴である。「うわいし」を用いて、磨り潰したり、敲き潰したりする。大きさは小型のものから大型のものまである。出土の分布は明確で、仰韶文化期より出現し渭水流域を中心に分布する。

D 類は、新石器時代前期に長江中流域の湖北省柳林渓遺跡などで数例みられるが、黄河下流域の山東半島の大汶口文化期併行に出土の分布が多い。柳林渓遺跡の出土例（第８図３）は、長楕円形の磨盤を縦方向に前後して擦った痕跡があり、その縁部がはっきりと確認できる。山東半島の出土例は、縁部は緩やかで明確でない。これらの「うわいし」は長い棒状の磨棒ではなく、楕円形あるいは球形の「うわいし」である。

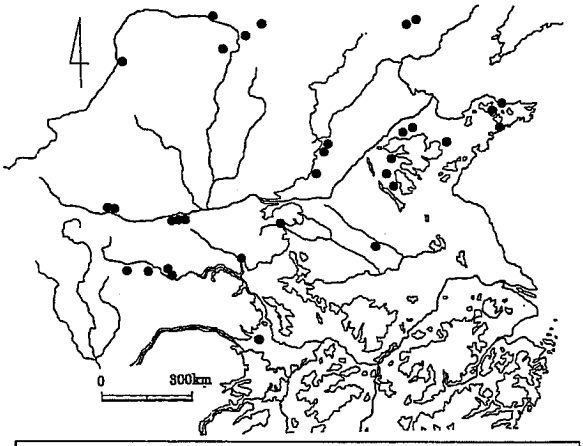
E 類は、深さ数 cm から十数 cm の臼状の凹みを作り、棒状の「うわいし」で押し潰したり敲き潰したりするものである。報告では臼とされるものである。出土は黄河流域に散在する程度であるが、前期には出土例はなく中期から後期にかけて出土する。この様相から、磨盤から臼へ穀物加工具が変化すると呉は想定したのであるが、E 類の凹みの幅や深さから、脱穀や精白のための日常道具としての用途を想定するには不十分と思われる。呉加安や馬洪路の考えるような道具の変化を想定するならば、もちろん「地臼」[21]を文献から引用し、その存在の可能性を述べるものの、臼に関しては、量的な資料の充実を待って型式学的な検討が必要と考える。

F 類は、黄河中流域の龍山文化期併行に出現する。長方体の石材の中央に深さ数 cm の隅丸長方形を呈す溝状の凹みをつくる。「うわいし」はその溝に合う



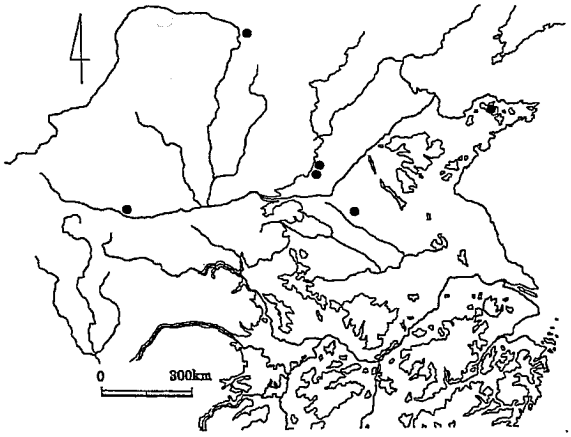
黄河下流域—後李文化期　黄河中流域—裴李崗文化期併行
渭水流域—白家村文化期　漢水上流域—李家村文化期

A類—1



黄河下流域—北辛文化期　大汶口文化期　黄河中流域—仰韶文化期
渭水流域—仰韶文化期　漢水上流域—仰韶文化期　長江中流域—屈家嶺文化期

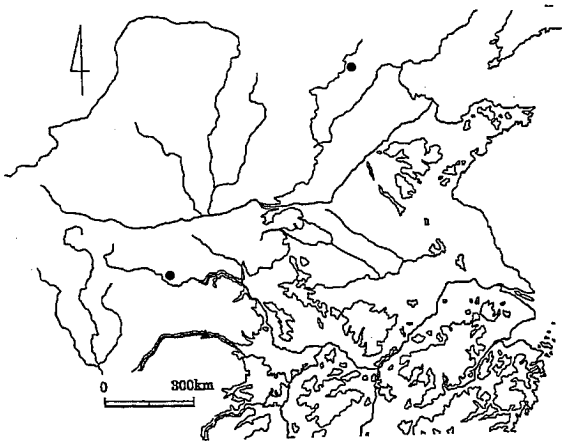
A類—2



龍山文化期併行

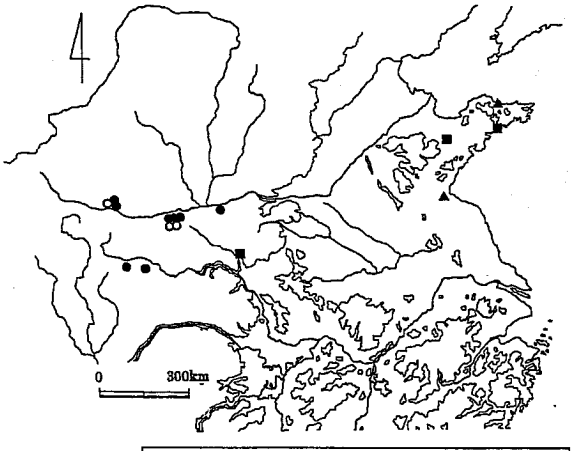
A類—3

第2図　A類の出土分布



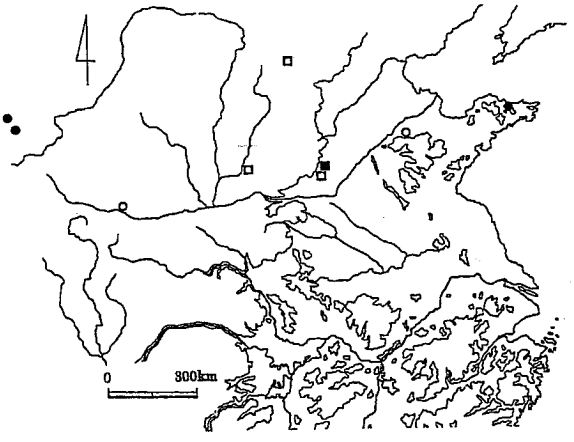
渭水流域—李家村文化期　長江中流域—前大溪文化期

B～F類—1



黄河下流域—大汶口文化期併行　黄河中流域—仰韶文化期
渭水流域—仰韶文化期　漢水上流域—仰韶文化期

B～F類—2



龍山文化期併行

B～F類—3

●-B類　○-C類　▲-D類　■-E類　□-F類

第3図　B～F類の出土分布

ような形状をしており、なかには把手を作り出したものもある。「うわいし」の形態から凹みにそって前後に擦って用いるものと考えられる。現在のところ、出土分布域が限られていることから、特定の用途を考える必要がある。

以上、各類とその出土分布の特徴を概観した。A類は従来認識されてきたいわゆる磨盤であり、その分布は前期の黄河流域に普遍的にみられる。しかし、成形が粗雑化したり出土量が減るものの、後期にいたるまで出土する。今回、分類したなかで注目されるのがB類である。B類の使用法はA類と異なる。すなわち、使用面が擂鉢状にくぼんでいることから、「うわいし」を「したいし」に当てて円を描くように、または小刻みに磨りあてたり、搗いたりする。それだけでなく、B類には打痕をもつものもあり、敲き潰す台石としての機能をももつ。こうした点においてB類はA類と区別することができる。

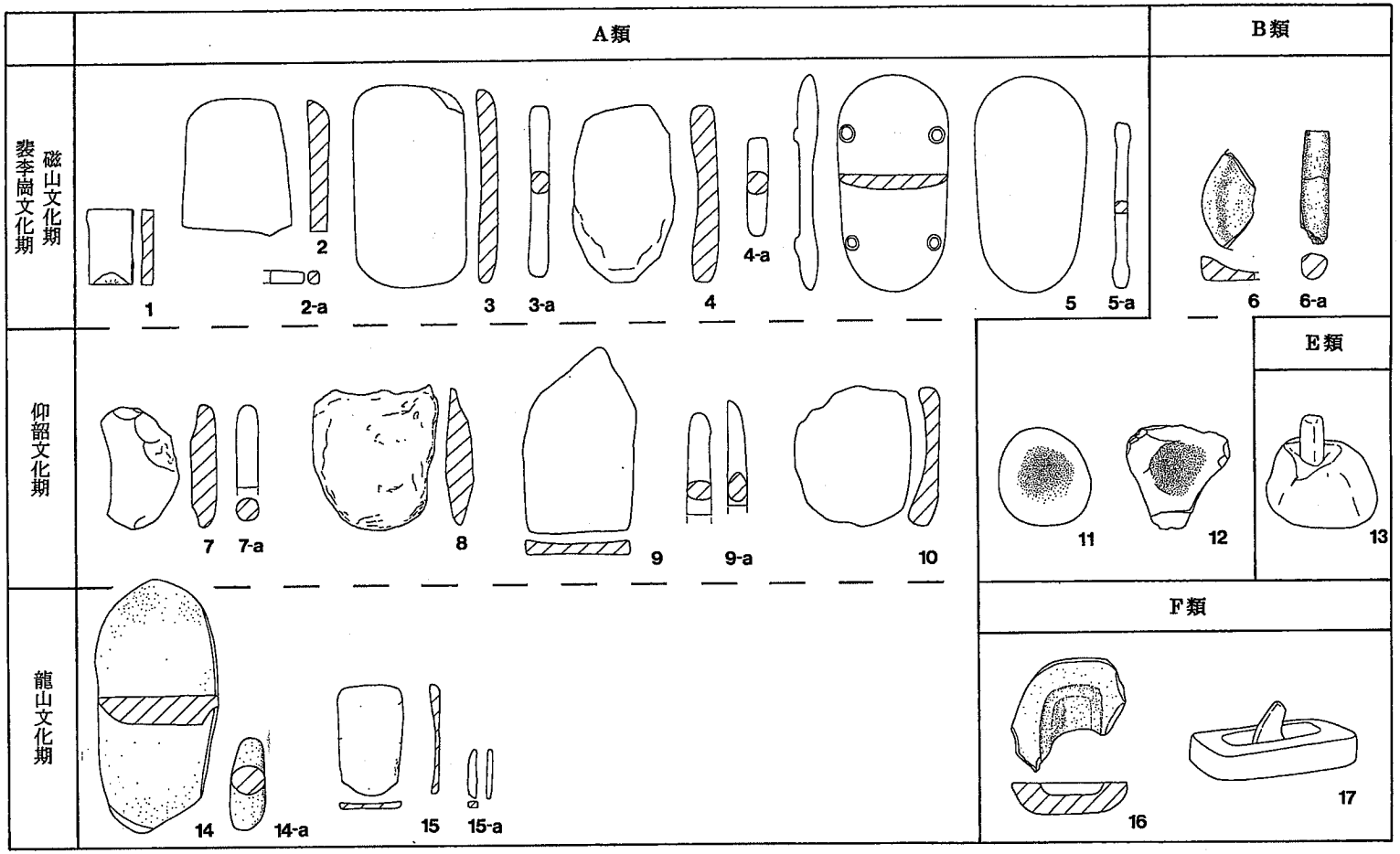
ところで、A類は有光が分類した鞍形すりうすと皿形すりうすを内包し、B類は石皿の一類型でもある。これらの技術進化の関係は、石皿から鞍形すりうす[22]、または皿形すりうすから鞍形すりうす[23]とされ、その関係は同時に時間的な前後関係となって解釈される傾向にある[24]。しかし、B類をみてみると、渭水流域では仰韶文化期に盛行しており、両者が時間的な前後関係をもって変化したものととらえることはできないのである。つまり、技術進化の系統として存在していない可能性があるのである。

こうした点に留意し、次節では地域ごとの様相をみていくことにする。

第三節　地域ごとの検討

1．黄河中流域（第4図）

裴李崗文化や磁山文化には、有足の磨盤と長い棒状の磨棒などがセットになって出土する（第4図5）。これは形態的にも特徴あるもので、穀物加工具としてだけでなく当該文化の性格をあらわすものとして注目されてきた。この磨盤はA類に属するが、こうしたものだけでなく、足を持たなかったり、成形が粗いものなどもある（第4図1～4）。有足のものは実用品でもあるが、副葬されることが多く社会的に象徴的な意味ももっていたと考えられる。セットとなる



第４図　黄河中流域磨盤・臼などの変遷

A類（1. 小山口遺跡　2～4. 水泉遺跡　5. 裴李崗遺跡　7. 中山寨遺跡　8. 後岡遺跡　9. 10. 石北口遺跡　14. 白営遺跡　15. 造律台遺跡）
B類（6. 南庄頭遺跡　11. 12. 廟底溝遺跡）E類（13. 黄楝樹遺跡）　F類（16. 白営遺跡　17. 陶寺遺跡）
（Scale=1/15　※－aは、対応する「うわいし」である。）

磨棒は、径数 cm ほどで、「したいし」の幅より長い。藤本強は、その使用法を磨棒の「両端をそれぞれの手で握り、手は下臼[25]の外にだし、前後運動させたのであろう」[26]としていることは、この地域の磨盤と磨棒の使用の特徴をよく表している。仰韶文化期に入ると消滅し、形態は不規則、粗雑になる傾向がある。一方、「うわいし」である磨棒は依然として普遍的に出土している。形態は棒状のものが存続し、長さもあまり変化がない[27]。裴李崗文化で行われてきた磨盤や磨棒の機能は失われていないと考えられる。

第４図 11･12 は、河南省廟底溝遺跡の B 類の出土例である。この地域で B 類の出土例はほかにないこともあり、渭水流域の B 類の影響が窺える。

２．黄河下流域（第５図）

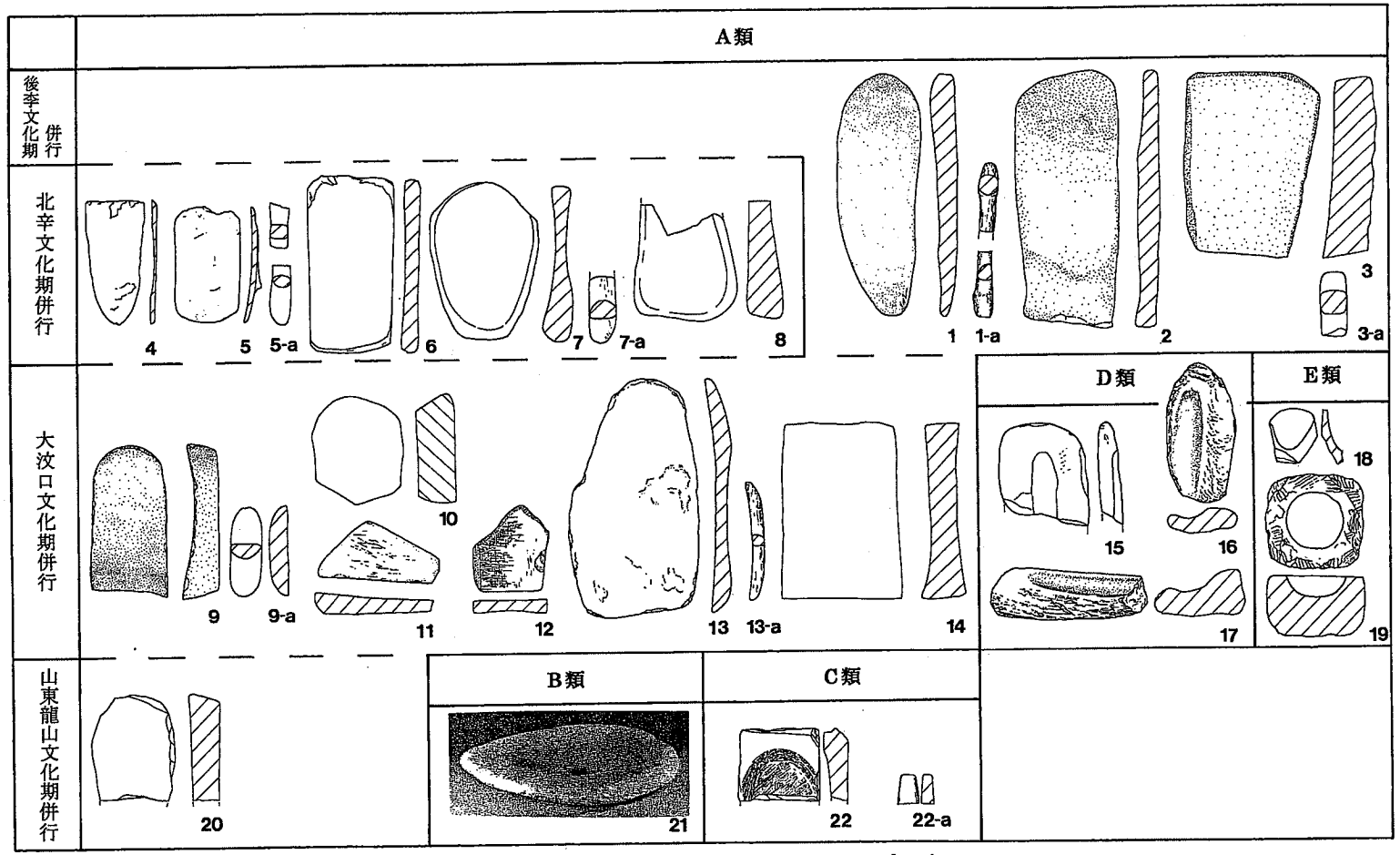
この地域で最も古い後李文化、そして後続する北辛文化の時期には A 類以外の「したいし」はみられない（第５図１～８）。北辛文化の A 類には有足のもの（第５図５）があり、時間的な関係から地域的に隣接する裴李崗文化や磁山文化の影響が窺える。大汶口文化期にはいると A 類に加えて、とくに D 類（第５図 15～17)、E 類（第５図 18･19）の出土が注目される。その分布域をみると山東半島に限られることがわかる。

山東龍山文化期併行では、山東半島先端部の山東省楊家圏遺跡（第５図 20）に A 類の出土例を確認できるが、所謂山東龍山文化の領域では A 類の出土例はない。しかし、棒状の磨棒は出土しつづけている。同省照格庄遺跡出土の B 類には、中央に孔がある（第５図 21)。

詳細な報告をもとにした論証は現時点ではできないが、黄河下流域は、泰山周辺と山東半島先端部とでは組成の様相が異なることが想定できる。それだけでなく、黄河流域全域でみた場合にも隣接地域とは、磨盤や臼などの時期的な消長が異なると指摘できる。

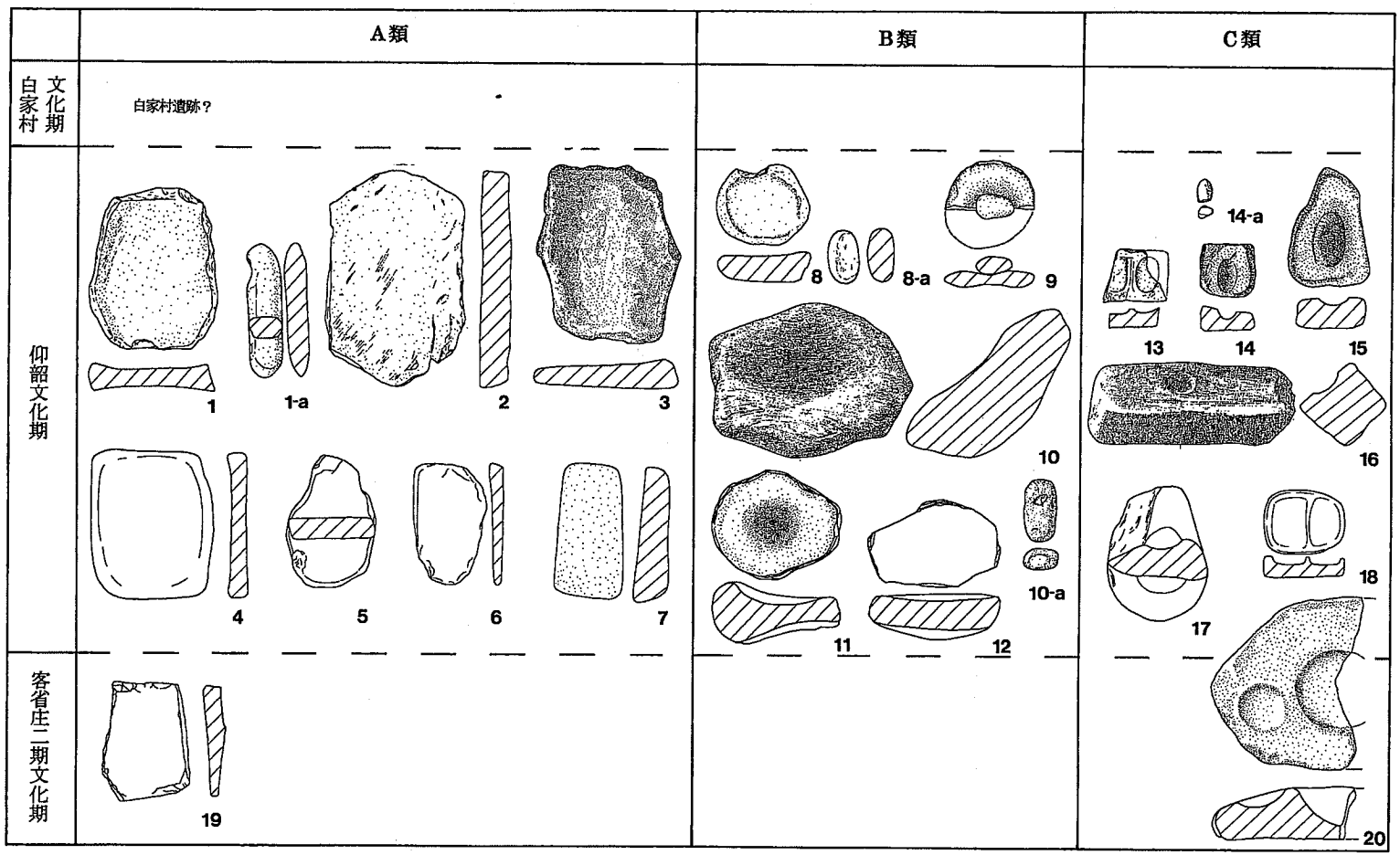
３．渭水流域（第６図）

白家村文化期では出土例は少なく、陝西省白家村遺跡に数点の報告がある。



第５図　黄河下流域磨盤・臼などの変遷

A類（1. 2. 小荊山遺跡　3. 西河遺跡　4~6. 北辛遺跡　7. 8. 9. 王因遺跡　10~12. 尉遲寺遺跡　13. 白石村遺跡　14. 20. 楊家圈遺跡）
B類（21. 照格庄遺跡）　C類（22. 城子崖遺跡）　D類（15. 大尹山遺跡　16. 17. 白石村遺跡）　E類（18. 前埠下遺跡　19. 廟埠遺跡）
（Scale=1/15　※－aは、対応する「うわいし」である。）



第６図　渭水流域磨盤・臼などの変遷

A類（1. 2. 姜寨遺跡　3. 半坡遺跡　4~7. 北首嶺遺跡　19. 許西庄遺跡）　B類（8. 9. 姜寨遺跡　10. 半坡遺跡　11. 12. 福臨堡遺跡）

C類（13. 姜寨遺跡　14~16. 半坡遺跡　17. 18. 北首嶺遺跡　20. 趙家来遺跡）　(Scale=1/15　※－aは、対応する「うわいし」である。)

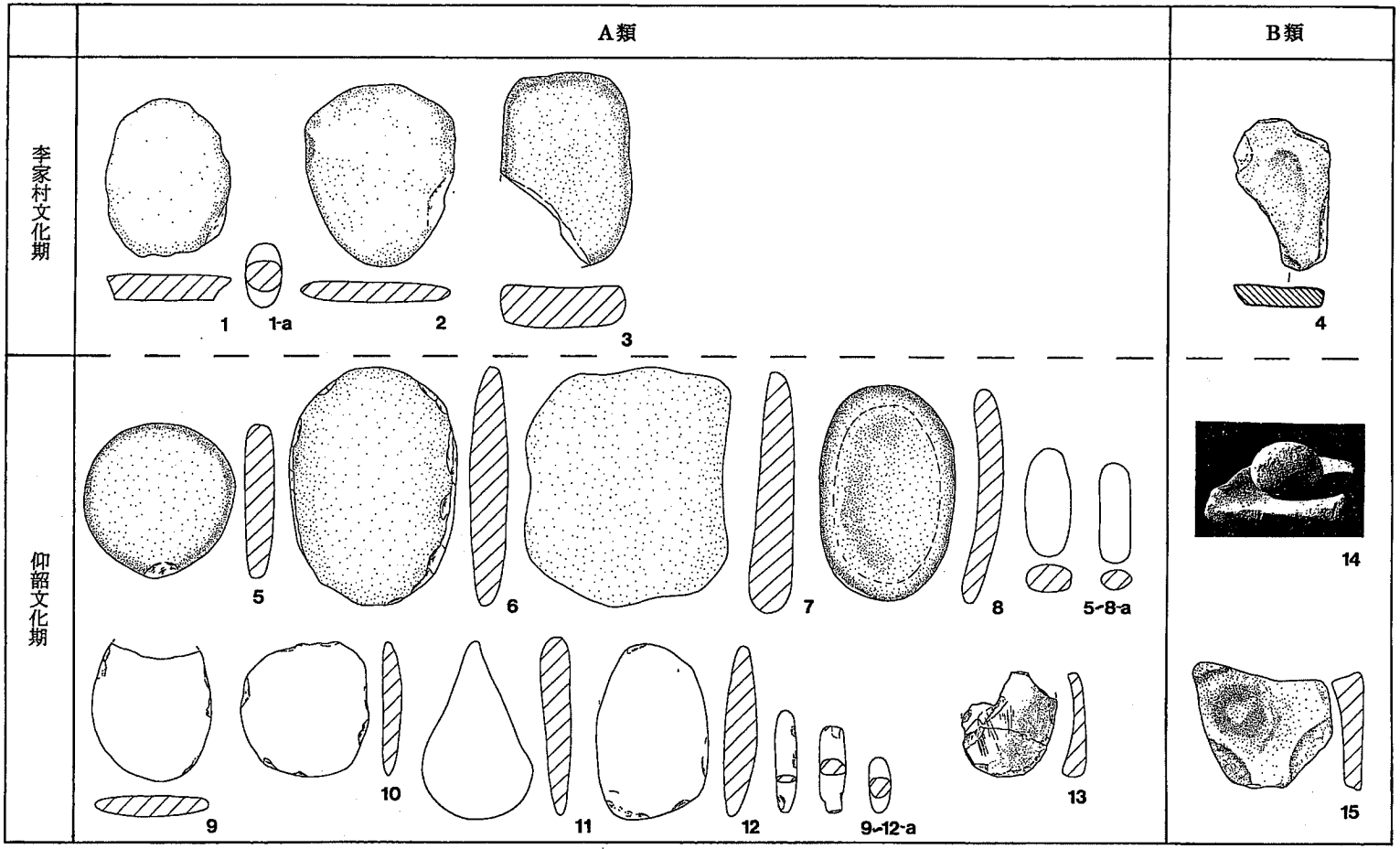
「したいし」は、長さは残存で 12cm、幅 8.6cm ほどで詳細は不明だが、A 類と思われる。仰韶文化期に入ると形態も多様化し、出土量も多くなる。A 類は扁平のものや割石状のものなどがあるが、成形したものはない。また、磨盤のなかほどが鞍形に大きく凹むようなものもない。しかし、「うわいし」の形態は棒状のものがあり、その擦れ具合から「したいし」に対して前後方向に擦って使用したと想定できる。また、この時期 B 類の出土が目立つ。陝西省姜寨遺跡（第６図８・９）や同省半坡遺跡（第６図 10）の報告には石磨臼、石臼と報告される、中央が凹むものが多く出土する。「うわいし」に楕円形、球形の磨石が多いことから、円を描くように擦ったり、搗いたりしたと想定できる。また、使用面に赤色顔料が付着するものがあり、食物を調理加工する以外の用途ももつ。この地域にはC類の出土も多く、これらには赤色顔料がよく付着しており、この地域の特色といえる。客省庄二期文化期にいたると出土数自体激減するが、出土例の種類はあまり変わらない。

ところで、赤色顔料が付着するものは、B 類、C 類に多い。第二節で述べたとおり B 類、C 類は渭水流域、漢水上中流域に多く出土しており、赤色顔料を多用する地域とほぼ重なることは留意すべきであろう。

４．漢水上中流域（第７図）

李家村文化期では、陝西省阮家壩遺跡（第７図１・２）、同省馬家営遺跡（第７図３）などから A 類が出土している。これらの遺跡の「うわいし」の磨棒は、平面形が楕円形のものなどがあるが、長い棒状の磨棒は出土していない。また、阮家壩遺跡からは B 類の出土例（第７図４）がある。使用面は長方形状の「したいし」の中央付近で底が長楕円形状に浅く凹む。仰韶文化期に入ると、阮家壩遺跡（第７図５～８）や馬家営遺跡（第７図９～12）などで李家村文化期と同形の A 類があるほか、同省何家湾遺跡（第７図 14･15）からは B 類も出土している。対応する「うわいし」は、球形のものがセットとなる。

仰韶文化期まで、この地域は A 類と B 類が並存しているが、屈家嶺文化期になるとこれら磨盤は出土しなくなる。屈家嶺文化は長江中流域に中心をもつ文化であるが、この地域への拡大によって在来の文化的要素が姿を消す現象が磨



第７図　漢水上中流域磨盤・臼などの変遷

A類（1. 2. 5~8. 阮家壩遺跡　9~12. 馬家営遺跡　13. 龍崗寺遺跡）　B類（4. 阮家壩遺跡　14. 15. 何家湾遺跡）

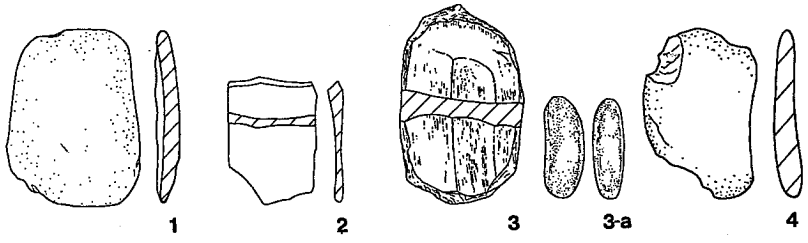
（Scale=1/15　※－aは、対応する「うわいし」である。）

盤にもあてはまることになる。

5．長江流域（第８図）

いわゆる磨盤は雑穀栽培と関係する遺物として捉えられてきたためか、この地域では注意されることが少なく、報告されても図や所見はほとんど見ることができない。ここでは、今回集成したなかで、穀物などの食物加工具としても想定できる磨盤などを挙げ、検討を加えてみたい。ただ、この地域では、磨盤、砥石などと報告される呼称と実際の機能、用途が一致しないものもあるなど、集成分析には慎重を要する。

湖南省高廟遺跡下層から、長さ 38cm、幅 28cm の磨盤が出土している（第８図１）。断面図から中央部が縦長に浅く凹むものである。遺跡下層の年代は、7400 年前と報告されている。また、第８図２は、縦断面の形状から、「うわいし」は前後に動かしたものと推測される。この遺跡からは、磨棒も出土している。磨棒と報告しているが端部が細くなるもので、こうした形態の磨棒はほかになく磨盤とセットになるかどうかは検討を要する。湖南省欧家台遺跡屈家嶺文化期にも長さ 33cm、幅 22cm のものがある（第８図４）。これらは、Ａ類に分類できる。長江中流域では、ほかに磨盤と報告されるものが数例あり、同様にＡ類に属するものとされる。しかし、中央が鞍形に凹むいわゆる鞍形すりうすのような形態のものは現在のところ出土例はない。また、湖北省柳林渓遺跡



第８図　長江流域の磨盤・臼など

1. 2. 高廟遺跡（A類）　3. 柳林渓遺跡（D類）　4. 欧家台遺跡（A類）

(Scale=1/15　※－ａは、対応する「うわいし」である。)

前大渓文化期より D 類の磨盤が出土している（第８図３）。長さ 41.2cm、幅 26cm で、前後に擦痕があり、浅く溝状に凹んでいる。このように長江中流域にも黄河流域の磨盤に類するものがあることが確認できる。

しかし、用途に関してはほかの地域同様に再検討を要する。黄河流域と一律に扱うよりも地域内での検討を積み重ねていくことが必要で今後の課題としたい。

第四節　まとめ

１．用途をめぐる問題－磨盤・臼などと穀物加工について－

以上、黄河流域と長江流域の主要な地域の磨盤・臼などの時期的変遷をみてきた。ここでもう一度整理してみると、磨盤・臼などは、機能的な側面からの形態分類により、大きく６分類することができた。そのなかで、従来、磨盤つまり穀物加工のすりうすとして認識されてきた磨盤には、いわゆる石皿とされるものも含まれていることが明らかとなった。本稿で、B 類としたものである。

有光の分類を再度みてみると、朝鮮半島の出土品を杵臼とすりうすに大別し、すりうすを皿形と鞍形に細分する。そして、臼のなかに石皿を入れ、皿形すりうすをすりうすに入れている。したがって、黄河・長江流域において、こうした形態のものも磨盤という用語で一括して認識してしまうことは、東アジアのみならず中央ユーラシア・西アジアとの相互関係を知るうえで齟齬をきたす恐れがある。それらは機能的に異なる遺物であり、明確な区分をしていく必要がある[28]。

さて、用途の問題であるが、その解明のためには出土状況や使用痕分析さらに対象物との比較検討を要する。磨盤や臼などについて、報告書に詳細な所見のないことが問題である。磨棒と報告されるものでも、筆者が実見した例では、側面に擦痕などはなく、端部に打痕や擦痕をもつものがあった[29]。側面を使用して磨る道具とした磨棒だけでなく、他の機能をもつものがあることは、今後注意していく必要がある。

これまで対象物は基本的には穀物で、磨盤や臼などは脱穀、製粉する道具と

して考えられてきた。この用途論の言説は第一節で述べた。つけくわえて、黄河流域での穀物はアワ、キビ、ヒエであるが、磨盤を使用して脱穀や精白は不可能ではないが、粒が細かすぎて用をなさない。また、製粉する道具としても再考を要する。製粉を否定するものではないが、西アジアの鞍形すりうすの用途と比較し、中国新石器時代の磨盤を製粉具とすることに疑問が残る。ひとつは、対象穀物の性格の違いである。コムギは粉食であるが、アワ、キビなどは粉食、粒食も問わないのである[30]。いまひとつは本章で示した磨盤の機能からみた形態の多様さである。農耕文化の伝播あるいは発展の系統論だけでは解明できないことを表していると思われる。このことは、まず地域を限って、そのなかの生業体系とその変化を比較しながら論じていくことも必要になるであろう。

2．磨盤・臼などからみた地域性

磨盤や臼などは、機能が異なるものを一括して呼称していることがわかったが、ここでは分類と出土分布を明らかにしたことを受けて、どのような地域性が窺えるか検討し、まとめとしたい。

とくに磨盤が卓越する新石器時代中期までは、黄河中流域ではA類、渭水流域や漢水上流域ではA類、B類が主流となっている。また、黄河下流域としたなかでも、泰山周辺と山東半島端部とでは様相が異なることが想定できる[31]。このことは、各地域において、磨盤は機能的に区別でき、その組成からみて、その用途も各地域で異なっていたと想定できる。重要なことは、磨盤や臼とされてきたものには、機能的に多種あり、各地域においてその組成が異なっていたことである。こうした相違は、アワ、キビなどを栽培する畑作地帯として一様な農耕形態をとっていたとはいえない可能性が考えられる。とくに渭水流域や漢水上流域の様相をみると、磨盤の盛行は黄河中流域の裴李崗文化期併行の白家村文化期や李家村文化期ではなく、むしろ仰韶文化期にあり、黄河中下流域とは時期的に異なるのである。磨盤の表面に赤色顔料の痕跡が残るものが多いことが報告されていることも考慮すると、裴李崗文化や磁山文化のように磨盤と穀物を現段階で積極的に結びつける根拠は少なくなる。また、磨棒の形態

にしても、同様に長い棒状のものはほとんど出土をみることはない。前節で述べたように、雑穀と粉食の関係からみて、磨盤や臼のあり方はより多角的な視点から解釈していく必要があろう。つまり、黄河中下流域と渭水流域や漢水上流域とでは、組成と出現時期が異なることから、磨盤や臼の用途も異なる可能性があるといえる。磨盤を穀物加工具それも雑穀と強く結びつくものと捉える従来の説明では、黄河全流域の磨盤の持つ意味が一律に想定される傾向にあったが、地域的にみると農耕の生業における比重の違い[32]や農耕に対する社会通念が異なる[33]などの見解もあり、穀物利用のあり方、ひいては食文化が異なることも予想される。

時間的にみると、新石器時代前期以来、黄河流域においては磨盤が一般化し、その後徐々に減少していく傾向が一様にみられる。しかし、各地域の磨盤や臼などは基本的に独自性をもち、そこからは、まずは生業体系や食体系の変化との関係が推測できる。つまり、その時期は煮沸具のなかで蒸具の増加が顕著になる時期であり[34]、食体系の変化とともに、生業と社会の体制自体が変化したことが挙げられる。その具体的な内容は、今後の検討にゆずるとして、可能性として挙げられるのは、甲元真之[35]や藤本強[36]も指摘するように植物質食物の需要の変化が考えられる。

3．総括

本章では、加工具である磨盤や臼などを、機能的側面を重視することで分類を行い、とくに磨盤が盛行する時期に黄河流域や渭水流域の各地域で地域性があることを指摘した。磨盤や臼などの用途は今度の課題としながらも、このことは加工具に異なる用途が存在することを示唆し、食文化体系において磨盤・臼などを出土する地域内で異なる体系が併存したことを述べることができる。

また、時期が下るにつれ、A類、B類ともに消滅こそしないものの減少することは確かで、食文化体系の変容を想定することができる。これについても、同様に地域間で時期差があることがわかった。

農耕初現期の磨盤の用途は、粉食のための製粉ではなく、精白手段としての粉砕と考えることで、アワ、ヒエなどが粉食を必然としないことへの回答とす

ることができる。ただし、用途にいたるまでの加工具の研究は、今後地域ごとに行うことで解決したい。

おわりに－課題にかえて－

本章では、磨盤や臼などの分類と出土の分布から地域性を概観するまでを述べた。これらの遺物は穀物栽培だけでなく、採集なども含めた生業体系のなかの道具として、今後ほかの植物性食物との関係を明確にしていくことも課題となってこよう。従来、農耕文化の指標のひとつとして磨盤が認識されてきたが、以上のことから明らかになったことを視野にいれて、B類のあり方から磨盤や臼などを再検討していく必要がある。また、渭水流域や漢水流域でみられた、赤色顔料の加工具としても存在することから、こうした視点からの分析も行っていかねばならない。

---

1 西谷正「東北アジアの鞍形磨臼」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』2002年

2 加藤里美「中国新石器時代における「すりうす」－研究の現状と方向性－」『亜州学誌』創刊号 2002年

3 天野元之助「第三編　農具編　第三章　ウスの発達」『中国農業史研究増補版』1979年 御茶の水書房

1952年に「中国の「うす」の歴史」と題し『自然と文化』3に発表した論文の結言に新石器時代の磨盤と輾棒を補充している。天野は、古代中国の食の変遷を粒食から粉食と考えていたが、1979年に新石器時代の磨盤を無視するものではないとし、留意している。その際、磨盤を（Saddle quern　石皿）と括弧付けしており、新石器時代の磨盤に2種類あると認識していることをうかがわせる。

4 有光教一「朝鮮石器時代の「すりうす」」『史林』第35巻第4号 1953年

5 中国科学院考古研究所編著『新中国的考古収獲』1962年 文物出版社

6 吉林大学歴史系考古専業・河北省文物管理処編『工農考古基礎知識』1978年 文物

出版社

[7] 曾騏「我国新石器時代的生産工具総述」『考古与文物』第5期 1985年

[8] 鞍形すりうすのことである。

[9] 呉加安「石器時代的石磨盤」『史前研究』第1・2期 1986年

[10] 陳文「論中国石磨盤」『農業考古』第2期 1990年

[11] また、対象とする磨盤は穀物加工具に限るとし、赤色顔料加工具は除くとしている。両者は考古学的な検討をしたうえで用途分類したものではなく、用途を先に限定してそれらを別々に検討してしまったのである。。

[12] 藤本強「石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼（I）ー序論・旧石器時代・中国新石器時代ー」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第2号 1983年

[13] 磨盤を製粉具とみた背景には、鞍形すりうすがとくに西アジアにおいてコムギの粉食に用いられたことが大きく影響している。その用途をもつ鞍形すりうすが中央ユーラシアを経由して東アジアまで伝播した可能性があることから、磨盤も粉食に用いられたと想定されたのである。（藤本強「磨臼（サドルカーン）について」『考古学と民族誌』1989年 六興出版）しかし、コムギには粉食にしないと食することができないという必然性があるものの、アワ、キビなどコムギと同様の理由をもって粉食の必然性を論じることはできない。

[14] 西谷正「東北アジアの鞍形磨臼」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』2002年

[15] 加藤里美「中国新石器時代における「すりうす」ー研究の現状と方向性ー」『亜州学誌』創刊号 2002年

[16] 分類において概念図はあるものの、その詳細はない。また、C型式としたものがあるが、文章、図において示した個所はない。

[17] 馬洪路「我国新石器時時代谷物加工方法演変試探」『農業考古』第2期 1984年
陳文「論中国石磨盤」『農業考古』第2期 1990年
穀物加工について、石杵の出土の変遷を整理することで舂搗法について論じている。形態からみると機能としては異論ないが、それを穀物加工に限定することは大きさや出土量に問題があり尚早であろう。

[18] 有光教一「朝鮮石器時代の「すりうす」」『史林』第35巻第4号 1953年

[19]詳細な報告が少ないことに加えて、磨り潰したり、敲いたり、砕いたりすることは、道具を違えないでも行うことができ、それぞれに対応する道具を明確に区別することはできないことも分析の障害になっている。(小林康男「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学』1978年)

[20]機能に注目して分類しているため、それ以外の形態的類似性は重要な要素にはしていない。

[21]「断木為杵掘地為臼」『易・系辞』とあり、「地臼」を想定する研究者は多い。

[22]呉加安「石器時代的石磨盤」『史前研究』第1・2期 1986年
陳文「論中国石磨盤」『農業考古』第2期 1990年
三輪茂男『臼(うす)』1997年 法政大学出版局

[23]有光教一「朝鮮石器時代の「すりうす」」『史林』第35巻第4号 1953年

[24]前者は採集狩猟経済から農耕経済への移行の指標、後者は作業効率に関する技術進化の指標となる場合もある。

[25]ここでは、磨盤のこと。

[26]藤本強「磨臼(サドルカーン)について」『考古学と民族誌』1989年 六興出版

[27]「したいし」の出土例について、報告書で詳細な所見や図などがほとんどみられない。「磨盤」と報告されているものの例は多く、今後これらも再確認していく必要がある。

[28]西谷は裴李崗・磁山文化の有足の磨盤を鞍形磨臼の一種と考えている。その際、他の地域で出土する磨盤をも一括することなく区別していることは重要である。

[29]例えば、陝西省紫荊遺跡出土の磨棒をみると長さ15cm 直径5cm の棒状の端部に擦痕と打痕が認められた。共伴する磨盤にはB類がある。凹みにはやはり擦痕と打痕が多数残っており、磨棒は横にして使用したのではなく、立てて端部を磨りあてたり敲いたりしたと想定できる。

[30]ほかにウルチ性かモチ性かで適した食し方はあるが、そのことと磨盤の使用は本来的に関係があるものではない。

[31]この地域の各考古学文化をみても山東半島端部は独自の様相を呈す。このことは自然環境が大きく影響していると同時に、遼東半島との関係も密接にもっていたことも背景として挙げられる。(宮本一夫「膠東半島と遼東半島の先史社会における交流」

『東アジアと『半島空間』－山東半島と遼東半島』2003年 思文閣出版）

[32]甲元真之「長江と黄河」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 1992年

[33]宮本一夫「中原と辺境の形成－黄河流域と東アジアの農耕文化－」『現代の考古学 3 食糧生産社会の考古学』1999年 朝倉書店

[34]槙林啓介「中国新石器時代甑の基礎的研究－黄河・長江流域を中心にして－」『先史学考古学論究』Ⅳ 2003年

[35]甲元真之『中国新石器時代の生業と文化』2001年 中国書店

[36]藤本強「植物利用の再評価－世界的枠組みの再構築を見据えて」『古代文化』第52巻第1号 2000年

第四章　調理具の考古学的研究

－蒸具とその組成からみた食文化体系－

はじめに

本章は、新石器時代の調理具、とりわけ蒸具について考察を行う。第一節、第二節でそれぞれ甑と甗の出現と展開について、その構造から分類し明らかにする。その後、第三節では、蒸具としての分類を行い、蒸具組成とその変化をみることで食文化体系について論じる。

第一節　甑の出現と展開－有孔型甑と筒型甑－

はじめに

中国新石器時代の黄河・長江流域では、自然遺物の出土の増加にしたがい、栽培穀物の地域差が明らかになっている。長江流域は、基本的にイネを栽培する。淮河以北の渭水流域を含む黄河流域は、アワ、ヒエ、キビ、イネなどを栽培し、後にムギ類が加わる。

こうした栽培穀物の地域差は、当然のことながら、その食し方にも反映していると思われる。農耕という一連の作業[1]は、人々の食料を得ることを目的にしたものであるが、これに、食糧をどのように食したかという、いわゆる調理の問題が加わる[2]。しかし、栽培穀物の地域差が調理具にどのように関係しているのか、具体的な遺物の検討をとおして論じられることはほとんどなかった。土器文化ごとに内容が整理されることが主であったため、地域を越えて見る場合、その特性が明らかにはなっていない。新石器時代では栽培穀物の異なる社会が併存しており、穀物利用においても地域で独自的な様相をみせる場合と地域を越えて共通な様相をみせる場合とが予想される。このようなことを明らかにするために、その道具である調理具がどのように使用され、どのような在り方を示すのかについて知ることも重要であると考えている。

黄河・長江流域における基本的な調理具は、新石器時代をとおして罐・釜・鼎などの煮沸具があり、どの地域でも煮沸具を備えていることはわかっている。そのなかで、蒸すためにもちいる甑・甗は特徴的な調理具のひとつである。しかし、甑や甗などについては、これまで、中心に扱った研究はほとんどなかっ

た。そこで、本節は、まず甑を集成したのち、考古学的に分析し、その分布と変遷を明らかにすることを目的にしたい。

1．甑の研究史

中国新石器時代研究において、甑にかぎらず蒸具の研究はほとんど行われることはなかった。そこでまず、煮沸具などの調理具研究のなかで蒸具がどのようにとらえられてきたかみておきたい。

日本人研究者による甑研究は古くからみられる。浜田耕作は鼎と鬲および甗との関係について、鼎、鬲の上に甑をのせ、甗へと変化することを述べた[3]。岡崎敬はかまど[4]を分析するなかで、甑の利用についても言及し、古代中国では釜甑形式から鍋形式へと調理法が変遷することを論じた[5]。岩崎卓也は、中国の甑形土器を紹介し、遠賀川系土器との比較を行った[6]。甑の分類は、岩崎の研究を受けて、堀田啓一が古文献と対照させて行っている[7]。これに続いて木下正史は、炊飯具の系譜を東アジア的視点で追っている[8]。これらの研究の主題は、古代日本の煮沸具の様相が大陸からどのように伝わったかというものであった。しかし、いずれも 1970 年代までの研究であり、この後、資料は飛躍的に増加し、再考の必要がでてきている。

中国新石器時代の煮沸具を総括的にまとめた論考のなかに、蒸具に関する言及が若干みられる。超清は、黄河流域を４地域に区分し、煮沸具の組み合わせとの共通性をまとめ、その変化が３段階あることを明らかにしている。そのなかで、罐や釜などの煮沸具のみであった第１段階から、第２段階では甑が出現し、第３段階で甗が出現すると述べた[9]。煮沸具を黄河と長江の両流域で取り扱った論考には今村佳子の研究[10]があり、新石器時代早、中期の煮沸具の組成を地域ごとに整理した。このほかにも調理具を地域、時期で区切って体系的に整理しようとしたものはあるが、多くは、鼎・鬲・鬶、あるいは三足土器・支脚などの、ひとつの器種を対象とした分類と分布の変遷をはかったものである。このように、甑などの蒸具の出現は煮沸具研究のなかで、調理方法のヴァリエーションが増加するという意義づけがされるものの、蒸具自体が対象にあつかわれることはほとんどなかったといえる。

このようななか、甑や甗を主体的に研究した施米克の論考[11]が挙げられる。氏は、甑と甗について黄河・長江流域における時期的な変遷をはじめて整理した。また、甑と甗との密接な関係を指摘し、甗が甑から変化、成立した可能性をいう。しかし、各地域の甑、甗の変遷の提示にとどまったことは否めない。

上述の如く、蒸具の体系的な研究は、ほとんどみることができない状況である。また、蒸具にはおもに甑と甗があるが、甑が煮沸具と伴出した場合、それらをあわせて甗と報告される場合や、単に孔をもつものを甑として報告されることもある。そこでまず、甑のみについて分析することからはじめたい。甗については第二節で論じる。また、甑にはほかに有機質の甑（セイロ）が想定される[12]が、今回の分析には含めない[13]。

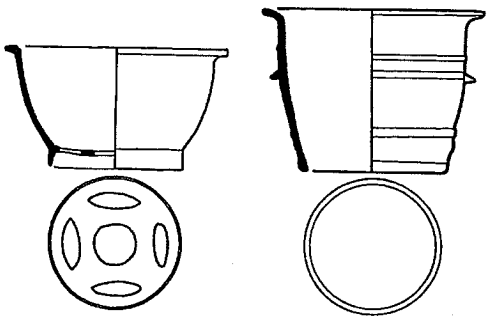
2．甑の分類

2．1．甑の分類

ここでいう甑とは、蒸す対象物をいれる容器であり、煮沸具とは別に単体で扱われるものをいう。甑とは食べ物を蒸すための道具であり、使用するときは水を入れた罐や釜などの煮沸具の上に置く。甑の底部や底部付近には蒸気孔があり、下からの蒸気により食べ物を蒸す。このように甑の甑たる由縁は、この蒸気孔の有無にある。蒸気孔の形態は様々である。蒸す対象物を入れる容器であるため、底の無いものの場合は、スノコを敷いて利用する。また、容器の底を残すものではそれ自体がスノコを支える部位にもなるし、直接対象物を入れることもできる[14]。その下の煮沸具は、罐形土器、鼎形土器、鬲形土器などがあり、地域によって異なる。

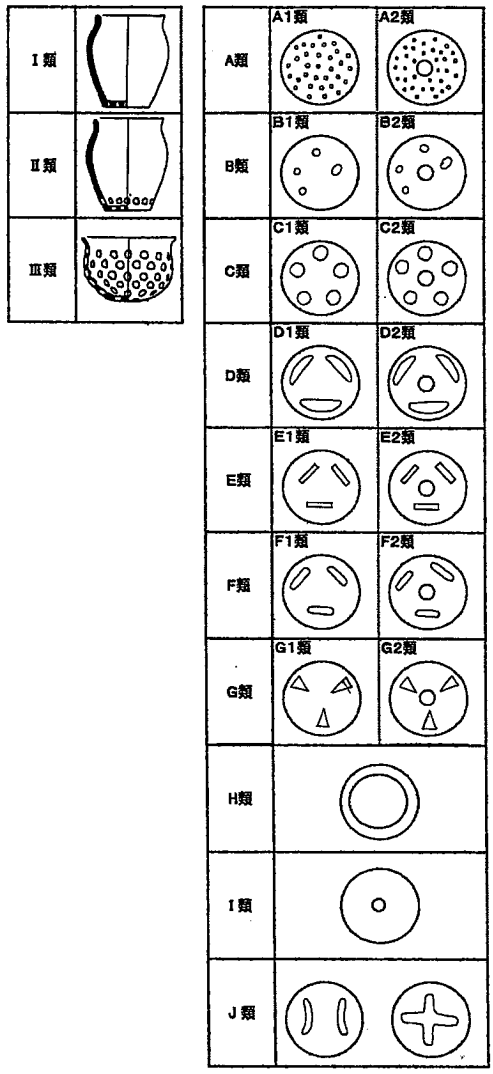
こうした使用上の違いは器形にも明確に現れている。そこで本節では、容器を成形後、底部などに蒸気孔を穿孔する「有孔型甑」と、底をつくらず筒状に胴部を積み上げ成形していく「筒型甑」との２つに大きく分類する（第１図）。なお、日本考古学では甑研究が進んでおり、なかでも外山政子[15]や杉井健[16]の一連の研究がある。これらも参考に分類を行った。

ところで有孔型甑については、容器製作に伴い、蒸気孔を施す必要がある。



有孔型甑　　筒型甑

第１図　甑の分類



第２図　左　有孔型甑蒸気孔位置分類
　　右　有孔型甑蒸気孔形態分類

蒸気孔は数、形などが様々で、これを蒸気孔形態としてとらえる。蒸気孔の種類には、底部にひとつ孔を施すものがある。筒型甑と同様につつぬけになるものであるが、製作工程上異なることから、これは有孔型のなかに分類した。また、蒸気孔は容器の底以外にも施されるものがあり、どこに施すかという蒸気孔位置を指標に加えることができる。

甑や甗について分類検討を行うことは、地域内での在り方よりも、それらが土器文化の領域を越えてどのような関係にあるのかを知ることを大きな目的としている。したがって、土器の形態や焼成などといった土器体系に関わる属性

までも取り上げると、既存の土器研究と同様の結果しか得ることができない。そのため、ここでは蒸気孔にかかわる製作上の要素を重要視し、有孔型甑と筒型甑に大別した。有孔型甑は蒸気孔の位置と形態とで細分を行った(第２図)。甑のほかの要素を含めた詳細は、地域を限って検討したい。

甑の分類

（一）有孔型甑

底部や側面に蒸気孔をつくったもの。

（１）有孔型甑の蒸気孔位置

Ⅰ…底部のみに蒸気孔があるもの。

Ⅱ…底部と底部付近側面に蒸気孔があるもの。

Ⅲ･･･器面全体に蒸気孔があるもの。

（２）有孔型甑の蒸気孔形態

Ａ類…小円形の蒸気孔を底部一面に穿孔している。

Ａ１類…中央に円形の蒸気孔がないもの。

Ａ２類…中央に円形の蒸気孔があるもの。

Ｂ類…Ａ類に比べて蒸気孔の数は少なく、ランダムに穿孔している。

Ｂ１類…中央に円形の蒸気孔がないもの。

Ｂ２類…中央に円形の蒸気孔があるもの。

Ｃ類…同じ円孔を底部縁に沿って規則的に穿孔した蒸気孔。

Ｃ１類…中央に円形の蒸気孔がないもの。

Ｃ２類…中央に円形の蒸気孔があるもの。

Ｄ類…底部縁に合わせて穿孔するレンズ状もしくは楕円形の蒸気孔。

Ｄ１類…中央に円形の蒸気孔がないもの。

Ｄ２類…中央に円形の蒸気孔があるもの。

Ｅ類…四角形の蒸気孔。

Ｅ１類…中央に円形の蒸気孔がないもの。

Ｅ２類…中央に円形の蒸気孔があるもの。

F類…隅丸四角形の蒸気孔。

F１類…中央に円形の蒸気孔がないもの。

F２類…中央に円形の蒸気孔があるもの。

G類…三角形の蒸気孔。

G１類…中央に円形の蒸気孔がないもの。

G２類…中央に円形の蒸気孔があるもの。

H類…単孔で底部に対し、径が大きい円形の蒸気孔。

I類･･･単孔で底部に対し、径が小さい円形の蒸気孔。

J類…異形の蒸気孔。

（二）筒型甑

底部をつくらず、つつぬけになっているもの。

２．２．有孔型甑

この場合、そのほとんどは、まず底部を作り、その後穿孔し、蒸気孔を作るという製作方法である。蒸気孔は、棒状工具で突き刺してあける方法と、刀子状工具で切り抜いてあける方法とがある。

蒸気孔位置と蒸気孔形態とには相関関係にはないようで、この二つの属性は異なる規範で存在しており、どちらかに規制があるということはない。蒸気孔位置は地域性が非常に強く現れる要素である。Ⅰ類の甑は各地域に出土しており、基本形といえる。それに対して、Ⅱ類の甑は、黄河中流域を中心に出土するという特徴がある（第３図）。このため、蒸気孔位置と蒸気孔形態を組み合わせて分類すると、説明に煩雑さを招くのと、これまでと同様に、地域内での様相のみが浮き出てしまうことから、それぞれに個別に検討していくことにする。

まず、蒸気孔位置についてみてみる。

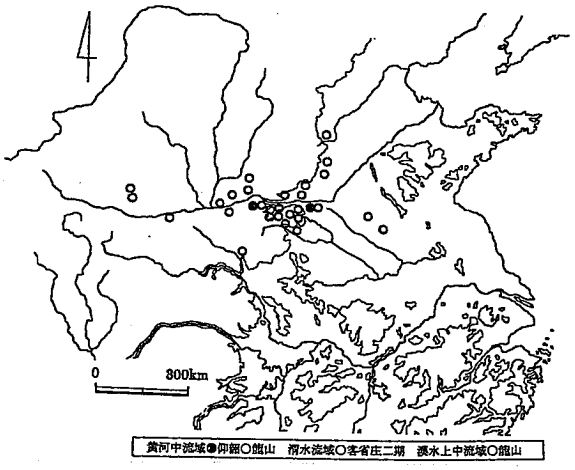
Ⅰ類

ほとんどが平底の底部形態をしている。丸底のものには、底部中央付近に集中して蒸気孔を施している。有孔型甑が出土する全地域にもっとも普遍的にみられる。

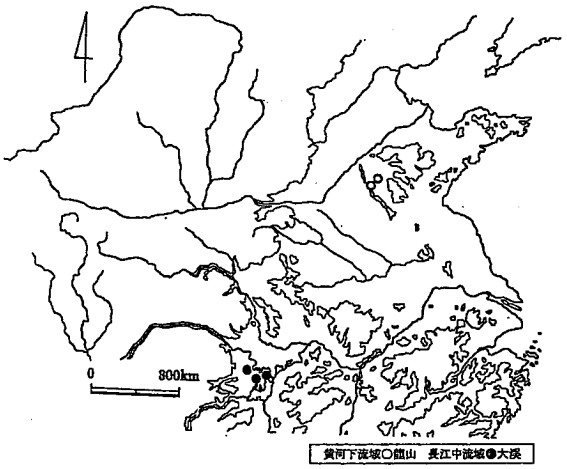
Ⅱ類（第３図）

胴部最下部側面に蒸気孔を施す。１周するものがほとんどであるが、２周、または３周するものもある。側面蒸気孔には、西山遺跡仰韶文化期出土例（第20図１）などのように細長い長方形の蒸気孔をもつものもあるが、基本的には底部の蒸気孔の形態や大きさと同じである。つまり、底部穿孔方法はそのまま側面にも適用される。

出土の分布は、時期的、地域的にほぼ限定できる。黄河中流域の仰韶文化期から徐々に出土し始め、龍山文化期になると出土数が急増し盛行する。出土遺跡のうち、約55%（71遺跡中39遺跡）にⅡ類が出土する。とくに河南省域では、その割合は約62%（51遺跡中32遺跡）にもなる。この地域の甑蒸気孔位置の主流といえる。蒸気孔形態には、Ａ類、Ｂ類、Ｃ類、Ｄ類などがみられるが、それらとの特別な関連性はうかがうことはできない。このことは、Ⅱ類がこの地域の蒸気孔位置の規範のひとつとして存在しており、強い地域性を表すものと理解できる。このⅡ類は二里頭文化期以降消滅することから、機能的な特徴ではなく、時間的に限られた甑製作に関する地域性の表象と捉えられる。



第３図　有孔型甑蒸気孔位置Ⅱ類の出土分布



第４図　有孔型甑蒸気孔位置Ⅲ類の出土分布

また、Ⅱ類は渭水流域では客省庄二期文化期になると出土するようになる。蔡家河遺跡出土例（第21図22)、将台山遺跡出土例は、平底の罐形土器の底部付近側面に1周する蒸気孔を配置する。蒸気孔の穿孔方向は斜め下から斜め上に施している[17]。このような要素は黄河中流域にもみられ、出土時期から、この地域のⅡ類は黄河中流域から伝播したことがわかる。しかし、土器の形態的特徴から、甑自体は当地の土器製作技法によって製作されたと理解できる。今後、調査例の増加にともない、出土例も増加すると思われ、黄河中流域との関係をより具体的に検討できる資料となるだろう[18]。

Ⅲ類（第4図）

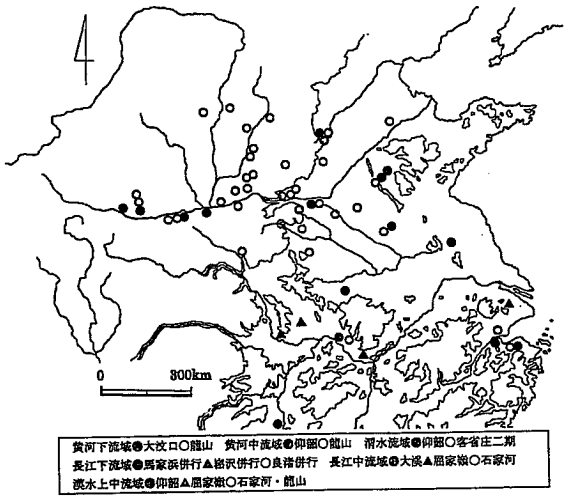
多数の円形蒸気孔を器面全体に穿孔する。長江中流域の大溪文化期と黄河下流域の龍山文化期に出土例がある。口縁部付近まで穿孔していることから、使用時には少なくとも蒸気孔は隠れる形で、下の煮沸具に収まっていたことになる[19]。

長江中流域にみられるものは、この時期の丸底をした口径20cm前後の盆と同様の器形をしており、ほぼ同じ大きさをした蒸気孔が器面全体に充填されている。劉卜台遺跡出土例（第23図6)、毛家山遺跡出土例（第23図8）は灰坑から出土しており、共伴遺物には釜・罐と報告されている、頚部がすぼみ胴部が膨らむ丸底の土器がある。また、劉卜台遺跡では、鼎足も共伴している。こうした容器がセットになるのであろう。大溪文化期以降、Ⅲ類の出土例はない。黄河下流域の山東龍山文化期出土例（第19図8・9）は罐形をしているが、この地域では例をみない器形である。現時点ではこれらと長江中流域のⅢ類との関係に言及できる証拠はなく、資料の増加を待ちたい。

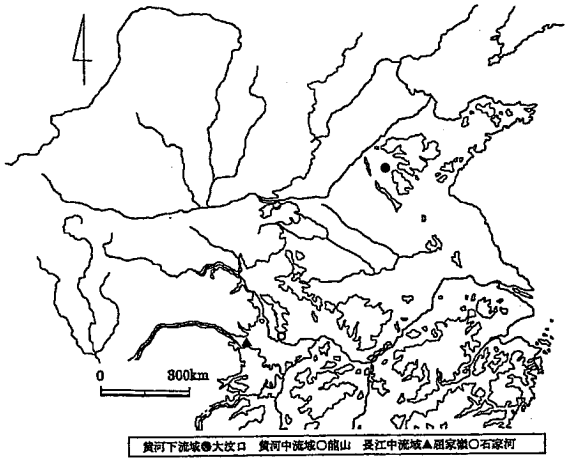
次に、蒸気孔形態についてみてみる。

A類（A1類・A2類）　（第5図・第6図）

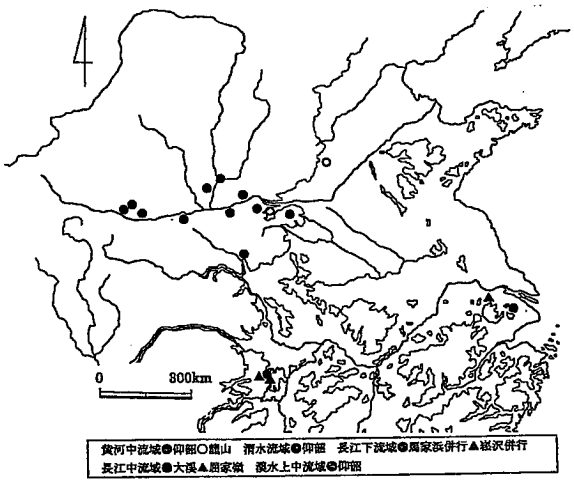
甑出現時からみられ、時期、地域を問わず出土し、偏りはないようである。出土点数も最も多く、蒸気孔形態の基本形のひとつといえる。棒状工具を用い刺突により穿孔をする。蒸気孔を幾重にも円周状に穿孔するもの、ランダムに



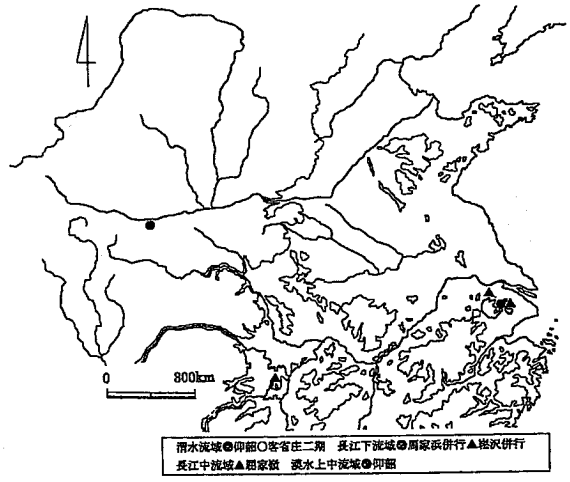
第5図　有孔型甑蒸気孔形態Ａ１類の出土分布



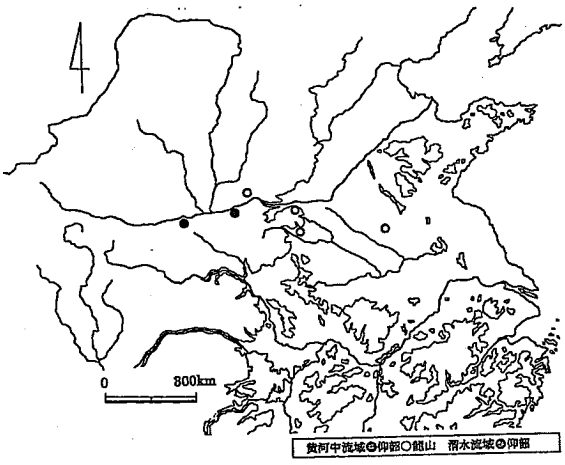
第6図　有孔型甑蒸気孔形態Ａ２類の出土分布



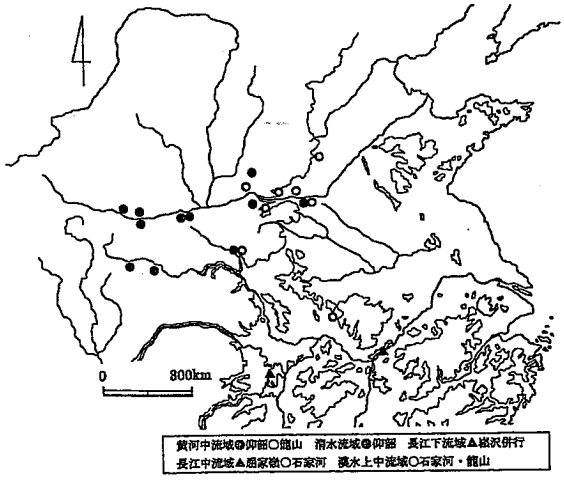
第7図　有孔型甑蒸気孔形態Ｂ１類の出土分布



第8図　有孔型甑蒸気孔形態Ｂ２類の出土分布



第9図　有孔型甑蒸気孔形態Ｃ１類の出土分布



第10図　有孔型甑蒸気孔形態Ｃ２類の出土分布

穿孔するものがある。Ａ１類のなかには、渭水流域の福臨堡遺跡、姜寨遺跡など仰韶文化期出土例の蒸気孔を規則正しく方眼状に配列したものもある。Ａ２類には、長江中流域の関廟山遺跡屈家嶺文化期出土例（第 23 図 11）があり、中央蒸気孔が他の蒸気孔より大きいものとして挙げられる。

Ｂ類（Ｂ１類・Ｂ２類）　（第７図・第８図）

Ｂ類は、穿孔の仕方に規則性はなく、また蒸気孔の大きさにも統一性がないものもある。周囲蒸気孔は、円形に配置するものの間隔が一定せず不規則なもの、ランダムに穿孔するものがある。しかし、そのような周囲孔であっても、Ｂ２類の中央孔は、意識的に中央に穿孔したものとして区別できる。こうした蒸気孔形態は時期が下るにつれ、なくなっていく傾向にある。分布の中心は、とくに仰韶文化期の渭水流域、黄河中流域にある。

Ｃ類（Ｃ１類・Ｃ２類）　（第９図・第 10 図）

周囲蒸気孔は、等間隔で規則的な配置をしている。Ｃ１類は、仰韶文化期では黄河中流域と渭水流域で出土し、黄河中流域では龍山文化期まで存続する。Ｃ２類の出土分布は黄河中流域以西と長江中流域に限定される。黄河中流域では、仰韶文化期、龍山文化期に出土する。仰韶文化期では、大河村遺跡出土例（第 20 図５）に壷形罐もあるが、ほかはすべて平底の盆形である。龍山文化期になると器形はすべて罐形に変わる。渭水流域では、客省庄二期文化期になるとまったく出土しなくなる。

長江下流域では、薛家崗遺跡薛家崗文化期出土例（第 22 図 10）がある。長江中流域では、劃城崗遺跡屈家嶺文化期出土例（第 23 図 13・14）、栗山崗遺跡石家河文化期出土例（第 23 図 20）などがある。劃城崗遺跡出土例は墓からの出土で、高さ 6.6cm と８cm の小形のものである。器形は黄河流域のような統一性がなく、口縁部がすぼまる簋形、胴部が球形をした甕形、広口の盆形など各遺跡によりまちまちである。

穿孔方法には刺突と切り抜きの２つの方法があるが、渭水流域出土の甑はすべて刺突による穿孔という特徴がある。黄河中流域の仰韶文化期でＣ類は、中央孔の周りに等間隔で刺突する方法であったのに対し、龍山文化期に入ると、

切り取りによってバランスよく穿孔するようになる。こうした方法は、次のD類とも共通している。

D類（D1類・D2類）　（第11図・第12図）

D類の特徴は、周囲孔を施すときに生じる。底部縁にそって穿孔するため、周囲孔と底部縁が並行する。周囲孔の内側縁部は外側と対称に切り取り、結果的にレンズ状あるいは楕円形を呈する。

D類は、長江中流域で出現する。大溪文化期の関廟山遺跡出土例（第23図4）、中堡島遺跡出土例（第23図5）がもっとも古い。この後、屈家嶺文化期、石家河文化期になると、出土例は急増する。黄河中流域では、石家河文化期併行の龍山文化期に出土するようになる。これらは、すべて蒸気孔位置Ⅱ類であるが、蒸気孔形態はD類を採用している。在地の要素であるⅡ類に、長江中流域の蒸気孔形態が見られることは、この期の長江中流域と黄河中流域の関係を知るうえできわめて重要である。このほか、長江下流域の陸墩遺跡薛家崗文化後期（第22図11）、匯観山遺跡良渚文化期に出土例（第22図19）がある。同様に、石家河文化期併行で長江下流域にも分布を拡大したことを示している。二里頭文化期以降、このタイプは土製甑とともに青銅製甑にも多く存在し続ける。

E類（E1類）　（第13図）

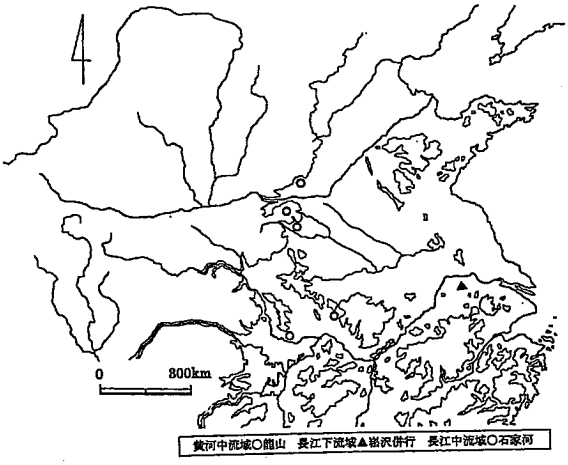
渭水流域の半坡遺跡仰韶文化期出土例（第21図12）のみである。現在はE2類の出土はまだ確認できない。

F類（F1類・F2類）　（第13図）

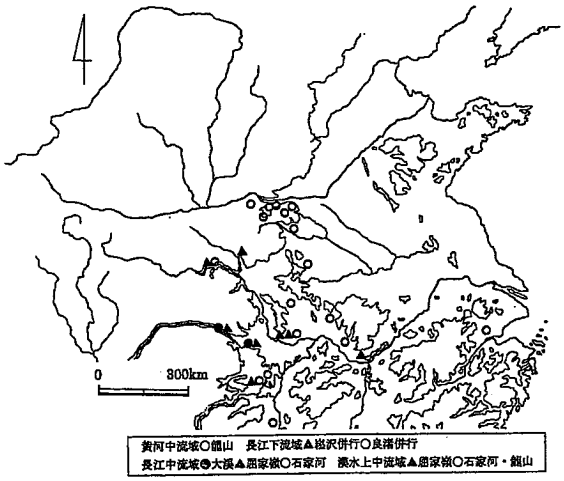
渭水流域の福臨堡遺跡仰韶文化期出土例（第21図14）、黄河中流域の西陰村遺跡仰韶文化期出土例（第20図6）、長泉遺跡仰韶文化期出土例などがある。廟底溝類型の分布範囲と類似することが指摘できる。

G類（G1類・G2類）　（第13図）

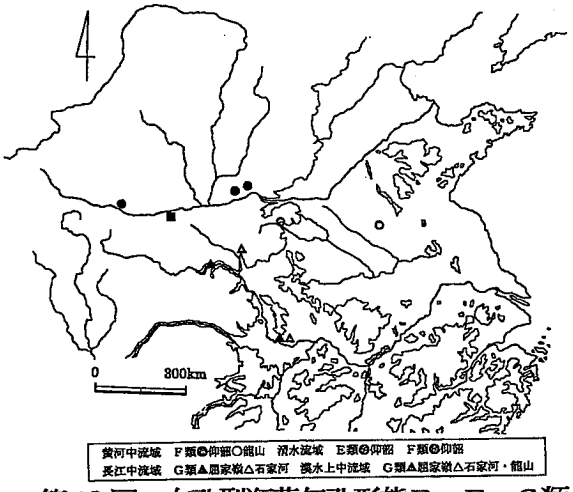
長江中流域と漢水中流域に出土分布の中心がある。同心円状に三角形蒸気孔



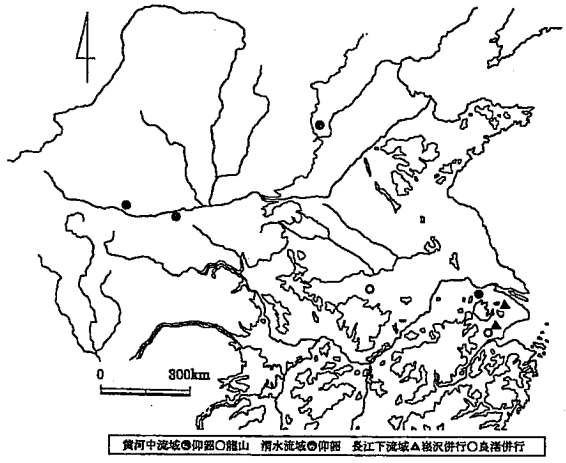
第11図　有孔型甑蒸気孔形態D１類の出土分布



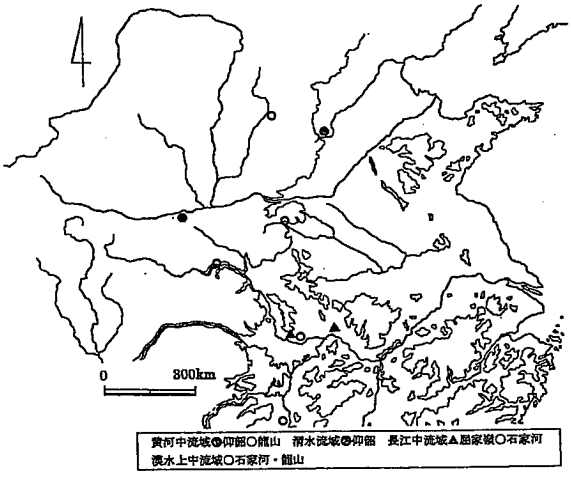
第12図　有孔型甑蒸気孔形態D２類の出土分布



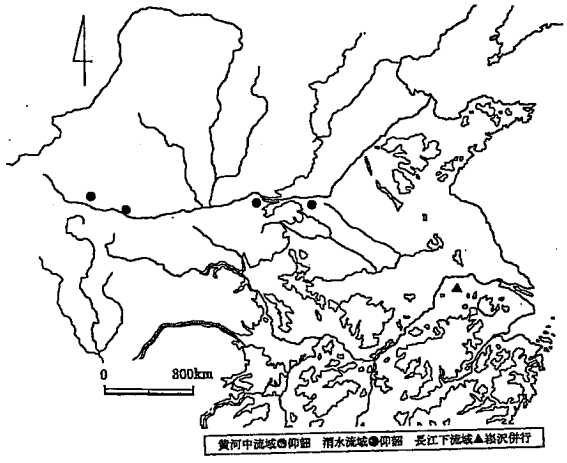
第13図　有孔型甑蒸気孔形態E・F・G類の出土分布



第14図　有孔型甑蒸気孔形態H類の出土分布



第15図　有孔型甑蒸気孔形態Ｉ類の出土分布



第16図　有孔型甑蒸気孔形態Ｊ類の出土分布

を配す。肖家屋脊遺跡屈家嶺文化期出土例（第23図17）のＧ１類甑には、レンズ状に穿孔した蒸気孔もともない、Ｇ類がＤ類より派生したことを示している。また、中央蒸気孔を特別に下側に作り出したものもある（第23図25･第24図５）。

Ｈ類（第14図）

出土分布の中心はなく、黄河下流域以外の地域に数例ずつ出土がみられる。黄河流域では、時期と共に減少するようである。

長江下流域綽墩遺跡崧沢文化期出土例（第22図12）は、一見筒型甑にみえるが、平底の盆形土器を製作したのち、腹部に立ち上がるきわから底部に大きく穿孔しているものである。成形段階から底をつくらない筒型と異なる点である。

Ｉ類（第15図）

仰韶文化期では黄河中流域以西を中心に分布する。石北口遺跡出土例（第20図８）、姜寨遺跡出土例（第21図18）などがある。

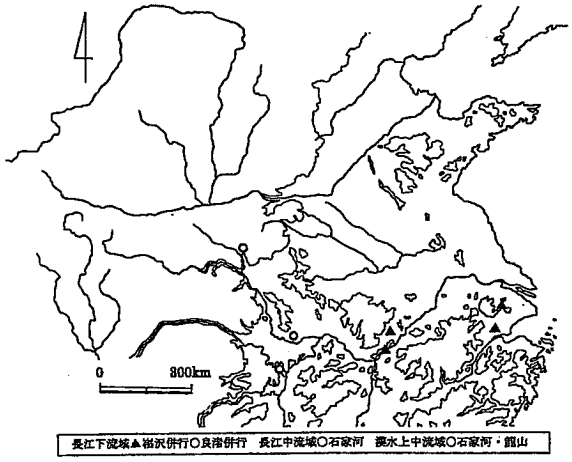
龍山文化期併行になると、中原龍山文化、石家河文化の領域にも分布を拡大する。また、このＩ類は、東北地方で主にみられる形態であり、今後この地域との比較をするうえで重要になってくる[20]。

Ｊ類（第16図）

黄河中流域と渭水流域の仰韶文化期に出土例が比較的多いが、龍山文化期併行になるとＪ類は出土しなくなる。こうしたＪ類の消長は、時期がくだるにつれ、蒸気孔の形態がいくつかに収斂される傾向を示している。出土例には、福臨堡遺跡仰韶文化期出土例（第21図19）のＸ字形、大地湾遺跡仰韶文化期出土例の十字形、中賈壁遺跡仰韶文化期出土例の楕円形の蒸気孔２個を平行に配したものなどがある。

長江下流域の三城港遺跡崧沢中期出土例（第22図13）は、三角形の中央孔とそれを取り囲むように３個の長細い蒸気孔を持つ。長江中流域の劃城崗遺跡屈家嶺前期出土例は、４個の蒸気孔のほか、なんらかの模様を描くかのごとく

小孔を多数穿孔している。なかには貫通していないものもある。



第17図　筒型甑の出土分布

2．3．筒型甑（第17図）

長江下流域の崧沢文化期併行から出現する。呉家埠遺跡（第22図15）と草鞋山遺跡（第22図14）などに出土例がある。ともに副葬品であり、もっとも古い。時期が新しくなると、長江中流域の石家河文化期からも出土するようになる。出土例は少ないが、筒型甑は長江流域に出土分布の中心をもつ、地域性の強いものと言える。また、黄河中流域の下王崗遺跡龍山文化期でも出土している（第24図10）。口縁部に向かって直線的にひらく盆形[21]で、石家河文化出土例と類似し、長江中流域からの影響が窺える資料である。

2．4．有孔型甑と筒型甑

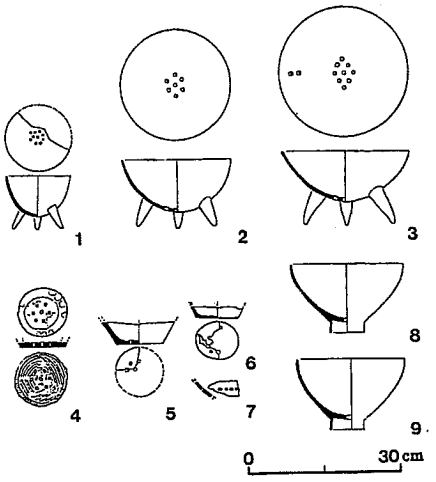
甑は、蒸気孔にかかわる製作上の特徴も加味したうえで、有孔型甑と筒型甑とに大別することができた。また、有孔型甑の蒸気孔位置と蒸気孔形態は互いに関連しあうものではなく、それぞれの出土分布と時期的変遷に地域性や時期性があることを明らかにした。

3．出現期の蒸具

地域ごとの様相は第4項で検討するが、その前に出現期の蒸具をめぐる若干の問題点を検討しておきたい。

最も古い資料は、いくつかの地域でみられる。裴李崗文化期では甑と報告される資料がある。ちなみに裴李崗文化と関係が深いとされる磁山文化や北辛文化の遺跡からは、まだ甑の出土はない。第18図1～3は、三足をもつ丸底鉢形

土器の底に、10個前後の孔があいたものである。焼成後に細い棒状工具で突き刺して穿孔している。第18図3には、口縁部付近にも小孔が2個ある。丸底土器に孔があるものは、ほかに第18図7がある。底部の詳細は不明であるが、胴部下半部に小孔が一周するように穿孔されている。第18図4～6は、平底土器の底部に棒状工具で突き刺して穿孔した小孔が数個ある。底部断面をみると、穿孔個所の内側が盛り上がっており、焼成前に穿孔したことがわかる。漢水上流域では、阮家壩遺跡李家村文化期に2例ある（第18図8・9）。高台のついた碗形土器の底部に直径1～2cmの孔が1個施されている。このように、孔の状況は甑として説明できる例もあるものの、これらは次段階への型式的な連続性をみせない[22]。



第18図　新石器時代前期の甑

1. 石固遺跡 2. 3. 馬良溝遺跡 4～7. 賈湖遺跡
8. 9. 阮家壩遺跡 (Scale＝1/15)

河姆渡遺跡第三層出土の甑は、長江流域ではもっとも古い資料である（第22図1）。平底の底部に比較的大きな孔が一面に施され、口縁部には把手が2個つく。同第一層にも類似するものがあり、甑であることは疑いない。しかし、第三層の年代が、^{14}C年代測定法によるとBC5000年ごろで、黄河流域の出土時期よりも若干新しい。このため、甑の初現は、現時点では黄河流域にあるといえるが、河姆渡遺跡の資料とは形態的に関係がなく、長江下流域でも自生した可能性が高い。むしろ、釜形の煮沸具も第四層から第一層にいたるまで基本的な変化はなく、甑の初現は将来さらにさかのぼると考えられる。

さて、甑は一般的に穀物を蒸す道具として扱われる。しかし、上記の地域以外でも穀物利用はすでに始まっており、耕起具、収穫具など農具も出土していることは周知のことである。しかし、イネを栽培する長江中流域の城背渓文化、彭頭山文化の土器組成にまだ蒸具は伴われない。

このように甑初現期の蒸具は、資料の僅少さから不明な点もあるが、各地域で独自の様相を示す未発達なものであったと思われる。

4．地域ごとの時期的様相

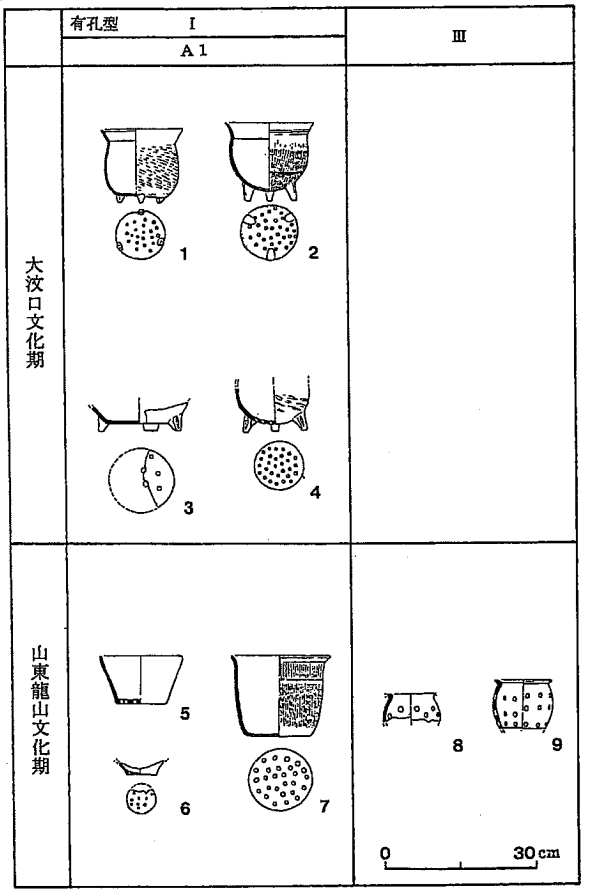
つぎに、甑が地域ごとにどのような様相を示すのか詳しくみてみたい。地域区分は、第一章で示した6地域である。

4．1．黄河下流域　（第19図）

山東半島およびその基部までを黄河下流域とする。北辛文化期、大汶口文化期、山東龍山文化期へと時期的な変遷を示す。北辛文化期[23]では、甑はまだ出土していない。

大汶口文化期になると甑と甗ともに出現する。甑は有孔型である。蒸気孔形態は、曲埠南興埠遺跡、曲埠西夏侯遺跡、蒙城尉遅寺遺跡でA1類が出土するのみで、甑の種類が限られた地域と言える。また、この時期、煮沸具は丸底の三足土器であり、甑の器形はこれと同じである。つまり、煮沸具に穿孔し、甑としているのである。

龍山文化期の甑には、蒸気孔位置Ⅲ類の有孔型甑が加わる。ただし、Ⅲ類は甑としての用途を再考する必要があることから、黄河下流域では蒸気孔位置Ⅰ類、蒸気孔形態A1類の有孔甑が主流と考える。しかし、この地域は甗が盛行する地域であり、蒸



第19図　黄河下流域甑の変遷

1. 西夏侯遺跡　2. 尉遅寺遺跡　3. 4. 南興埠遺跡
5. 8. 程子崖遺跡　6. 辛冢集遺跡　9. 西呉寺遺跡
(Scale＝1/15)

具としての主流は甗にある。

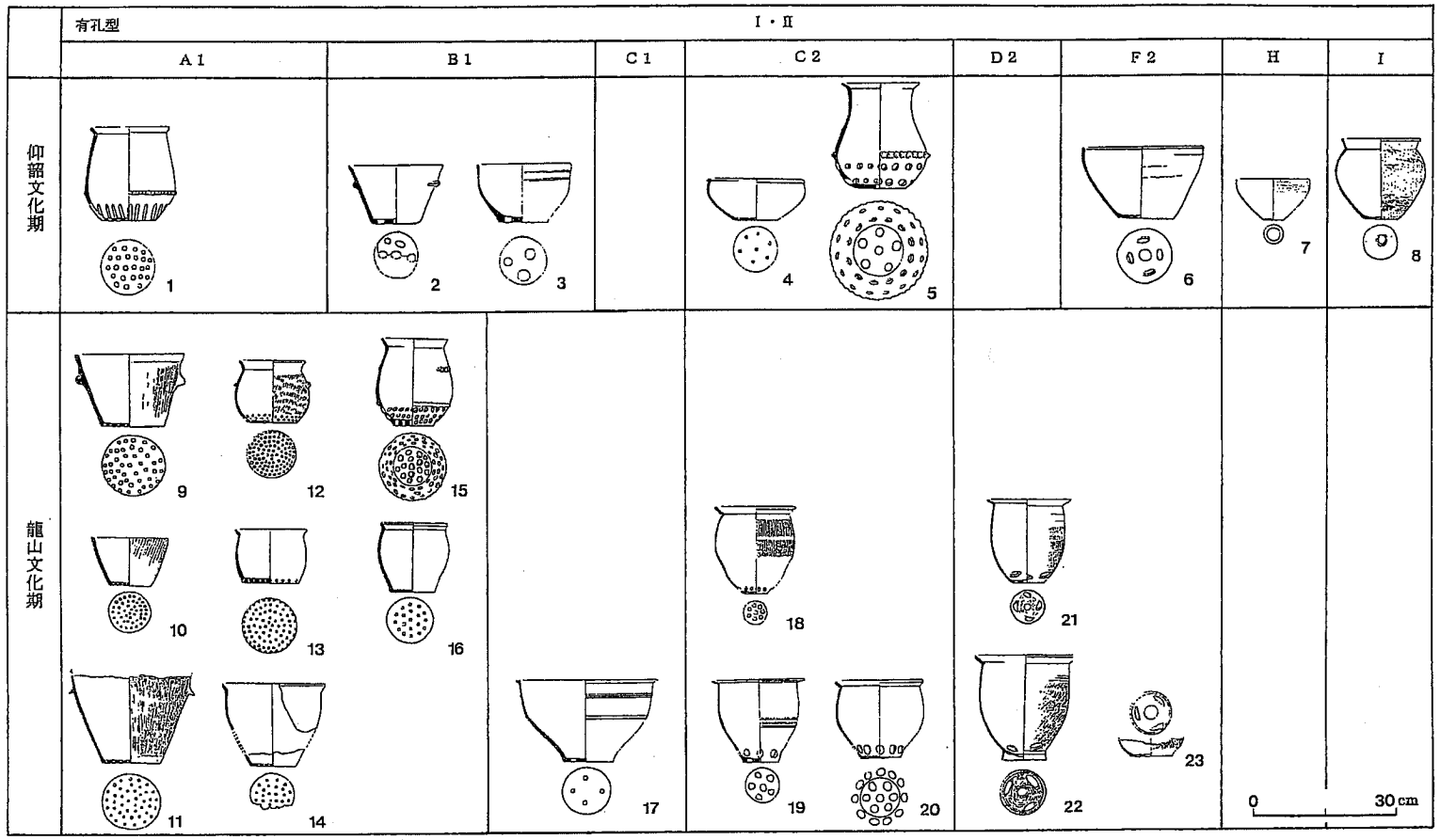
また、この地域には、「箅子」と呼ばれる、多数穿孔された円盤状のものが多くある。これは、土製スノコと考えられ、甗のなかにいれて使用したと想定される。しかし、その直径と通常の甗のくびれ部の直径とが合致しないものも多数あり、スノコとして想定した場合、すでに紹介した甑や甗以外の蒸具、たとえば木製甑の存在も検討する必要があろう。

４．２．黄河中流域　（第 20 図）

河南省域、河北省南部、山西省南部を黄河中流域とする。裴李崗文化期、仰韶文化期、龍山文化期へと時期的に変遷する。裴李崗文化期の甑は先述した通りである。

仰韶文化期になると甑の出土は増加する。甑はすべて有孔型であり、蒸気孔位置はＩ類が基本である。さらに蒸気孔形態は、Ａ１類、Ｂ１類、Ｂ２類、Ｃ２類、Ｆ２類、Ｈ類、Ｉ類、Ｊ類があり、ヴァリエーションに富む。Ⅱ類は、西山遺跡、大河村遺跡からの出土があるが、すべて時期は仰韶文化後期である。両河流域でみてもこの２遺跡の出土例が現在もっとも古い。第 20 図１は、最大径を胴部下半にもち、口縁に向かって斜行する罐である。また、側面蒸気孔は、縦方向の棒状をしている。第 20 図５は、口縁下部に頸部をもつ広口の「壷形罐」形である。こうした器形は、この時期以外にみられない。裴李崗文化と異なり、蒸具としての形式をもつ甑が出現したと捉えられる。また、胴部最大径に一周する突帯が貼られており、煮沸具の上に置いたときに支えになる設備と考えられる。

龍山文化期で特徴的な変化は蒸気孔位置Ⅱ類が盛行することである。上記のように、出土甑の約６割がⅡ類である。このような状況は、Ⅱ類の分布の中心が黄河中流域にあるといえる。側面穿孔の方法としては、底部蒸気孔と同じ穿孔を施すことが挙げられる。底部蒸気孔形態が棒状工具で突き刺して穿孔しているならば、側面も同様にし、Ｄ類のようにレンズ状に穿孔しているならば、側面もレンズ状に穿孔している。このことは、穿孔方法や蒸気孔形態が異なっても側面にまで同じ蒸気孔をつくることで共通性をもつ。



第 20 図　黄河中流域甑の変遷

1. 西山遺跡　2. 12. 東関遺跡　3. 槐林遺跡　4. 耿壁遺跡　5. 大河村遺跡　6. 西陰村遺跡　7. 超窯遺跡　8. 石北口遺跡　9. 陶寺遺跡　10. 杏花村遺跡　11. 番家溝遺跡　13. 14. 白営遺跡　15. 里溝遺跡　16. 鹿台崗遺跡　17. 王油坊遺跡　18. 19. 西干溝遺跡　20. 矬李遺跡　21. 22. 王城崗遺跡　23. 連桜遺跡　(Scale＝1/15)

またこの時期の甑の器形は仰韶文化期とは異なり、罐形のものが主流になる。口径に極端な変化はないが、器高が平均して約８cm 高くなっており、容量が増加している。

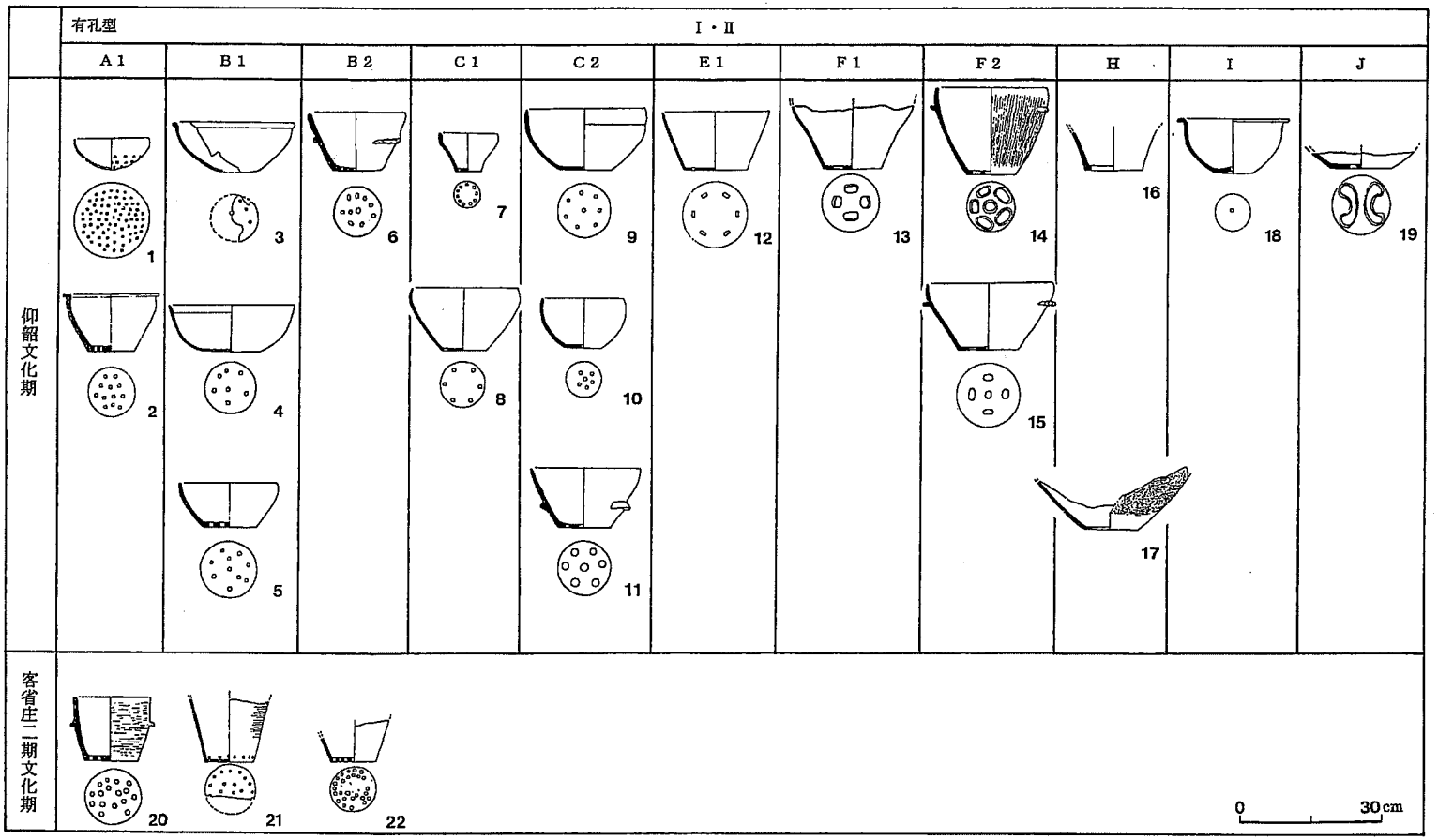
蒸気孔形態でみると、Ｄ類が出現する。Ｄ類は長江中流域に初現があるが、龍山文化期で黄河中流域に一気に分布を拡大している。このような地域でのＤ類は長江中流域との関係を窺わせるが、器形や製作技法から在地で製作されたと考えられるものと、外来系と考えられるものとがある。王城崗遺跡龍山文化期出土のＤ類甑のなかにも高台がつくものがある（第 20 図 22)。また、瓦店遺跡の甕棺葬では、Ｄ類甑が副葬されている。これは長江中流域石家河文化の同形式の高台をもつ盆形の甑である。副葬品にはほかに玉鏟、鳥形玉器があり、同様に石家河文化の要素が入っている。

４．３．渭水流域　（第 21 図）

白家村文化期にはまだ出土はなく、仰韶文化半坡期の有孔型甑出土例が最も古い。蒸気孔位置はＩ類のみであるが、蒸気孔状態のヴァリエーションは豊富である。基本的に器形は丸底の鉢形、平底の盆形に限られており、また鉢や盆と法量もほぼ同じである。この地域の煮沸具は、基本的に三足を持たない平底の罐で、さらにそれらは支脚を伴わない。また、竈が多く出土しており、それには煮沸具が製作時にあらかじめ備え付けられている。こうした煮沸具とのセット関係にも特徴がある地域である。また、福臨堡遺跡などにみられるＦ類は、山西省南部の西陰村遺跡などでも出土している。これらの出土は仰韶文化のなかでも廟底溝類型[24]の時期と範囲に限られる。

客省庄二期文化期になると、前段階までの蒸気孔形態の豊富なヴァリエーションは減少する。第 21 図 20～22 のように、平底の罐の底部に穿孔したＡ１類の有孔型甑のみに収斂する。ただ、第 21 図 21 のように、側面最下部に蒸気孔が１周するⅡ類もみられる。このⅡ類は前述のように黄河中流域を初現とするものであり、その地域からの伝播が考えられるが、器形はこの文化期に普遍的に出土する平底の罐形である。

ところで、穿孔方法においては異なる現象がみられる。この地域では、刺突



第21図　渭水流域甑の変遷

1. 2. 5. 8～10. 18. 姜寨遺跡　3. 呉家営遺跡　4. 13～15. 19. 福臨堡遺跡　6. 11. 白家村遺跡　12. 16. 半坡遺跡 17. 北首嶺遺跡
20. 小官道遺跡　21. 康家遺跡　22. 蔡家河遺跡　(Scale＝1/15)

による穿孔が基本形のようである。Ⅱ類の蒸気孔位置は黄河中流域の要素でありながら、黄河中流域で多用される切り取りによる穿孔方法は、渭水流域にはその技法が流入していないことになる。

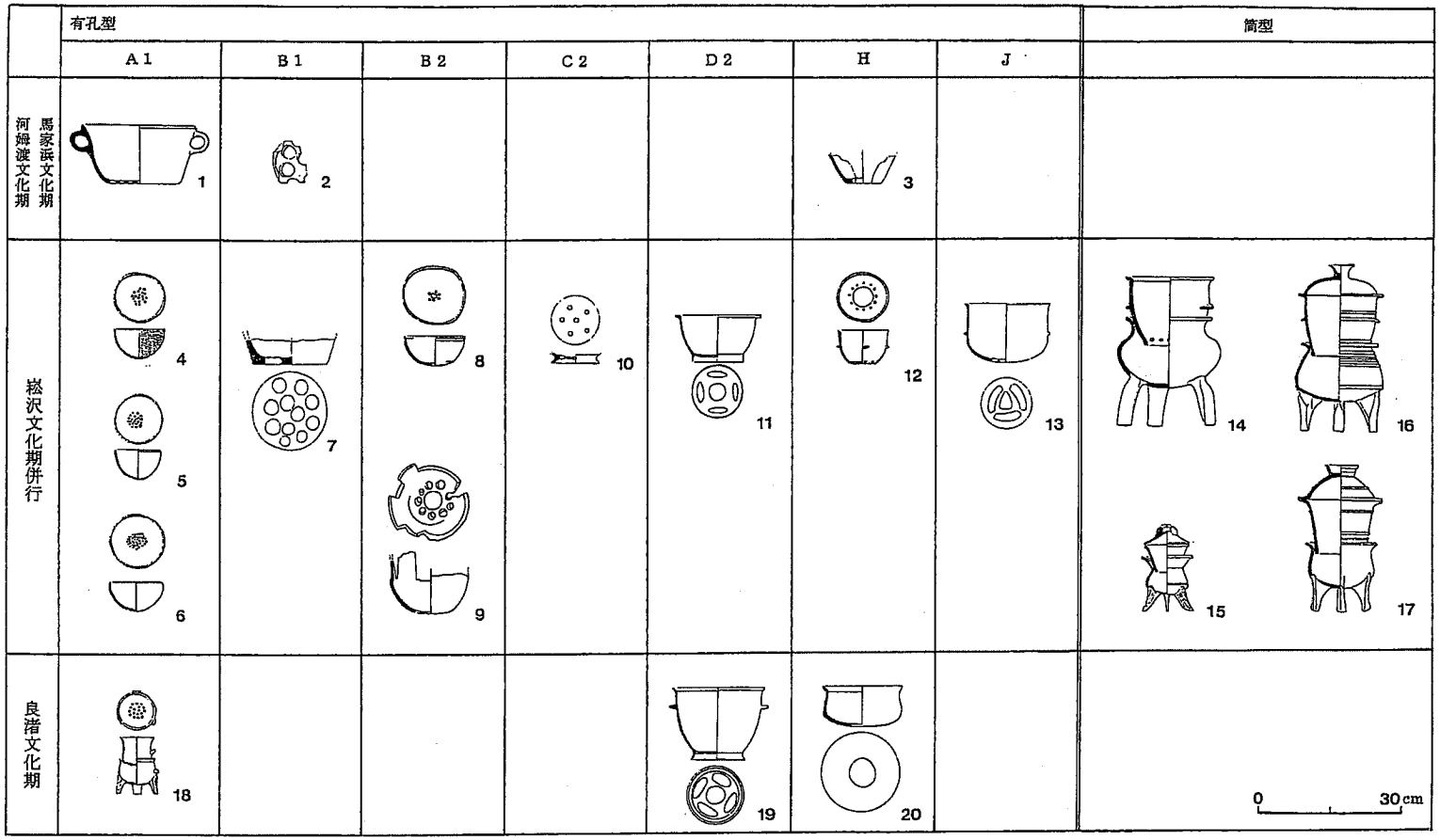
一方、現在までに甗の出土例はない。このことを含め、前述した甑の変遷は、客省庄二期文化の独自的な様相の一端を示していると考える[25]。

4．4．長江下流域　（第22図）

馬家浜文化期[26]では、太湖周辺の綽墩遺跡出土例（第22図2）の蒸気孔形態B1類、圩墩遺跡出土例（第22図3）のH類、杭州湾岸の跨湖橋遺跡出土例のA類の有孔型甑がある。また、杭州湾南岸では、河姆渡遺跡第三文化層出土例（第22図1）のA類がある。口縁部直下に環状把手が2個つく平底の鉢形をしている。同遺跡最下層の第四文化層には、これと同器形の平底鉢が出土しており、甑の出現は将来おそらく第四文化層に遡るものと思われる。また、良渚文化期併行の河姆渡遺跡第一層にも類例があり、杭州湾南岸地域の河姆渡文化に特徴的な有孔型甑であろう。

つづく崧沢文化期併行[27]では、有孔型甑のヴァリエーションが増える。綽墩遺跡出土例は、すべてが副葬品である。丸底鉢にA1類やB2類を施したもの（第22図4～6・8）や、底部の大半を円形に切り取って蒸気孔にし、その周囲に小孔を12個めぐらすH類（第22図12）がある[28]。腹部に把手をもつ。いずれも鼎とセットで出土する。圩墩遺跡出土例（第22図9）のB2類は、底部中央に大きめの蒸気孔とその周りに9個の円孔をもつ。丸底で腹部に段を持つ器形で、他に例がない。三城巷遺跡出土例（第22図13）は、中央に三角形孔を施し、その辺に沿うように周囲に3個の蒸気孔を配す。腹部中ほどに把手を2つもつ。陸墩遺跡からはD2類が出土しており、長江中流域との関係を窺わせる（第22図11）。このように、遺跡ごとに器形、蒸気孔形態は異なることが指摘できる。

また、この時期から筒型甑が出現する。草鞋山遺跡出土例（第22図14）、呉家埠遺跡出土例（第22図15）がある。どちらも副葬品であり、鼎と組み合わさった状態で出土しており、呉家埠遺跡出土例にはつまみをもつ蓋が載ってい



第22図　長江下流域甑の変遷

1. 河姆渡遺跡　2. 4～6. 8. 12. 綽墩遺跡　3. 9. 圩墩遺跡　7. 烏墩遺跡　10. 16. 17. 薛家崗遺跡　11. 陸墩遺跡　13. 三城巷遺跡
14. 草鞋山遺跡　15. 18. 呉家埠遺跡　19. 匯観山遺跡　20. 反山遺跡　(Scale＝1/15)

る。薛家崗文化期の薛家崗遺跡出土例（第22図16･17)、江洋廟遺跡出土例の筒型甑は、腹部がほぼ垂直に立ち上がる。煮沸具の鼎と甑の蓋とが共伴している。

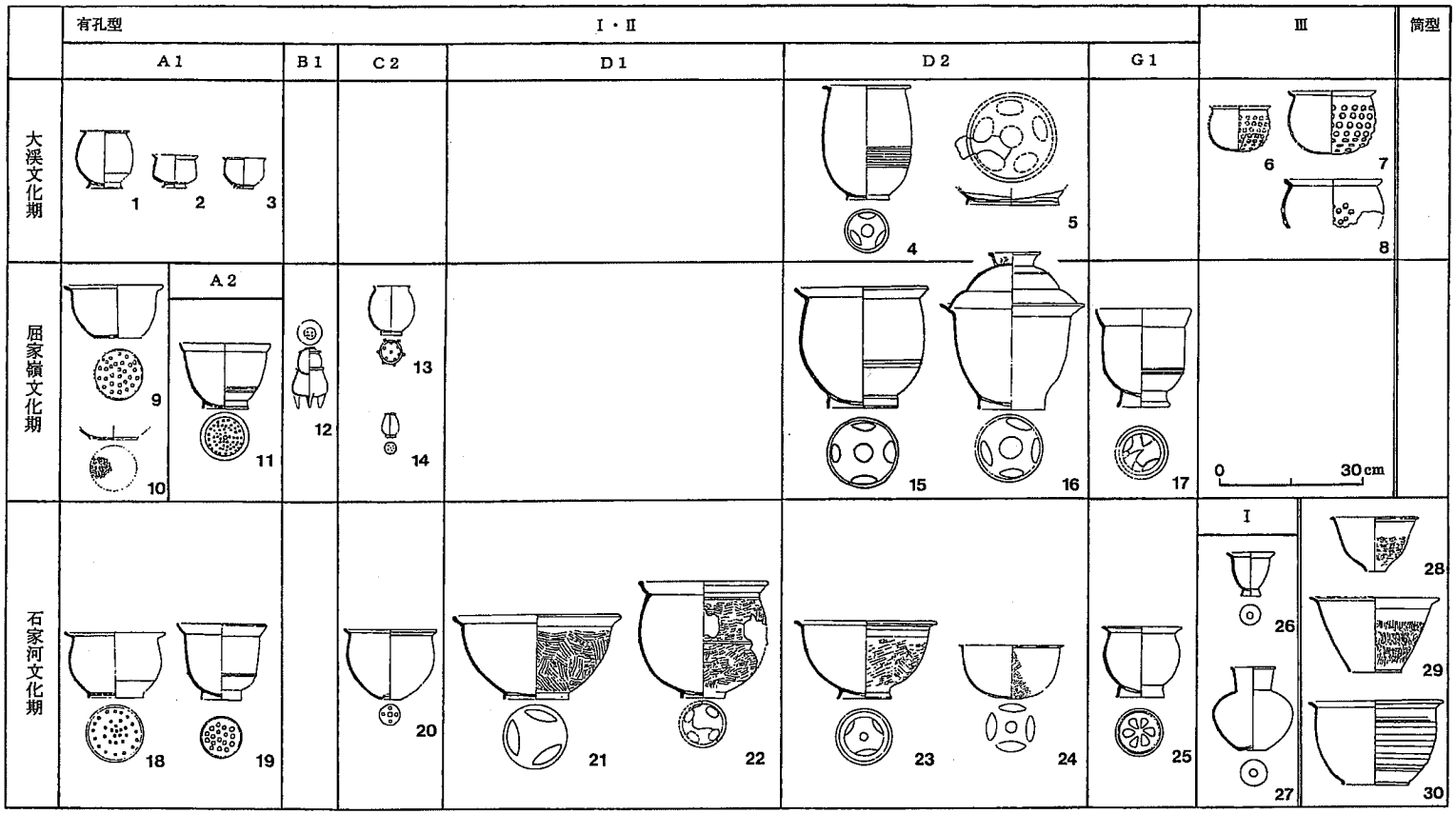
良渚文化期併行の出土例はすべて副葬品である。呉家埠遺跡出土例（第22図18）のＡ１類、反山遺跡出土例（第22図20）のＨ類がある。匯観山遺跡出土例（第22図19）にＤ２類があり、杭州湾や太湖周辺では唯一の例である。これらのすべてが鼎と組み合わさって出土している。

長江下流域では、鼎の内面に突帯をめぐらせた甑と煮沸具一体型の甗が崧沢文化期から出現する。こうした甗が卓越する地域でもある。

４．５．長江中流域　（第23図）

この地域の新石器時代におけるもっとも古い考古学的文化は、彭頭山文化、皂市下層文化、城背溪文化である。しかし、中流域での蒸具の出現は、次段階の大溪文化期である。有孔型甑の蒸気孔位置は、Ⅰ類とⅢ類がある。Ⅲ類は丸底の罐形をしており、胴部最大径と口径がほぼ同じか、胴部径がやや広い（第23図６～８)。この地域に分布の中心がある蒸気孔形態Ｄ類の初現は、大溪文化期後期まで遡る。関廟山遺跡出土例（第23図４)、中堡島遺跡出土例（第23図５）の２例である。また、第23図１～３のように小型の甑がある。器高、口径ともに10cm前後で、容量は概算で200ml程度しかない。これらは副葬品であり明器として製作されたと考えられる。器形は、胴部が膨らむもの、胴部が屈折するものがあり、実際に使用された甑にもこうした器形のものもあったと推測できる。

屈家嶺文化期ではＤ類の甑が多く占めるようになり、Ａ類と併せて基本的な蒸気孔形態となる。Ａ類の器形は盆形で、Ｄ類は罐形という傾向がある。この時期にも副葬される甑があり、それらは、皆小型のもので明器とされる。そのうち、三元宮遺跡や劃城崗遺跡にＢ類、Ｃ類の甑がある（第23図12～14)。これらは器高6.6cm～８cmで、底部径は４cm前後しかない。これらの蒸気孔は棒状工具で突き刺して穿孔する。Ｂ類、Ｃ類に分類したものの、底部の小ささからこうした蒸気孔形態とならざるを得なかったのであろう。また、屈家嶺



第23図　長江中流域甑の変遷

1～3. 螺蛳山遺跡　4. 11. 15. 関廟山遺跡　5. 中堡島遺跡　6. 劉卜台遺跡　7. 13. 14. 劃城崗遺跡　8. 毛家山遺跡　9. 10. 16. 屈家嶺遺跡　12. 夢渓三元宮遺跡　17. 21. 23. 25. 28. 29. 肖家屋脊遺跡　18. 譚家嶺遺跡　19. 鄧家湾遺跡　20. 22. 栗山崗遺跡　26. 羅家柏嶺遺跡　27. 岱子坪遺跡　30. 白廟遺跡　(Scale＝1/15)

遺跡出土の甑に、つまみをもつ土製の蓋が伴出している。

つづいて石家河文化期での有孔型甑の基本的な蒸気孔形態もA類とD類である。I類の出土例には、岱子坪遺跡出土の壷形をした特異なものもある（第23図 27)。特筆すべきことは、筒型甑が出現することである。肖家屋脊遺跡、白廟遺跡から出土例（第 23 図 28～30）があり、それらはすべて盆形であるが、底部に煮沸具との接合部を設けている。器形は容器としての盆と類似しながらも、製作段階からこうした部位を作り出していることがわかる。また、この地域では屈家嶺文化・石家河文化期での甑の容量の増大が顕著である。

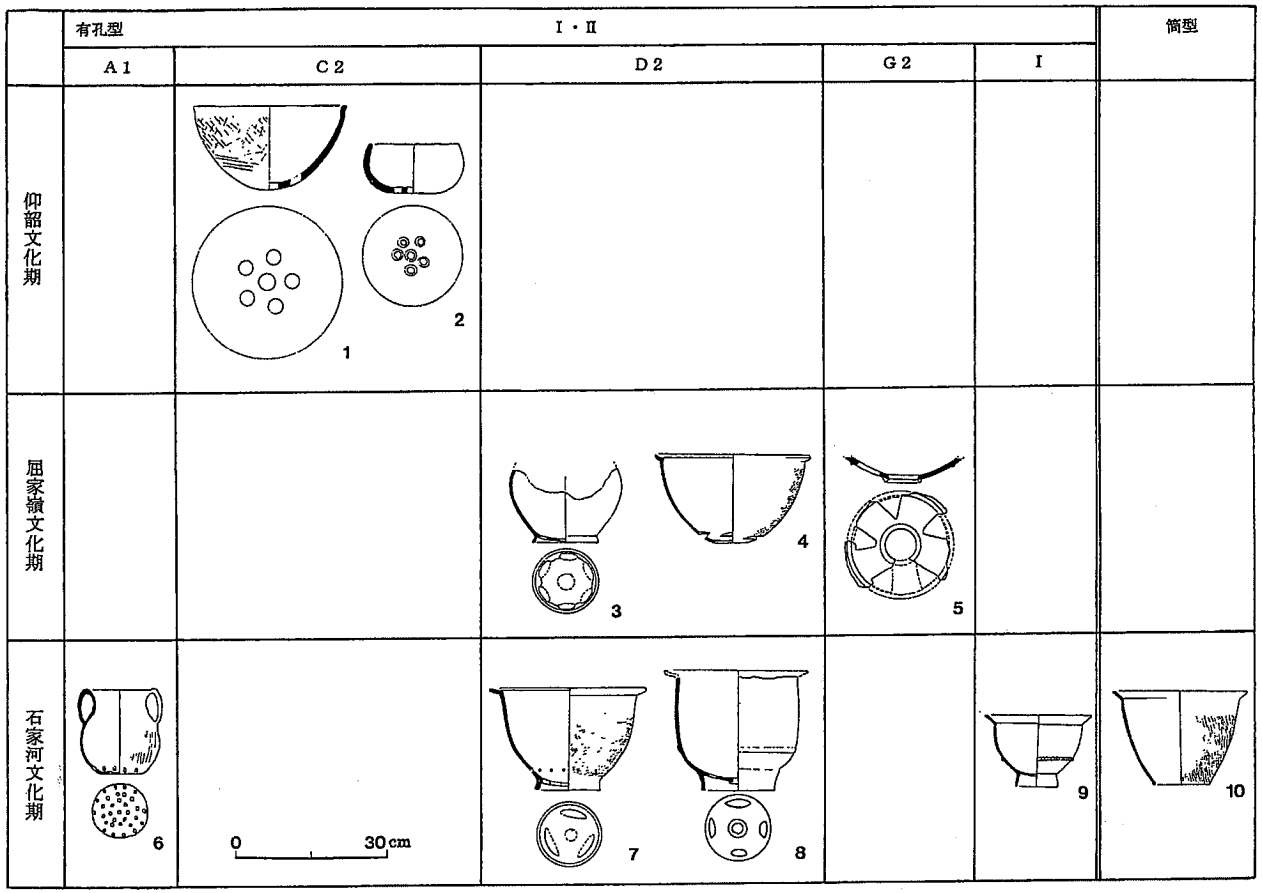
4．6．漢水上中流域　（第 24 図）

李家村文化期から仰韶文化期と時期的に変遷し、のち屈家嶺文化期、石家河（青龍泉三期）文化期につづく地域である。屈家嶺文化の北上により長江流域の文化域に変容する地域である。

仰韶文化期の出土例は少なく、有孔型甑の蒸気孔形態はB類とC類に限られる。屈家嶺文化は、大溪文化の時代とは異なり、その分布範囲を北に広げており、下王崗遺跡、青龍泉遺跡でD類の甑が出土するなど、甑の動態も同様な動きを見せる。下王崗遺跡龍山文化期では、筒型甑も出土する（第 24 図 10)。長江中流域の肖家屋脊遺跡出土の第 24 図 28･29 にみられるような石家河文化の筒型甑と同類である。器面は、藍文[29]や斜条文で飾られている。下王崗遺跡の龍山文化期の内容は石家河文化の影響を受けており、そうした要素が甑にも現れている。長江流域で出現した筒型甑は、有孔型甑D類が黄河中流域まで出土分布を広げるのに対して、この地域までしか出土しないことがわかる。また、同遺跡には、蒸気孔位置II類、蒸気孔形態A類の有孔型甑がある（第 24 図 6）。器形もふくめて、これまでこの地域でみられなかったものである。

4．7．ほかの地域

東北地方は、黄河流域の甑とは別の蒸気孔形態を持つ。長方形孔や1孔のみの穿孔を特徴とする。四川盆地と南方地域は現在のところ、蒸具の出土につい



第 24 図　漢水上中流域甑の変遷

1. 阮家壩遺跡　2. 4. 6. 10. 下王崗遺跡　3. 5. 7～9. 青龍泉遺跡　(Scale＝1/15)

てはまだ明らかでない。新石器時代末から徐々に出現してくる地域と考えられる。

5．小結

蒸具とされるもののうち、本節ではまず甑の分類を行い、それぞれの出土分布を整理した。甑は、容器の底や側面に蒸気孔をつくる有孔型甑と、底をつくらずに筒状に胴部のみを製作する筒型甑に分類できることがわかった。これを地域ごとに簡単にまとめると、

黄河下流域：有孔型甑。

黄河中流域：有孔型甑。

渭水流域：有孔型甑。

長江下流域：有孔型甑。崧沢文化期から筒型甑が出現。

長江中流域：有孔型甑。石家河文化期から筒型甑が出現。

漢水上中流域：有孔型甑。石家河文化期から筒型甑が出現。

となる。有孔型甑の蒸気孔位置Ⅰ類は、基本形として普遍的にみられるが、Ⅱ類は黄河中流域を分布の中心とする。また、蒸気孔形態は、時期的あるいは地域的に特徴をもつこともわかった。そのなかで、顕著な出土分布をみせるのは、Ｄ類甑であり、その出土分布の変化は、長江中流域と黄河中流域や長江下流域との関係をうかがわせるものであった。筒型甑は、長江下流域で出現し、長江中流域へと出土分布を拡大する[30]。

また、黄河流域で今回区分した三地域では、甑に関して独自の変遷があった。黄河下流域では、有孔型甑のみで、さらにその蒸気孔形態はＡ１類に限られる。黄河中流域では、裴李崗文化期で出現した甑は、仰韶文化期から豊富なヴァリエーションをもつようになる。Ⅱ類という独自の蒸気孔位置をもつ甑を製作するが、蒸気孔形態をみると長江中流域との関係のなかで甑体系が形成されていた。渭水流域では、仰韶文化期までは豊富なヴァリエーションをもっていたが、客省庄二期文化期になると蒸気孔形態Ａ１類をもつ甑のみになる。このように同じ雑穀栽培地域であるが、蒸具の変遷には独自性があったといえる。長江流域でも同様で、有孔型甑Ｄ類や筒型甑のように相互に出土分布を広げるものも

ありながら、基本的にはそれぞれに生成していく。特に長江下流域では、遺跡ごとに出土する甑の種類に異なる様相がうかがえる。

甑は、農耕初現期の段階では地域により様相が異なり、蒸具として形成過程にあるといえる。時期が下るにつれ地域ごとに蒸具の一部として体系化された。しかし、その形成には地域を越えた交流も要因としてあげられる。このことは、淮河付近を境にした黄河流域と長江流域との対象穀物の違いに対して、蒸具からみた食文化体系は文化交流と関係してより複雑な様相であったと想定できる。前述のように、主な蒸具にはほかに甗などがあり、今後、これらも検討し、新石器時代の蒸具の体系化を図りたい。

---

1 耕起、播種、管理、収穫という栽培に関わる過程。

2 雑穀栽培地帯では粉食、稲作地帯では粒食が主な調理法といわれている。しかし、こうした栽培種と調理方法の違いは有史以後を対象としている。新石器時代の黄河流域では、磨盤や磨棒の減少に替わり、甑の出土が増加することから、粉食から粒食への転換を想定する論考がある（藤本強「石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼（1）」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第2号　1983年）。

3 浜田耕作「鼎と鬲に就いて」『東亜考古学研究』1930年 岡書院

4 高 蒙河も渭水流域の甑と竈の関係にも少し触れている（高蒙河「先秦陶灶的初歩研究」『考古』第11期 1991年）。

5 岡崎敬「中国古代のかまどについて―釜甑形式より鍋形式への変遷を中心として―」『東洋史研究』第14巻 1･2号合併号　1955年

甑を使用し調理する段階から鍋形炊飯具を用いて調理する段階へと考えているが、鍋形式とした段階にもその後の調査から甑や甗が多く出土しており、この段階説は再考しなければならない。

6 岩崎卓也「甑小考」『信濃』第18巻第4号 1966年

7 堀田啓一「日本上代の甑について」『日本古文化論攷』1970年 吉川弘文館

8 木下正史「古代炊飯具の系譜」『古代･中世の社会と民俗文化』1976年 弘文堂

9 超　清「黄河流域新石器時代炊器之演変」『中原文物』第1期 1988年

第1段階（裴李崗文化期併行）では、鼎、深腹罐、釜などの煮沸具が登場する段階。第2段階（仰韶文化期併行）では、これに甑が加わる段階。第3段階（龍山文化期併行）では、さらに、鬶、鬲、甗などの器種が加わる段階を設定する。

[10]今村佳子「中国新石器時代の文化動態」『古文化談叢』1996年

[11]施米克「論陶甑、陶甗的来源和分布」『考古学文化論集』三　1993年 文物出版社

[12]堀田啓一「日本上代の甑について」『日本古文化論攷』1970年 吉川弘文館

[13]このほかに、スノコと考えられる「算子」とよばれるものがある。用途ははっきりしていないが、甗などの内側にいれてスノコとして用いたと想定されている。しかし、形が大きく甗におさまらないものもある。以後、あらためて論じたい。

[14] 杉井は、このスノコを支える意味を重要視し、その有無を分類の基準のひとつとした（杉井健「甑形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』第28号 1994年）。

[15]外山政子「甑について―平安時代の甑を中心にして―」『研究紀要』四　1987年
外山政子「群馬県地域の土師器甑について」『研究紀要』六　1989年

[16]杉井健「甑形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』第28号 1994年
杉井健「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学』1999年

[17] 類例は、黄河上流域の秦魏家遺跡、大何庄遺跡にもある。斉家文化に特徴的な両側に把手を持つ平底の壷形土器を利用し、同様に底部から立ち上がる際に蒸気孔を斜めに穿孔している。

[18] 山西省南部の陶寺類型と客省庄二期文化との関係を考慮していく必要がある。

[19] 胴部径が口径より広いものもあり、煮沸具に乗せたときに不具合が考えられる。煮沸具の種類も含めて使用方法を再考する必要もある。

[20] 龍山文化期以降の東北地域で多く出土する。このタイプは、その後朝鮮半島を経由して弥生時代の日本に伝播する系譜につながると考えられる。

[21] この盆形のものは、長江下流域の胴部がほぼ垂直に立ち上がるものとは器形が異なるが、今回、製作上の要素をとりあげて有孔型甑との違いを重視したため、筒型甑の範疇に入れている。分布の時間的拡がりから長江下流域の筒型甑から派生したものと考えることができる。

[22] 高台をもつ碗形土器は次段階の仰韶文化半坡類型期では消滅する。漢水上流域では、この孔をもつ碗形土器は阮家壩遺跡のみ出土で、その阮家壩遺跡には煮沸具とされ

る三足罐の出土はない。

[23] 北辛文化に先行する後李文化の遺跡からも甑の出土は未検出である。

[24] 廟底溝類型は、廟底溝遺跡一期を指標とする文化類型であるが、近年では地域別に文化類型を再考する動向がある。

[25] 今村は、渭水流域の新石器時代早期から次段階への変化を土器の器種構成から分析し、独自的発展をした地域と述べている（今村佳子「中国新石器時代の文化動態」『古文化談叢』1996 年)。同様にこうした特性は客省庄二期文化に至っても存在していると考えられる。

[26]太湖周辺の馬家浜文化や杭州湾南岸の河姆渡遺跡第三層の時期を便宜的に一括し使用した。河姆渡遺跡第四層は馬家浜文化よりもさらに古く位置付けられる。

[27]河姆渡遺跡第二層と安徽省南部薛家崗文化もここでは崧沢文化期併行とした。

[28]蒸気孔とは異なるもので、杉井のあげた属性にもあるようにスノコを支える桟わたしのための部位であると考えられる（杉井健「甑形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』第 28 号 1994 年)。綽墩遺跡にも類例がある（第 22 図 12)。

[29]籠目状の文様。叩板に平行の沈線を刻み、それを用いて土器を整形したためにできた文様。（飯島武次『中国考古学概論』2003 年 同成社）

[30]一方で筒型甑は長江下流域で出現する甗と密接に関係する蒸具である。

第二節　甗の出現と展開－一体型甗と結合型甗－

はじめに

甗は、甑とともに中国新石器時代の主要な蒸具であるが、これまでに専論的に取り扱われることはなかった。蒸具の研究は、穀物栽培を行う新石器時代でその穀物をどのように調理し食したかという食文化的な視点から論じることができる。

蒸具としての体系を得るために、前節では甑について論じた[1]。本節は、甗の集成、分類を主に行う。まず、甗の基礎的な様相を明らかにする。

1．　甗の研究史と問題の所在

1．1．甗の呼称をめぐって

「甗」という呼称は、もともと青銅製甗に由来する。西周前期より自名のものがあるが、「甗」の字体はなく、「獻」ないしその異体字が用いられている。文献には『考古圖』[2]が初出とされ、以来この字をもって呼びならわされていることから、林巳奈夫は、「甗」字をもって名づけるとしている[3]。本節では新石器時代の甗を扱うが、後世のこうした青銅製甗へつづくものであることから、ここでも「甗」の名称を用いることにする。

林の青銅製甗の定義では、「三本ないし四本の袋足のついた鬲状の部分の上にこしき（甑）のついた器」[4]としている。殷周時代までは上下をひとつにして鋳造されたものであるが、春秋前期以降、甑を取り外せる型式のものが出現する。青銅製甗の場合には、甑と煮沸具が分離するものも一緒にして甗として扱われる。

新石器時代の甗の取り扱われ方をみても、甑と共伴する鼎をひとつにして甗と報告する場合がみられることはこうした名残と思われる。

しかし、それらは、青銅器のようにもともとひとつの器種として製作されたものではなく、甑形土器と三足土器（鼎、鬲）というふたつの器種を重ねたも

のである。新石器時代の場合、ふたつの器種の組合せを甗という呼称で一括して捉えると、他地域との関係のなかで誤解をまねく恐れがある。甑形土器は甑、三足土器は煮沸具として独立しており、考古学的な呼称として別にすべきである。本節では、新石器時代の甗と呼称、報告されるもののうち、ひとつの土器で甑と煮沸具が一体化した一器種のものを甗とする。

また、甗という呼称をそのまま使用するのは、甗のもつ本来の意味を残すことで、二里頭文化以降の甗との通時的説明にも役立たせることと、通史的に齟齬をきたさないようにするためである。

1．2．新石器時代の甗の研究史と問題の所在

アンダーソンが河南省不召寨遺跡出土の底部に孔をもつ土器を、食べ物を蒸すための容器と考え鬲の上において使用したと考えた。これを後世の青銅製甗と類似することから甗と呼んだのが、近代考古学において最初と思われる。しかし、浜田耕作は、1927 年、『貔子窩』[5]の発掘調査報告、さらに論文「鼎と鬲に就いて」[6]において、甑と鬲が連結した形式、つまり瓦甗（甗形土器）が存在することを明らかにした。

もちろん、このことは甗がそれまで認識されていなかったということではない。前述の『考古圖』にも甗は紹介されているが、重要なことは、当時、甑は「甑」と認識されず、鬲などの煮沸具の上に載せて使用する「甗」と認識されていたことである。これは、天津在住の華石斧がアンダーソンに「據云古時有甗即架於鬲而為蒸食物之用者」[7]と説明していることからもうかがえる。しかし、遼寧省貔子窩遺跡の調査において甗形土器がはじめて明らかになったとともに[8]、それをうけて甑と鬲が結合したものを甗としたのである。おそらく、これを機に甗形土器はその形態とともに認識されるようになったと思われる[9]。青銅製甗の系譜が新石器時代まで遡ることになったのである。

その後、発掘調査数の増加とともに出土資料も増加する。甗の用語も一般的に使用されるようになったが、各地域において甗の形態に地域性が顕著になるにつれ、用語と形態との関係にも地域差が出始めた。しかし、それまでにも煮沸具などを対象にした研究[10]がいくつかみられるが、甗について言及あるいは

甗を主体的にした研究はなかった。

こうしたなか、小川誠[11]が、岳石文化の起源を論じるなかで、山東龍山文化の甗をとりあげて分類したのち、甗の時期的変化を考察している。山東地域の甗は実足甗から袋足甗へ変化することを鬶の変化と比較しながら明らかにした。ただ、山東龍山文化の袋足甗および岳石文化の甗は北方の夏家店下層文化の影響のもと出現したと論じていることには賛同できない。いずれにしても、甗の形態変化については、欒豊実[12]、趙輝[13]、李権生[14]も同様の結論を出しており、大筋では明らかになったといえる。ただし、小川誠と欒豊実、趙輝の見解では、甗の煮沸部の製作方法に問題が残る。これについては、後述する。

ともあれ、これまでの研究の対象は、山東地域のみであり、他地域の甗およびその関係までは論じられることはない状況であった。ただし、李権生が後岡二期文化の編年研究を行った際に、後岡遺跡出土の甗を層位的な前後関係から、甗の袋足のつき方が開いていくことを述べているが一律にそうした方向性はなく再考を要するものであった。

その後、施米克[15]は、新石器時代の黄河・長江流域における甑と甗の時期的変遷を整理した。そのなかで、甗の各地域での出現については一応把握されるまでにいたった。また、甑と甗との密接な関係を指摘し、甗が甑から変化、成立した可能性を述べたことは評価できるものであった。広範囲の地域における甗を対象としながらも、基礎的な分類作業を経ていないことで、長江流域の甗と黄河流域の甗との系譜の問題や、各地域の甗出現の背景などの検討が問題として残る。

研究史を振り返ると、甑同様、甗も蒸具の一器種として考えられてきたにもかかわらず、機能や用途を考慮した新石器時代における文化的な意義付けがなされるまでにはいたっていないことも課題として残っている。新石器時代は久しく穀物栽培を主体とする時代と考えられてきている。蒸具としての甗を穀物利用においてどのように位置づけることが可能であるか、考えていく必要がある。前節において、筆者はこうした視点からまず甑について検討を加えてみた。

本節では、これまで漠然とした甗の定義を再考し、そのうえで新石器時代の甗を分類し、さらに地域ごとに甗を検討することで、甗の出現と展開について分析していくことにする。

2．甗の分類

2．1．分類の問題と方法

前記のように全く器形の異なるものも、すべて甗として取り扱われている現状がある。新石器時代の土器のなかで甗と称されるものは、下半は袋足土器や三足土器などの煮沸具で、その上に甑形土器を接合したものである。接合部はくびれたようになり、その内側にスノコなどを載せる。青銅製甗と器形が類似し、その祖形となるものである。

これとは別に、特に長江下流域を中心に出土分布するものがある。鼎形土器の内側なかほどに突帯を貼りめぐらしてスノコを載せ上下に仕切ることで蒸具にしたものである。これらは、前述した甗と器形はまったく異なるが、その機能から甗と称されている。報告によっては、鼎の一形式として挙げられることもある。また、一方、第一節でも若干述べたが、とくに長江下流域に出土する甑のなかには、副葬品として鼎と組み合わさった状態で出土するものについて、甗と報告される場合がある。

このように、甗の器形と用語に関して考古学的に一致した一器種として扱われていない。地域ごとに慣習化した用語を用いていることも原因と考えられる。こうした現状をまず、おさえておきたい。

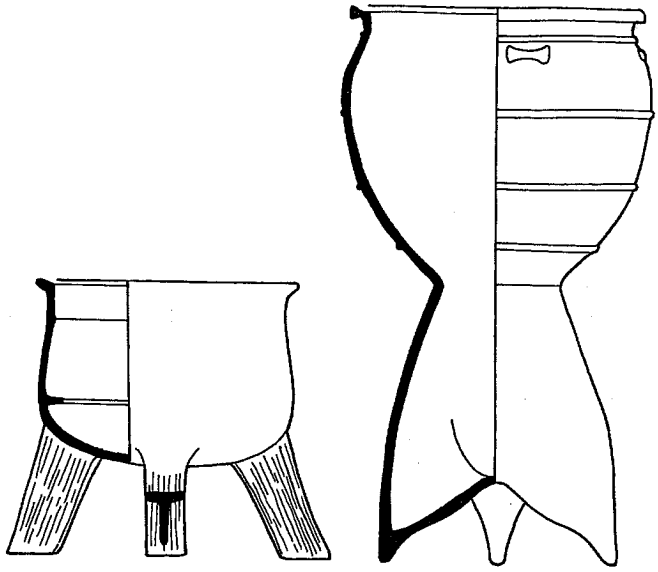
分類の目的は、甗の基礎的な把握と各地域の甗の系譜を明らかにすることである。しかし、甗は土器であるため、土器文化[16]を表す属性をも持っている。本節では、黄河・長江流域を対象にしているため、広域的には異なる土器文化が併存した時代を背景にもっている。

そこで、分類においてはあくまでも甗の蒸具としての機能的かつ特徴的な構造に着目することにしたい。その後、各地域、各時期によって、詳細を分析する手順をとる。

2．2．分類

甑は、煮沸と蒸すの両者をひとつの容器で賄うことができる。構造的には、煮沸部と対象物を入れる甑部の間に、蒸気を通しながらも対象部を支えるスノコを置く部位が必要となる。

新石器時代の甑には、容器の中間がくびれることで、あるいは内面に突帯をめぐらすことで、スノコの支えとしたものなどがある。



一体型甑　　結合型甑

第 25 図　甑の分類

これらの製作上の差異としては、煮沸用土器と甑形土器を結合させたもの、もともとひとつの煮沸具であるが、その器内を上下に仕切るようにしたものとがある。後者の場合、青銅製の典型的な甑とは器形が異なるが、新石器時代研究で慣例として呼称されていることは前述のとおりである。本節でもこれらも取り上げる。

以上、蒸具としての構造を重視すると、甑の定義は、煮沸部のうえに甑部を結合あるいは一体化させたものとし[17]、大別して一体型と結合型に二大別することができる（第 25 図）。なお、本節では、水を沸かす部位を煮沸部、対象物を蒸す部位を甑部と便宜的に呼称する。

一体型甑は、突帯の下部が煮沸部となり、突帯にスノコを置き、その上部が甑部となる。既存の鼎に突帯を付けるだけで、蒸具に変えたものである。

結合型甑は、煮沸部と甑部が異なる形態もしくは器種のものを結合してできている。接合部はくびれ、その下部が煮沸部、その上部が甑部となる。煮沸部は、実足のものから袋足のものへと変化することがいえる[18]。ただし、その変化の過程では、鬲、斝、鬲などの袋足土器との関係が推測され、各地域での詳細を検討する必要がある。

2．3．一体型甑と結合型甑

これまでは明確な定義なしで甑の用語が用いられてきたが、前項では甑の構造から、中国新石器時代の甑は、一体型甑と結合型甑に大別できることがわかった。

つぎに、一体型甑と結合型甑それぞれについて、各地域の出現と展開をみていくことにする。

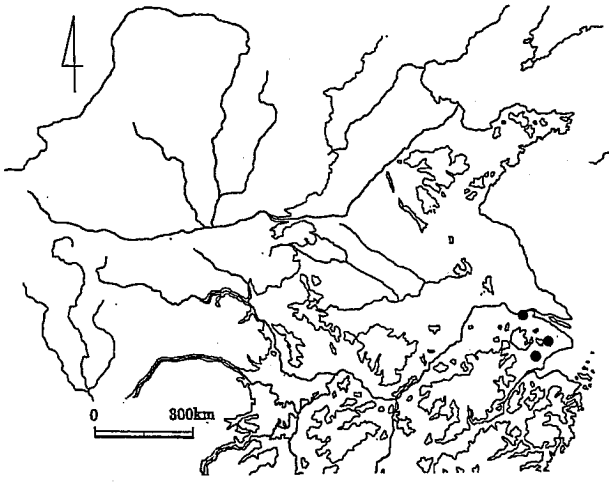
ところで、甑を考えるうえで、これまでの地域設定では、把握が困難な場合がある。基本的には序章で設定した6地域ごとに検討するが、以下、黄淮平原をとくに取り上げているのは、黄河下流域、もしくは黄河中流域で一括しての説明が困難なためである。黄淮平原の動向は、甑の展開を把握するのに重要な地域と考えられる。黄淮平原の文化類型は、大汶口文化期では、大汶口文化の一類型が、山東龍山文化期では、河南龍山文化王油坊類型が設定されている。最近、この地域の文化類型が、黄河下流域か黄河中流域のどちらに属するか、議論が始まりつつある[19]。このような議論があること自体、黄淮平原の土器文化が周辺のさまざまな文化要素を複合していることを示しているのかもしれない。対象が土器であるために、こうした研究背景を考慮し、黄淮平原の説明は適宜行うことにする。機会を改めて、黄淮平原を中心にした検討を行いたいと考えている。ちなみに、行政区分でいうと河南省開封地区東側、商丘地区、周口地区、山東省荷沢地区、安徽省北部、江蘇省北西部である。

3．一体型甑の出現と展開

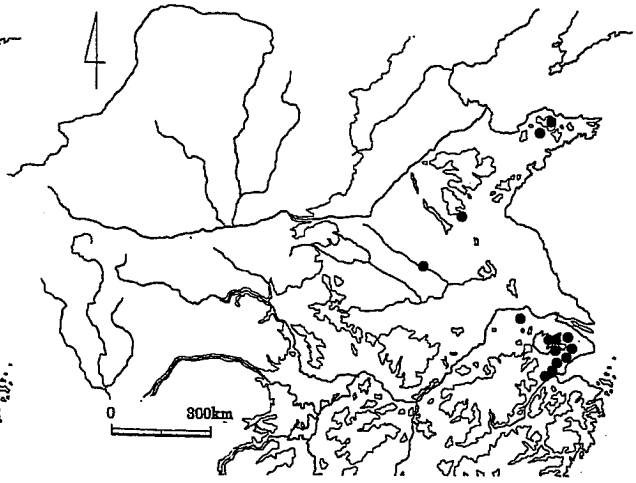
まず、一体型甑についてみていく。

出土地域は、崧沢文化期の長江下流域のとくに太湖周辺・杭州湾北岸に出現し（第26図）、良渚文化期・大汶口文化後期には長江下流域から黄河下流域までひろがるが（第27図）、地域によって出土分布状況が異なる。

以下、地域ごとに詳しくみていくことにする。



第26図　一体型甗出土の分布（崧沢文化期）



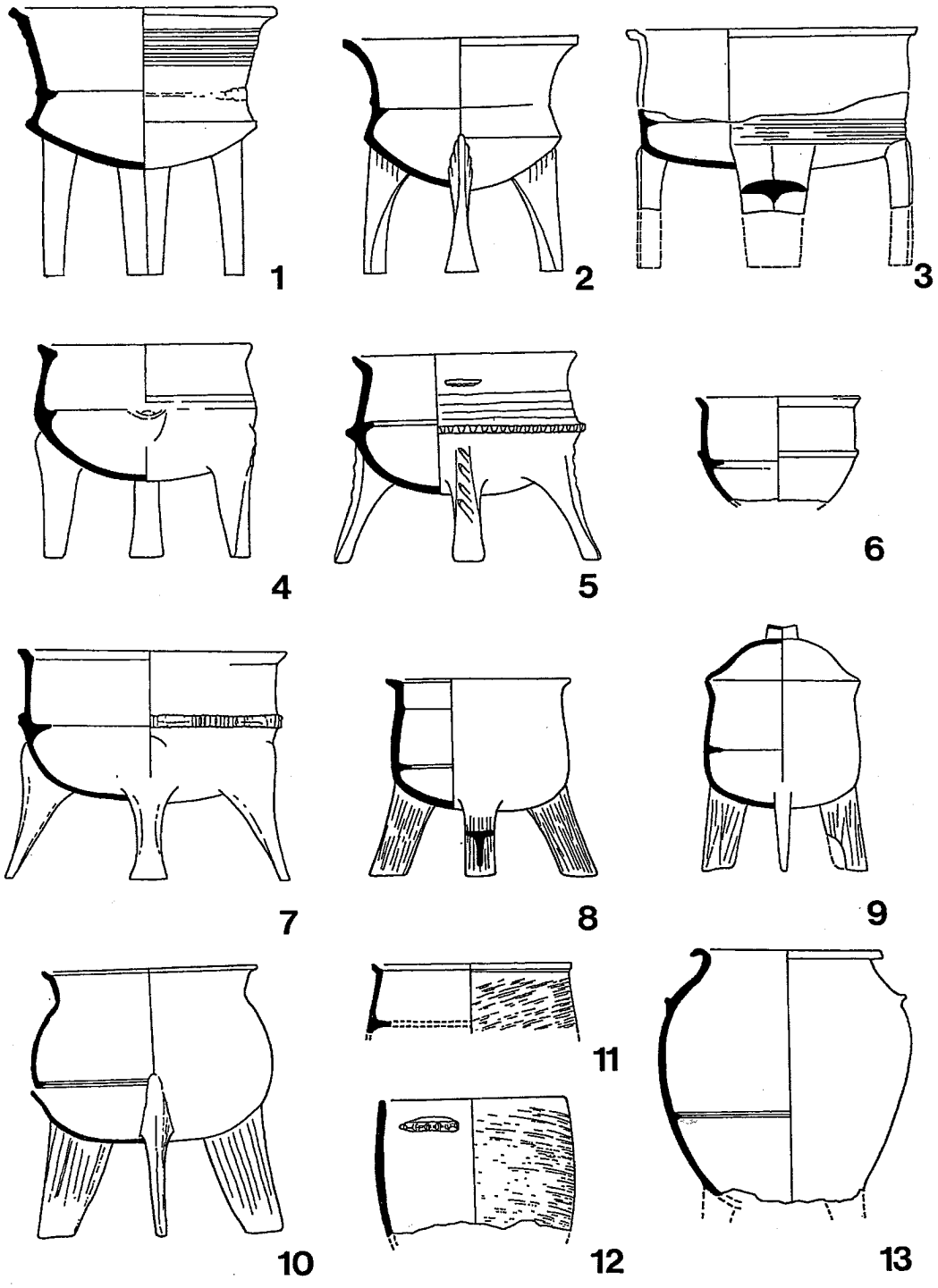
第27図　一体型甗出土の分布
（良渚文化期・大汶口文化後期）

3．1．長江下流域

この地域では、崧沢文化期に一体型甗が出現する（第26図）。出土範囲はせまく、崧沢文化の遺跡にのみ出土例がみられる。これは、既存の鼎の内面に突帯をほどこすだけで蒸具としたものであり、完成後の器形は突帯以外、既存の鼎と外見上ほぼ同じである。良渚文化期になっても出土範囲はほとんど変化しない（第27図）。副葬されることが多く、その出土状況はつまみの付いた蓋を伴っている。ただし、甑と共伴することはない[20]。

一体型甗は、２つに大別できる。ひとつは、容器の器壁は胴部で屈折しており、その屈折部の内面に突帯を施す（第28図１～３）。もうひとつは、基本的に胴部最大径の部位内面に突帯がつくもの（第28図４～10）。鼎胴部は丸く膨らんだ円腹をしているため、外側からではどこに突帯があるかわかりにくい。これらは、時間的な前後関係にあり、前者から後者へ変化する。これは、もともと鼎であるため、突帯を除いて、鼎の器形変化にほぼ相当している。つまり、煮沸部や甑部の容量は変化することもなく、蒸具として機能分化しなかったと大枠説明できる。具体的には、崧沢文化後期ごろに変化すると考えられる。

ただし、江蘇省金山墳遺跡（第28図４）、同省亭林遺跡（第28図10）出土



第 28 図　一体型甗（長江下流域・黄河下流域・黄淮平原）

長江下流域（崧沢文化期）　1～3．徐家湾遺跡　4．金山墳遺跡　5．双橋遺跡　6．崧沢遺跡

長江下流域（良渚文化期）　7．龍南遺跡　8．雀幕橋遺跡　9．福泉山遺跡　10．亭林遺跡

黄河下流域・黄淮平原（大汶口文化後期）　11．12．建新遺跡　13．楊家圈遺跡　(Scale=1/8)

例などは、ちょうど突帯下部に注口がつくられているものがある。そこから打水のために水を加えることができるようにしたと考えられる。崧沢文化後期から出現する新しい要素である。

スノコは、崧沢文化後期から良渚文化期にかけて、口径が突帯部径よりも狭くなる傾向にあるため、箅子のような円板状のものではなく、木製のものが想定できよう。

3．2．黄河下流域・黄淮平原

ここでは、黄河下流域に、黄淮平原を含める。大汶口文化後期に、黄淮平原や黄河下流域の山東半島東部に散在する（第27図）。

この地域の一体型甗は製作するのに決まった器形のものがなく、遺跡ごと、あるいは小地域ごとにその特徴が異なっている。

山東省建新遺跡H195出土例（第28図11）は、口径29cm、残高8.2cmで、器形は罐形と推測される。突帯に長方形孔が施されている。同遺跡H137出土例（第28図12）は、口径22cm、残高16cmの罐形土器の内面に、鶏冠状の突帯を施したものである。報告書では、ここにスノコを掛け渡して使用したとしている。ただし、口縁部から突帯までの深さが3cmと浅く、箅子以外に、甑をさらに置いて使用したとも考えられる。時期は、ともに大汶口文化後期である。

山東半島先端部に位置する同省楊家圈遺跡出土の一体型甗(第28図13)は、胴部上半部から口縁部にむかってすぼまり、三足が付く。鼎式甗と分類されている。こうした器形は同遺跡出土罐に類似するものがある。胴部内面下半部に一周する突帯が施されている。この部位の直径は、口径より広い。調査中、直径1cmほどの棒状の土製品が出土しており、これを何本か使用し桟にしたと報告書では推測している。類例は、同省于家店遺跡出土のもののみで、魯東から山東半島先端部の地域性として考えることができる。時期は、すべて大汶口文化後期に併行する。

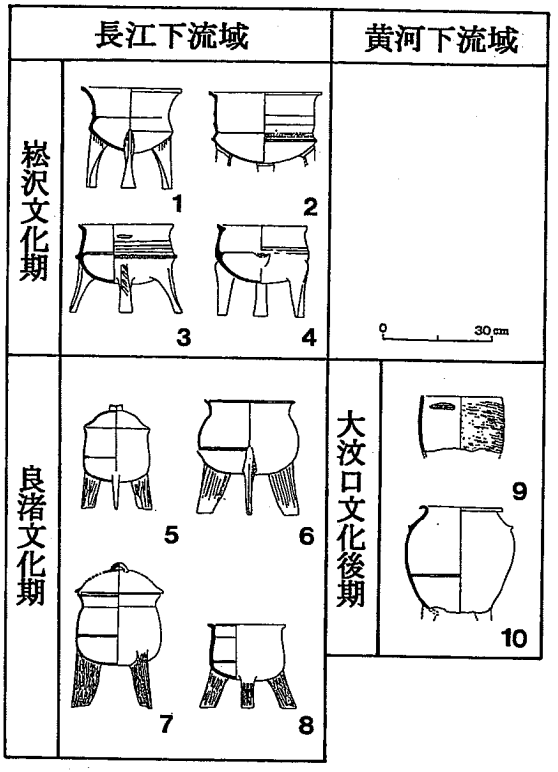
3．3．一体型甗の出現と展開（第29図）

一体型甗は、長江下流域の崧沢文化期で出現する。既存の鼎の内面に突帯を施すことでスノコ支えとし、蒸具にしたものである。また、一体型甗の器形変化は鼎の器形変化に対応しており、蒸具の機能にかかわる変化はとくにみられない。ただし、打水をするために突帯下部に注口がつくものが崧沢文化後期から出現する。

黄河下流域・黄淮平原では、長江下流域の一体型甗と異なり、他地域で出土するものは器形や突帯の位置に統一性がなく、出土地域にも偏りがある。山東省建新遺跡には、罐形土器上方内面に突帯がつき、魯東から山東半島先端部の同省楊家圏遺跡や同省于家店遺跡には、三足土器の内面に突帯がつく。これらと、長江下流域の一体型甗とに、直接的な関係はみられず、つづく山東龍山文化期に入ると、消滅することから、一時期だけに出現した器種と言える。また同省建新遺跡出土例は、突帯にスノコや箅子をひいた場合、対象物を置くスペースは非常に狭い。

このように、一体型甗は地域的に独自的なものであり、蒸具のひとつとして成立したのは長江下流域のみと言える。良渚文化期においても盛行するが、分布域は太湖周辺から杭州湾北岸に限られており、いわゆる良渚文化の文化域[21]と重なることは留意したい。

以上に示した地域以外で、一体型甗の出土はまだみない。



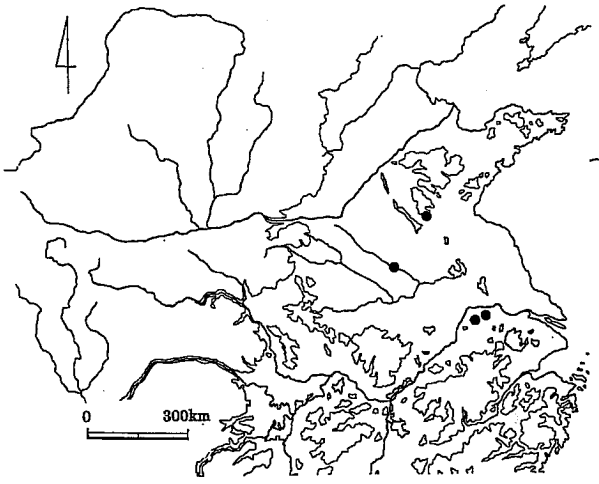
第29図　一体型甗の出現と展開

1．2．徐家湾遺跡　3．双橋遺跡　4．金山墳遺跡
5．福泉山遺跡　6．亭林遺跡　7．大墳遺跡
8．雀幕橋遺跡　9．建新遺跡　10．楊家圏遺跡

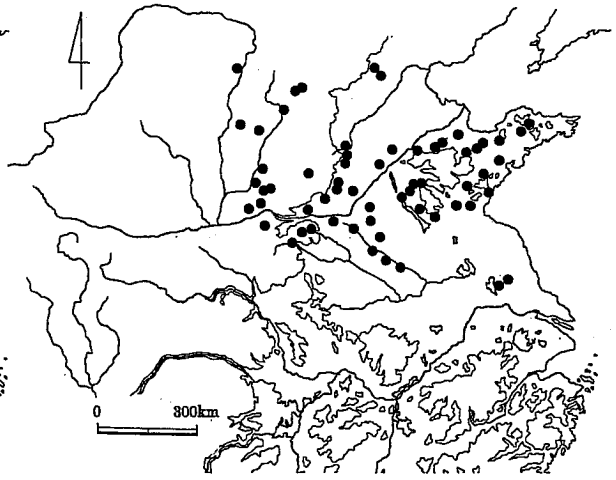
4．結合型甗の出現と展開

出土地域は、良渚文化期・大汶口文化後期に長江下流域の一部の地域から、黄淮平原・黄河下流域に広く出現し（第30図）、龍山文化期併行になると黄河下流域、黄河中流域、黄淮平原の広い範囲に拡がる（第31図）。

以下、地域ごとの様相をみていく。



第30図　結合型甗出土の分布
（良渚文化期・大汶口文化後期）

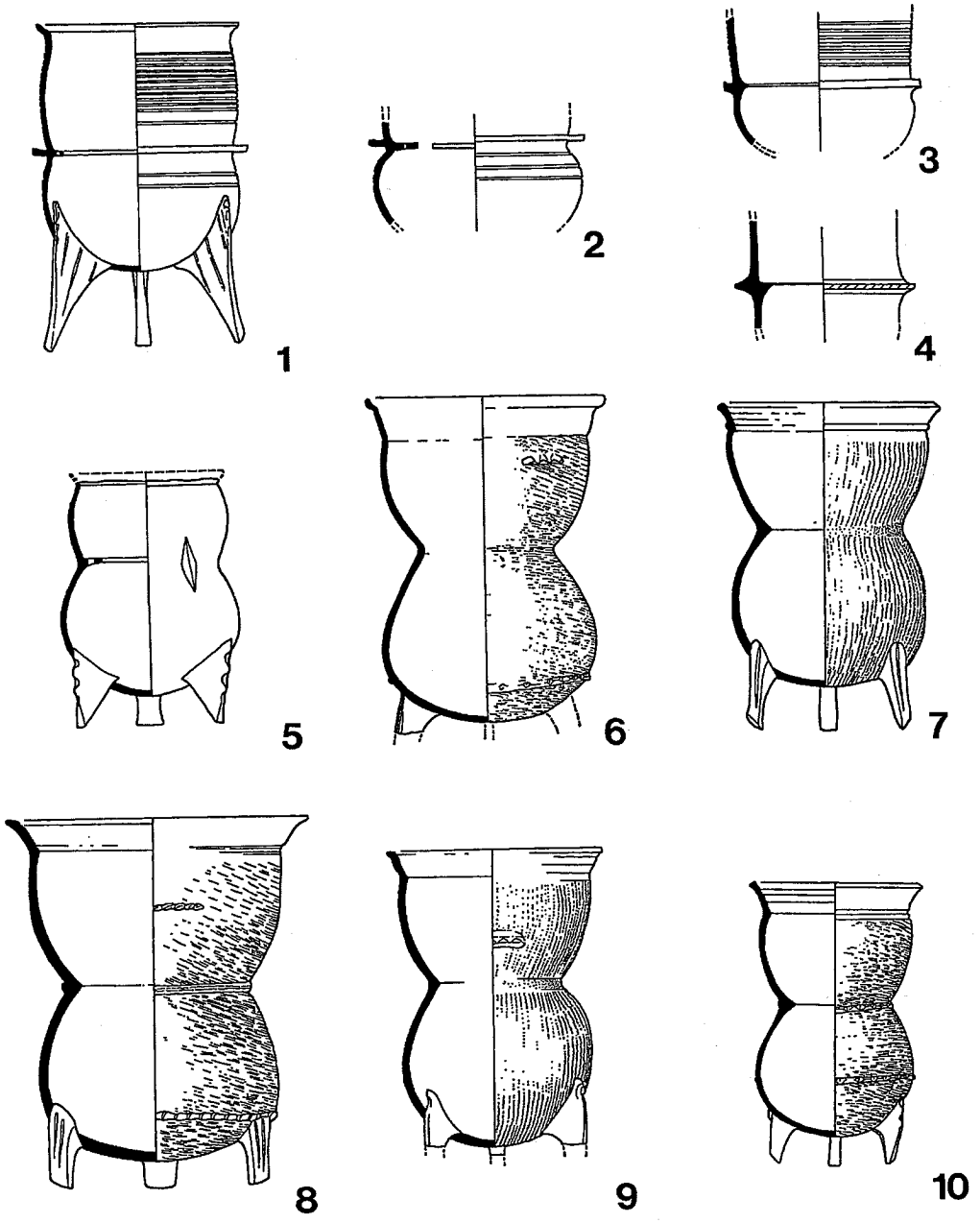


第31図　結合型甗出土の分布
（龍山文化期併行）

4．1．長江下流域

長江下流域の結合型甗は、現在のところ、江蘇省城頭山遺跡（第32図1・2）、同省西溝居遺跡（第32図3・4）の2遺跡からの出土のみである。煮沸部には、既存の鼎を利用し、突帯を施した後、その上に筒形甑を載せ、結合させている。

出土結合型甗は、すべて良渚文化前期に属する。これら甗は一体型甗から変化したと考えられている[22]が、その構造からみて、型式学的に変化したとは言い難い。長江下流域で結合型甗が出土する地域は、南京鎮江地区付近のみであり、いわゆる良渚文化の主分布域[23]からははずれる。このように出土地域が非常に狭いこと、そして太湖周辺・杭州湾北岸の一体型甗出土地域と隣接するにもかかわらず、形態上明確な差異があることは、地域性と捉えることができる。



第 32 図　長江下流域・黄河下流域・黄淮平原の結合型甗

長江下流域　1．2．城頭山遺跡　3．4．西居溝遺跡

黄河下流域・黄淮平原　5．建新遺跡　6～10．尉遲寺遺跡　(Scale=1/8)

一方、結合型甗との密接な関係を想定することができるのは、安徽省南部の薛家崗文化に出土する筒型甑[24]である。鼎の上に筒形甑を載せたときのプロポーションと城頭山遺跡出土甗との類似性は高い（第22図16･17）。筒型甑が下の鼎と結合し、結合型甗が成立したか、あるいは地域性として両者が存在したかは、今後の資料の増加を待って再検討したい[25]。

また、同時に山東省建新遺跡出土の結合型甗（第32図5）、安徽省尉遲寺遺跡（第32図6～10）とも類似する。城頭山遺跡や西溝居遺跡の結合型甗は典型的な良渚文化のものとは言えないが、欒豊実が指摘するように良渚文化の北進[26]が言えるならば、その影響をうけ、黄淮平原を介し、尉遲寺遺跡、建新遺跡の結合型甗を成立させた可能性がある。

この地域の結合型甗は、従来漠然と長江下流域の甗として捉えられてきたが、以上の検討により、長江下流域の甗はふたつの器種があることを新しく確認することができ、さらにそれらは別の系譜であることも判明した。

4．2．　黄河下流域

ここでは、大汶口文化後期と山東龍山文化期とで別々に検討していきたい。

4．2．1．　大汶口文化後期－長江下流域との関係－

大汶口文化後期、この地域でも結合型甗が出現する。

黄淮平原では、安徽省尉遲寺遺跡出土例（第32図6～10）がある。藍文を施した罐形鼎のうえに広口の罐をのせたものである。結合部はくびれており、そこにスノコを載せることができる。多くは土器棺に転用している。

山東省建新遺跡F20出土例（第32図5）は、夾砂紅陶で鼎形土器の上に罐形土器が載る。結合部はくびれ、内面に小孔があいた突帯が施されている。甑部は、罐の胴部のみが使用されている。足は鑿形を呈し、稜部には刻み目を施す。

前述した長江下流域と比較すると、結合部に突帯が施されていることや足の

形態は、江蘇省城頭山遺跡出土結合型甗に類似するといえる。一方、甑部は、城頭山遺跡出土例が筒型甑であるのに対して、建新遺跡や尉遲寺遺跡の例では、罐形土器の胴部を使用していることが異なる。いずれにしても相互の関係は密接であり、出土時期からみると、長江下流域の結合型甗の影響を受け、この地域の結合型甗が出現したと考えられる。

４．２．２．山東龍山文化期

結合型甗は、山東龍山文化期に非常に盛行する。また、当該期に煮沸部の形態変化が大きいのも地域的な特徴である。

黄河下流域の山東龍山文化の結合型甗については、これまでいくつか分類と編年がされている。それら研究の主要な分類は、煮沸部の形態変化を襠部の形状から行ったものである。これは、鄒衡の鬲の分類研究[27]、つまり、分襠、聯襠の概念[28]をもとにしたものである。山東龍山文化前期の結合型甗は、襠部が円弧状になるものが多く、それは聯襠の基準と類似することから、聯襠の製作方法を想定する小川誠や欒豊実らの見解[29]もある。しかし、前期の結合型甗の足部をみると既成の罐形土器に足を取り付けたもの（第 33 図１～４）で、結果として襠部が円弧状を呈するものとも思われ、それが直ちにその製作方法にあたるわけではない。

しかし、結合型甗の変化は、襠部が円弧状のものから、袋足へと変化することは間違いない。ただし、今後に検討すべき問題が、二つある。

まず、襠部が円弧状のものの製作方法の問題である。その製作方法には二つの可能性が考えられる。小川誠が言うように、「板状にのばした胎土を円筒状にまるめて、そこから三足をひねりだす方法」[30]、つまり蘇秉琦が論じた聯襠の製作方法が可能性のひとつである。もうひとつは、既成の罐形土器に三足を取り付ける方法である。あきらかに後者と考えられる例には、山東省三里河遺跡Ｈ120 出土例（第 33 図１）、同遺跡M2124 出土例（第 33 図２）、同省鄒家庄遺跡Ｈ131 出土例（第 33 図３）、同省姚官庄遺跡Ｈ135 出土例（第 33 図４）がある。小川が、襠部が円弧状を呈するとしたものには、これらも含むことから、再考すべきと考える。ただし、まだ、聯襠製作方法の存在を否定すること

はできない。欒豊実も、製作方法には直接触れていないが、「款足甗」[31]と表現するように、分類上指標となる要素が明確でない土器群といえる。

こうした問題が生じる背景には、分類指標に形態と製作技法とを混在させたまま用いていることがある。仮に、聯襠の概念を用いるならば、「袋足甗」ではなく「分襠甗」と用いるべきである。しかし、そうすると鄒衡の聯襠、分襠概念に内包される製作方法が、黄河下流域の結合型甗に認められるかどうか明らかにしたうえ、用いなければならなくなる。だが、実際は、報告書レベルの情報では、製作方法を個体別に明らかにすることはできない。現状では、製作方法には上記の２つが想定できることに留めざるを得ない。筆者は、今後、結合型甗を実見、精査し、その製作方法を明らかにしたうえで改めて論じたいと考えている。

いまひとつの問題は、袋足の出現についてである。袋足は、模製法で製作される。模製法とは、足の形をした型に粘土を貼り付けて製作する型おこし法のことである。模製法の場合、袋足内面に反転文様が残ることがある。報告書でもこうした記載はあり、山東龍山文化の袋足甗も模製法で製作されたと考えられる。問題は、その出現の背景である。黄河下流域で独自に出現した製作方法か、隣接地域とくに黄河中流域から伝播した製作方法かが、ここでは想定できる。

黄河下流域での袋足甗出現は、山東龍山文化期の早くとも中期ごろからであるが、一方、黄河中流域の袋足甗は、王湾三期文化前期併行の様相が分かっていない。また、袋足土器には、ほかに斝や鬲や鬶があり、これらの時間的併行関係も考慮する必要がある。しかし、最大の問題は、山東龍山文化と黄河中流域の王湾三期文化や後岡二期文化との併行関係が解明されていないことである。これに対して、欒豊実の積極的な研究[32]があるが、編年学的に併行関係が明らかになっているわけでない。黄河下流域と黄河中流域における袋足甗の関係は、併行関係を明確にしたうえで論じる段階に来ている。

とはいえ、いずれの場合も形態的な要素から分類をし、型式の組列を組む方法は報告書レベルの情報ではすでに限界であり、煮沸部の明確な製作方法の解明が求められる。残念ながら、出現の背景を明確にできる段階に至っていないのが現状である。

以上、黄河下流域における甗研究の現状と問題点を指摘した。本節では、甗を黄河流域と長江流域において位置づけることが主たる目的であるため、以上に指摘した問題は改めて論じることにしたい。

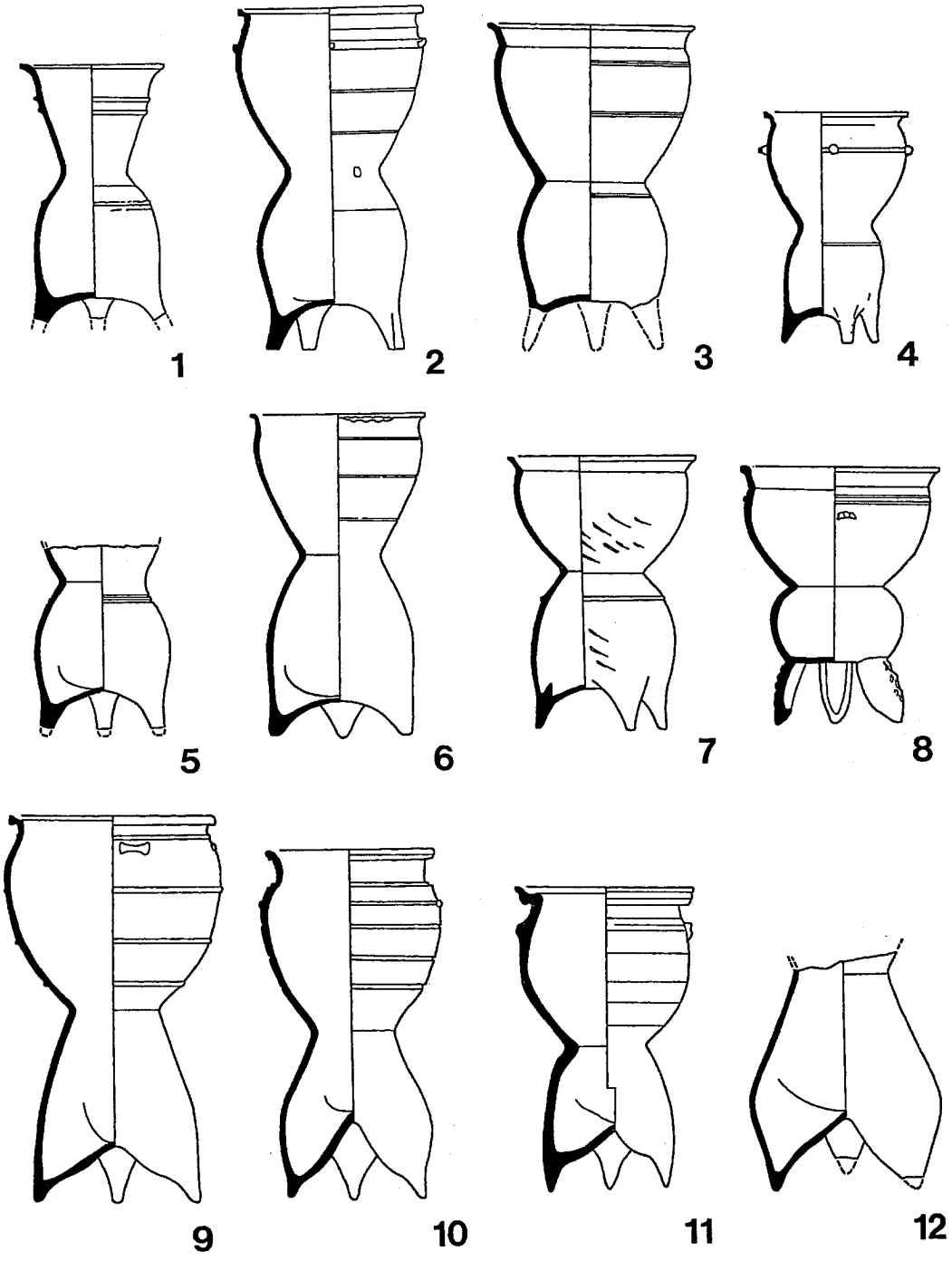
ただし、結合型甗の変化の過程は、大枠では首肯できるため、ここでは先学の山東龍山文化の編年研究や甗の分類研究を踏まえながら、黄河下流域の結合型甗を概観する。

出土の分布は、山東半島先端部を除いた、黄河下流域全域である。とくに、泰山周辺の山東龍山文化の遺跡に普遍的に出土しており、量も他地域と比べて最も多い。一遺跡からの出土も比較的多く、たとえば、山東省尚庄遺跡 124 点、同省尹家城遺跡 26 点、同省西呉寺遺跡 33 点、同省姚官庄遺跡 21 点を数える。この数値は、鼎や鬻などのほかの器種と比較しても高い。黄河下流域以外の地域では、一遺跡に多くとも 10 数点の出土しかないことと比べると、結合型甗が最も盛行する地域といえる。同時に、甑の出土がほとんどなく、蒸具の主体が結合型甗であることは、黄河下流域の特徴といえる。

また、ほかの地域との比較において、黄河下流域では結合型甗が墓に副葬されることが特筆できる。ほかの地域では、土器蓋葬に転用されることはあっても、副葬品として扱われることはない。

所属する時期は、前述のように時期決定は困難ではあるが、山東龍山文化期初頭の出土例がないようである。しかし、前項で論じたように大汶口文化後期にはすでに結合型甗が出現しており、断絶する[33]とは考えられない。調査遺跡自体が少ないことも理由のひとつであろう。

出土した結合型甗は、小川の分類を参考にすると、襠部が円弧状のもの（第 33 図 1 ～ 7）、平底で実足のもの（第 33 図 8）、袋足のもの（第 33 図 9 ～12）とがあり、襠部が円弧状のものから袋足のものへ変化する。平底で実足のものは、足の形状が、「鳥首形」をしたものである。これは、罐形鼎にも存在する。他の結合型甗の煮沸部は、鬻の胴部と類似するが、「鳥首形」の実足甗は、同形の罐形鼎を利用している。また、これには泥質黒陶のものがある。泥質とは、いわゆる精製土器で、黒陶は器面が丁寧に磨かれたもので透水性は低く、煮沸には適さない。一般に、祭祀用あるいは明器に多い。他の結合型甗が灰褐陶か紅褐陶であり対照的である。しかし、出土状況に区別はなく、用途はさらに検



第 33 図　黄河下流域の結合型甗

1．2．三里河遺跡　3．鄒家庄遺跡　4．姚官庄遺跡　5．6．西呉寺遺跡　7．呈子遺跡
8．火山埠遺跡　9．10．尹家城遺跡　11．桃園遺跡　12．両城鎮遺跡　(Scale=1/8)

討を要する。

4．3．黄河中流域

黄河中流域での結合型甗の出土は、王湾三期文化期併行からである。大汶口文化後期に併行する廟底溝二期文化期併行の遺跡からの出土例は、これまでになく、黄河下流域よりも一時期遅れて出現することになる。

出土分布にも特徴がある。出土地域は、河南北部、河南中部、山西中南部に集中する。しかも、それぞれの地域が、後岡二期文化、王湾三期文化、陶寺文化の展開する領域にはからずも相当していることが、今回、わかった。この3つの地域は、大枠では結合型甗の製作技術の背景が異なるため、以下、それぞれに分けてみていくことにする。そのうち、河南中部については、黄淮平原との関係が深く、一緒に検討する。

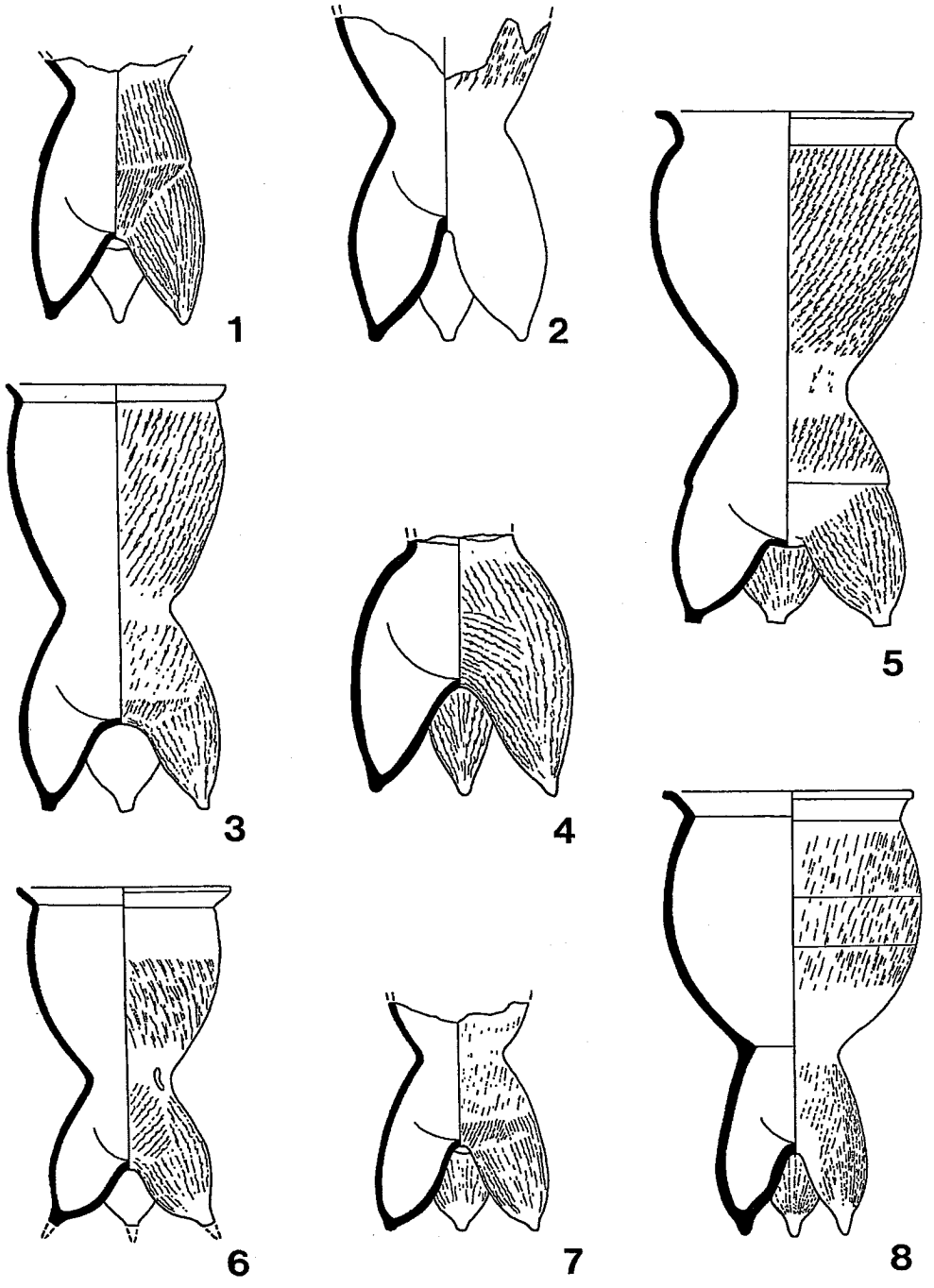
編年に関しては調査遺跡数も少なく、細分化途上である。ここでは、後岡二期文化は、後岡遺跡の編年[34]、王湾三期文化は、韓建業らの研究[35]、陶寺文化は宋建忠の研究[36]を参考にする。

ところで、いわゆる中原龍山文化の文化域のうち、河南南部の駐馬店地区、南陽地区では甗の出土例は現在まで認められないことである。駐馬店地区の楊庄遺跡龍山文化期の文化層から、長江中流域の石家河文化に由来する有孔型甑（蒸気孔形態D類）が多く出土している。南陽地区の淅川下王崗遺跡龍山文化期の出土遺物でも同様の傾向である。このことから、結合型甗が出土分布をこの地域にまで拡大しないのは、石家河文化の北上にともなう影響を背景にもつと考えられる。

河南北部

この地域は、後岡二期文化[37]の遺跡が分布する。河南省北部の太行山脈東麓である。

ここでは、河南省後岡遺跡出土の結合型甗を中心に検討する。後岡遺跡は、1931年梁思永らの調査を機に数次にわたり発掘調査が行われている。遺跡は、洹河南岸の舌状台地に立地する。1979年の調査において、厚さ2.5mの文化層は7層に分層されており、出土遺物から2層が商代、3層から7層までが龍山



第 34 図　黄河中流域（河南北部）の結合型甗

1～7．後崗遺跡　8．白営遺跡　(Scale=1/8)

文化と報告されている。全部で 39 基の住居址が検出されており、龍山文化の一大集落址である。

結合型甗は、完形および復元されたものが、総計 10 数点（16 点が報告）出土している。器面は、藍文もしくは縄文により充填されるのが主で、ほか素文もある。縄文はさらに粗いものと細いものとの二種類ある。すべて夾砂灰陶である。報告書では、製作方法について、結合型甗の上下は、模製法によりそれぞれ製作された後、接合して成形しているとしている。

その接合部位であるが、これには二種類あるようである。第 34 図 1・5 はくびれ部より下の煮沸部の肩部あたりで、袋足と接合している。こうした製作法は後岡遺跡にのみ見られる特徴である。第 34 図 2 ～ 4・6 ～ 7 はくびれ部で甑部の罐と煮沸部の袋足を接合したものである。このことは、煮沸部製作に異なる製作法があったことを想定できる。まず、前者は斝製作技術を背景にもつと考えられる。煮沸部肩部より下部は、斝の胴部と袋足である。後者は、模製法により製作した 3 つの袋足を上部で接合したものである。

後岡遺跡出土結合型甗で、出土位置がわかるものから、この両者の時間的前後関係を調べてみると、以下のようになる。肩部接合部で段ができているものは、第 6 層包含層出土例（第 34 図 1）、第 5 層 H31 出土例（第 34 図 5）があり、遺跡早・中期に属する。後期にはこのタイプのものは無くなる。甑部は、すべて罐形をしている。袋足の形態変化は、最大径が上半にあり先端に向かって直線的なもの（第 34 図 2 ～ 4）から、最大径が中間で全体的に卵形のもの（第 34 図 6・7）へ変化していく。

後岡二期文化の遺跡には、ほかに湯陰白営遺跡がある。遺跡は 6 文化層あり、龍山文化前期、河南龍山文化（典型）中期、龍山文化後期に分けられている。結合型甗は龍山文化後期遺存から数十点出土している。すべて夾砂灰陶である。煮沸部はすべて袋足をしている（第 34 図 8）。後岡遺跡出土のような斝の胴部から袋足部に類似するものはない。

ところで、河南北部より以北の地域では、夏家店下層文化期に結合型甗が出土し始める。近年の研究では、夏家店下層文化の開始がどの段階かは明確でないが、龍山文化期併行にまで上がることが指摘されている[38]。そうであるならば、後岡二期文化の結合型甗の北上が想定できるほか、晋中地区の結合甗と共

通する甗もあり、太行山脈をこえて伝播したと考えられる。黄河流域以北については、改めて検討したい。

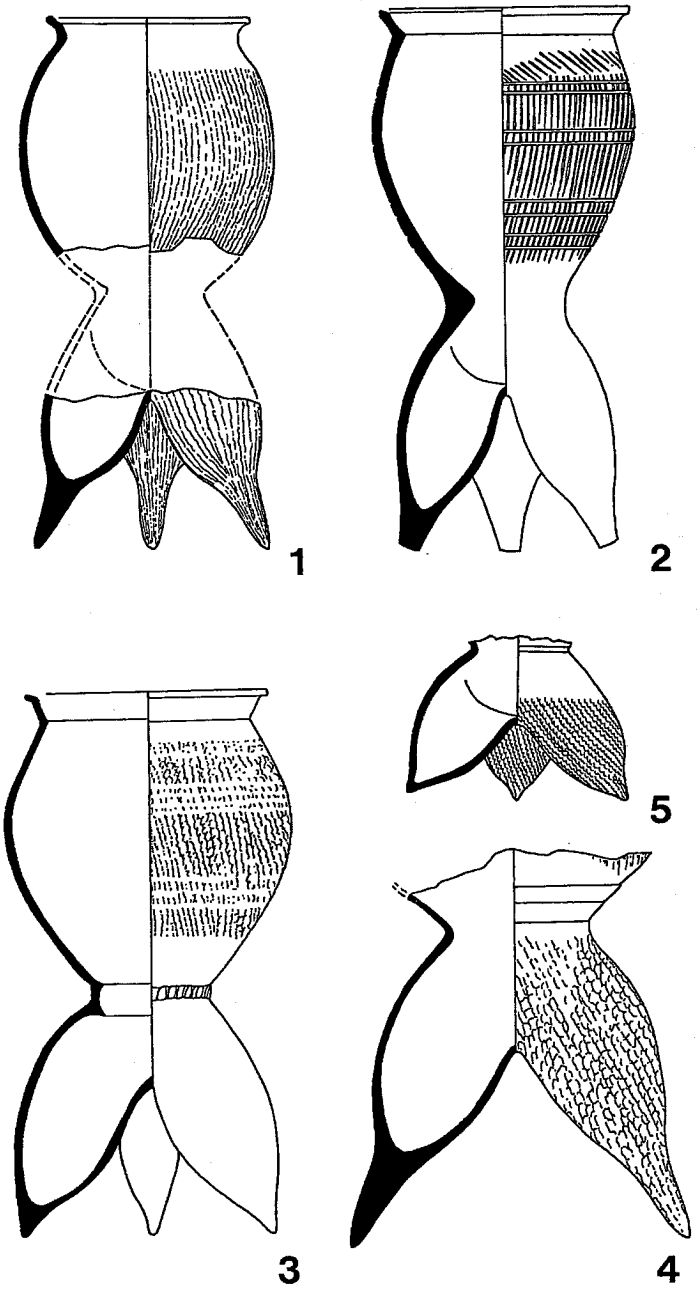
河南中部・黄淮平原

報告されている結合型甗は少なく、また完形品も少ないため詳細がわかりにくい地域である。このため、現研究段階では、結合型甗の時期的な形態の変化を検討することは困難である。王湾三期文化前期の結合型甗の存在は不明である。また、王湾三期文化移行期の様相は不明なことが多く[39]、結合型甗の出現の様相の説明には課題を残す。

前述のように、黄河下流域や黄淮平原では大汶口文化後期の結合型甗がすでに存在しているが、河南地域での存在はまだわかっていない。安徽省尉遅寺遺跡大汶口文化後期出土結合型甗は、既存の罐を利用して製作したものであったが、これは、河南省中部の罐とも形態的に共通性をもつ。尉遅寺遺跡の結合型甗が、黄淮平原を介した交流の一端と捉えることができるならば、この地域にも存在した可能性もある。しかし、王湾三期文化前期の状況が不明である以上、今後の資料の増加を待ちたい。

この地域の結合型甗の出土は、いわゆる鄭洛地区とその周辺に限られる。まとまって出土している遺跡には、輝県孟庄遺跡がある。孟庄遺跡は台地に立地し、東壁約 375m、北壁復元 340mのほぼ方形の城址遺跡である。前期、後期の２時期に区分されている。出土結合型甗のうち、10 点の報告がある。夾砂褐陶が主である。器面調整には無文、縄文、藍文の３種類があり、袋足は普通、縄文が施されているが、無文のものもある。足先端はさらに棒状にのびる。袋足は、火を受け、黒灰色を呈したものもある（第 35 図１）。出土した結合型甗の器高はすべて、55cm 前後と高く、足先から襠部まで約 20cm あることから、煮沸効率が高いことをうかがわせる。煮沸部の袋足は、それぞれの最上部で接合したものが多い。そのため、袋足の膨らみの最大径部は襠部より下に位置することになる。この地域の結合型甗の最大の特徴である。足先はさらに棒状の粘土を継ぎたしている。類例には、河南省点軍台遺跡（第 35 図３・４）、同省王庄遺跡、同省苗店遺跡、同省煤山遺跡、同省閻庄遺跡、同省程庄遺跡などから出土例がある。いずれも鄭洛地区の遺跡である。

さて、結合型甗の製作技術的な背景を検討するために、当該地域の袋足土器



第 35 図　黄河中流域（河南中部）の結合型甗

1．2．孟庄遺跡　3．4．点軍台遺跡　5．洛絲潭遺跡　(Scale=1/8)

の鬲や斝と比較しておきたい。ただし、当該地域の基本的な煮沸具は鼎であり、鬲や斝もまたそれぞれに検討する必要があるが、若干の検討をしておきたい。鬲が出土する遺跡には、洛陽王湾遺跡H57、孟津小潘溝遺跡F７、洛陽西澗溝遺跡H308　　がある[40]が、それらは山西省南部や河南省西部からの外来のものと考えられている。この地域の主要な袋足土器は、斝（釜形斝）[41]である[42]。斝の袋足は、ひとつひとつ模製法により製作し、容器底部に接合する。これに対して、結合型甗の袋足をみてみると、襠部はくびれ部付近まで高いことから、袋足をくびれ部付近で接合したものと考えられる。このことは、結合型甗の袋足製作と斝の袋足製作に共通性をうかがい知ることができる。また、袋足接合方法も他地域にはみることができないことから、独自的な技術背景を想定することができる。

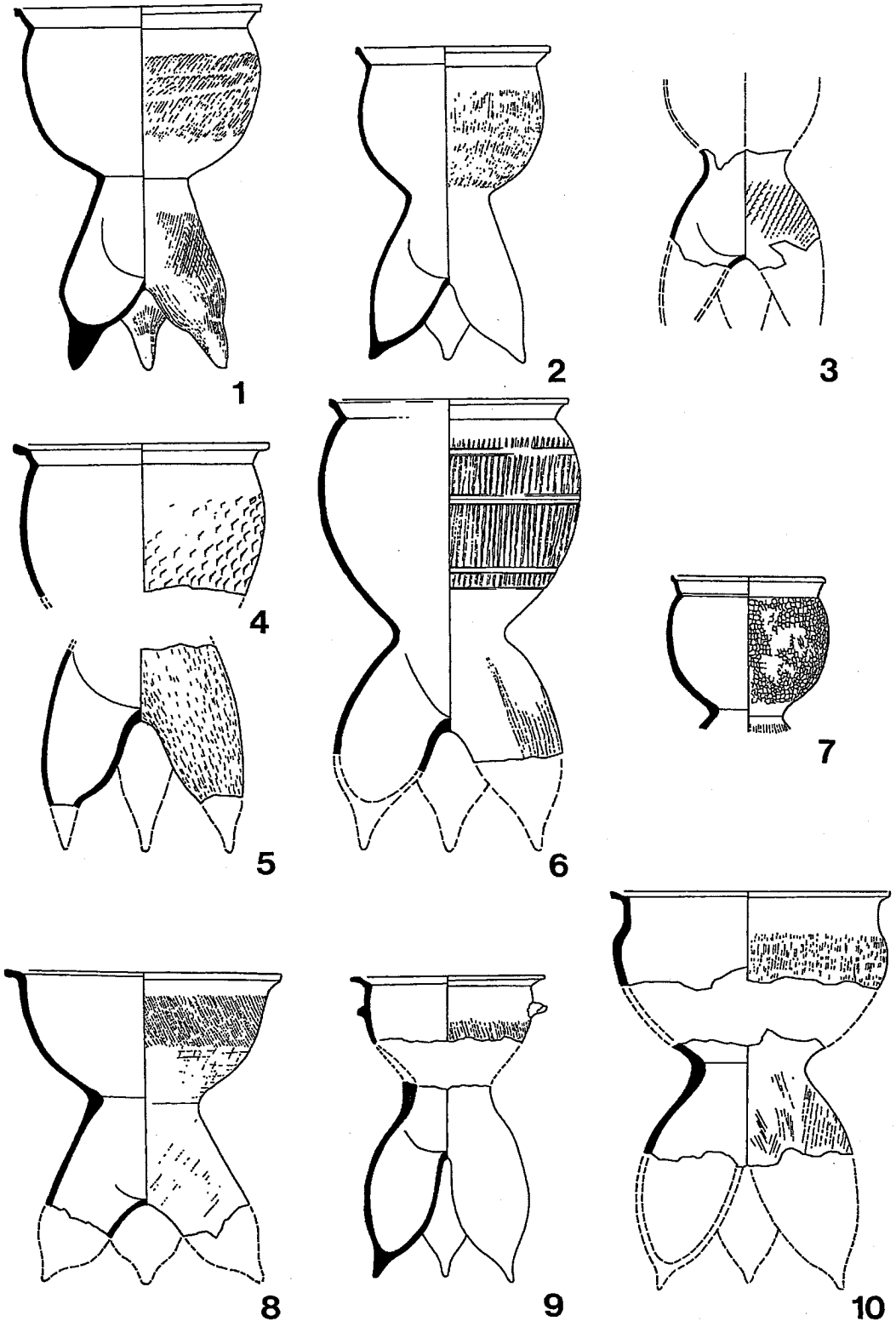
次に、黄淮平原の様相について、とくに述べておきたい。大汶口文化後期に結合型甗がすでに存在しているが、王湾三期文化期併行の結合型甗は、あきらかに鄭洛地区付近の結合型甗の影響を受けているからである。ここでいう黄淮平原は、王湾三期文化東限の伏牛山東麓一帯や山東龍山文化が分布する魯山西麓一帯とは区別する。鄭州付近に端を発し淮河下流へ注ぐ、渦河流域を指す。

王油坊類型の標式遺跡になっている河南省王油坊遺跡出土例（第36図1・2）をみると、袋足接合部はくびれ部に近いところにあり、足先はさらに棒状粘土を継ぎたしている。これらは、鄭洛地区の結合型甗の系統と考えることができる。

また、甑部の形態には、罐形と盆形がある。罐形のものは、河南省欒台遺跡（第36図3）、同省鹿台崗遺跡（第36図4～6）に出土例があり、前述の鄭洛地区の孟庄遺跡や点軍台遺跡と類似する。盆形を呈するものは、王油坊遺跡出土例、安徽省尉遅寺遺跡出土例（第36図7）などがあり、この地域の特徴といえる。盆形のものは、黄淮平原南側の淮河下流域の江蘇省周邨墩遺跡(第36図8・9)、同省戴家舎南蕩遺跡（第36図10）でも出土しており、鄭洛地区に系譜を持ちながらも、時期が下るにつれ甑部の器形を変えながら南下していくと考えられる。

山西中南部

ここで、山西中南部としたのは、太原市付近より南側の省域をさす。ふつう



第 36 図　黄河中流域（黄淮平原）の結合型甗

1．2．王油坊遺跡　3．欒台遺跡　4．5．6．鹿台崗遺跡　7．尉遲寺遺跡

8．9．周邨墩遺跡　10．南蕩遺跡　(Scale=1/8)

は、晋中、晋南と呼ばれる地域である。また、長治地区も含める。編年に関しては、宋建忠の研究[43]を参照した。

山西中南部の出土例のうち、陶寺文化前期の出土例について、現編年研究からは明確に時期を比定することが困難であるが、おそらくすでに出現していたと思われる。この地域で盛行するのは後期に入ってからである。全体の出土数は比較的多いが、出土状況などの詳細は不明なことが多い。本報告の刊行を期待したい。

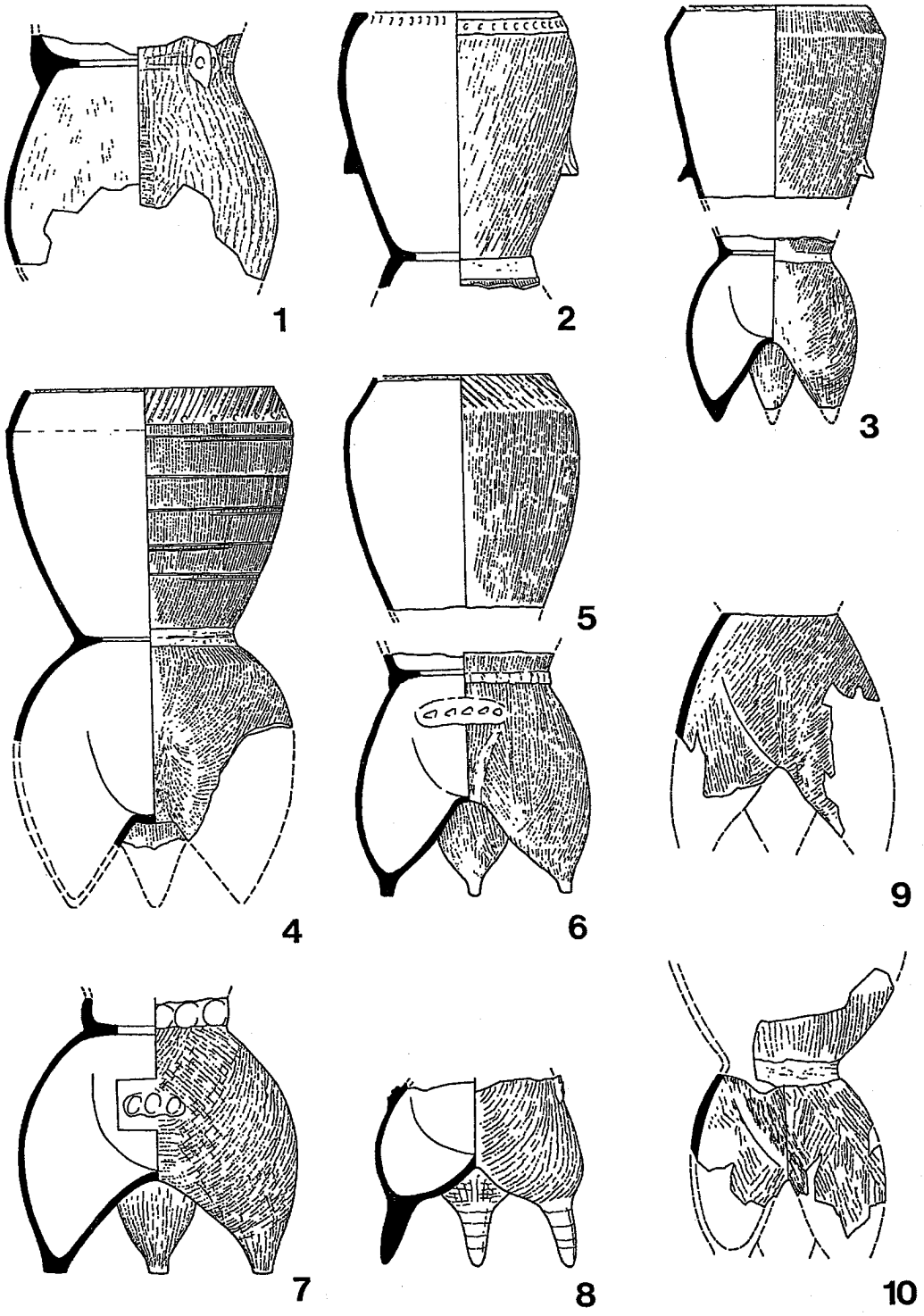
出土の分布は、山西南部から汾河流域を遡上するように拡がっていく。新石器時代に限ると、太原市近くの五台陽白遺跡の出土が北限である。また、黄河を越えて陝西省域には出土しないことも特筆しておく。ただし、陝西省最東北部の府谷鄭剛峁遺跡に一例出土している。報告では龍山文化とあるが、中原二里頭文化併行の可能性が高い。以下、山西中南部の結合型甗の特徴をみていこう。

山西省喬家溝遺跡出土例（第37図4）は、袋足は径の大きい砲弾形を呈し、全体的にずんぐりとした煮沸部である。くびれ部外側は突帯を貼り付け、連続する圧痕がめぐる。内側には突帯がほどこされている。類例には、垣曲龍王崖遺跡（第37図1）、洪洞侯村遺跡（第37図2）、汾陽杏花村遺跡（第37図5・6）、忻州游邀遺跡（第37図7）に各出土例があり、山西中南部に広く分布する。

とくに注目されるのは、煮沸部の製作方法である。煮沸部は袋足であるが、ひとつひとつの袋足はほぼ垂直なまま接合しており、襠部の位置は相対的に低くなる。また、杏花村遺跡、游邀遺跡出土例など煮沸部に把手をつけたものがある。こうした特徴は、当該地域の鬲と同じで、鬲を製作後、甑部を結合させたことが想定できる。

また、くびれ部の内面に突帯をもつこともこの地域の大きな特徴である。むしろ、突帯を持たないものはないといってよい。他地域で突帯をもつものは、山西中南部との関係を検討する必要がある。

ところで、長治盆地出土の結合型甗はこれらとは少し異なる。山西省小神遺跡出土例（第37図9・10）の煮沸部の形態的特徴は、袋足の最大径が上部にあり、肩が張っている。また、器面は縄蓆文により充填されている。こうした特



第37図　黄河中流域（山西中南部）の結合型甗

1．龍王崖遺跡　2．侯村遺跡　3．4．喬家溝遺跡　5．6．杏花村遺跡

7．8．游邀遺跡　9．10．小神遺跡　(Scale=1/8)

徴をもつ結合型甗は、河南北部の後岡遺跡、白営遺跡、大寒村遺跡出土の結合甗に類似するだけでなく、くびれ部外面には貼付突帯があるものの、内面には突帯はない。小神遺跡を標式遺跡として小神類型[44]と類型化されており、陶寺文化後期に併行するが、従来のように、陶寺文化との関係だけでなく、太行山脈東麓の後岡二期文化の影響を検討する必要があろう。ただし、調査例が少ないことから、併行関係が明確でなく、ここでは以上を指摘するに留める。

4．4．結合型甗の出現と展開（第38図）

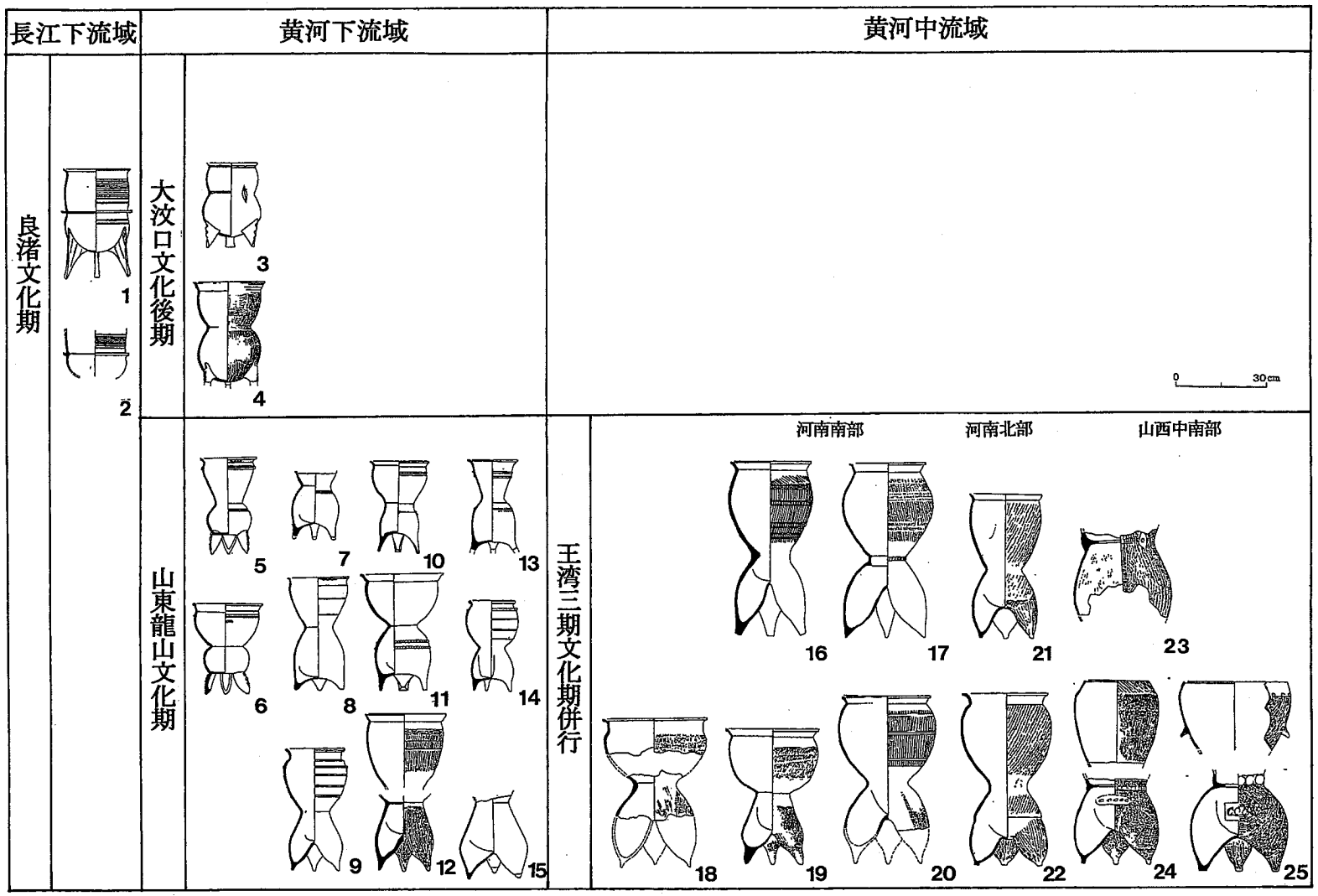
良渚文化期・大汶口文化後期に、結合型甗は出現する。長江下流域の南京・鎮江地区を中心に、鼎形土器に筒型甑を載せたものが出現する。黄淮平原や黄河下流域の山東半島南部では、罐形鼎に罐形土器を載せたものが出現する。これらは形態および構造の類似と出現時期から、相互の関係が想定できる。また、長江下流域の結合型甗は、隣接する薛家崗文化に主に出土する筒型甑との類似性が高く、その影響のもとに出現したと考えられる。同時に、一体型甗とは、器形や製作上の類似性は低く、系譜は異なると考えられる。

黄河流域の龍山文化期併行の段階にはいると、結合型甗は多くの地域で出土するようになる。しかし、その成立に関しては、前段階からの直接的な系譜はみられず、各地域の他の煮沸具製作技術を背景にしていると考えられる。簡単にまとめると以下のようになる。

黄河下流域は、大汶口文化後期に長江下流域の影響を受け結合型甗が出現し、山東龍山文化期では、襠部円弧状のものから袋足甗へと変化する。袋足製作技術は黄河下流域にも黄河中流域にも伝統があり、袋足甗への変化の背景の解明については今後の課題としたい。

黄河中流域の河南北部や河南中部では、斝の袋足製作技術を背景にもつと考えられる。また、河南中部の結合型甗は、黄淮平原に向かって分布を拡大する。山西中南部では、鬲の上に甑部を製作する結合型甗が成立し、汾河を遡上するように拡大する。

一方で、渭水流域や河南南部で出土しないことは、前者は客省庄二期文化、後者は石家河文化の影響を想定することができる。



第38図　結合型甗の出現と展開

1．2．城頭山遺跡　3．建新遺跡　4．尉遲寺遺跡　5．丁公遺跡　6．火山埠遺跡
7．8．西呉寺遺跡　9．尹家城遺跡　10．11．獅子行遺跡　12．安邱堌堆遺跡　13．14．三里河遺跡
15．両城鎮遺跡　16．孟庄遺跡　17．点軍台遺跡　18．周邨墩遺跡　19．王油坊遺跡
20．鹿台崗遺跡　21．22．後岡遺跡　23．龍王崖遺跡　24．杏花村遺跡　25．游邀遺跡

５．小結

５．１．一体型甗と結合型甗

本節では、従来、一括されてきた甗を、一体型甗と結合型甗に大別した。そして、それらは系譜が異なるふたつの器種であることを指摘した。また、形態変化からみると、機能的に差異があることも指摘できる。

一体型甗は、時間とともに土器様式も変化し、それと同様に使用される土器（鼎形土器）は、形態的に変化していく。しかし、蒸具の機能を変化させるような形態的変化はない。結合型甗は、蒸具として型式変化する。良渚文化期・大汶口文化後期に出現した実足甗は、龍山文化期併行の黄河下流域と中流域の各地域で袋足甗へ変化する。それは、煮沸部の製作にかかわる変化であることから、蒸具として煮沸の効率化を改良したと考えることができる。

ところで、長江下流域で盛行した一体型甗は、良渚文化期以後、馬橋文化期になると消滅する。同時に結合型甗が下流域一帯に広く出土するようになる。これは、二里頭文化の結合型甗の影響が背景にあるが、同じ蒸具の一器種であった一体型甗の消滅は、結合型甗との機能的な差異も要因にあったのではないだろうか。

５．２．良渚文化期・大汶口文化後期における結合型甗展開の意義
－黄淮平原を介した関係－

良渚文化期・大汶口文化後期に、長江下流域から黄淮平原そして山東半島基部にまで広く出土する結合型甗を食文化的な視点から、若干の検討を行いたい。

これらの出土分布域である黄淮平原には淮河が東西に流れているが、この淮河は気候など自然環境の境界にはじまって、栽培植物の境界にもなっていることが従来から指摘されている。つまり、長江流域では、イネを主としており、黄河下流域では、アワ、ヒエ、キビ、イネなどが栽培されている。こうした栽培穀物の相違は栽培の過程のみならず、穀物の特性からその食文化にもなんらかの相違を想定させる。

もちろん、両河流域では、早い段階から甑が出土しており、穀物を蒸して食べていたことは想定されている。その様相は、それぞれの地域で独自的なものであった[45]。

その後、蒸具体系の変化のひとつとして甗が出現する。そのなかで、良渚文化期・大汶口文化後期併行の結合型甗は、栽培植物の出土分布の境界を跨いで類似性をもっており、相互の交流があったことを物語る。

江蘇省城頭山遺跡や同省西溝居遺跡が位置する地域の主要栽培穀物がイネであることは異論ないことである。一方、安徽省尉遅寺遺跡や山東省建新遺跡では、アワ、イネなどが出土している。さらに、両地域では農耕具組成も異なっている。しかし、結合型甗はそれら穀物を蒸して食べる道具の形態に類似性を持っていたことを示しており、両地域間の黄淮平原での文化交流の一端を表わすものと理解することができる。

ところで、江蘇省城頭山遺跡や同省西居溝遺跡は、南京・寧鎮地区に位置し、出土遺物は典型的な良渚文化としては捉えられないものである。一方で、結合型甗が太湖周辺から杭州湾北岸一帯には出土例をみないこともあり、一体型甗と系譜が異なるものであることは、長江下流域の蒸具体系に地域差があったことを想定できる。

５．３．龍山文化期併行の結合型甗展開の意義－結合型甗文化圏の成立－

龍山文化期にはいると、前段階からの様相は一変して、甗の出土分布域は拡大する。大汶口文化後期の結合型甗を祖源としながらも、当該期の結合型甗はそれぞれの地域で独自的に出現し成立する。

こうした各地域の結合型甗の地域的な特徴に対して、結合型甗の形態からは地域間の関係について直接言及することができなかった。構造的な類似性はあっても、製作技術においては相互の影響を見出すことはできなかったため、結合型甗の分布の拡大を一元的な伝播論で解釈できないと考えたからである。

しかし、同時に結合型甗が広範囲に出現する意義も考える必要がある。先の見解は、逆に、当時の地域間の関係の一端を示しているといえないだろうか。黄河中下流域において、これまでになかった新しい器種の出現であることを重

視すると、結合型甗を受容し共有するまとまりの出現ともいえる。結合型甗の拡がりは、情報だけが主に伝わり、各地域で独自的に製作するに到ったと解釈するほうが適当である。これは、鬲や斝の型式の組列が空間的拡がりをもって展開すること[46]とは異なる。また、対象物、つまり穀物遺存体の出土分布とも一致しない。これまでの黄河流域と長江流域で区分された穀物遺存体の出土分布の相違とも明らかに異なる。

つまり、結合型甗の拡がりは、それを共有しようとする地域どうしの社会的関係が背景にあると想定する。その意味において、龍山文化期の結合型甗の分布領域は、結合型甗文化圏であると解釈したい。

おわりに－課題にかえて－

本節では、各地域での甗の具体的なあり方までの検討は行わなかった。甗の出土状況、大きさ、スノコの種類などからも地域的、時期的な特徴がある。今後、本文中にも指摘した製作方法の解明も含めて、地域ごとに検討したい。

ところで、結合型甗は青銅器時代にはいり、調理具のひとつとして青銅器においても組成される。この時期の青銅製祭器は祭祀的な意味合いが強く、単なる調理具のバリエーションとしてだけでなく、祭祀・儀礼的に意味をもつ。

新石器時代、黄河中下流域での結合型甗文化圏の成立は、青銅器時代の青銅製祭器の成立を考察する際に、大きな意味を有していることを指摘しておきたい。

---

1 槙林啓介「中国新石器時代甑の基礎的研究－黄河・長江流域を中心として－」『先史学考古学論究』Ⅳ 2003年

2 呂大臨『考古圖』1092年（元祐七年）

3 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究－殷周青銅器総覧－－』1984年 吉川弘文館

4 前掲註3に同じ。

5 東亜考古學會編著『貔子窩』（東方考古學叢刊　第一册）1929年

[6] 浜田耕作「鼎と鬲とに就いて」『東亜考古學研究』1930年 岡書院

[7] 安特生「中華遠古之文化」『地質彙報』第5号 1923年

[8] 「併し我々は從來此の鬲と甑との複合形式なる甗は、土器の「ステーヂ」よりも、寧ろ銅器として始めて發生した器形かと信じて居つたのであるが、何ぞ知らん、土器に於いても既に存在して居つたとは。即ち、(中略) 滿州貔子窩東老灘の遺跡を發掘するに及んで、我々は遂に瓦甗の存在を確證することが出來たのである。」(浜田耕作「鼎と鬲とに就いて」『東亜考古學研究』1930年 岡書院。初出は、『狩野教授還暦記念支那學論叢』1927年。)

[9] ただし、アンダーソンはその後も甑と甗の差異を明確にはしていない(J.G.Andersson「Prehistoric Sites in Honan」『BMFEA』vol.19 1947年)。

[10] 岡崎敬「中国古代のかまどについて－釜甑形式より鍋形式への変遷を中心として－」『東洋史研究』第14巻1・2号合併号 1955年
岩崎卓也「甑小考」『信濃』第18巻第4号 1966年
超清「黄河流域新石器時代炊器之演変」『中原文物』1期 1988年
陳国慶「長江下游地区史前文化的炊器研究」『考古学文化論集』二 1989年

[11] 小川誠「岳石文化の甗」『考古学雑誌』第74巻第3号 1989年

[12] 欒豊実「海岱龍山文化的分期和類型」『海岱地区考古研究』1997年 山東大学出版社

[13] 趙輝「龍山文化的分期和地方類型」『考古学文化論集』三 1993年 文物出版社

[14] 李権生「山東竜山文化の編年と類型－土器を中心として」『史林』第75巻第6号 1992年

[15] 施米克「論陶甑、陶甗的来源和分布」『考古学文化論集』三 1993年 文物出版社

[16] この土器文化の概念は、蘇秉琦の提示した区系類型論でひとまず体系化され、その背景のもとに構築されてきたものであるが、一定の領域が新石器時代を通して存続することはなく、時期により変化することがわかってきているのみならず、今日その概念自体の再検討も多く見られる。たとえば、岡村秀典「マルクス主義と区系類型論」(『展望考古学』1999年 考古学研究会)、大貫静夫「中国における土器型式の研究史」(『考古学雑誌』第82巻第4号 1997年) などがある。

[17] 甑と煮沸具が重なって出土した場合など、それらを一緒にして甗と報告することも

ある。本章では、上部に載る甑は第一節で扱い、一体となっているもののみを本節で分析した。

[18]施米克「論陶甑、陶甗的来源和分布」『考古学文化論集』三　1993年 文物出版社

[19]何徳亮・孫波「試論魯南蘇北地区的大汶口文化」『中国考古学会第九次年会論文集』1993年 文物出版社

欒豊実「論大汶口文化和崧沢、良渚文化的関係」『中国考古学会第九次年会論文集』1993年 文物出版社

韓建業「試論豫東南地区龍山時代的考古学文化」『考古学研究』三　1997年 科学出版社

孫広清「河南境内的大汶口文化和屈家嶺文化」『中原文物』第2期 2000年

樊力「豫西南地区新石器文化的発展序列及其与鄰近地区的関係」『考古学報』第 2 期 2000年

欒豊実「論陸庄新石器時代遺存的文化性質和年代」『考古』第2期 2000年

肖燕・春夏「皖北、豫東地区大汶口文化的分期与性質」『華夏考古』第3期 2001年

[20]これについては、第三節で検討した。

[21]朔知「良渚文化的範囲ー兼論考古学文化共同体」『南方文物』第2期 1998年

[22]中村慎一「河姆渡文化研究の諸問題」『中国古代文明の原像ー発掘が語る大地の至宝』1998年 アジア文化交流協会

[23]朔知「良渚文化的範囲ー兼論考古学文化共同体」『南方文物』第2期 1998年

[24]槙林啓介「中国新石器時代甑の基礎的研究ー黄河・長江流域を中心としてー」『先史学考古学論究』Ⅳ　2003年

[25]城頭山遺跡や西溝居遺跡の文化遺存は、報告では良渚文化あるいは良渚文化相当としているが、太湖周辺の良渚文化とは異にするところが多い。また、南京付近の北陰陽営遺跡に代表される北陰陽営文化とも異なる。こうした状況は考古遺存から文化類型を設定するプロセスに限界があることが問題として挙げられる。

[26]欒豊実「良渚文化的北漸」『中原文物』第3期 1996年

[27]鄒衡「論先周文化」『夏商周考古論文集』1980年 文物出版社

[28]もともと、蘇秉琦「瓦鬲的研究」(『闘鶏台溝東区墓葬』陝西考古発掘報告第一種第一号　1948年）で、鬲をA型（袋足類)、B型（聯襠類)、C型（折足類)、D型（矮

脚類）の４類にわけたものを、鄒衡がＡ類、Ｂ類、Ｄ類を分襠鬲、Ｃ類を聯襠鬲と二つに大別した概念。襠部の形態から鬲を分類する方法である。

[29]小川誠「岳石文化の甗」『考古学雑誌』第 74 巻第３号 1989 年

[30]前掲註 29 に同じ。

[31]欒豊実「海岱龍山文化的分期和類型」『海岱地区考古研究』1997 年 山東大学出版社

[32]欒豊実「論城子崖類型与後岡類型的関係」『考古』第５期 1994 年

[33]欒豊実「海岱龍山文化的分期和類型」『海岱地区考古研究』1997 年 山東大学出版社

[34]中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1979 年安陽後崗遺址発掘報告」『考古学報』第１期 1985 年

[35]韓建業 楊新改「王湾三期文化研究」『考古学報』第１期 1997 年

[36]宋建忠「山西龍山文化的類型和分期」『文物季刊』1993 年

[37]中国社会科学院考古研究所編著『新中国的考古発現和研究』（1984 年　文物出版社）で設定している後岡二期類型を指す。中国社会科学院考古研究所編著『新中国的考古収穫』（1961 年　文物出版社）では河南龍山文化と記述されており、また李権生「後岡文化の編年と類型」（『考古学研究』第 40 巻第３号 1993 年）とも、概念設定が異なる。

[38]千葉基次「遼西地域における夏家店下層文化－夏家店下層文化考・１－」『考古学雑誌』第 71 巻第１号 1986 年

千葉基次「燕南地域の夏家店下層文化－古治・劉李店文化－夏家店下層文化考・２－」『研究論集』XⅢ 1994 年

[39]韓建業 楊新改「王湾三期文化研究」『考古学報』第１期 1997 年

[40]高天麟「黄河流域龍山時代陶鬲研究」『考古学報』第４期 1996 年

[41]蔣志龍「釜形斝研究」『考古与文物』第４期 1995 年

[42]煮沸具においては、実足の鼎が主体的な地域である。

徳留大輔「中国新石器時代河南中部地域の土器から見た地域間交流－王湾三期文化の形成過程－（上）（下）」『古代文化』第５５巻第５号第６号 2003 年

[43]宋建忠「山西龍山文化的類型和分期」『文物季刊』1993 年

[44]前掲註 43 に同じ。

[45]槙林啓介「中国新石器時代甑の基礎的研究－黄河・長江流域を中心として－」『先史学考古学論究』Ⅳ　2003 年

[46]高天麟「黄河流域龍山時代陶鬲研究」『考古学報』第 4 期 1996 年

蒋志龍「釜形斝研究」『考古与文物』第 4 期 1995 年

第三節　蒸具からみた食文化体系とその変容－蒸具の多種化－

はじめに

穀物調理には、煮る、炊く、蒸すなどの方法があり、それらは調理具である煮沸具や蒸具を利用して行われる。新石器時代の煮沸具は、基本的な道具として地域的にも時期的にも普遍的に備わる[1]。しかし、煮沸具だけでなく甑などの蒸具も存在することから、蒸すことも食文化体系のなかの一要素であることがわかる。そこで、本節では蒸具を分析することで食文化体系の様相を明らかにしていく。

ところで、ここでは、蒸具の呼称を用いる。蒸器は文字通り器などそのもの単体をさす意味が強い。それに対して、蒸具は機能・用途の意味をも内包する。蒸すことは、煮沸部と対象物を入れる甑部とが必要であり、それを一括して蒸具と呼ぶことにする。

１．蒸具研究略史と目的

１．１．研究略史

蒸具の研究は、現在にいたるまでほとんどみることができない。戦前、浜田耕作は東亜考古学会の貔子窩遺跡[2]における発掘調査の成果をもとに、鬲の上に甑を載せることで甗へ変化したことを想定した[3]。これは、古代中国における鬲の重要性を視点の背景に持ちながら、甗と呼ばれる、蒸すための器種が新石器時代にその初現を求めることができることを実証したものである。その後、中国人研究者による考古学研究が活発になり、多くの発掘調査の成果から新石器時代に農耕が主体的に行われていたことが具体的に明らかになっていくとともに、甑や甗などの資料も増加した。その間、時折言及されることはあったが[4]、概して蒸具として認識されながらも、その存在の有無にとどまったままであった[5]。積極的に考古学的研究を行ったのは、施米克の概括的な論考[6]のみである。個別の研究はなおも低調である[7]。各地域の土器編年研究に分析対象のひとつ

として挙げられる程度であった。甗については、袋足土器（鬲、斝、鬻、甗など）は先史・古代中国を代表する土器であり、鬲や鬻同様に論じられなければならない対象でもある[8]。

このように、蒸具の文化的な位置づけや食からのアプローチによって農耕文化を論じる段階にいたっていないばかりか、個別の考古学的研究も立ち遅れた状況である。そこで、第一節と第二節で甑と甗について分類を行い、出土分布とその変遷に関して基礎的な様相を明らかにしたところである[9]。

１．２．目的

すでに記してきたように、新石器時代における蒸具の様相を解明することが目的である。新石器時代の農耕は、黄河流域と長江流域とでは栽培穀物が異なることは周知のとおりである。この栽培穀物の相違が食する過程において調理具にどのように反映されているのかまだ明らかになっていない。穀物遺存体の出土時期から、両河流域それぞれに農耕が発生・発展したと考えられているが、調理する道具も同時にみていく必要がある。穀物には、イネ、アワ、ヒエ、キビなどがあるが、蒸具を利用して蒸すことが稲作文化に関係するものなのか、アワ、ヒエなどの雑穀作（畑作）文化に関係するものなのか、明らかにすることも必要である。

ただし、こうした課題については以下のような問題がある。コムギは、粒食では消化不良になり、粉食にせざるを得ない性質がある。しかし、それ以外の穀物それ自身の性質と調理法とに必然的な相関はない[10]。もちろん、穀物によっては不可能な食べ方もあるが、実際の考古資料からでは、それを特定するのは困難である[11]。ほかに調理法の類推には、民族・民俗例を参考にする方法がある。台湾民族例では、モチ性アワはハレのとき蒸して食べる。日本列島でも、餅にするのはモチ性アワである。以前、阪本寧男は、東アジアの雑穀類のウルチ性、モチ性の別を分布図にして作成した際に、近代・現代では、中国華北はウルチ性アワが卓越しており、モチ性アワは朝鮮半島、日本列島、台湾などの地域に主に分布する。このことから、華北でのモチ性のアワの有無を論議することはできないことは承知しているが、この事例に示された意味は考慮してお

くべきであろう。民族例や民俗例を参照すると、蒸して食べる場合、ハレのときにモチ性のものが利用されることが多い。しかし、ウルチ性であっても粉にしたものを団子状にして蒸して食する場合もあり、蒸具の有無がそうしたウルチ性、モチ性の違いを反映しているとはただちに言うことはできない。それ故、民族例などを羅列的に参照し、民族考古学的に穀物利用における蒸具のあり方を類推するよりも、新石器時代の考古資料をまず把握することから始める必要がある。

こうしたことを念頭において、実際の考古資料である甑や甗とその研究史をみると以下のことが問題点としてあげられた。前述のとおり、とくに中国考古学においては、ほとんど研究対象として扱われてこなかった研究史である。また、各報告書での報告は、甑でないものも含まれていたり[12]、長江下流域の甗は鼎として報告されていたり、また甑と鼎が組み合わさって出土したものを甗として報告したりと、用語と資料とが符合しない場合がある。このことは、考古資料としての甑や甗と、機能や用途を表す甑や甗とが一致していないのであり、基礎的な考古学的分析が不十分であることが原因にあるといえる。このことから、前節までに甑や甗を個別に基礎的分析を行ったのである。

これをうけ、本節では、甑や甗を総括的に蒸具として扱い分類を行う。甑は煮沸具の上に置いて使用するため、その煮沸具と組み合わせた状態で蒸具として捉える。その後、各地域の蒸具とその組成の時期的な変化を明らかにすることで、新石器時代における蒸具組成などの様相を明らかにし、食文化体系の地域性とその変化を検討していくことにする。しかし、蒸具とその組成がそのまま穀物利用を反映しているか、さらに多角的な検討が必要であり、ここではまず蒸具組成の時期的変遷の意味について検討することにしたい。

１．３．甑と甗の研究

以下の分析の前提となるため、甑と甗の基礎的な様相を再度確認しておきたい。

甑は、容器を成形後、底部などに蒸気孔を穿孔する「有孔型甑」と、はじめから底をつくらず筒状に胴部を積み上げ成形していく「筒型甑」との２つに大

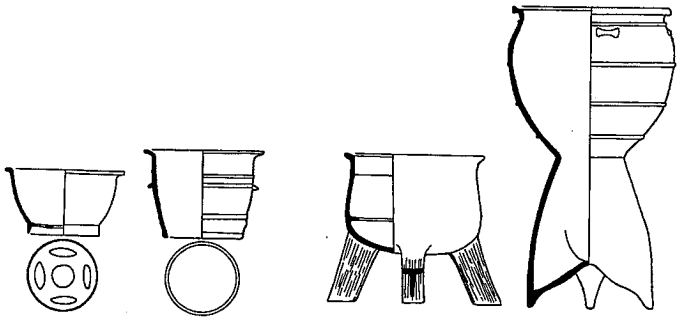
別することができる（第39図）。有孔型甑は、蒸気孔形態と蒸気孔位置からさらに細分し（第 2 図）、地域性や時期性の強いものがあることがわかった（第18図～第24図）。詳細は後述するが、有孔型甑と筒型甑とに区分できたことをまずおさえておきたい。ところで、蒸気孔がひとつのもの（蒸気孔形態 I 類）は、筒型甑に似るが、両者は製作方法が異なることで区別され[13]、出土分布にも関係がみられなかったことを付け加えておく。

甗は、一体型甗と結合型甗に大きく分類できる（第39図）。一体型甗は、長江下流域の太湖周辺、いわゆる崧沢文化・良渚文化の遺跡から主に出土する。器形は変化することなく、既存の鼎を利用して製作され続ける（第29図）。一方、結合型甗は、長江下流域の筒型甑や一体型甗との関係のもと、良渚文化期・大汶口文化晩期に出現し、その後、黄河下流域での山東龍山文化期では袋足甗に変化する。ほぼ同時に、河南地域さらに山西西南部の陶寺文化や游邀文化の遺跡にまで拡がる。地域間で型式学的に組列が組めないことや、地域によって鬲や斝の製作方法と関係が深いことから、それぞれの地域で独自的に製作され成立したことがいえる。しかし、この時期に広域的に結合型甗という共通の器種・形式をもつにいたったことを指摘しておきたい（第38図）。

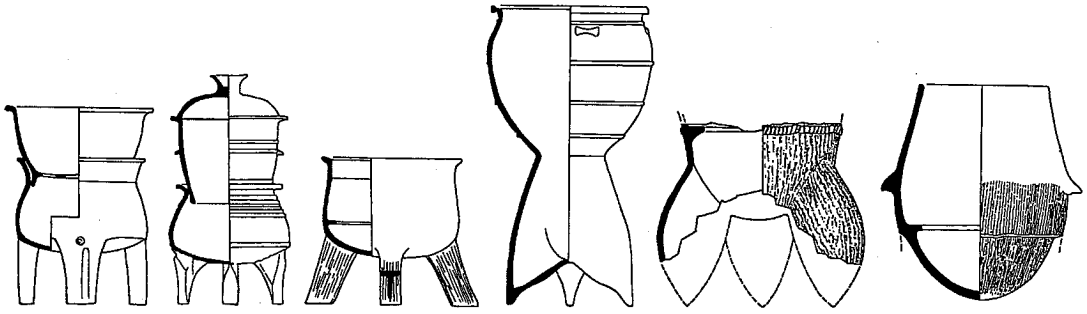
2．蒸具の分類

蒸具の構造を中心として分類を行う。甑は煮沸具と組み合せて使用するものであるから、甑と煮沸具[14]のセット関係で蒸具として扱い、ほかの蒸具である甗と一緒にして蒸具の分類を行う。甑と煮沸具とがセットになる蒸具は、両者は別々に製作され、かつ分離することができるため分離型蒸具とし、甗は甑部と煮沸部が一体となっているため、一体型蒸具と大別できる。また、蒸具使用時にはスノコ[15]を敷いて対象物を置くことが必要になるものもある。スノコ支えの有無をみることで、スノコを要するか否か区分する。つまり、スノコ不要タイプとスノコ必要タイプとがあることになる。

甑を有孔型と筒型に大別したが、このことは、使用法の相違にかかわり、構造が直接分類の指標として有効となる。また、甗の分類では、同様にその構造



第 39 図　甑と甗の分類



A類　B類　C類　D類　E類　F類

第 40 図　蒸具の分類

第１表　蒸具の分類

分類	構造1	構造2	スノコ	従来の認識	
A類	分離型	有孔型甑＋煮沸具	不要	甑	甑＋煮沸具で鼎式甑、甗などの呼称あり。
B類	分離型	筒型甑＋煮沸具	必要	甑	甑＋煮沸具で鼎式甑、甗などの呼称あり。
C類	一体型	一体型甗	必要	甗	鼎として分類、あるいは鼎式甗の呼称
D類	一体型	結合型甗	必要	甗	
E類	一体型	鬲(斝)内面に突帯	必要	鬲	突帯付きのものを、とくに分類していない。
F類	一体型	釜灶内面に突帯	必要	釜灶	突帯付きのものを、とくに分類していない。

から、結合型甑と一体型甑に分類を行った。これは、系譜が異なり、独立した蒸具として捉えることができたため、本分類にそのまま加えることにする。

蒸具を以下のように分類することができる。

A 類蒸具…分離型蒸具…有孔型甑＋煮沸具

B 類蒸具…分離型蒸具…筒型甑＋煮沸具

C 類蒸具…一体型蒸具…一体型甑

D 類蒸具…一体型蒸具…結合型甑

さらに、「釜灶」と呼ばれる、釜や罐などの煮沸具と移動式カマド（灶）が一体となった器種があるが、山西省西南部の限られた地域の釜灶には、煮沸部内面に突帯が付き、スノコを載せることで蒸具としても使用できるものがある。また、同地域の斝形土器[16]にも同様に内面に突帯を施し、スノコを載せて蒸具としても使用できるものがある。これらをそれぞれ E 類蒸具、F 類蒸具とする。本節の分類と従来の認識との比較を表に示している（第 1 表）。有孔型甑と筒型甑は、使用法も異なるもので、明確に区分することができる。結合型甑は、筒型甑と煮沸具を組み合せたときの構造に関係をもって出現することから、一体型甑とは系譜上区別されるべきである。一体型蒸具には、それ自体スノコの機能をもつ部位はなく、スノコ必要タイプのみが存在することになる。このほかに釜灶などにも蒸具と考えられるものがあることがわかり、これらを含めると、6 タイプの蒸具が分類できることになる（第 40 図）。それぞれの使用法は、以下のように説明することができる。

A 類蒸具…煮沸具の上において、使用する。甑底部がスノコの役目を果たす。必要によっては、さらにスノコを敷いても構わない。

B 類蒸具…煮沸具の上において、使用する。つつぬけになっているので、スノコを置く必要がある。

C 類蒸具、E 類蒸具、F 類蒸具…甑部と煮沸部との境の突帯にスノコを置き使用する。

D 類蒸具…甑部と煮沸部の境のくびれにスノコを置き使用する。（くびれに、突帯を施したものもある。）

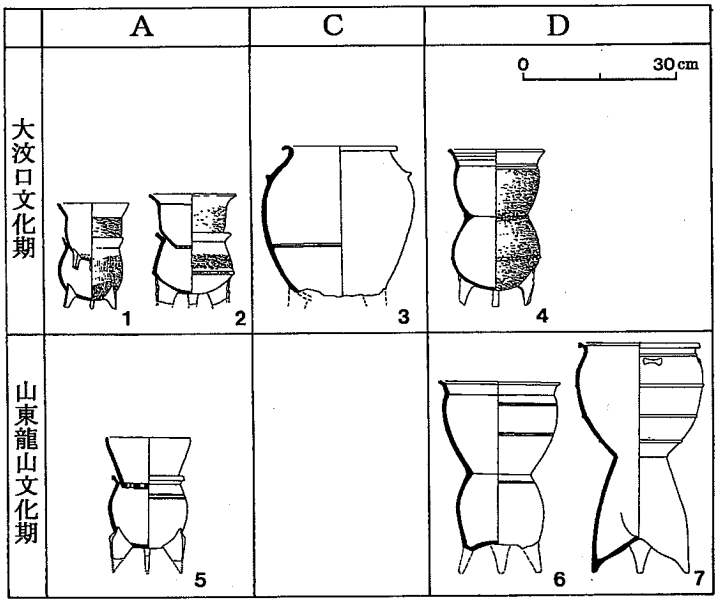
3．各地域の蒸具とその組成

ここでは、先の蒸具分類にしたがって、各地域の様相をみていくことにする。まず、時期ごとに蒸具を概述する。明らかになった蒸具の関係を地域における蒸具組成とみなし、その特徴を述べる。また、A類蒸具、B類蒸具の煮沸具については、墓葬、灰坑、住居址など一括性の高い共伴資料を選び出し、確実に組み合わさるセット関係を抽出しながら、同時に概観していくことにする。

3．1．黄河下流域（第41図）

後李文化期・北辛文化期には蒸具の出土例はない。大汶口文化期に、A類、C類、D類蒸具の3種類が出現し、A類、D類は山東龍山文化期でも存続する。現在までにA類、D類蒸具の出土例は大汶口文化晩期を遡るものがなく、土製の蒸具については、この3種がほぼ同時に出現することになる。しかし、A類蒸具が他地域において普遍的なあり方をみせることから、この地域においてもさらに遡る可能性はあると考えられる。

大汶口文化期に出現するA類蒸具の有孔型甑は、2種類ある。平底のものと、丸底に足がつくものである（第41図1・2）。足がつくものでも、足の長さは短く、開脚度も小さい。共伴例から煮沸具に収まることがわかり、実用できることには問題ない。山東龍山文化期でも煮沸具は鼎が基本であり、この地域のA



第41図　黄河下流域蒸具の変遷

1．尉遅寺遺跡(H42)　2．尉遅寺遺跡(F31)　3．楊家圈遺跡(包含層)
4．尉遅寺遺跡(M203)　5．程子崖遺跡(包含層)　6．鄒家庄遺跡(H131)
7．尹家城遺跡(H48)　(Scale＝1/15)

類蒸具の煮沸具は鼎が使用され続ける（第41図5）。C類は一時的に出現する蒸具と思われる(第41図3)[17]。

D類蒸具のこの地域の初現である山東省尉遲寺遺跡出土例（第41図4）や同省建新遺跡出土例などは、長江下流域のD類蒸具（第44図8）に類似する。尉遲寺遺跡では、多くの土器蓋葬に用いられている。

山東龍山文化期に入ると、D類蒸具の出土例は急増するし、しかも独自の形態変化をする。とくに煮沸部の形態が、袋足へ変化するのであるが(第41図6・7)、その製作技法においては多くの課題が残る。A類蒸具の出土例が極端に少ないことからすると、D類蒸具が蒸具の主体となり盛行する地域といえよう。

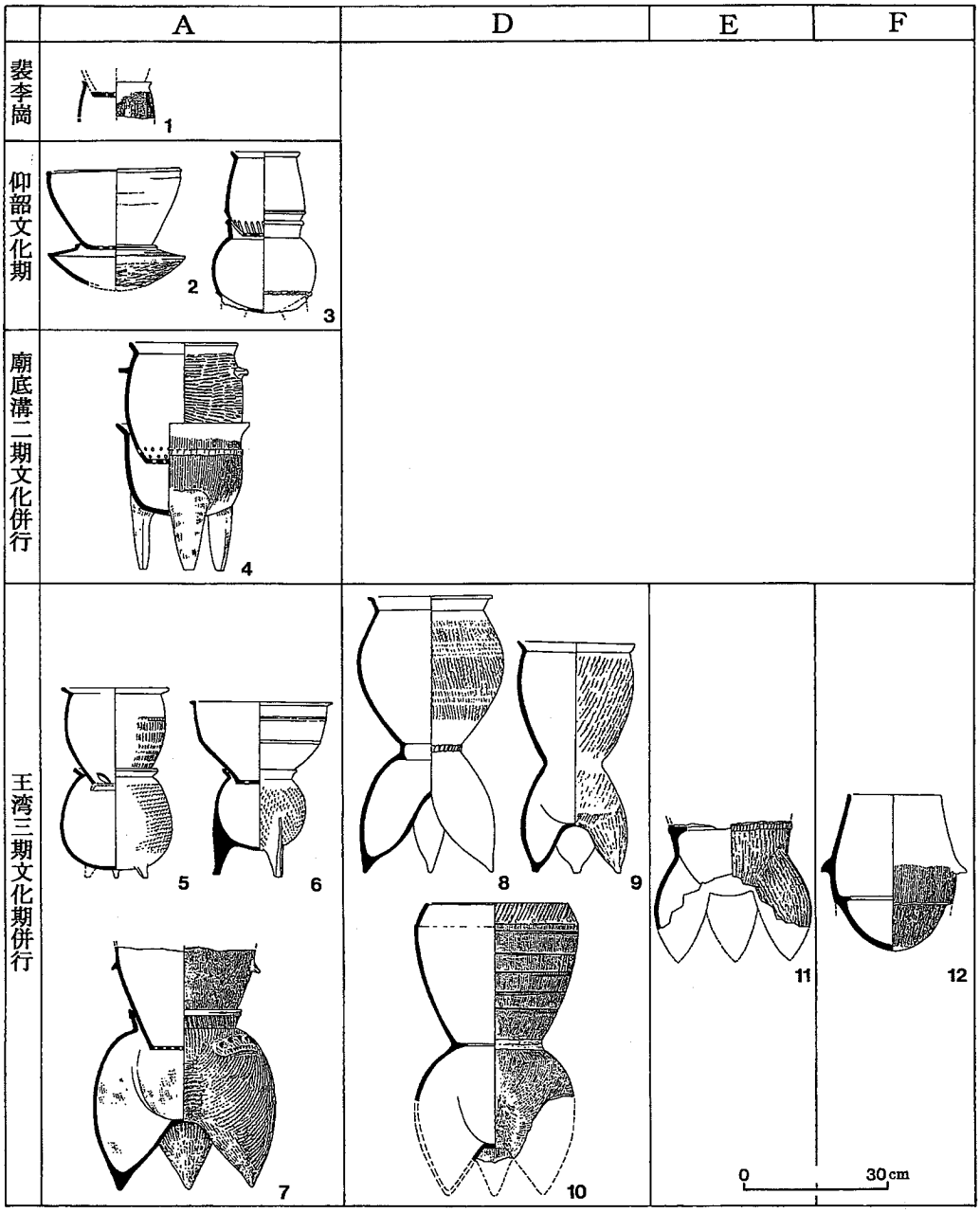
ところで、長江流域を除いて、蒸具を副葬する地域はこの黄河下流域のみである[18]。とくに山東龍山文化期になると、D類蒸具は普遍的に副葬される。

3．2．黄河中流域（第42図）

裴李崗文化期の甑には、三足鉢を焼成後、穿孔したものがある。河南省馬良溝遺跡H1出土の煮沸具には罐があるが、三足鉢の足があたりうまく機能しない。このように、甑か否かについては検討の余地を残す。

一方で、同省賈湖遺跡出土甑のなかに、平底土器底部に棒状工具で突き刺して穿孔した小孔をもつものがある。蒸気孔形態は、B類とC類に分類できる。これらは刺突による穿孔で、のちに出現するB類やC類と系譜的につづくものではない。工具の形状と使用法からは、刺突による無数の蒸気孔を底部一面に施す蒸気孔形態A類へとつづくものと考えられる[19]。H19では、罐形鼎が共伴する。外面に篦画文が施された夾砂紅褐陶である。この口径と甑底部とが整合する。H36でも、罐形鼎が共伴している。同遺跡の鼎には、ほかに盆形鼎、鉢形鼎、釜形鼎があるが、前二者は、口が開いており、甑を載せるのには適さない。釜形鼎は、小型すぎる。このことから、罐形鼎が甑とセットとなると想定できる（第42図1）[20]。つまり、A類蒸具がこの時期、出現したことになり、現在、中国における最古の蒸具といえる。ただし、確実に蒸具といえる資料は、同遺跡出土例のみである。

仰韶文化期や廟底溝二期文化併行期でも、蒸具はA類のみである。セットに



第 42 図　黄河中流域蒸具の変遷

1　賈湖遺跡(H19)　2．西陰村遺跡(H39)　3．西山遺跡(H1452)　4．東関遺跡(H252)
5．王城崗遺跡(H291)　6．王油坊遺跡(H29)　7．喬家溝遺跡(H１)　8．点軍台遺跡(包含層)
9．後岡遺跡(H50)　10．喬家溝遺跡(H１)　11．東下馮遺跡(H240)　12．東関遺跡(H198)
(Scale＝1/15)

なる煮沸具には、釜、釜形鼎、鼎、罐などが想定できる(第42図2～4)。出土例が少ないこともあり、調理具における蒸具の比重に関しては未だ検討の余地が残る。

王湾三期文化併行になると、新たな蒸具が出現する。D類(第42図8～10)、E類(第42図11)、F類(第42図12)である。しかし、その出土分布域には偏りがある。D類蒸具、すなわち結合型甗は、太行山脈東麓の後岡二期文化、山西省域の陶寺文化や游邀文化、河南北部の鄭洛地区付近の王湾三期文化に主に出土する。それぞれの文化域における形態などの相違はすでに述べたとおりであるが、D類蒸具の分布の拡がりは広域的な共通性を強く表すものとして理解できる。E類は、山西省東下馮遺跡[21]に1例、F類は山西省陶寺遺跡、同省龍王崖遺跡、同省東関遺跡など山西省西南部にのみ出土する。きわめて小地域に限られる蒸具である。釜灶は廟底溝二期文化期から出現している器種であるが、筆者は甗と関係してF類も出現すると考えている。

A類蒸具も、存続している。セットになる煮沸具をみると、小地域ごとに独自の器種を選んでいる(第42図5･6)。これらの詳細は別稿にゆだねるが、概して鼎を煮沸具にする地域と鬲を煮沸具にする地域に大きく分かれる[22]。

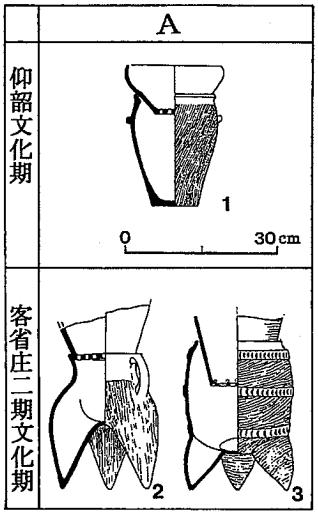
また、煮沸具自体にはほかに罐、罐形斝、釜形斝などがある。罐形斝は、河南省三里橋遺跡H2112の甑との共伴例があり、A類蒸具の煮沸具としても使用されたと想定できる。釜形斝は灰坑などに共伴する甑があるが、釜形斝の口縁部形態とサイズから判断して甑を載せることはできない。このことは、逆に釜形斝が甑とセットになる蒸具にはならないことを意味し、ほかの用途を想定することができる。

各蒸具は、遺構内で共伴する事例はないが、遺跡共伴例が多い。2種類から4種類の蒸具が併存して用いられたことになる。

3．3．渭水流域(第43図)

新石器時代、一貫してA類のみが存続する。有孔型甑の蒸気孔形態では、他地域から影響を受けることはないが、客省庄二期文化期の陝西省蔡家河遺跡出土例など蒸気孔位置Ⅱ類をもつものがある。

煮沸具を通史的にみると、仰韶文化期では罐がセットになる（第 43 図１）。また、同省福臨堡遺跡では、H126 から、釜灶[23]が共伴していることから、甑は釜灶の上に載せて使用したことも想定できる。廟底溝二期文化期に入ると、罐に加えて、鼎、罐形斝が出現し、客省庄二期文化期では、鬲と罐形斝が主体となる。これら煮沸具と共伴する事例はないが、甑底部と鬲や罐形斝の口縁部形態やサイズから、セットになると考えられる（第 43 図２）[24]。ただし、渭水流域にも釜形斝が存在するが、黄河中流域と同様、甑が載ることは物理的に不可能である。



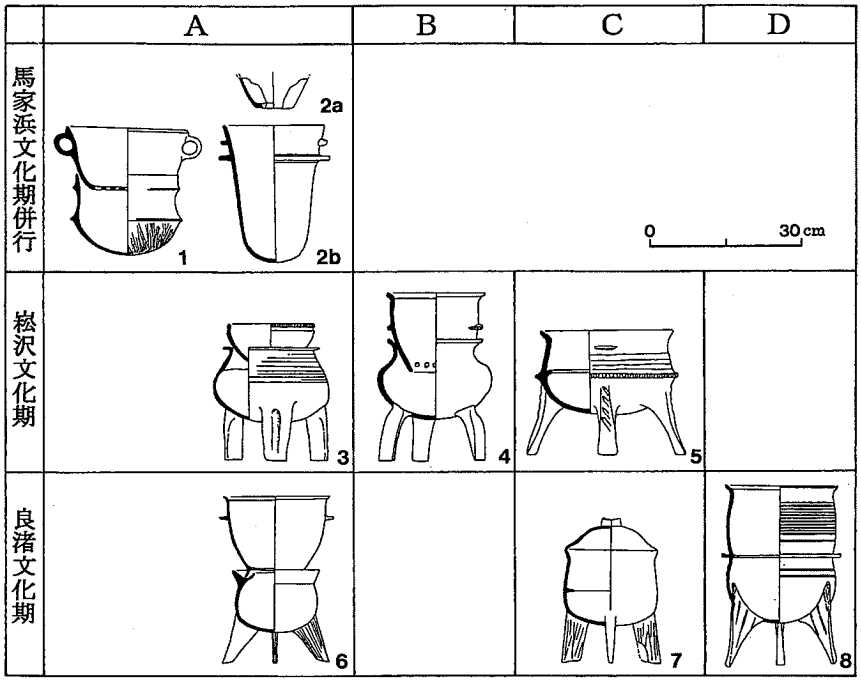
第 43 図　渭水流域蒸具の変遷
1．姜寨遺跡(H239)　2．康家遺跡(包含層)
3．蔡家河遺跡(H29)　(Scale＝1/15)

蔡家河遺跡 H29 では、A 類蒸具とともに、鼎足が出土している。形態から黄河中流域からの外来のものと考えられる。また、A 類蒸具は、蒸気孔位置Ⅱ類の有孔型甑であることからも、他地域との関係をみることができる。この地域の煮沸具には、鼎は組成されないことから、蒸気孔位置Ⅱ類の有孔型甑と鼎とのセット関係から黄河中流域との関係を知ることができる。しかし、H29 には、罐形斝も共伴しており、甑を上に載せることもできる(第 43 図３)。

３．４．長江下流域（第 44 図）

馬家浜文化期併行ではＡ類蒸具（第 44 図２）のみであったが、崧沢文化期併行よりＢ類（第 44 図４）、Ｃ類蒸具（第 44 図５）、良渚文化期よりさらにＤ類蒸具（第 44 図８）が加わる。Ａ類蒸具やＢ類蒸具の煮沸具は馬家浜文化期では、突帯付弧腹釜や突帯付罐が用いられるが(第 44 図２)、崧沢文化期からは鼎のみがセットになる。墓に副葬されることが多く、煮沸具と筒型甑と蓋が組み合わさった状態で出土する。筒型甑の口縁部と蓋の縁部に貫通する孔があるものがあり、甑と蓋の密封性を高めるための紐を通す孔と考えられる。

筒型甑には、スノコ支えがあるものとないものとがある。前者には、底部内



第 44 図　長江下流域蒸具の変遷

1．河姆渡遺跡(包含層)　2a．圩墩遺跡(包含層)　2b．草鞋山遺跡(包含層)
3．綽墩遺跡(M16)　4．草鞋山遺跡(M203)　5．双橋遺跡(H 1)
6．匯観山遺跡(M4)　7．福泉山遺跡(M109)　8．城頭山遺跡(H4)
(Scale＝1/15)

側に突帯状の張り出しがつく。後者には、支えとなるものが全くないものと胴部最下部に一周する孔があり、そこにスノコ支えを挿入するものなどがある。C類蒸具は、既存の鼎を加工して蒸具にしたものである。

崧沢文化期より出現する蒸具の出土分布には、地域性が見出せる。B類蒸具の出土は主に安徽省南部の薛家崗文化の遺跡に集中する。太湖周辺・杭州湾北岸の遺跡では、江蘇省草鞋山遺跡、浙江省呉家埠遺跡からの出土をみるのみである。C類蒸具は、いわゆる崧沢文化・良渚文化の遺跡から出土し、他地域へは拡大しない。D類蒸具は、太湖西側から南京付近の地域にのみ出土する。太湖周辺・杭州湾北岸では、A類、B類、C類の3種類が併存することになる。しかし、一遺跡内でこれらが共伴する事例がなく、遺跡ごとに用いる蒸具が異なっており、これらを蒸具組成としてみることはできない。出土数からみると、崧沢文化期では、A類、B類、C類の順に、6遺跡、2遺跡、7遺跡とA類とC類がほぼ均衡するが、良渚文化期になるとC類蒸具が蒸具出土の 15 遺跡中 12 遺跡と圧倒的になる。また、A類蒸具が出土するのは太湖南側から杭州湾北

岸にかけての地域のみになり、C類蒸具が卓越する。

このように長江下流域では、崧沢文化期併行から多くの蒸具が出現するようになるが、それらに地域性があると同時に、A類蒸具も含めても遺跡内で共伴することはないことが特徴として挙げられる。

ところで、杭州湾南岸地域、すなわち河姆渡文化の遺跡が分布する地域の蒸具は、上記とは異なる。A類蒸具のみが存続する（第44図1）。河姆渡文化が独自的な要素が強い文化であるように、蒸具に関しても同様と思われる。

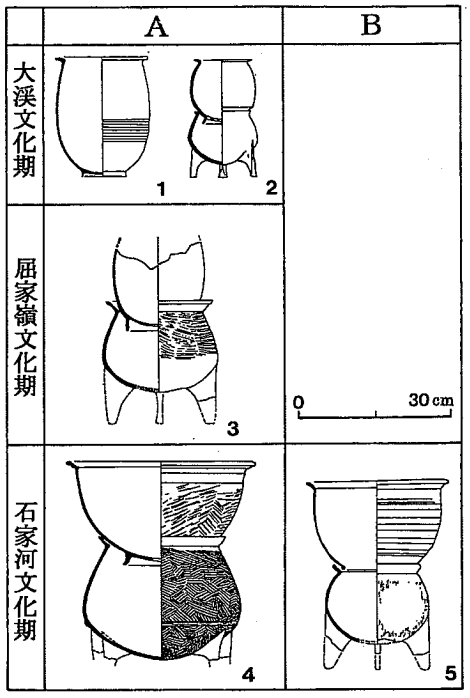
3．5．長江中流域（第45図）

蒸具は大溪文化期よりA類蒸具（第45図1・2）が出現し、石家河文化期になりB類蒸具（第45図5）が加わる地域である。

B類蒸具の筒型甑は、長江下流域から伝播した筒型甑を盆型土器の製作技術を応用して製作したものである。出土遺跡には、湖北省肖家屋脊遺跡、同省白廟遺跡（第45図5）などにみるが多くはない。

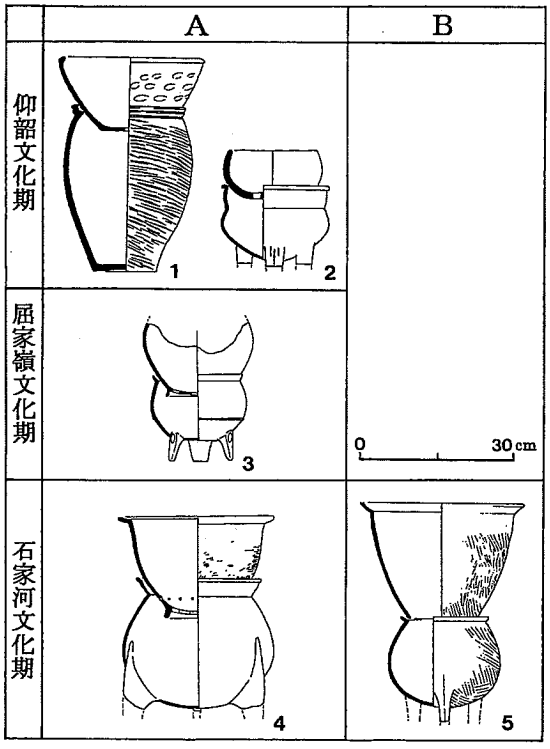
蒸具の主体はA類蒸具にある。有孔型甑をみると、蒸気孔形態D類がほとんどを占め、地域性が際立つ。セットになる煮沸具であるが、屈家嶺文化期以降、煮沸具の主流が鼎になると、墓や灰坑からの共伴例も多くなりセット関係とすることができる。ただし、大溪文化期では、検討の必要がある。湖北省螺蛳山遺跡（第45図2）、同省関廟山遺跡、湖南省三元宮遺跡の墓では、有孔型甑に共伴する煮沸具はすべて鼎である。それらはすべて明器であり、実用煮沸具では鼎ではなく、罐や釜である。A類蒸具の実用煮沸具には、これら罐や釜が使用されたと考える方が妥当であるが、逆に副葬鼎の意義も検討する必要があろう。

現在のところ、蒸具出現に関しては検討すべきことがある。すでに稲作が開始されていたとされる彭頭山文化や城背溪文化・皂市下層文化では、蒸具は出土していないことに加え、大溪文化期のどの段階で蒸具ここでは有孔型甑が出土するのかが問題である。大溪文化における最も遡る資料は、大溪文化晩期の出土例である。前述のように、コメと蒸具の必然性は立論段階では関係ないことも考慮に入れると、他地域からの影響も考える必要がある。出現期の大溪文



第 45 図　長江中流域蒸具の変遷

1．関廟山遺跡(包含層) 2．螺蛳山遺跡(M3)
3．肖家屋脊遺跡(H85) 4．肖家屋脊遺跡(H434)
5．白廟遺跡(包含層)　(Scale＝1/15)



第 46 図　漢水上中流域蒸具の変遷

1．龍崗寺遺跡(H174) 2．下王崗遺跡(F26,包含層)
3．青龍泉遺跡(包含層) 4．青龍泉遺跡(包含層)
5．下王崗遺跡(H123,H339)　(Scale＝1/15)

化晩期は湖北省東部から安徽省南部にひろがる薛家崗文化にほぼ併行するが、薛家崗文化の消長については前後の考古学的文化がわかっていないこともあり流動的である。現段階では、伝播の方向を特定するよりも、A類蒸具の出現において、有孔型甑の類似性から長江中下流域に関係があったことを想定するに留めたい。

3．6．漢水上中流域（第 46 図）

漢水流域の李家村文化期では、まだ蒸具の出現は不確定の段階である。仰韶文化期そして、屈家嶺文化期までは、A類蒸具のみが存在する（第 46 図 1～3）。石家河文化期になると、長江中流域の影響のもと、B類蒸具（第 46 図 5）も出現し、A類（第 46 図 4）とともに 2 種類存在する。

一見、蒸具は単純な変遷を示しているようであるが、この地域は長江と黄河の文化が複雑に関係し合う地域であり、とくに各蒸具の要素から若干検討して

おきたい。均県周辺地域では、湖北省均県青龍泉遺跡三期文化遺存を代表とする青龍泉三期文化や河南省淅川県下王崗遺跡のように、河南龍山文化下王崗類型と土器文化の基盤は異なる文化遺存が存在する。青龍泉遺跡出土の甑は、すべて蒸気孔形態がD類のものである。

一方、下王崗遺跡出土の有孔型甑の蒸気孔位置はⅡ類である。Ⅱ類は黄河中流域の要素である。また、筒型甑も出土することから、各蒸具の要素からみると遺跡ごとに異なる様相をみせる。このことは、土器文化類型同様、黄河と長江の文化が入り組む様相の一端の表象とみることができよう。下王崗遺跡出土甑（蒸気孔形態A類、蒸気孔位置Ⅱ類）は、頚部がすぼむ双耳罐を利用したものである。黄河中流域に主に分布する蒸気孔形態D類と蒸気孔位置Ⅱ類を備えることから、長江中流域のD類が一旦黄河中流域に入ったのちに、この地域に影響を与えたものと考えられる。ちなみに下王崗遺跡二里頭文化期出土の筒型甑は、H87出土の筒型甑に形態さらに把手の形状ともに酷似する。

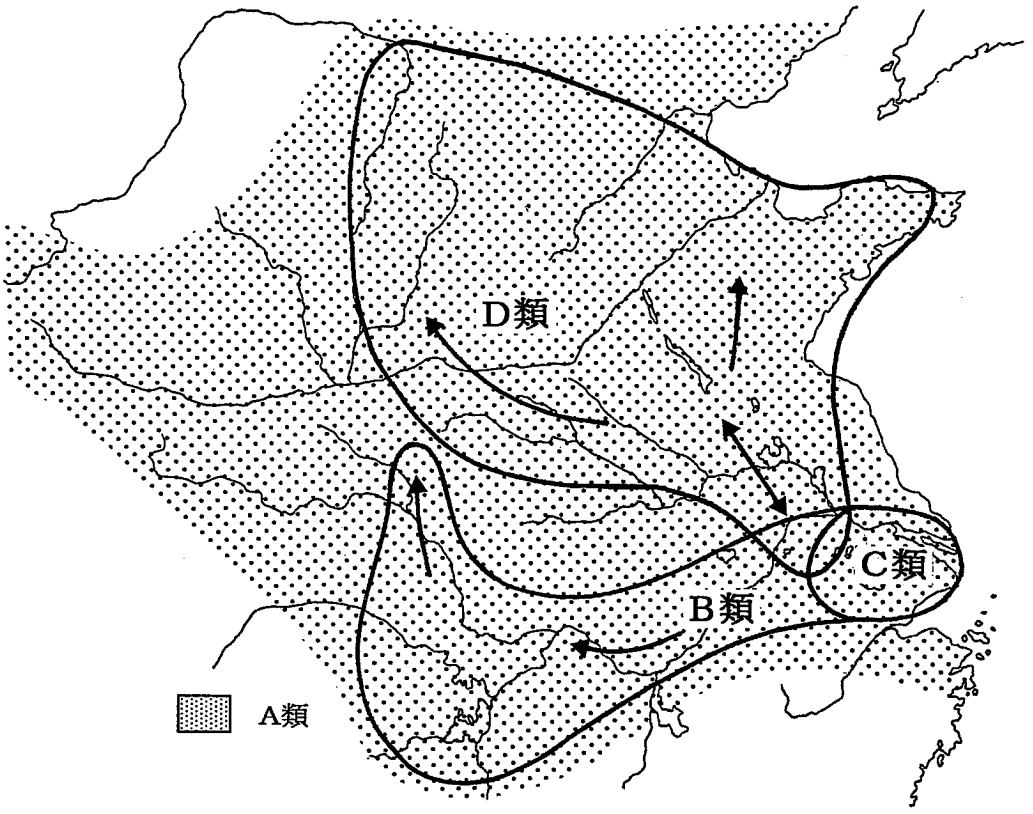
次に、以上明らかにした蒸具の様相をもとに、各蒸具の出土分布変遷の意義、蒸具組成の変化の意義について考えることにする。

4．蒸具組成からみた蒸具利用の変容

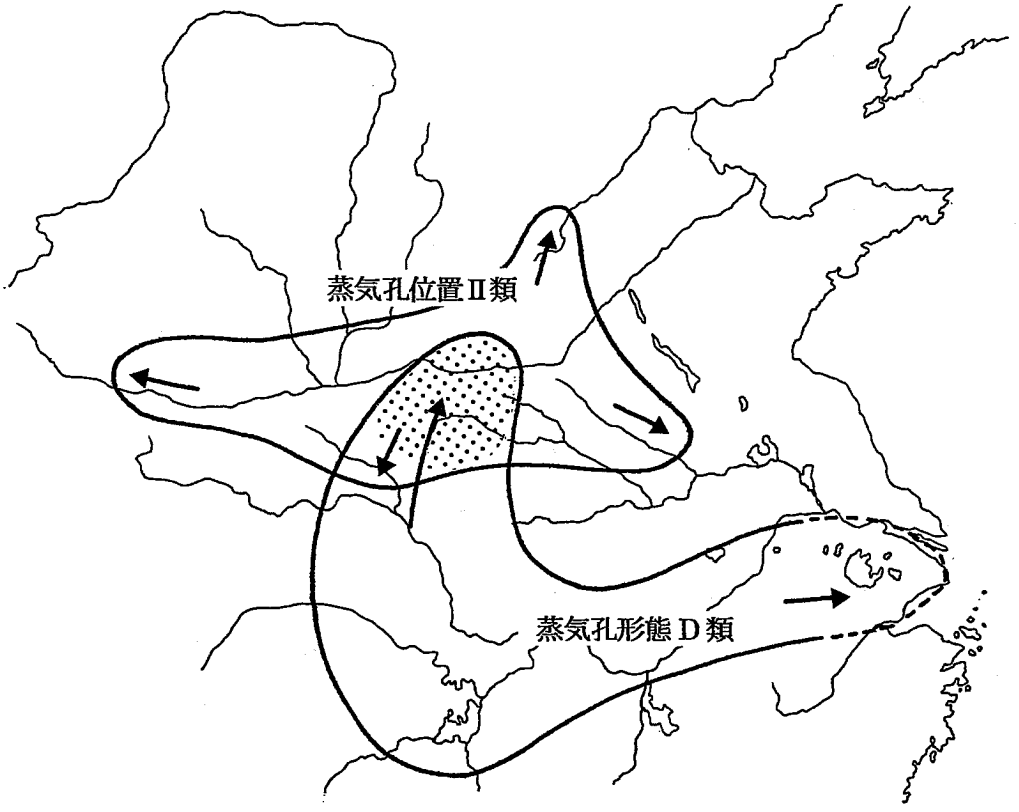
4．1．各蒸具の出土分布の特徴

まず、蒸具それぞれの出土分布の拡大について若干の検討をしておきたい。A類は、蒸具のなかで最も一般的なものである。各地域の蒸具の初現はすべてA類であり、新石器時代を通して存続する。B類は長江流域に特有なもので、長江中流域から北上し漢水上中流域にも出土するようになる。C類は、長江下流域の太湖周辺・杭州湾北岸に特有のものである。D類は、良渚文化期・大汶口文化晩期併行に黄淮平原を介して出現し、山東龍山文化期併行、黄河中下流域に広く展開するようになる。E類、F類はともに、黄河中流域の小地域に限定されたものであった。（第47図）

このなかで、他地域へ分布を拡大するものは、B類とD類である。これにつ



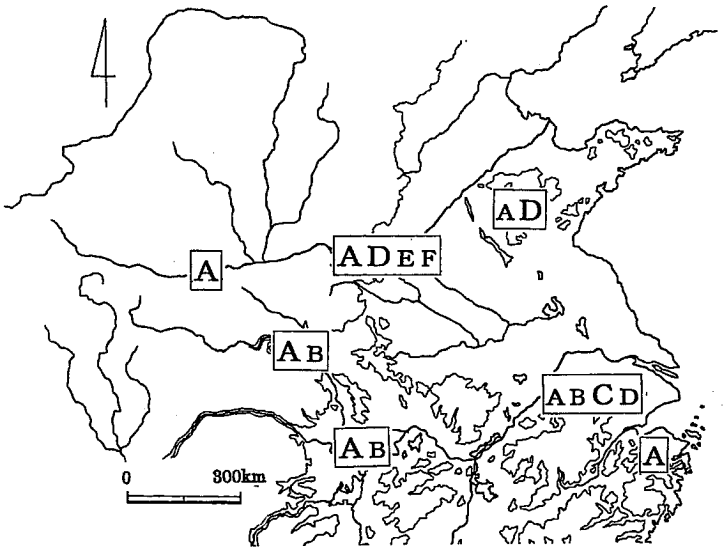
第 47 図　新石器時代蒸具の拡がり



第 48 図　有孔型甑の拡がり(蒸気孔形態Ｄ類と蒸気孔位置Ⅱ類)

(　蒸気孔位置Ⅱ類と蒸気孔形態Ｄ類をもつ有孔型甑)

いて、とくに述べておきたい。B類は長江流域すなわち稲作地帯の蒸具であることになる。このB類は漢水流域の下王崗遺跡石家河文化期に出土例があり、北限である。屈家嶺文化や石家河文化は漢水流域を遡上し拡大するといわれており[25]、この動態にひとつの表象をみることができる。一方、長江下流域のB類蒸具は、北へ分布を拡大することはない。この地域では、D類蒸具の動向が重要である。既存の煮沸具に甑部を結合させることから始まったD類蒸具（結合型甑）の初現は、長江下流域から黄河下流域までの黄淮平原一帯に出現している。良渚文化と大汶口文化との相互の関係は、これまでにも論じられてきており[26]、D類の出現も同様の背景が考えられる。その後、D類蒸具は黄河中下流域で盛行することは前に述べたとおりである。いずれにせよ、B類とD類は、長江流域に出現し、前者は長江中流域から後者は長江下流域から黄河流域へ広がっていくのである。



第 49 図　新石器時代後期の蒸具の様相

ところで、長江中流域のA類蒸具は、黄河中流域まで広がっていく。正確には、蒸気孔形態D類の有孔型甑が黄河中流域で採用される。蒸気孔形態D類は、蒸気孔位置Ⅱ類をもつ有孔型甑（第 48 図の網目）にも融合し、のちに黄河中流域特有の有孔型甑へと成立する。B類蒸具以外に、長江中流域から黄河流域へ影響を与えた蒸具として強調しておく。（第 48 図）

逆に、蒸具のなかで、黄河流域・渭水流域すなわち雑穀作（畑作）地帯から長江流域へ拡がる蒸具はみることができない。また、黄河・渭水流域のなかは、地域ごとに蒸具組成は異なる。

４．２．蒸具組成の類型と画期

第３項でみたように、ある画期をもって蒸具の種類が増加しており、蒸具組成が変化することがわかる。つまり、蒸具の多種化が起こることになる。その変化を簡略化すると、以下のようになる。（第２表）

黄河下流域…（Ａ類）→Ａ類＋Ｄ類（大汶口文化後期）

黄河中流域…Ａ類→Ａ類＋Ｄ類＋Ｅ類＋Ｆ類（王湾三期文化期併行）

渭水流域…Ａ類

長江下流域…Ａ類→Ａ類＋Ｂ類＋Ｃ類（崧沢文化期）＋Ｄ類（良渚文化期）

長江中流域…Ａ類→Ａ類＋Ｂ類（石家河文化期）

漢水上中流域…Ａ類→Ａ類＋Ｂ類（石家河文化期）

このように渭水流域を除いて、蒸具の種類が増加する画期があることがわかる。

蒸具組成は、一種類の蒸具だけを使用する場合をⅠ類型、多種の蒸具を使用する場合をⅡ類型と類型化できると同時に、時間的な関係でもあるから、その変化の時期を蒸具組成の画期としてとらえることができる。ただし、画期はすべての地域で時期的に併行しているわけではない。本論文では便宜上、６つに

第２表　地域ごとの蒸具の画期

渭水流域

客省庄二期	A類
廟底溝二期	A類
仰韶	A類
白家村	(A類)

黄河中流域

王湾三期併行	A類・D類 E類・F類
廟底溝二期併行	A類
仰韶	A類
裴李崗併行	A類

黄河下流域

山東龍山	A類・D類
大汶口	A類・ C類・D類
北辛	
後李	

漢水上中流域

石家河	A類・B類
屈家嶺	A類
仰韶	A類
李家村	(A類)

長江中流域

石家河	A類・B類
屈家嶺	A類
大溪	A類
皂市下層 城背溪	
彭頭山	

長江下流域

良渚	A類・B類・ C類・D類
崧沢	A類・ B類・C類
馬家浜	A類

蒸具未出土
蒸具不確定
Ⅰ期（Ⅰ類型）
Ⅱ期（Ⅱ類型）

地域区分をしているが、この地域はほぼ蒸具組成の変遷にも対応しており、まずはこの地域ごとに画期について考えることができよう。

4．3．蒸具組成の画期の特徴

画期は地域によって異なる場合と併行する場合とがあるものの、画期がある地域のいずれも、蒸具の種類がこれまでひとつだけのⅠ類型から、多種のⅡ類型に変化する。つまり、A類蒸具だけであったのが、A類とは別の蒸具が増えるという変化である。

蒸す機能は変わらないので、まず、用途の違いが想定できる。対象物の相違、目的の相違などが挙げられる。また、組成する蒸具の種類の多寡によって、その地域・時期における蒸す行為への比重の変化も想定される。こうしたことを念頭に、変化後の様相を検討することで考察する。Ⅱ類型は、A類蒸具に他の蒸具が増え多種化するわけであるが、どのように出現したものか、以下の２つに分類できる。

①同一地域内で出現したもの。

②他地域由来のもの。もしくは他地域との関係のもとに出現したもの。

地域ごとには、以下のようになる。

黄河下流域…C類は②。D類は②。

黄河中流域…D類は②。E類、F類は①。

長江下流域…B類、C類、D類は①。

長江中流域…B類は②。

漢水流域…B類は②。

①には、長江下流域のB類、C類、D類、黄河中流域のE類、F類がある。②には、長江中流域と漢水流域のB類、黄河下流域のC類、黄河下流域、黄河中流域のD類がある。

②のものについては、これまでの検討から他地域由来と同時に、当地の土器製作技術を用いて製作していることがわかっている。

D類の出現と展開については、第二節で述べたので簡述する。山東龍山文化期併行のD類は黄河下流域から中流域まで広くみられるようになるが、各小地

域で形態、製作技法は異なる。すなわち、黄河下流域では実足から袋足へ変化し、黄河中流域の河南北部および河南中部では斝や鬲の袋足技術を応用し、山西中南部では鬲そのものを煮沸部とした。地域ごとに在地の製作技術を背景にして独自的に成立したのである。これが黄河中下流域におけるD類蒸具の出現の特徴である。同時に、器形、製作技術はたがえても、黄河下流域から黄河中流域までの広い範囲でD類蒸具を共有したことは、共通する文化的な意味を推測させる。これを筆者は結合型甗文化圏と呼んでいる[27]。

他地域由来の蒸具を変化させ独自性をもたせたものはこれだけではない。A類蒸具の有孔型甑にも見出せる。河南地域を中心に出土する蒸気孔形態D類の有孔型甑は、長江中流域の影響を受けながらも、蒸気孔位置Ⅱ類の甑と融合することで在地性の高いものとして成立したのもこの時期である。しかし、蒸気孔形態 D 類自体がコメの調理法をも伴って黄河流域へ入ってきたとは考えにくい。イネ遺存体や籾殻などの出土分布の拡大の時期とは一致しないこと、蒸気孔形態D類とコメの調理との必然性を考えることができないと、いったことが理由である。長江流域のイネとの関係のなかで論じるよりも、石家河文化からの文化的社会的影響の一端として捉えることができよう。

長江中流域のB類蒸具についてみてみよう。石家河文化期からのB類蒸具が出現することが重要であろう。時期的にやや遅れることから、長江下流域（薛家崗文化）の影響を受けて出現したと考えられる。

両者は異なる器形である。長江下流域（薛家崗文化）のB類蒸具の筒型甑は文字通り筒状のものであるのに対して、長江中流域のものは、盆形を呈している。筒型甑が出土する湖北省肖家屋脊遺跡や同省白廟遺跡では、同形の盆形土器が共存している。薛家崗文化に筒型甑と同形の土器がないことから判断すると、技術的背景が異なることがわかる。漢水中流域に出土する筒型甑も盆形を呈する。すでに述べたように類似する土器文化を背景にもつ地域である。

さらに、こうしたあり方に加えて、筒型甑はもともとそれぞれの地域に備わる有孔型甑と異なる点があることを再度強調したい。本章で分類の要素としたスノコの問題である。筒型甑の場合、文字通り筒抜けであるために、スノコを置かなければ用を成さない。安徽省薛家崗遺跡出土の筒型甑の底部内面にはスノコを置くためと考えられる突帯がある。江蘇省草鞋山遺跡出土例の胴部最下

部には、スノコを支えるための一周する孔がある。湖北省肖家屋脊遺跡出土例の場合、盆形を呈しており底に向かってすぼまることでスノコを置くことができる。同遺跡では、スノコとして用いられたと考えられる半球上の算子も出土している。このように、スノコを置くための設備は地域により異なるものの、いずれもスノコをおかなければ機能しないものであることでは共通するし、有孔型甑とは明確に区別できるのである。

概して、このように②にみた蒸具出現の様相は、穀物利用そのものとは異なる規範のもとにあると理解できるであろう。もちろん、用途には穀物などを蒸すことが挙げられるが、由来となる地域の蒸具の有意性のもとに分布圏が変動したのではなく、文化的あるいは社会的な動態の結果としての意味が大きい現象として考える。

では、①の場合はどうだろうか。長江下流域のB類、C類、D類はいずれも他地域に来源を求めることはできない蒸具である。D類の出現は良渚文化期で、他より若干遅れる。B類は、A類のように煮沸具の上に甑を載せるものである。しかし、甑が筒状をしているため、合理的に考えると対象物を入れるのに不都合である。にもかかわらず、筒型甑を製作し続け、また、有孔型甑も併存することに意味を見出す必要があると考える。

C類はA類に限らず、形態上類似する蒸具がほかにはなく、特異である。A類やB類との関係を出土状況ここでは、墓での副葬状況からみていく。この地域では、蒸具も副葬されることが多く分析においても有効である。これは他地域ではみることができない現象である。一言でいうと、各蒸具はひとつの墓で共伴することがないことが特筆される。

普通、蒸具が副葬される場合、さらに煮沸具も副葬されることが多い。とくに蒸具がC類の場合には、ほとんどは、別にふつうの鼎が副葬されるのである。このことは、ただ煮沸のみに使用される煮沸具と蒸すために使用される蒸具の２セット必要であることが想定される。このことが、この地域の調理体系における調理具の基本的なセットと、まずいえるだろう。

いずれにせよ、煮沸具と蒸具とを副葬することは、煮ると蒸すとを別々の道具で行っていたと想定できる。C類の出現は崧沢文化期であり、そのころから、調理形態において変化が始まったといえる。C類が既存の鼎から派生した器種

であることも、調理あるいはそれ以上に文化的ななんらかの要請があったと推定できる。ただし、C類蒸具は、長江下流域それも太湖周辺のいわゆる崧沢・良渚文化範囲から外にでることはない。つまり、C類蒸具は、長江下流域の独自性の強い蒸具であることがわかる。他地域へ伝播しない理由として、C類がとくに太湖周辺から杭州湾北岸にかけての蒸具さらには調理具のなかで規範・体系だった関係のもとに存在したことを想定することができないだろうか。

蒸具の多種化は、具体的には、以上みてきたように、二つの変化のあり方があることがわかった。すなわち、同一地域内での新器種の出現、他地域由来の新器種の出現である。後者はさらに地域ごとに独自的なものに変化をもたせ成立する。食文化体系が変化したことは理解できよう。さらに、その出現には異なる要因、社会的関係の増大といったことも関連してきそうである。その検討は、蒸具だけでなく他の考古資料も含めた今後の課題としたい。

5．小結

甑と甗の基礎的分類をもとに、蒸具の分類を構造とスノコ支えの有無から行い、6つに分類した。地域ごとにそれぞれの蒸具の様相をまず明らかにした。

蒸具のうち、他地域へ拡大するものとして、B類とD類があげられる。長江中流域から漢水流域へ、長江下流域から黄河中下流域への2つの伝播ルートがあることがわかった。また、長江中流域のA類蒸具は、蒸気孔形態D類を見ることで、黄河流域へ拡大することを再度指摘した。

時間的にみると渭水流域を除いて、各地域の蒸具はある画期をもって多種化することがわかった。その変化は、一種類の蒸具を使用することから多種類の蒸具を使用することであり、それぞれ蒸具組成をⅠ類型とⅡ類型に類型化することができ、時間的前後関係にあることから、同時にⅠ期、Ⅱ期とすることができた。

類型は時間的に変化することから、Ⅱ期に増えた蒸具には、①同一地域内で出現したものと②他地域由来のものとに分けることができる。次に、これを検討することで、画期の特徴を明らかにした。Ⅱ類型出現の様相は、大まかに2つに分けることができそうである。

②を検討すると、地域間交流により、いくつかの地域を跨いで蒸具の共通性がみられた。その関係は、従来の穀物栽培領域とは無関係に形成されており、蒸具が各地域の穀物調理との関係で存在するものではないと推測できるのである。

各地域でみられる蒸具の多種化は蒸す行為に対する文化的な対応の変化つまり食体系の変化であり、新石器時代晩期の地域を跨いだ蒸具の共通性は、そうした食体系の一側面における共通性としてみることができないだろうか。さらに、それには蒸具の多種化の画期には、社会的な背景が要因と考えられるのである。

①を検討すると、墓の副葬状況などから、煮沸具に対して蒸すための道具として開発されたと考えることができ、煮沸具などを含めた調理具の体系　が変化したことを推測できる。蒸具どおしの関係は、地域的、あるいは遺跡単位の独自性、選択性として考えることができる。

このように、画期の性格には大きく２つが想定できた。とくに前者は、ほぼ時期的に併行する。いずれにせよ、蒸具の多種化は、調理体系が変化したことを表し、また画期の性格を検討することによって、当時の食文化体系自体が変容したとして理解することができる。

ところで、Ⅰ期は、各地域で様相が異なり、蒸具をもつ地域と持たない地域とがあり、持つ地域では、地域を跨いだ共通性はみられず、独自的なあり方をもっている。その性格は、Ⅱ期の性格を考慮に入れると、食物とくに穀物調理との関係のうえに存在したと想定でき、地域ごとの食文化そのものに深くかかわったあり方と解釈することができる。

おわりに－課題にかえて－

本節では、蒸具組成画期のⅡ期を中心に検討したが、Ⅰ期はさらに細分する必要がある。Ⅰ期のはじめは、蒸具出現期にあたり、Ⅱ期の蒸具組成Ⅱ類型へ変容する過程を具体的に論じることが課題である。つまり、Ⅰ期からⅡ期へいたる過渡期の存在を想定できるのである。Ⅰ期に登場した蒸具が地域性を持って成立する段階である。

その際の展望として、本章では取り上げなかった煮沸具が重要となる。蒸具が多種化する時期と煮沸具が多種化する時期とはかならずしも一致しない。たとえば渭水流域や黄河中流域ではすでに斝が出現している。つまり、煮沸具においても食文化体系の地域性と変容を検討することが次の課題である。

そのうえで、煮沸具と蒸具の関係をもあらためて論じたい。

さらに、本章の検討で、蒸具からみた食文化体系は、黄河流域と長江流域とで異なる穀物遺存体の分布と比較すると、それと完全に一致するものではないことがわかった。これは蒸具組成Ⅱ期についてさらに顕著であり、栽培穀物の違いを背景にもつ時代から、ほかの文化的な要因によって形成される時代へ移行すると解釈できると考えている。

---

1 中国社会科学院考古研究所編『新中国的考古発現和研究』1984年　文物出版社

2 東亜考古学会編著『貔子窩』1929年

3 浜田耕作「鼎と鬲に就いて」『東亜考古學研究』1930年 岡書院

4 第一節、第二節参照。

5 日本考古学では、戦後も東アジア的な視点から古代中国もしくは新石器時代の蒸具について論じている。日本弥生時代に稲作が開始されることに関して、コメの利用、調理についても大陸にその源流を求める目的があったと考える。ただし、当時と比べ、資料は飛躍的に増加したことと、中国考古学自身が作り上げてきた新石器時代研究が一定の成果を挙げてきたことから、再考を要する時期となっている。

6 施米克「論陶甑、陶甗的来源和分布」『考古學文化論集』三　1993年 文物出版社

7 小川誠「岳石文化の甗」『考古学雑誌』第74巻第3号　1989年

8 甗の袋足は、蘇秉琦や鄒衡の鬲の研究をもとに分類されているが、先行研究は時代、地域ともに異なり、甗自体の製作技法の解明は必要であろう。例えば山東龍山文化の甗は実足から袋足に変わることはわかっているが、その中間的な形態の款足の存在や技術的な系譜に関しては具体的な分析は行われていない現状がある。

9 槙林啓介「中国新石器時代甑の基礎的研究－黄河・長江流域を中心として－」『先史学考古学論究』Ⅳ　2003年

[10]穀物の種類、ウルチ性かモチ性かなどの区分と、煮る・炊く・蒸す・焼くなどの調理法が相関しないということである。例えば、ウルチ性のコメは、炊く、煮るなどのほか、粉にして蒸す・煮る・焼くなどして食すし、モチ性は、蒸して餅にするほか、蒸しておこわにもする。アワ、ヒエ、キビも同様のことがいえる。

[11]煮沸具や蒸具の存否を時間軸において考察し、調理法の変遷を論じるためには個体それぞれについて、ふきこぼれやススなどの観察から、付着物の科学的分析まで、いわゆる使用痕分析も必要となってくる。そのため、ここでは穀物と調理法との関係を論じることは問題にできない。

[12]底部に孔があるが器形からみて土鈴に分類できるもの、算子のなかでも容器状を呈するものを甑と報告しているもの、などが指摘できる。

[13]杉井健は、日本の古墳時代の甑を分類する際に、スノコ支えの有無を重要な分類要素としている（杉井健「甑形土器の基礎的研究」『持兼山論叢』1994年）。中国新石器時代の甑では、筒型甑と１孔の甑とが区分できない。また、１孔の甑、私分類ではＩ類としたものは、スノコを必ずしも必要としない程度の大きさで、日本古墳時代出土の１孔の甑とは、孔の大きさとスノコ支え部分の広さが異なっている。

[14]煮沸具の器種には様々あるとともに、地域間で器種と名称が異なることがある。本来はそれらを明確にして論を進める必要があるが、ここでは、基本的に報告書記載の用語を用いることにする。そのまま使用すると明らかに齟齬を来たすと判断する場合には、逐一註を入れることにする。

[15]前川文夫は、「スノコ（簀子）とは、甑の底に敷くものである。底が広く安定していれば簀子は必要ない。対象物は、甑布（こしきぬの）に入れてあるいはくるんでいるので、下に零れ落ちることはない。スノコは対象物を直接置く道具ではない」（前川文夫「弥生式土器のふかし形態に附随する二、三の民俗植物学的考察」『人類学雑誌』第七十一巻一号　1963年）と指摘している。よって、有孔型甑の場合、底部自身がスノコの役割を果たすことになる。日本では、スノコのほか、駒（こま）と呼ばれる木製のものを置く場合もある。ちなみに、甑布とは甑で物を蒸す時、下に敷く布の意。

[16]報告では甗としている。これは、内面に突帯が付いていることを重視したためと思われるが、器形は鬲であり、甗として扱うと齟齬を来たす。ここでは、鬲形土器と

呼称し、甑（結合型甑）とは区別する。

17山東龍山文化期にはC類蒸具の出土例はない。大汶口文化期の出土例の器形はどれも特異であり、山東龍山文化期に類似した器形がないこと、また、出土数自体も数例であることから、消滅したと考えられる。

18黄河中流域の河南省後岡遺跡や山西省峪道河遺跡に墓葬出土の蒸具（D類蒸具）があるが、これらは所謂土器蓋葬であり、副葬品ではない。

19蒸気孔穿孔のための工具と穿孔方法は、本章の分類では詳細に検討できなかった。その理由として、刺突か切り取りかは図面上では判断できないことが多くある。また、分析を進めた結果、中国全土的に把握する目的のもとでは、分類が煩雑になることがわかった。たとえば、ミニチュア土器の場合、そのほとんどが刺突による穿孔であり、甑のサイズも加味して分類を行うと分類数が非常に多くなる。実用か明器かで穿孔方法が異なることを挙げるよりも、実用でも明器でも、蒸気孔形態は変わらないことをまず重視したのである。そこで、工具と穿孔方法の問題は地域ごとに行うほうが有効と考えている。将来の課題としている。

20賈湖遺跡は、河南省南部淮河上流域の舞陽県に所在し、裴李崗文化でコメが出土する唯一の遺跡である。こうしたことも含めて、河南省中部に分布する典型的な裴李崗文化とは、異なる文化類型に属すると考えられる。ほかの文化要素として、副葬品のあり方が異なることも挙げられる。

21時期は、龍山文化晩期と報告されている。（中国歴史博物館・中国社会科学院考古研究所東下馮考古隊・山西省文物工作委員会「山西夏県東下馮龍山文化遺址」『考古学報』第1期　1983年）

22その他、煮沸具には罐や斝がある。斝のうち釜形斝は蒸具を載せることができないサイズと構造をしている。罐形斝は、河南省三里橋遺跡H2112で甑との共伴例があり、A類蒸具の煮沸具としても使用されたと想定できる。

23出土の釜灶は、釜形土器が二つ並列して備え付けられているものである。煮沸用と蒸用との用途別に使用できるもの、もしくは一度に2つの調理ができるものとして想定できよう。

24鬲と罐形斝の比率から、客省庄二期文化の文化域において類型化する論考もあり、両者が併存する場合と片方しかない場合とでは、その用途も変わってくるかもしれ

ない。(梁星彭「試論客省庄二期文化」『考古学報』第4期 1994年、秦小麗「試論客省庄二期文化的分期」『考古』第3期 1995年)

25 樊力「丹江流域新石器時代遺存試析」『江漢考古』第4期 1997年

26 欒豊実「良渚文化的北漸」『中原文物』第3期 1996年

劉恒武「中国海岱地域と太湖周辺の先史文化の大口尊」『古代学研究』161号 2003年

27 これに対して、渭水流域のA類蒸具は、有孔型甑と鬲との組合せであった。外見上、結合型甗に酷似している。鬲が卓越するこの地域では、結合型甗の影響を受けなかったのではなく、甑と鬲を結合させることをしなかったとも解釈することができる。

終章　中国新石器時代の農耕文化の形成と変容

第一節　食文化体系とその変容

ここでは、第三章と第四章で明らかにしたことを、収穫後の一連の過程として理解することを試みる。具体的には、加工調理具について時期的、地域的な特徴を明らかにし、その意義について論じる。

1．加工調理具の地域的特徴－農耕初現期の食文化体系－

第三章では、加工具のうち、磨盤や臼などを中心にして検討した。従来からも磨盤や臼などは黄河流域で卓越し、農耕文化の一要素として挙げられてきた。そのことは、今回、集成することで追認することができたが、さらに重要なことは考古学的に磨盤と一括して報告されてきた遺物は、機能の面で異なるものが内包されており、細分できることがわかった。また、これにより黄河流域内の各地域において異なる組成をもつことが判明した。つまり、渭水流域と黄河中下流域とで組成が異なるのである。また、渭水流域には黄河中流域に主に出土する、足が付く特徴的な磨盤が出現しないことも加えると、これら二つの地域では、加工具の用途が異なり、さらに磨盤に対する文化的価値観も異なっていたことも想定できる。

一方、蒸具の出現は、黄河下流域でやや遅れる。黄河下流域では、大汶口文化期の中後期ごろが初現であり、黄河中流域や渭水流域の出現の時期とは一致しない。このことは、アワ・キビなどの同じ穀物を栽培しながらも、初期の段階では調理法が異なっていたことになる。

これを類型化すると、黄河下流域、黄河中流域、渭水流域ではそれぞれ独自性があり、この３地域に大別することができる。収穫後、食するまでを考えると、アワ、キビなどの共通する穀物を栽培し食しながらも、食し方や調理法、つまり食文化体系に違いがあったことが想定できるのである。

長江流域をみてみよう。加工具は、黄河流域に類似する磨盤はあるものの、「うわいし」すなわち磨棒とのセット関係をみると、黄河流域の磨盤と同類に扱うことは難しい。基本的には長江流域は磨盤などの加工具を使用しなかったと考えてよいだろう。したがって、第二章で述べたように加工の過程では、長

江下流域の浙江省銭山漾遺跡出土例（第二章第７図 16）にみるような木杵を使用して、脱穀、精白をし、そして粒食したと想定できる。しかし、調理具である蒸具の出現は、長江下流域と長江中流域とでは、時期差があった。前者は馬家浜文化期・河姆渡文化期から、後者は大渓文化後期[1]からである。さらに、長江下流域の崧沢文化期では、はやくも蒸具の多種化が起こる。このように、長江中流域と長江下流域の調理具は、全く異なる時期的変遷を示しているといえる。同じイネを栽培しながらも、食文化体系は異なるものであったと想定できる。

以上をまとめると、加工調理具からみると今回設定した６地域で、農耕初現期の食文化体系は異なることが分かる。

その組成を以下に示してみよう。

黄河下流域…加工具（磨盤Ａ類）、煮沸具。

黄河中流域…加工具（磨盤Ａ類）、煮沸具、蒸具（Ａ類）。

渭水流域…加工具（磨盤Ａ類、Ｂ類）、煮沸具、蒸具（Ａ類）。

長江下流域…煮沸具、蒸具（Ａ類）。

長江中流域…煮沸具。

漢水上中流域…加工具（磨盤Ａ類、Ｂ類）、煮沸具、蒸具（Ａ類）?。

さて、ここまで、加工調理具に関してその出現期の各地域の諸特徴について論じたが、次に加工調理具の時間的な変化について、考えてみたい。

２．食文化体系の変容

第四章では、蒸具組成の変化を調理法の変化ととらえ、調理法の変化を食文化体系の変化と論じた。この視点を利用して、加工調理具の消長について再度検討してみたい。

加工具の出現時期に関しては、前述した通りである。次にその衰微については第三章で述べたように従来の見解のように黄河流域の仰韶文化期に完全に消滅したとはいえず、また、それに変わる脱穀や製粉のための、例えば「うす」の出現もみることはなかった。減少傾向はいえるが、別のものに転換したことを現時点では明らかにすることはできない。調理具は、煮るなどの煮沸具だけ

の時期から、蒸す調理法の出現を意味する蒸具の出現を重視することにする。

以上から、加工調理具の消長について、第三章と第四章での検討から以下のようにまとめることができる。

黄河下流域…大汶口文化中後期（蒸具の出現）

黄河中流域…裴李崗文化期から基本的な加工調理具組成は変わらない。

渭水流域…白家村文化期から基本的な加工調理具組成は変わらない。

長江下流域…馬家浜文化期併行から基本的な加工調理具組成は変わらない。

長江中流域…大溪文化後期（蒸具の出現）

漢水上中流域…屈家嶺文化期（加工具の消滅）

明確な変化をもつ地域には、黄河下流域、長江中流域、漢水上中流域があることがわかる。黄河下流域では、後李文化期～大汶口文化前期の時期は加工具と煮沸具だけであったのが、大汶口文化中後期から蒸具が加わることで画期があることになる。長江中流域では、同様に大溪文化後期に蒸具が出現する。漢水流域では、屈家嶺文化期に移行するときに、加工具が消滅する。

明確な画期がある地域について詳しくみてみる。

黄河下流域は、第四章で論じたように、黄淮平原を介した動向が大きく左右した地域である。また、隣接する黄河中流域との関係は、強弱はあるものの常に継続している[2]。にもかかわらず、後李文化期から大汶口文化前期ごろまで、蒸具が出土していないことは重要である。つまり、黄河下流域では、黄河中流域のアワなどの調理法とも、長江下流域のコメの調理法とも異なる時期がつづく。そして、大汶口文化中後期の黄淮平原の交流のなかで、なんらかの契機があり蒸具を受容したと想定できよう。

長江中流域でも同様に画期は、蒸具の出現である。この地域も隣接する長江下流域、漢水流域ともに蒸具をもつ。彭頭山文化期以来、煮沸具は、丸底罐形土器であったが、蒸具出現期の蒸具とセットになって出土する煮沸具は鼎形土器であることに注意したい。蒸具は、鼎形土器を伴った出現であった可能性が指摘できる。

ところで、従来、コメ、とくにモチ性のコメと蒸具との関係は深いとされてきた。モチ性の澱粉の成分はアミロペクチンであり、熱を加えたときの糊化がはや過ぎて炊飯には適さない。しかし、蒸す技術ならば全く問題なく料理する

ことができる[3]。こうしたモチ性のコメの特性を考えると、蒸具の有無は栽培イネがウルチ性かモチ性かに関係する可能性がある。また、民族・民俗例をみると、モチ性のコメと蒸具との関係は深い[4]。

こうしたことから、少なくとも長江下流域の蒸具の存在は、モチ性のコメも栽培していた可能性が高いことはいえる。長江中流域の蒸具の出現が、長江下流域からの伝播によるものならば、モチ性のコメを本格的に利用し始めたと想定できる。イネの起源は長江中流域か長江下流域かの問題にからむかもしれない。モチ性かウルチ性かの判別はＤＮＡから分析することができ[5]、遺跡出土のイネ遺存体の分析が待たれる。

漢水上中流域の画期は、加工具の消滅にある。この画期が長江中流域の屈家嶺文化へ変化する時期と同じであること、さらに蒸具も長江中流域系統の蒸具に入れ替わることから、この画期が「仰韶文化」から「屈家嶺文化」へ文化的に変化することに一致する。逆に、加工具である磨盤が黄河流域の文化的要素であることを強調することができる。

以上、画期のある地域について、詳しくみてきた。黄河下流域と長江中流域は、蒸具が加わることで、これまでとは異なる調理法が出現したことになり、大きくみると食文化体系が変容したということができる。漢水流域では、全く異なる文化に変化したことに伴い、加工調理具も変化しており、同様に食文化体系も変容したといえる。

その他の地域は、このような基本的な加工調理具組成の変化がみられず、初現期から基本的な食文化体系は整っていたと考えることができるのである。BC6000 年以前の新石器時代の考古学的文化については、現在ほとんどわかっていない。しかし、このような加工調理具が整うまでにいたる過程が予想されることになる。

それでは、第四章で、論じた蒸具組成の変化からみた食文化体系の変容は、何を表すのか問題になってこよう。蒸具を構造から分類し、蒸具組成を各流域で明らかにした。蒸具の多種化は、対象物を蒸すために異なる蒸具を使用することが出現したと解釈した。蒸す行為のなかに、蒸具の種類を変えて蒸す必要が生じたのである。それを食文化体系の変容と言ったのである。

この場合の変容とは、物質文化的には蒸具のなかで起こった変化であるため、

加工調理具組成の変化のように大きな変化には一見みえない。しかし、加工調理具組成の変化と蒸具の多種化は、どちらも食文化体系の変化である。これらの変化の意義についてもう少し述べておきたい。

蒸具の多種化の性格は、第四章で論じたように、他地域からの伝播と同一地域内での創出の二つあった。しかし、すべてA類蒸具以外に、ほかのタイプの蒸具が新出されるのである。つまり、以前の蒸具が新しい蒸具に変換しているのではなく、以前の蒸具に新しい蒸具が加わっているのである。このように考えると、食文化体系に多様性が出てきたと解釈することができる。

それまでの加工調理具組成は加工調理の諸過程にそれぞれ一器種ずつが存在していたが、蒸具組成の画期は蒸す過程にいくつも器種を使用するようになるもので、これを文化的な多様性の表象と考えるのである。さらに述べると、加工調理具組成の変化に対し、蒸具組成の変化は農耕文化の成熟化が背景にあると考えたい。

第二節　農耕文化の形成と変容

1．農耕文化の類型化

1．1．食文化体系と農耕形態の比較

本論文では、栽培のみならず、加工調理する過程をも検討することで農耕文化の一側面を明らかにしようと試みた。そして、第一節で食文化体系を論じたことをうけ、ここでは、第二章で区分した農耕形態との比較を行う。

第二章で明らかにした農耕形態の地域区分は、黄河流域、長江下流域、長江中流域、漢水上中流域であった。まず、第三章、第四章で明らかにしたことから、この区分をみてみよう。

本論文の地域区分において、栽培から調理までに地域的独自性が強く現れている地域は、長江下流域と長江中流域そして漢水上中流域である。そこでは、農耕形態で区分した地域区分に呼応するように、食文化体系の地域的領域も一致し、栽培から調理までが連動した農耕文化として存在していたと述べること

ができよう。

これに対して、黄河流域では黄河下流域から渭水流域まで、農耕形態は基本的な共通性があったが、食文化体系からみると黄河下流域、黄河中流域、渭水流域ではそれぞれに異なったものであった。このことは、農耕形態と食文化体系が異なる規範のもとで存在していたことになる。

仰韶文化期以降、磨盤などの加工具は、耕作具や収穫具とは対照的に徐々に減少していくことは、もともと農耕形態の一要素ではなく、食文化体系の道具であったことを意味していたと考える。

１．２．農耕文化の類型化

栽培から調理までを一連の文化と捉え、諸過程で使用する道具を考古学的に検討し、農耕形態と食文化体系の関係を類型化したことを、以下にまとめる。

長江下流域と長江中流域では、農耕形態と食文化体系は、一連の農耕文化としてそれぞれに存在した。黄河下流域、黄河中流域、渭水流域は、農耕形態では連動した共通性を維持しながらも、食文化体系では各地域で独自的な発展形成を示した。漢水上中流域では、もともと黄河流域的な農耕文化であったが、屈家嶺文化期より長江中流域的な農耕文化へと変化する。

中国新石器時代の農耕文化は、おおよそ以上のように説明できる。

２．農耕文化の形成と変容

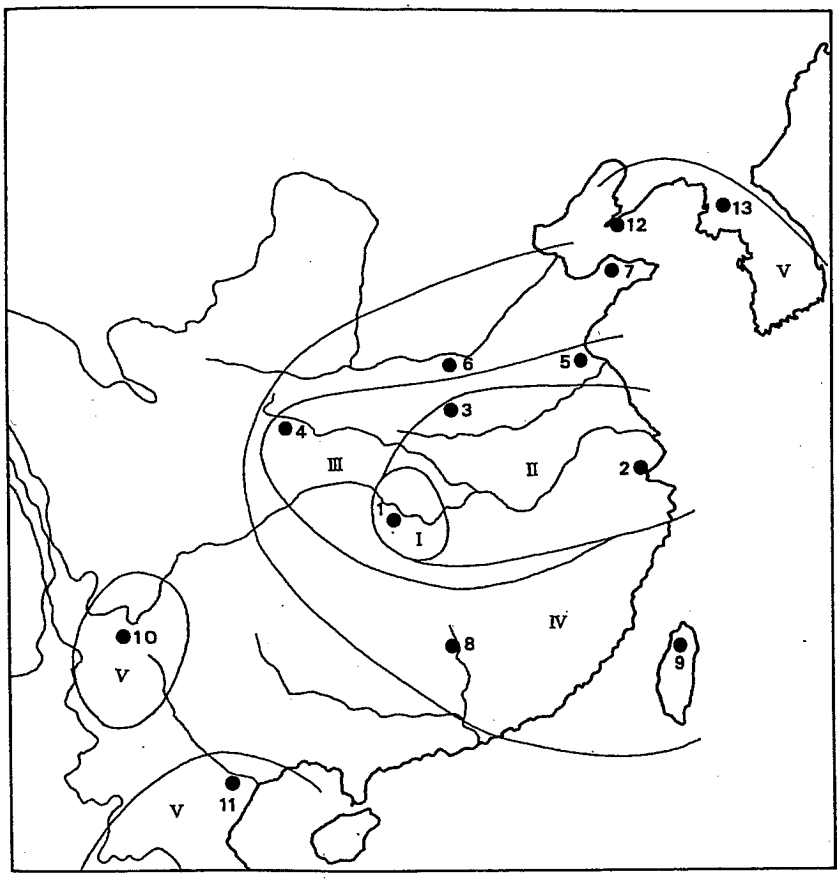
２．１．形成－穀物遺存体との比較－

農耕形態と食文化体系から明らかにした農耕文化について、穀物遺存体との関係から、論じてみたい。ただし、ＢＣ6000年以前の考古学的状況がわかっておらず、現段階ではその出現過程を論じることはできない。

まず、黄河下流域、黄河中流域、渭水流域からみていこう。穀物遺存体は、アワ、ヒエ、キビなどの雑穀であり、イネも出土するものの普遍的に雑穀が栽培されていたといえる。また、農耕形態でみた農耕具組成も共通性があったこ

とは論じた。これに対して、これら３つの地域の大きな相違は食文化体系にあった。この違いが穀物の種類に対応していないことは明白であり、自然環境やほかの生業なども含め、別の要因を考えていかなければならない。

次に、黄河流域と長江中下流域との関係を、イネ遺存体の出土分布と比較しながら検討する。イネ遺存体の出土分布は、考古学的に長江流域とくに長江中流域から波紋状に拡がっていくことがわかっている（第１図）。黄河流域へはすでにＢＣ6000年ごろから出土し始め、ＢＣ2000年までに黄河流域のほとんどの地域に出土するようになる。黄河流域と長江流域との関係だけからいえば、イネは長江流域から黄河流域へ北上したと説明できる。



第１図　出土イネの年代的分布

Ⅰ:9000B.P.以前　　Ⅱ:9000~7000B.P.　　Ⅲ:7000~5000B.P.
Ⅳ:5000~4000B.P.　　Ⅴ:4000~3000B.P.

１．彭頭山　２．羅家角　３．賈湖　４．何家湾　５．二潤村
６．大河村　７．楊家圏　８．石峡　９．芝山岩　10．大墩子
11．ドンダウ　12．大嘴子　13．南京

甲元真之『中国新石器時代の生業と文化』
（2001年　中国書店）より、転載。

しかし、それにもかかわらず、イネの拡散に伴う農耕具や加工具はない。これに対して、蒸具からみた黄河・長江流域の関係は常に長江流域から黄河流域への拡散であった。長江中流域では屈家嶺文化期から漢水上中流域を経由して黄河中流域へ有孔型甑や筒型甑が拡がる。長江下流域からは、良渚文化期に結合型甗が黄淮平原を介して黄河下流域へ拡がり、龍山文化期では黄河下流域から黄河中流域一帯に拡がる。黄河流域では、新石器時代前期にすでに蒸具はあったが、屈家嶺文化期・石家河文化期や良渚文化期に併行する時期、つまり仰韶文化後期から龍山文化期併行にかけて長江流域の蒸具を受容するのである。この事実とイネの拡散を比較すると、ＢＣ3000～2000 年ごろ黄河流域でイネが広範囲に出土する時期とほぼ重なることになる。

一方、黄河流域から長江流域へ拡がるのは、収穫具である。アワなどの黄河流域で栽培している穀物、磨製石鏟などの耕作具、磨盤などの加工具、蒸具は長江流域へは拡がらない。

収穫具の南下の時期は、長江中流域では大溪文化期、長江下流域では馬家浜文化期である。それら両地域ともにすでに農耕は開始している。しかし、彭頭山文化期・皂市下層文化期の収穫具に関しては、まだ分かっていない。

耕作具も出土例がないのが現状であるが、もう一度確認してみよう。

長江中流域では木製農耕具の存在を想定した。しかし、石器（石斧類）は存在しており、石製農耕具の不在に疑問が残る。最古級のイネ遺存体の出土は、長江中流域でのイネの栽培化を想定することになったが、農耕具の考古学的証拠がいまだ明確でない。農耕初現期のイネ栽培化過程の復元に関して、具体的な農耕具の変遷の過程を考えるのには、いまだ考古資料が不足する。

長江下流域では馬家浜文化の開始がＢＣ5000 年ごろで、農耕初現期に黄河流域から石刀が伝播したと考古学的に説明することができる。しかし、イネ遺存体の研究では更に遡る可能性がある[6]。

いずれにしても、長江中流域、長江下流域では、耕作具の伝播はなく、それぞれの地域独自の耕作具を創出し使用したといえるだろう。さらに、その後も黄河流域の耕作具を受け入れることなく、長江下流域では石犂や破土器などの新しい耕作具が出現する。

したがって、農耕の過程で、黄河流域と長江流域の関係がわかるのは収穫具

だけになる。本論文では明らかにすることができなかったが、収穫具の出現期だけでなく、今後は、長江中流域と長江下流域それぞれにどのように収穫具が流入していくのか、通史的に解明していくことで、黄河流域との農耕文化における関係を追求していく必要があろう。

ところで、黄河流域と長江流域との農耕文化の関係は、長江下流域と長江中流域とではそれぞれに関係していたことはすでに述べたところである。それでは長江中流域と長江下流域との関係はどうだろうか。

両地域ともに、主要な栽培植物はイネであり、穀物の相違は問題にならないであろう。しかし、現時点での考古学的な出土分布からみると長江中流域から長江下流域へ拡がったことになる。これに関しても耕作具や収穫具における関係は顕著ではない。初期の水田はいずれも低湿地を利用したことが想定されているが[7]、使用した農耕具が共通していないことは、両地域ですでに独自性があったとするのが妥当である。同じ稲作地帯であっても、両地域間の交流の内容に耕作具や収穫具に関する情報交換は希薄であったといえる。

しかし、蒸具からはA類蒸具やB類蒸具にみるように相互の影響があったことがわかった。これは、先にも述べたがイネの栽培ではなく、食文化体系における関係であったといえる。その最初の時期は、大渓文化後期と想定した。

長江下流域と長江中流域との関係の背景については、本研究で行った分布論だけでは解明できないことが多く、今後は蒸具の出土状況やセットになる煮沸具について、さらに検討していかなければならない。とくに長江中下流域では、蒸具が副葬されることがあり、ここでは副葬状況から両地域での蒸具の社会的なあり方を検討することで明らかにできる可能性を指摘しておきたい。

2．2．変容－文化的多様性の形成－

これまでみてきた地域ごとの農耕文化の性格は、新石器時代のなかで変容することを最後に論じたい。

注目するのは、食文化体系の変容である。とくに蒸具の多種化は、文化的な多様性の表象に置き換えることができたことである。長江下流域を除く地域では、農耕具に明確な組成変化、つまり新器種が出現しなかったことから、農耕

生産の発展から歴史的説明をできない状況にいた[8]。長江下流域では、崧沢文化期からの農耕具の変革はそのまま社会発展との関係に結びつけることができたが[9]、他の地域では、このような明瞭な変化がなかったために、あまりこの視点からの論究はなかったのである。

長江下流域を除く地域では、農耕の諸過程には新石器時代後期に到るまで基本的に一器種ずつが存在したと考えられる。しかし、蒸具の多種化でみた画期の時期と農耕具組成の画期の時期は、仰韶文化後期から龍山文化期併行の時間幅でほぼ重なっていることは、重視すべきことである。

いま、一過程一器種と述べたが、農耕具のなかで、今一度振り返ると収穫具が再検討すべき課題として挙がる。黄河流域では、石鎌類がふたたび盛行する時期である。このとき、石刀類が衰退することはなく、収穫具に石鎌類と石刀類とが併存して使用されるようになると想定できないだろうか。

食文化体系を農耕形態と結びつけて類型化した農耕文化は、食文化体系の変容をもってその変容とすることができ、その変容の時期のひとつに、仰韶文化後期から龍山文化期併行を想定することができる。時期幅が長いのは、変化の時間そのものが長かったと考えるほうが妥当である。いくつもの変化が重なり、文化変容が起こるのである。第四章で課題としてあげた煮沸具の多種化が仰韶文化後期に予想されるのも、その変化のひとつであろう。そうであるならば煮沸具と蒸具の変容の時間幅が一致し、農耕文化がある時間幅をもって変容したことを論じるにいたると述べておきたい。逆に、それ以前の段階では、6地域で異なる食文化体系が存在したことは、農耕文化の範疇だけでなく、生業体系そのものが所与の生態系に依存したこと[10]が背景に考えられる。

以上から、中国新石器時代における農耕文化の変容は、栽培穀物の違いを背景にもつ時代から、ほかの文化的な要因によって形成される時代へと変移することを意味する、と歴史的に解釈することができる。そして、後者を農耕文化の文化的多様性の形成の時期と考えるのである。

第三節　農耕文化からみた新石器時代社会－展望－

農耕文化の変容の時期を文化的多様性の形成と論じたが、ここでは、そのこ

とから新石器時代社会について展望したい。

序章第二節で論じた新石器時代研究の現状は、文明論に代表されるように新石器時代社会の発展過程を解明する方向にある。区系類型論から追求されてきた地域間の文化動態の大枠は、一元論から多元論へと変わった。1980年代以降の考古学的な成果から、各地域の地域性が見出されるようになったことが大きい。

そのなかで、大規模な城址遺跡や基壇遺跡に着目して、新石器時代社会の発展を論じる研究がある。城址遺跡の出現は、長江中流域では屈家嶺文化期、黄河流域では龍山文化期である[11]。長江中流域では、湖南省城頭山遺跡の調査成果から、出現はさらに大溪文化期まで遡る可能性がある。黄河流域でもさらに遡ると思われる。

本論文で明らかにした農耕文化の変容の時期は、こうした城址遺跡の出現の時期にほぼ一致することがわかる。つまり、都市の出現と社会的関係の拡大の時期に農耕文化の変容も始まるのである。さらに、黄河中下流域における龍山文化期併行の城址遺跡の分布は、第四章第三節で論じた結合型甗文化圏とほぼ一致する。これは、城址遺跡間にある社会的「つながり」の考古学的表象とみることができないだろうか。今後、結合型甗の社会的意義も検討していきたいと考えている。

総じて、ＢＣ6000年ごろ形成された中国新石器時代の農耕文化は、ＢＣ3000年前後から、社会的な変化と呼応しながら変容していくと考えられる。このことは、前述のように都市形成過程にみる社会間関係の拡大[12]をも視野に入れて考えていく必要があろう。

---

1 第四章でも述べたとおり、大溪文化の前期の資料はなく、現時点では後期までしか遡ることができない。

2 とくに仰韶文化廟底溝類型期では、彩陶の紋様から渭水流域から黄河下流域まで広い交流があったことがわかっている（西谷大「大汶口文化の廟底溝類型系彩陶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991年）。

3 石毛直道「稲作社会の食事文化」『日本農耕文化の源流』1983年 日本放送出版協会

4 佐々木高明『南からの日本文化』2003年 日本放送出版協会

阪本寧男『モチの文化誌』1989年 中央公論社

5 佐藤洋一郎『イネの文明』2003年 ＰＨＰ研究所

6 佐藤洋一郎『ＤＮＡが語る稲作文明』1996年 日本放送出版協会

7 シンポジウム『稲作起源を探る』実行委員会事務局『シンポジウム稲作起源を探る－中国・草鞋山遺跡における古代水田稲作－』1996年 日本文化財科学会

湖南省文物考古研究所「澧県城頭山古城址 1997～1998年度発掘簡報」『文物』第6期 1999年

8 序章、第一章参照。

9 中村慎一「長江下流域の考古学的研究－栽培システムの進化を中心に－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第5号 1986年

10 甲元真之「長江と黄河－中国初期農耕文化の比較研究－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 1992年

11 宮本一夫「新石器時代の城址遺跡と中国の都市国家」『日本中国考古学会会報』第3号 1993年

12 岡村秀典「長江流域新石器時代城郭遺址の研究」『中国古代都市の形成』2000年

小泉龍人『都市誕生の考古学』2001年 同成社

おわりに－課題にかえて－

本論文では、中国新石器時代の黄河・長江流域の農耕文化について、農耕具と加工調理具を検討することで明らかにしてきた。

序章では、農耕文化にかかわる構造と体系を明示し、本論文での研究方法論を提示した。第一章では、農耕具研究、加工調理具研究の現状から問題の所在を述べ、第二章以降の研究の位置づけを行った。第二章では、各地域の耕作具と収穫具から農耕具組成を明らかにし、その共通性から新石器時代の基本的な農耕形態を区分した。第三章では、加工具である磨盤・臼などが地域ごとに異なる組成を有したことを明らかにし、各地域で食文化体系に相違があることを指摘した。第四章では、甑と甗の基礎研究を行ったのち、蒸具からみた食文化体系の変容を論じた。以上の検討をもとに、終章では、農耕形態と食文化体系を比較することで、新石器時代の農耕文化の形成と変容について考察した。

最後に本論文で掲げたいくつかの課題について、再度述べ、論点を明確にしておく。

1．まず、収穫具の再検討である。仰韶文化後期・廟底溝二期文化期併行の収穫具の様相について、再検討を行うことで、農耕形態の変化をより明確にできる可能性を見いだした。また、長江中流域や長江下流域への伝播のあり方を比較することで、両流域の稲作農耕文化の相違を論じることができることもわかった。こうした視点から、収穫具の再検討を行うことが必要となった。

2．煮沸具からみた食文化体系を明らかにする。第四章では、蒸具の多種化の前に煮沸具の多種化がなされた可能性を指摘した。終章で考察したように、農耕文化の変容に蒸具だけでは明らかにできない食文化体系の変容があり、煮沸具を蒸具研究と同様の視点で検討していくことで、農耕文化の変容の具体を明確化する。

3．本論文で設定した地域以外についても今後取り上げる必要がある。具体的には、黄淮平原、長江中流域と長江下流域を挟む地域である。考古学的にはあまり明らかになっていないため、これらの地域の重要性はあまり意識されることはなかったが、新石器時代の文化・社会の生成を地域間関係から解明する際に、必要となる地域として焦点をあてていきたい。

【謝辞】本論文を草するにあたり、指導教官の古瀬清秀先生より、懇切なご指導を賜りました。伏して御礼申し上げます。川越哲志先生、河瀬正利先生、中越利夫先生、藤野次史先生、竹広文明先生、安間拓巳先生、増田直人先生、中村真理先生には、懇切なご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。北京大学の高崇文先生には、留学中そして帰国後も格段のご指導とご配慮を賜りました。心より感謝申し上げます。

また、以下の諸機関、諸先生、諸氏より、多くのご指導とご配慮を賜りました。ご芳名を記して、感謝申し上げます。

夏県博物館　河南省博物館　河南省文物考古研究所　河北省文物考古研究所　九州大学考古学研究室　熊本大学考古学研究室　熊本大学埋蔵文化財調査室　湖南省文物考古研究所　山西省文物考古研究所　山西省文物考古研究所侯馬工作站　山東省博物館　山東省文物局　山東大学考古系　商州市博物館　商洛地区博物館　西北大学文博学院　陝西省文物考古研究所　中国社会科学院考古研究所　中国社会科学院考古研究所洛陽工作站　中国社会科学院考古研究所西安工作站　鎮江博物館　青島市博物館　鄭州大学文博学院　鄭州市博物館　南京博物院　広島大学考古学研究室　広島大学文化財学研究室広島大学埋蔵文化財調査室　北京大学考古系（五十音順）

今井晃樹氏　今村佳子氏　尹申平先生　上野祥史氏　王建新先生　王昌富先生　王迅先生　大坪志子氏　岡村秀典先生　岡山真知子氏　尾上実氏　何介鈞先生　加藤里美氏　黄川田修氏　木下尚子先生　久慈大介氏　倉本卿介氏　黄暁芬先生　甲元真之先生　蔡鳳書先生　崎川隆氏　佐々木正治氏　佐藤洋一郎先生　島田美代子氏　徐天進先生　白木原和美先生　秦小麗氏　杉井健先生　角南聡一郎氏　薛新民先生　宋建忠先生　曹伝松先生　趙輝先生　張従軍先生　陳建立氏　田建文先生　徳留大輔氏　中尾篤志氏　永島暉臣慎先生　西江清高先生　西谷正先生　浜名弘二氏　韓国河先生　藤井康隆氏　松井和幸氏　水ノ江和同氏　宮原晋一氏　宮本一夫先生　村上恭通先生　吉井宣子氏　山下啓之氏　山中章先生　梁勝弼氏　楊亜長先生　横田禎昭先生　吉田恵二先生　吉原道夫氏　欒豊実先生　李伯謙先生　劉呆運先生　林澐先生　Dr Anne P.Underhill　Dr Lothar.Von Falkenhausen（五十音順）

なお、雑穀の栽培および加工調理について、2001年6月から12月までの間、広島県東広島市在住の島田美代子さん、同県黒瀬町在住の香月祐三夫妻、島根県邑智町耕地課の吾郷真彦さん、同町在住の農家の中村省三夫妻、梅田定信さんの協力を得て現地調査を行ったことを記して、感謝申し上げます。

また、1999年11月に中華人民共和国湖南省でイネの栽培と加工調理、2000年2月と2002年5月に同国山西省と陝西省で雑穀の栽培と加工調理について、聞き取り調査を行った。ご協力いただいた農家の方々に感謝申し上げます。

図表出典一覧

出典を文献番号で付しているものは、後記の【図表出典参考文献一覧】の番号に対応する。

1．挿 図

序　章

第１図　筆者作成。

第一章

第１図　木俣美樹男ら「北海道沙流川流域における雑穀の栽培と調理」（『季刊人類学』17巻１号1986年）より、一部改変。

第二章

第１図　筆者作成 。

第２図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1～10. 文献186　11～13. 文献7.8　14～18. 文献202.204　19～25. 文献86）

第３図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1～4. 文献170　5～9. 文献28　10～15. 文献30　16～18. 文献199　20～25. 文献25）

第４図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1～6. 文献159　7～11. 文献153　12～16. 文献109　17～22. 文献106　23～26. 文献137）

第５図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1～4. 文献132　5～8. 文献131　9～12. 文献26　13. 文献130　13～21. 文献158）

第６図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1～9. 文献61　10～12. 文献152　13～15. 文献212）

第７図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1～5. 文献122　6～8. 文献218　9. 文献102　10～16. 文献123　17～21. 文献90）

第８図　筆者作成。

第三章

第１図　筆者作成。

第２図　筆者作成。

第３図　筆者作成。

第４図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1. 文献 167　2～4. 文献 173　5. 文献 170　7. 文献 172　8. 文献 165　9. 10. 文献 31　14. 文献 14　15. 文献 221　6. 文献 217　11. 12. 文献 150　13. 文献 193　16. 文献 14　17. 文献 180～182）

第５図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1. 2. 文献 100　3. 文献 77　4~6. 文献 186　7～9. 文献 161　10~12. 文献 160　13. 文献 9　14. 20. 文献 214　21. 文献 9　22. 文献 201　15. 文献 255　16. 17. 文献 9　18. 文献 79　19. 文献 10）

第６図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1. 2. 8. 9. 13. 文献 109　3. 10. 14~16. 文献 162　4~7. 17. 18. 文献 153　19. 文献 155　11. 12. 文献 216　20. 文献 156）

第７図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1. 2. 4~8. 文献 130　9~12. 文献 133　13. 文献 129　14. 15. 文献 131）

第８図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1. 2. 文献 56　3. 文献 62　4. 文献 49）

第四章

第１図　筆者作成。
第２図　筆者作成。
第３図　筆者作成。
第４図　筆者作成。
第５図　筆者作成。
第６図　筆者作成。
第７図　筆者作成。
第８図　筆者作成。
第９図　筆者作成。
第 10 図　筆者作成。
第 11 図　筆者作成。
第 12 図　筆者作成。
第 13 図　筆者作成。
第 14 図　筆者作成。
第 15 図　筆者作成。
第 16 図　筆者作成。
第 17 図　筆者作成。

第 18 図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1. 文献 19　2. 3. 文献 1　4～7. 文献 23　8. 9. 文献 130）

第 19 図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1. 文献 183　2. 文献 160　3. 4. 文献 75　5. 8. 文献 44　6. 文献 13　9. 文献 43）

第20図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．文献45　2．12．文献192　3．文献17　4．文献70　5．文献199　6．文献67　7．文献30　8．文献31　9．文献181　10．文献46　11．文献46　13．14．文献14　15．文献15　16．文献200　17.文献174　18.19.文献157　20.文献219　21.22.文献25　23.文献18）

第21図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．2．5．8～10．18．文献109　3．文献139　4．13～15．19．文献216　6．11．文献159　12．16．文献162　17．文献153　20．文献138　21．文献137　22．文献213）

第22図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．文献122　2．4～6．8．12．文献147　3．9．文献42.102　7．文献5　10.16.17.文献2　11.文献175　13.文献66　14.文献203　15.18.文献125　19．文献127　20．文献128）

第23図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1～3．文献60　4．11．15．文献177　5．文献61　6．文献54　7．13．14．文献51　8．文献37　9．10．16．文献152　12．文献50　17．21．23．25．28．29．文献58　18．文献119　19．文献120　20．22．文献212　26．文献64　27．文献52　30．文献65）

第24図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．文献130　2．4．6．10．文献26　3．5．7～9．文献158）

第25図　筆者作成。

第26図　筆者作成。

第27図　筆者作成。

第28図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1～3．文献146　4．文献96　5．文献126　6．文献94　7．文献145　8．文献124　9．文献88　10．文献97　11．12．文献78　13．文献214）

第29図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．2．文献146　3．文献126　4．文献96　5．文献88　6．文献97　7．文献220　8．文献124　9．文献78　10．文献214）

第30図　筆者作成。

第31図　筆者作成。

第32図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．2．文献194　3．4．文献206　5．文献78　6～10．文献160）

第33図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．2．文献154　3．文献215　4．文献72　5．6．文献43　7．文献99　8．文献98　9．10．文献86　11．文献113　12．文献222）

第34図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1～7．文献165　8．文献14）

第35図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．2．文献24　3．4．文献196　5．文献103）
第36図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．2．文献 174　3．文献 22　4～6．文献 200　7．文献 160　8．9．文献20　10．文献210）
第37図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．文献 179　2．文献 71　3．4．文献 46　5．6．文献 46　7．8．文献38　9．10．文献69）
第38図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．2．文献194　3．文献78　4．文献160　5．文献81　6．文献98　7．8．文献43　9．文献86　10．11．文献4　13．14．文献154　15．文献222　16．文献24　17．文献196　18．文献208　19．文献174　20．文献200　21．22．文献165　23．文献179　24．文献46　25．文献38）
第39図　筆者作成。
第40図　筆者作成。
第41図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．2．4．文献160　3．文献214　5．文献44　6．文献215　7．文献86）
第42図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．文献23　2．文献67　3．文献45　4．文献192　5．文献25　6．文献174　7．10．文献46　8．文献196　9．文献165　11．文献190　12．文献192）
第43図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．文献109　2．文献137　3．文献213）
第44図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．文献122　2a．文献42　2b．文献203　3．文献147　4．文献205　5．文献126　6．文献127　7．文献88　8．文献194）
第45図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．文献177　2．文献60　3．4．文献58　5．文献65 ）
第46図　下記文献より、それぞれトレースし、筆者作成。
（1．文献129　2．5．文献26　3．4．文献158）
第47図　筆者作成。
第48図　筆者作成。
第49図　筆者作成。

終　章
第1図　甲元真之『中国新石器時代の生業と文化』（2001年　中国書店）より、転載。

2．挿 表

第一章

第１表　小澤正人・谷豊信・西江清高『中国の考古学』（1999 年　同成社）を参考にして、筆者作成。

第四章

第１表　筆者作成。

第２表　筆者作成。

【図表出典参考文献一覧】

1．開封地区文管会等「河南密県馬良溝遺址調査和試掘」『考古』第３期 1981 年

2．安徽省文物工作隊「潜山薛家崗新石器時代遺址」『考古学報』第３期 1982 年

3．安陽地区文物管理委員会「河南湯陰白営龍山文化遺址」『考古』第３期 1980 年

4．濰坊市芸術館・濰坊市寒亭区図書館「山東濰県獅子行遺址発掘簡報」『考古』第８期 1984 年

5．烏墩考古隊「武進烏墩遺址発掘報告」『通古達今之路　寧瀘高速公路（江蘇段）考古発掘報告集』1994 年

6．李洪甫「連雲港市大尹山新石器時代遺址」『中国考古学年鑑』 1986 年

7．烟台市博物館「山東烟台市白石村遺址調査簡報」『考古』第２期 1981 年

8．烟台市文物管理委員会「山東烟台白石村新石器時代遺址発掘簡報」『考古』第７期 1992 年

9．煙台市博物館「煙台白石村遺址発掘報告」『胶東考古』 2000 年

10. 王洪明「山東省海陽県史前遺址調査」『考古』第 12 期 1985 年

11. 開封地区文物管理委員会・新鄭県文物管理委員会「河南新鄭裴李崗新石器時代遺址」『考古』第２期 1978 年

12. 開封地区文物管理委員会・新鄭県文物管理委員会・鄭州大学歴史系考古専業「裴李崗遺址一九七八年発掘簡報」『考古』第３期 1979 年

13. 荷沢地区文物工作隊「山東辛冢集遺址試掘簡報」『考古』第５期 1980 年

14 河南省安陽地区文物管理委員会「湯陰白営河南龍山文化村落遺址発掘報告」『考古学集刊』3　1983 年

15. 河南省鞏叉市文物保護管理所「河南省鞏叉市里溝遺址調査」『考古』第４期 1994 年

16. 河南省博物館・長江流域規画弁公室文物考古隊河南分隊「河南淅川下王崗遺址的試掘」『文物』第 10 期 1972 年

17. 河南省文物管理局・河南省文物考古研究所『黄河小浪底水庫考古報告（一）』 1999 年

18. 河南省文物研究所・禹県文管会「河南禹県潁河両岸考古調査与試掘」『考古』第２期 1991 年

19. 河南省文物研究所「長葛石固遺址発掘報告」『華夏考古』第１期 1987 年

20. 河南省文物研究所「舞陽賈湖遺址的試掘」『華夏考古』第２期 1988 年

21. 河南省文物研究所「河南舞陽賈湖新石器時代遺址第二次至第六次発掘簡報」『文物』第１期 1989 年

22. 河南省文物研究所「河南鹿邑欒台遺址発掘簡報」『華夏考古』第１期 1989 年

23. 河南省文物考古研究所『舞陽賈湖』 1999年
24. 河南省文物考古研究所「河南輝県孟庄龍山文化遺址発掘簡報」『考古』第3期 2000年
25. 河南省文物研究所・中国歴史博物館考古部『登封王城崗興陽城』 1992年
26. 河南省文物研究所・長江流域規画弁公室考古隊河南分隊『淅川下王崗』 1989年
27. 河北省文物管理処「磁県下藩汪遺址発掘報告」『考古学報』第1期 1975年
28. 河北省文物管理処・邯鄲市文物保管所「河北武安磁山遺址」『考古学報』第3期 1981年
29. 河北省文物研究所・邯鄲地区文物管理処「河北永年石北口遺址発掘簡報」『文物春秋』第3期 1989年
30. 河北省文物研究所・河北文化学院「武安超窰遺址発掘報告」『考古学報』第3期 1992年
31. 河北省文物研究所・邯鄲地区文物管理所「永年県石北口遺址発掘報告」『河北省考古文集』 1998年
32. 河姆渡遺址考古隊「浙江河姆渡遺址第二期発掘的主要収穫」『文物』第5期 1980年
33. 賈蘭坡・張振標「河南淅川県下王崗遺址的動物群」『文物』第6期 1977年
34. 甘粛省博物館・奏安県博物館・大地湾発掘組「1980 年奏安大地湾一北文化遺存発掘簡報」『考古与文物』第2期 1982年
35. 邯鄲市文物保管所・邯鄲地区磁山考古隊短訓班「河北磁山新石器遺址試掘」『考古』第6期 1977年
36. 宜昌博物館「湖北宜昌市中堡島遺址西区 1993年発掘簡報」『考古』第9期 1996年
37. 紀南城文物考古発掘隊「江陵毛家山発掘記」『考古』第3期 1977年
38. 忻州考古隊「山西忻州市游邀遺址発掘簡報」『考古』第4期 1989年
39. 屈家嶺考古発掘隊「屈家嶺遺址第三次発掘」『考古学報』第1期 1992年
40. 黄岡地区博物館「1990年湖北黄岡螺蛳山遺址墓葬清理発掘」『鄂北考古発現与研究』 1998年
41. 黄宣佩・張明華「青浦県崧沢遺址第二次発掘」『考古学報』第1期 1980年
42. 江蘇省圩墩遺址考古発掘隊「常州圩墩遺址第五次発掘報告」『東南文化』第4期 1995年
43. 国家文物局考古領隊培訓班『兗州西呉寺』 1990年
44. 国家文物局考古領隊培訓班「山東済寧程子崖遺址発掘簡報」『文物』第7期 1991年
45. 国家文物局考古領隊培訓班「鄭州西山仰韶時代城址的発掘」『文物』第7期 1999年
46. 国家文物局・山西省考古研究所・吉林大学考古系『晋中考古』 1998年
47. 国家文物局三峡考古隊「湖北宜昌中堡島遺址発掘簡報」『文物』第2期 1989年
48. 国家文物局三峡考古隊「湖北秭帰朝天嘴遺址発掘簡報」『文物』第2期 1989年
49. 湖南省津市市文物普査弁公室「湖南省津市市新石器時代遺址普査簡報」『考古』第1期 1990年
50. 湖南省博物館「澧県夢溪三元宮遺址」『考古学報』第4期 1979年
51. 湖南省博物館「安郷劃城崗新石器時代遺址」『考古学報』第4期 1983年
52. 湖南省博物館「湘郷岱子坪新石器時代遺址」『湖南考古輯刊』 2輯 1984年
53. 湖南省博物館「湖南石門県皂市下層新石器遺存」『考古』第1期 1986年
54. 湖南省文物考古研究所「華容県劉卜台新石器時代遺址発掘簡報」『湖南考古輯刊』 5輯 1989年
55. 湖南省文物考古研究所「湖南臨澧県胡家屋場新石器時代遺址」『考古学報』第2期 1993年
56. 湖南省文物考古研究所「湖南省黔陽高廟遺址発掘簡報」『文物』第4期 2000年
57. 湖南省文物考古研究所・澧県文物管理所「湖南澧県彭頭山新石器早期遺址発掘簡報」『文物』第8期 1990年

58. 湖北省荊州博物館・湖北省文物考古研究所・北京大学考古系・石家河考古隊『肖家屋背』1999年
59. 湖北省黄岡地区博物館「湖北黄岡螺蛳山遺址墓葬」『考古学報』第3期 1987年
60. 湖北省黄岡地区博物館「湖北黄岡螺蛳山遺址墓葬」『鄂北考古発現与研究』 1998年
61. 湖北省宜昌地区博物館「宜昌中堡島新石器時代遺址」『考古学報』第1期 1987年
62. 湖北省文物考古研究所「1982 年秭帰県柳林溪発掘的新石器早期文化遺存」『江漢考古』第1期 1994年
63. 湖北省文物考古研究所『宜都城背溪』 2001年
64. 湖北省文物考古研究所・中国社会科学院考古研究所「湖北石家河羅家柏嶺新石器時代遺址」『考古学報』第2期 1994年
65. 湖北宜昌地区博物館・四川大学歴史系考古専業「湖北宜昌白廟遺址試掘簡報」『三峡考古之発現』 1998年
66. 三城巷考古隊「丹陽市三城巷遺址発掘報告」『通古達今之路　寧瀘高速公路（江蘇段）考古発掘報告集』 1994年
67. 山西省考古研究所「西陰村史前遺存第二次発掘」『三晋考古（二）』 1996年
68. 山西省考古研究所晋東南工作站「山西長治小神村遺址」『考古』第7期 1988年
69. 山西省考古研究所晋東南工作站「長治小常郷小神遺址」『考古学報』第1期 1996年
70. 山西省考古研究所・洪洞県博物館「山西洪洞耿壁遺址調査、試掘報告」『三晋考古（二）』1996年
71. 山西省考古研究所・洪洞県博物館「洪洞侯村新石器時代遺址調査、試掘報告」『三晋考古（二）』 1996年
72. 山東省博物館「山東濰坊姚官荘遺址発掘簡報」『考古』第7期 1963年
73. 山東省博物館・聊城地区文化局・茌平県文化館「山東茌平県尚荘遺址第一次発掘簡報」『文物』第4期 1978年
74. 山東省文物管理所「山東日照両城鎮遺址勘察紀要」『考古』第9期 1960年
75. 山東省文物考古研究所「山東曲阜南興埠遺址的発掘」『考古』第12期 1984年
76. 山東省文物考古研究所「茌平尚荘新石器時代遺址」『考古学報』第4期 1985年
77. 山東省文物考古研究所「山東章丘市西河新石器時代 1997年的発掘」『考古』第10期 2000年
78. 山東省文物考古研究所・棗庄市文化局『棗庄建新』 1996年
79. 山東省文物考古研究所・寒亭区文物管理所「山東濰坊前埠下遺址発掘報告」『山東高速公路考古報告集』 1997年
80. 山東省文物考古研究所・北京大学考古実習隊「山東栖霞楊家圈遺址発掘簡報」『史前研究』第3期 1984年
81. 山東大学歴史系考古専業「山東鄒平丁公遺址第二、三次発掘簡報」『考古』第6期 1992年
82. 山東大学歴史系考古専業「山東泗水尹家城第一次発掘」『考古』第1期 1980年
83. 山東大学歴史系考古専業「山東泗水尹家城遺址第四次発掘簡報」『考古』第4期 1987年
84. 山東大学歴史系考古専業「山東鄒平県苑城早期新石器文化遺址調査」『考古』第6期 1989年
85. 山東大学歴史系考古専業・済寧地区文物科・泗水県文化館「泗水尹家城遺址第二次，三次発掘簡報」『考古』第7期 1958年
86. 山東大学歴史系考古専業教研室『泗水尹家城』 1990年
87. 上海市文物管理委員会「青浦福泉山遺址崧沢文化遺存」『考古学報』第3期 1990年
88. 上海市文物管理委員会『福泉山－新石器時代遺址発掘報告』 2000年

89. 上海市文物保管委員会「上海市青浦県崧沢遺址的試掘」『考古学報』第2期 1962年
90. 上海市文物保管委員会「上海市松江県広富林新石器時代遺址試探」『考古』第9期 1962年
91. 上海市文物保管委員会「上海福泉山良渚文化墓葬」『文物』第2期 1984年
92. 上海市文物保管委員会「上海青浦福泉山良渚文化墓地」『文物』第10期 1986年
93. 上海市文物保管委員会「上海青浦福泉山良渚墓地」『文物』第10期 1986年
94. 上海市文物保管委員会『崧沢』 1987年
95. 上海市文物保管委員会「1987年上海青浦県崧沢遺址的発掘」『考古』第3期 1992年
96. 上海市文物保管委員会「上海青浦県金山墳遺址試掘」『考古』第7期 1989年
97. 上海博物館考古研究部「上海金山区亭林遺址 1988、1990 年良渚文化墓葬的発掘」『考古』第10期 2002年
98. 寿光県博物館「寿光県古遺址調査報告」『海岱考古』 1989年
99. 昌楽地区文物管理組・諸城県博物館「山東諸城呈子遺址発掘報告」『考古学報』第3期 1980年
100. 章丘県博物館「山東章丘県小荊山遺址調査簡報」『考古』第6期 1994年
101. 商丘地区文物管理委員会・中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「1977 年河南永城王油坊遺址発掘概況」『考古』第1期 1978年
102. 常州市博物館「常州圩墩新石器時代遺址第三次発掘簡報」『史前研究』第2期 1984年
103. 新郷地区文管会・新郷県文化館「河南新郷県洛絲潭遺址試掘簡報」『考古』第2期 1985年
104. 西安半坡博物館「1971年半坡遺址発掘簡記」『考古』第3期 1973年
105. 西安半坡博物館「陝西臨潼白家遺址調査試掘簡報」『史前研究』第2期 1983年
106. 西安半坡博物館「陝西岐山双庵新石器時代遺址」『考古学集刊』3 1983年
107. 西安半坡博物館「銅川李家溝新石器時代遺址発掘報告」『考古与文物』第1期 1984年
108. 西安半坡博物館「陝西臨潼康家遺址第一、二次試掘簡報」『史前研究』第1期 1985年
109. 西安半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼県文化館『姜寨』1988年
110. 西安半坡博物館・臨潼県文化館「1972年臨潼姜寨遺址発掘簡報」『考古』第3期 1973年
111. 西安半坡博物館・臨潼県文化館「姜寨遺址第二，三次発掘的主要収穫」『考古』第5期 1975年
112. 西安半坡博物館・臨潼県文化館「臨潼姜寨遺址第四至十一次発掘起要」『考古与文物』第3期 1980年
113. 青州市博物館「青州市新石器遺址調査」『海岱考古』 1989年
114. 西北大学文博学院考古専業「陝西扶風県案板遺址第五次発掘」『文物』第11期 1992年
115. 西北大学文博学院考古専業『扶風案板遺址発掘報告』2000年
116. 西北大学歴史系考古専業「陝西扶風県案板遺址第二次発掘」『考古』第10期 1987年
117. 西北大学歴史系考古実習隊「陝西扶風県案板遺址第三次，四次発掘」『考古与文物』第 5・6 期 1988年
118. 石河考古隊「湖北省石家河遺址群 1987年発掘簡報」『文物』第8期 1990年
119. 石河考古隊「湖北省石家河遺址群 1987年発掘簡報」『文物』第8期 1990年
120. 石河考古隊「湖北省石家河遺址群 1987年発掘簡報」『文物』第8期 1990年
121. 浙江省博物館自然組「河姆渡遺址動植物遺存的鑑定研究」『考古学報』第1期 1978年
122. 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館「河姆渡遺址第一期発掘報告」『考古学報』第1期 1978年
123. 浙江省文物考古管理委員会「呉興銭山様遺址第一、二次発掘報告」『考古学報』第2期 1960年

124. 浙江省文物考古研究所「浙江北部地区良渚文化墓葬的発掘（1978～1986）」『浙江省文物考古研究所学刊 1993』 1993 年
125. 浙江省文物考古研究所「余杭呉家埠新石器時代遺址」『浙江省文物考古研究所学刊 1993』 1993 年
126. 浙江省文物考古研究所「嘉興双橋遺址発掘簡報」『浙江省文物考古研究所学刊 1993』1993 年
127. 浙江省文物考古研究所・余杭市文管会「浙江余杭匯観山良渚文化祭壇与墓地発掘報告」『浙江省文物考古研究所学刊 1997』 1997 年
128. 浙江省文物考古研究所反山考古隊「浙江余杭反山良渚墓地発掘簡報」『文物』第 1 期 1988 年
129. 陝西省考古研究所『龍崗寺』 1990 年
130. 陝西省考古研究所・陝西省安康水電站庫区考古隊「阮家壩遺址」『陝南考古報告集』 1994 年
131. 陝西省考古研究所・陝西省安康水電站庫区考古隊「何家湾遺址」『陝南考古報告集』 1994 年
132. 陝西省考古研究所・陝西省安康水電站庫区考古隊「李家村遺址」『陝南考古報告集』 1994 年
133. 陝西省考古研究所・陝西省安康水電站庫区考古隊「馬家営遺址」『陝南考古報告集』 1994 年
134. 陝西省考古研究所・陝西省安康水電站庫区考古隊「白馬石遺址」『陝南考古報告集』 1994 年
135. 陝西省考古研究所漢水考古隊「陝西西郷何家湾新石器時代遺址首次発掘」『考古与文物』第 4 期 1981 年
136. 陝西省考古研究所康家考古隊「陝西臨潼康家遺址発掘簡報」『考古与文物』第 5・6 期 1988 年
137. 陝西省考古研究所康家考古隊「陝西省臨潼県康家遺址 1987 年発掘簡報」『考古与文物』第 4 期 1992 年
138. 陝西省考古研究所陝北考古隊「陝西綏徳小官道龍山文化的発掘」『考古与文物』第 5 期 1983 年
139. 陝西省考古研究所配合基建考古隊「陝西合陽呉家営仰韶文化遺址清理簡報」『考古与文物』第 6 期 1990 年
140. 陝西省考古研究所宝鶏工作站・陝西省宝鶏市考古隊「宝鶏福臨堡遺址 1984 年発掘簡報」『考古与文物』第 6 期 1987 年
141. 陝西省考古研究所宝鶏工作站・陝西省宝鶏市考古隊「陝西省宝鶏市福臨堡遺址 1985 年発掘簡報」『考古』第 8 期 1992 年
142. 陝西省社会科学院考古研究所漢水隊「陝西西郷何家湾新石器時代遺址 1961 年発掘簡報」『考古』第 6 期 1962 年
143. 陝西分院考古研究所「陝西西郷何家湾新石器時代遺址」『考古』第 7 期 1961 年
144. 蘇州博物館・呉江県文物管理委員会「江蘇呉江県龍南新石器時代村落遺址第一・二次発掘簡報」『文物』第 8 期 1990 年
145. 蘇州博物館・呉江県文物管理委員会「呉江梅埝龍南新石器時代村落遺址第三、四次発掘簡報」『東南文化』第 3 期 1999 年
146. 蘇州博物館・張家港市文物管理委員会「江蘇張家港徐家湾新石器時代遺址」『考古学報』第 3 期 1995 年
147. 蘇州博物館・昆山市文物管理所「江蘇昆山市綽墩遺址発掘報告」『東南文化』第 1 期 2000 年
148. 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「安陽後崗新石器時代遺址的発掘」『考古』第 6 期 1982 年
149. 中国科学院考古研究所『澧西発掘報告』1963 年
150. 中国科学院考古研究所『廟底溝与三里橋』1959 年

151. 中国科学院考古研究所湖北発掘隊「湖北黄岡螺蛳山遺址的探掘」『鄂北考古発現与研究』1998年
152. 中国社会科学院考古研究所『京山屈家嶺』 1965年
153. 中国社会科学院考古研究所『宝鶏北首嶺』 1983年
154. 中国社会科学院考古研究所『胶県三里河』 1988年
155. 中国社会科学院考古研究所「滸西庄遺址」『武功発掘報告』 1988年
156. 中国社会科学院考古研究所「趙家来遺址」『武功発掘報告』 1988年
157. 中国社会科学院考古研究所「西干溝遺址」『洛陽発掘報告』 1989年
158. 中国社会科学院考古研究所『青龍泉与大寺』 1991年
159. 中国社会科学院考古研究所『臨潼白家村』 1994年
160. 中国社会科学院考古研究所『蒙城尉遅寺』 2001年
161. 中国社会科学院考古研究所『山東王因』 2000年
162. 中国社会科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館『西安半坡』1963年
163. 中国社会科学院考古研究所・中国歴史博物館・山西省考古研究所『夏県東下馮』 1998年
164. 中国社会科学院考古研究所安徽工作隊「安徽蒙城尉遅寺遺址発掘簡報」『考古』第1期 1994年
165. 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1979 年安陽後崗遺址発掘報告」『考古学報』第1期 1985年
166. 中国社会科学院考古研究所安徽隊「安徽宿県小山口和古台寺遺址試掘簡報」『考古』第 12 期 1993年
167. 中国社会科学院考古研究所安徽隊「安徽宿県小山口和古台寺遺址試掘簡報」『考古』第 12 期 1993年
168. 中国社会科学院考古研究所安陽発掘隊「1971年安陽後崗発掘簡報」『考古』第3期 1972年
169. 中国社会科学院考古研究所河南一隊「1979年裴李崗遺址発掘簡報」『考古』第4期 1982年
170. 中国社会科学院考古研究所河南一隊「1979年裴李崗遺址発掘報告」『考古学報』第1期 1984年
171. 中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南汝州中山寨遺址試掘」『考古』第7期 1986年
172. 中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南汝州中山寨遺址」『考古学報』第1期 1991年
173. 中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南郟県水泉裴李崗文化遺址」『考古学報』第1期 1995年
174. 中国社会科学院考古研究所河南二隊・河南商邱地区文物管理委員会「河南永城王油坊遺址発掘報告」『考古学集刊』5 1987年
175. 中国社会科学院考古研究所湖北工作隊「湖北黄梅陸墩新石器時代墓葬」『考古』第6期 1991年
176. 中国社会科学院考古研究所湖北工作隊「湖北枝江県関廟山新石器時代遺址発掘簡報」『考古』第4期 1981年
177. 中国社会科学院考古研究所湖北工作隊「湖北枝江関廟山遺址第二次発掘」『考古』第1期 1983年
178. 中国社会科学院考古研究所山西工作隊「山西垣曲古文化遺址的調査」『考古』第10期 1985年
179. 中国社会科学院考古研究所山西工作隊「山西垣曲龍山崖遺址的両次発掘」『考古』第2期 1986年
180. 中国社会科学院考古研究所山西工作隊・山西臨汾地区文化局「陶寺遺址 1983－1984年Ⅲ区居住址発掘的主要収穫」『考古』第9期 1986年
181. 中国社会科学院考古研究所山西工作隊・臨汾地区文化局「山西襄汾県陶寺遺址発掘簡報」『考古』

第1期 1980年
182. 中国社会科学院考古研究所山西工作隊・臨汾地区文化局「1978-1980年山西襄汾県陶寺墓地発掘簡報」『考古』第1期 1983年
183. 中国社会科学院考古研究所山東工作隊「西夏侯遺址第二次発掘報告」『考古学報』第3期 1986年
184. 中国社会科学院考古研究所山東隊「山東曲阜西家侯遺址第一次発掘報告」『考古学報』第2期 1964年
185. 中国社会科学院考古研究所山東隊・烟台市文物管理委員会「山東牟平照格庄遺址」『考古学報』第4期 1986年
186. 中国社会科学院考古研究所山東隊・山東省膝県博物館「山東膝県北辛遺址発掘報告」『考古学報』第2期 1984年
187. 中国社会科学院考古研究所陝西隊「陝西臨潼白家村新石器時代遺址発掘簡報」『考古』第 11 期 1984年
188. 中国社会科学院考古研究所武功発掘隊「1981－1982年陝西武功県趙家来遺址発掘的主要収穫」『考古』第7期 1983年
189. 中国社会科学院考古研究所宝鶏工作隊「一九七七年宝鶏北首嶺遺址発掘簡報」『考古』第2期 1979年
190. 中国歴史博物館・中国社会科学院考古研究所東下馮考古隊・山西省文物工作委員会「山西夏県東下馮龍山文化遺址」『考古学報』第1期 1983年
191. 中国歴史博物館考古部・山西省考古研究所・垣曲県博物館「1982-1984年山西垣曲古城東関遺址発掘簡報」『文物』第6期 1986年
192. 中国歴史博物館考古部・山西省考古研究所・垣曲県博物館『垣曲古城東関』2001年
193. 長江流域規画弁公室考古隊河南分隊「河南淅川黄楝樹遺址発掘報告」『華夏考古』第3期 1990年
194. 鎮江市博物館「江蘇句容城頭山遺址試掘簡報」『考古』第4期 1985年
195. 鄭州市博物館「鄭州大何村遺址発掘報告」『考古学報』第3期 1979年
196. 鄭州市博物館「滎陽点軍台遺址 1980年発掘簡報」『中原文物』第4期 1982年
197. 鄭州市文物考古研究所『鄭州大河村』 2001年
198. 鄭州市文物工作隊・鄭州市大河村遺址博物館「鄭州大河村遺址 1983、1987年発掘報告」『考古学報』第1期 1996年
199. 鄭州市文物工作隊・鄭州市大河村遺址博物館「鄭州大河村遺址 1983、1987年発掘報告」『考古学報』第1期 1996年
200. 鄭州大学文博学院・開封市文物工作隊『豫東杞県発掘報告』 2000年
201. 傅斯年・李済・梁思永・董作兵・呉金鼎・郭宝鈞・劉嶼霞『城子崖』 1934年
202. 南京博物院「江蘇邳県四戸鎮大墩子遺址探掘報告」『考古学報』第2期 1964年
203. 南京博物院「江蘇呉県草鞋山遺址」『文物資料叢刊』3 1980年
204. 南京博物院「江蘇大墩子遺址第二次発掘」『考古学集刊』1 1981年
205. 南京博物院「蘇州草鞋山良渚文化墓葬」『東方文明之光』 1996年
206. 南京博物院・鎮江博物館「江蘇丹陽西溝居新石器時代遺址試掘」『考古』第5期 1994年
207. 南京博物院・昆山県文化館「江蘇昆山綽墩遺址的調査興発掘」『文物』第2期 1984年

208. 南京博物院・楊州博物館・高郵文管会「江蘇高郵周邨墩遺址発掘報告」『考古学報』第4期 1997年
209. 南京博物院・連雲港市博物館・灌雲県博物館「江蘇灌雲大尹山遺址 1986 年的発掘」『文物』第7期 1991年
210. 南京博物院考古研究所・揚州博物館・興化博物館「江蘇興化戴家舎南蕩遺址」『文物』第4期 1995年
211. 廖永民「大何村遺址的発掘与研究」『中原文物』第3期 1989年
212. 武漢大学歴史系考古教研室・黄岡地区博物館・麻城市革命博物館「湖北麻城栗山崗新石器時代遺址」『考古学報』第4期 1990年
213. 北京大学考古系・宝鶏市考古工作隊「陝西麟游県蔡家河遺址龍山遺存発掘報告」『考古与文物』第6期 2000年
214. 北京大学考古実習隊・煙台市博物館「栖霞楊家圈遺址発掘報告」『胶東考古』 2000年
215. 北京大学考古実習隊・昌楽県図書館「山東昌楽県鄒家庄遺址発掘簡報」『考古』第7期 1987年
216. 宝鶏市考古工作隊・陝西省考古研究所宝鶏工作站『宝鶏福臨堡』 1993年
217. 保定地区文物管理所・北京大学考古系・河北大学歴史系「河北徐水県南庄頭遺址試掘簡報」『考古』第11期 1992年
218. 羅家角考古隊「桐郷県羅家角遺址発掘報告」『浙江省文物考古所学刊』1981年
219. 洛陽博物館「洛陽挫季遺址試掘簡報」『考古』第1期 1978年
220. 陸耀華「浙江嘉興大墳遺址的清理」『文物』第7期 1991年
221. 李景「豫東商丘永城調査及造律台黒弧堆曹橋三處小発掘」『考古学報』2冊 1947年
222. 劉敦愿「日照両城鎮龍山文化遺址調査」『考古学報』第1期 1958年
223. 龍南遺址考古工作隊「江蘇呉江梅埝龍南遺址 1987年発掘紀要」『東南文化』第5期 1988年
224. 臨汝県博物館「河南臨汝中山寨遺址調査簡報」『考古』第6期 1986年
225. 連雲港市博物館「江蘇灌雲大尹山新石器時代遺址第一次発掘報告」『東南文化』第2期 1988年

加工具出土遺跡一覧

［凡例］
1．中国新石器時代の黄河・長江流域の加工具出土遺跡一覧である。
2．黄河下流域、黄河中流域、渭水流域、漢水上中流域、長江流域、華南地域の順に並べている。
3．磨盤、磨石、砥石、臼、磨棒、杵の出土遺跡を掲載した。
4．磨石や砥石には、磨盤とすべきものがあるため、それらもここで集成した。
　また、分類できるものには、○の横に分類名を記載した。
5．報告書に図や詳細な所見がない場合は、分類欄は空白している。ただし、出土が判断できる場合は、○と表記した。
6．足が付く磨盤には○足、赤色顔料の痕跡があるものには、○赤色と表記した。
7．文献は、報告書名と出版年、または雑誌名と出版年のみを記載した。

1．黄河下流域

番号	省名	県名	遺跡名	時期	磨盤	分類	磨石	分類	砥石	分類	臼	分類	磨棒	杵	文献
1	江蘇	邳県	大墩子	大汶口文化期									○	○	『考古学報』1964年第2期
2	江蘇	邳県	劉林	大汶口文化期					○				○		『考古学報』1962年第1期
3	江蘇	連雲港	大尹山	大汶口文化期併行	○	Cor D			○					○	『文物』1991年第7期
4	山東	莱陽	泉水頭	不明	○	不							○		『考古』1983年第3期
5	山東	安丘	峒峪	山東龍山文化期											『考古』1963年第10期
6	山東	威海	羲和	北辛文化期									○		『考古』1997年第5期
7	山東	濰坊	前埠下	後李文化期	○	A			○					○	『山東省高速公路考古報告集』2000年
				大汶口文化期	○	A	○				○		○		
8	山東	兗州	王因	北辛文化期	○	A	○						○		『山東王因』2000年
				大汶口文化期	○	A	○						○		
9	山東	煙台	白石村	白石村一期	○	A							○		『考古』1992年第7期
				白石村二期	○	A			○	B			○		『胶東考古』2000年
10	山東	黄県	乾山	新石器時代前期	○	不									『考古』1983年第3期
11	山東	莒県	大朱家	大汶口文化中期					○						『考古学報』1991年第2期
12	山東	煙台	邱家庄	邱家庄類型	○	A							○		『考古』1997年第5期
13	山東	煙台	毓璜頂	邱家庄類型									○		『史前研究』1987年第2期
14	山東	胶県	三里河	大汶口文化期					○						『胶県三里河』1998年
15	山東	済南	田家庄	北辛文化期									○		『華夏考古』2000年第2期
16	山東	済南	西郊	大汶口文化期	○	不							○		『考古』1981年第1期
17	山東	章丘	西河	新石器時代早期	○	A							○		『考古』2000年第10期
18	山東	鄒平	西南庄	大汶口文化期	○	A							○		『考古与文物』1992年第2期
19	山東	即墨	姜家馬坪	山東龍山文化期			○								『考古』1989年第8期
20	山東	泰安	大汶口	北辛文化期	○	A			○				○		『大汶口続集』1997年
				大汶口文化期					○						
				大汶口文化期									○		『大汶口』1974年
21	山東	張山	張山	北辛文化期	○	A	○						○		『考古』1996年第4期
22	山東	棗庄	建新	大汶口文化期					○				○		『棗庄建新』1996年

23	山東	棗庄	紅土埠	大汶口文化期									○		『考古』1984年第4期
24	山東	乳山	翁家埠	大汶口文化期									○		『考古』1992年第12期
25	山東	乳山	北斜山	大汶口文化期									○		『考古』1992年第12期
26	山東	乳山	小疃	大汶口文化期									○		『考古』1992年第12期
27	山東	蓬莱	大仲家	邱家庄類型									○		『考古』1997年第5期
28	山東	歴城	城子崖	山東龍山文化期	○	C			○						『城子崖』1934年
29	山東	海陽	蛸岔埠	大汶文化期	○								○		『考古』1985年第12期
30	山東	海陽	城子頂	山東龍山文化期	○	不									『考古』1985年第12期
31	山東	海陽	大榆村	山東龍山文化期									○		『考古』1985年第12期
32	山東	海陽	司馬台	山東龍山文化期					○				○		『考古』1985年第12期
33	山東	海陽	廟埠	大汶文化期	○	A			○		○		○		『考古』1985年第12期
34	山東	曲阜	曲阜	山東龍山文化期									○		『考古』1965年第12期
35	山東	章丘	小荊山	後李文化期	○	A							○		『考古』1994年第6期
				後李文化期	○	A	○				○		○		『華夏考古』1996年第2期
36	山東	即墨	北阡	大汶口文化期					○					○	『考古』1981年第1期
37	山東	即墨	東演堤	大汶口文化期										○	『考古』1981年第1期
38	山東	即墨	南阡	大汶口文化期					○					○	『考古』1981年第1期
39	山東	費県	固子	山東龍山文化期									○		『考古』1986年第11期
40	山東	牟平	照格庄	山東龍山文化期					○？	B					『考古学報』1986年第4期
									孔						
41	山東	泗水	尹家城	山東龍山文化期			○	BorC					○	○	『泗水尹家城』1990年
42	山東	滕県	北辛	北辛文化期	○	A							○		『考古』1980年第1期
					○足	A									
				北辛文化期	○	A	○						○		『考古学報』1984年第2期
43	山東	鄒県	野店	大汶口文化期M	○	B			○				○		『鄒県野店』1985年
44	山東	鄒平	苑城	北辛文化期	○	A							○		『考古』1989年第6期

2．黄河中流域

番号	省名	県名	遺跡名	時期	磨盤	分類	磨石	分類	砥石	分類	臼	分類	磨棒	杵	文献
1	北京	北京	鎮江営	磁山併行	○	A orB							○		『鎮江営与塔照』1999年
				仰韶文化期併行	○	A							○		
				龍山文化期併行	○								○		
2	北京	平谷	上宅	仰韶文化後崗類型期	○	A							○		『文物』1989年第8期
3	北京	平谷	北埝頭	磁山～仰韶文化期	○	A							○	○	『文物』1989年第8期
4	河北	武安	牛洼堡	磁山文化期									○		『考古』1984年第1期
5	河北	武安	西万年	仰韶文化後崗類型期	○	A？			○					○	『考古』1984年第1期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	磨盤	分類	磨石	分類	砥石	分類	臼	分類	磨棒	杵	文献
6	河北	武安	磁山	磁山文化期	○足	A							○		『考古学報』1981年第3期
					○	A									
				磁山文化期	○足	A			○				○		『考古』1977年第6期
					○	A									
7	河北	磁県	下藩汪	仰韶文化期										○	『考古学報』1975年第1期
				龍山文化期									○		
8	河北	容城	上坡	磁山文化期併行	○	A							○		『考古』1999年第7期
9	河北	容城	北庄	磁山文化期	○	A							○		『文物春秋』1996年第2期
10	河北	三河	孟各庄	仰韶文化後崗類型期	○	A							○		『考古』1983年第5期
11	河北	三河	劉白塔	仰韶文化前期？	○	A							○		『考古』1995年第8期
12	河北	懐来	馬站	龍山文化期										○	『考古』1988年第8期
13	河北	崇純	石嘴子	龍山雪山二期	○	A							○		『考古』1992年第2期
14	河北	徐水	南庄頭	磁山文化期	○	B							○		『考古』1992年第11期
15	河北	承徳	白河南	新石器時代後期	○	?							○		『考古』1992年第6期
16	河北	承徳	娘娘廟	新石器時代後期	○	A							○		『考古』1992年第6期
17	河北	邯鄲	潤溝	龍山文化期	研磨器										『考古』1961年第4期
18	河北	永年	石北口	仰韶文化期	○	A							○		『河北省考古文集』1998年
					○	B									
19	河北	永年	台口村	龍山文化期										○	『考古』1962年第12期
20	河北	易県	北福地	磁山文化期併行	○	A							○		『考古学報』1988年第4期
21	河南	鞏県	鉄生溝	裴李崗文化期	○足	A							○		『文物』1980年第5期
22	河南	鞏県	水地河	裴李崗文化期	○足	A									『考古』1990年第11期
23	河南	鞏義	瓦窯嘴	裴李崗文化期									○		『考古』1996年第7期
24	河南	淅川	黄楝樹	屈家嶺文化期					○		○	E		○臼共伴	『華夏考古』1990年第3期
25	河南	淅川	下王崗	仰韶文化期	○	A							○		『淅川下王崗』1989年
26	河南	孟津	小潘溝	龍山文化期										○	『考古』1978年第4期
27	河南	孟県	西後津	龍山文化期										○	『中原文物』1984年第4期
28	河南	密県	莪崗北崗	裴李崗文化期	○足	A							○		『文物』1979年第5期
29	河南	方城	大張庄	裴李崗文化期					○ 両面				○		『考古』1983年第5期
30	河南	舞陽	賈湖	裴李崗文化期	○足	A							○		『文物』1989年第1期
				裴李崗文化期	○	A			○				○		『華夏考古』1988年第2期
				裴李崗文化期	○	A			○				○		『舞陽賈湖』1999年
31	河南	湯陰	白営	龍山文化期	○	A					○	E		○	『考古』1980年第3期
32	河南	登封	王城崗	龍山文化期					○					○	『登封王城崗興陽城』1992年
33	河南	鄭州	馬庄	龍山文化期										○	『中原文物』1982年第4期
34	河南	長葛	石固	裴李崗文化期	○	A									『華夏考古』1987年第1期
35	河南	新鄭	唐戸	裴李崗文化期	○足	A							○		『考古』1979年第3期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	磨盤	分類	磨石	分類	砥石	分類	臼	分類	磨棒	杵	文献
36	河南	新鄭	西土橋	裴李崗文化期	○足	A							○		『考古』1979年第3期
37	河南	新鄭	沙窩季	裴李崗文化期	○足	A	○						○		『考古』1983年第12期
38	河南	新鄭	裴李崗	裴李崗文化期	○足	A	○						○		『考古学報』1984年第1期
				裴李崗文化期	○足	A							○		『考古』1982年第4期
				裴李崗文化期	○足	A							○		『考古』1979年第3期
					○	A									『考古』1979年第3期
				裴李崗文化期	○足	A	○						○		『考古』1978年第2期
					○	A									
39	河南	商丘	造律台	龍山文化期	○	A							○		『考古学報』1947年2冊
40	河南	恐義	北営	裴李崗文化期									○		『中原文物』1992年第4期
41	河南	恐義	東山原	裴李崗文化期	○足	A							○		『中原文物』1992年第4期
42	河南	靈宝	北陽平	仰韶文化廟底溝類型期併行										○	『考古』1999年第12期
43	河南	臨汝	安溝	裴李崗文化期									○		『中原文物』1985年第4期
44	河南	臨汝	槐樹陰	裴李崗文化期									○		『中原文物』1985年第4期
45	河南	臨汝	中山寨	裴李崗文化期									○		『中原文物』1985年第4期
				裴李崗文化期	○	A							○		『考古学報』1991年第1期
				仰韶文化秦王寨類型期	○	A							○磨盤共伴		
				裴李崗文化期	○	A							○		『考古』1986年第7期
				仰韶文化期	○								○		
46	河南	臨汝	季桜	龍山文化期	○				○				○	○	『考古学報』1994年第1期
47	河南	洛陽	高崖	裴李崗文化期	○足	A									『華夏考古』1996年第4期
48	河南	孟津	寨板	裴李崗文化期	○	A							○		『黄河小浪底水庫考古報告
49	河南	密県	青石河	裴李崗文化期	○足	A									『考古』1979年第3期
50	河南	密県	莪溝	裴李崗文化期	○足	A							○		『考古』1979年第3期
51	河南	密県	城東北角	裴李崗文化期	○足	A									『考古』1979年第3期
52	河南	密県	馬良溝	裴李崗文化期	○足	A							○		『考古』1981年第3期
53	河南	舞陽	賈湖	裴李崗文化期	○										『中原文物』1983年第1期
54	河南	登封	八方	仰韶文化期									○		『華夏考古』1992年第2期
55	河南	中牟	業王	裴李崗文化期	○足	A							○		『考古』1979年第3期
56	河南	登封	東崗嶺	裴李崗文化期	○足	A									『考古』1979年第3期
57	河南	長葛	石固	裴李崗文化期	○足	A							○		『中原文物』1982年第1期
58	河南	陝県	廟底溝	仰韶文化廟底溝類型期	○赤色	B									『廟底溝与三里橋』1959年
				仰韶文化廟底溝類型期	○	C									
				龍山文化期	○?									○	
59	河南	信陽	孫砦	龍山文化期					○						『華夏考古』1989年第2期

60	河南	新鄭	沙窩李	裴李崗文化期	○足	A									○			『中原文物』1982年第2期
61	河南	新安	西沃	龍山文化期							○							『黄河小浪底水庫考古報告
62	河南	済源	留庄	龍山文化期							○				○			『黄河小浪底水庫考古報告
63	河南	郟県	水泉	裴李崗文化期	○	A	○				○				○			『考古学報』1995年第1期
					○足	A												
				裴李崗文化期	○	A									○			『考古』1992年第10期
					○足	A												
				裴李崗文化期	○足	A									○			『考古』1979年第6期
64	河南	淇県	花窩	裴李崗文化期											○			『考古』1981年第3期
65	河南	安陽	後崗	仰韶文化期	○	A									○			『考古』1982年第6期
				龍山文化期	○	A	○					○	E				○	『考古学報』1985年第1期
66	安徽	宿県	小山口	新石器早期	○	A									○			『考古』1993年第12期
67	山西	襄汾	陶寺	龍山文化期	○	F									○			『考古』1983年第1期
68	山西	定襄	西社村	龍山文化期	○	F											○	『考古』1987年第11期
69	山西	芮城	東庄村	仰韶文化廟底溝類型期													○	『考古学報』1973年第1期
70	山西	侯馬	褚村	廟底溝二期文化期	○													『文物季刊』1993年第2期
71	山西	垣曲	東関	仰韶文化前期											○			『文物』1995年第7期

3．渭水流域

番号	省名	県名	遺跡名	時期	磨盤	分類	磨石	分類	砥石	分類	臼	分類	磨棒	杵	文献
1	陝西	西安	半坡	仰韶文化期	○								○		『西安半坡』1963年
2	陝西	藍田	泄湖	仰韶文化半坡類型期		B	○								『考古学報』1991年第4期
				仰韶文化西王村類型期									○		
3	陝西	臨城	北台	仰韶文化前期									○		『考古与文物』1994年第2期
4	陝西	宝鶏	第四中学校園内	仰韶文化期	○	不							○		『考古』1959年第5期
5	陝西	宝鶏	紙坊頭												『文物』1989年第5期
6	陝西	宝鶏	福臨堡	仰韶文化前期			○								『宝鶏福臨堡—新石器時代遺址発掘報告』1993年
				仰韶文化廟底溝類型期	○	B									
				仰韶文化西王村類型期	○	B	○							○	
7	陝西	宝鶏	北首嶺	仰韶文化期			○赤色？						○		『考古』1979年第2期
				仰韶文化期墓葬	○	A	○		○						『宝鶏北首嶺』1983年
					○赤色	A									
					○赤色	B									
					○赤色	C									
8	陝西	臨潼	白家村	白家村文化期									○		『考古』1984年第11期
				白家村文化期	○	A							○	○	『臨潼白家村』1994年

9	陝西	臨潼	姜寨	仰韶文化半坡類型期	○	A					○ 赤色	C	○			『姜寨』1988年
				仰韶文化半坡類型期		B										
				仰韶文化西王村類型期		B							○	○		
				客省庄二期文化期										○		
10	陝西	臨潼	康家	客省庄二期文化期									○	○		『考古与文物』1992年第4期
				客省庄二期文化期									○			『史前研究』1985年第1期
11	陝西	渭南	史家	仰韶文化史家類型期	○	不	○									『考古』1978年第1期
12	陝西	渭南	北劉	白家村文化期					○				○			『考古与文物』1982年第4期
				仰韶文化廟底溝類型期	○ 小型	B							○			『史前研究』1986年第1・2期
13	陝西	鳳翔	大辛村	客省庄二期文化期									○			『考古与文物』1985年第1期
14	陝西	黄龍	南溝	客省庄二期文化期	○	B							○			『考古与文物』1989年第1期
15	陝西	千陽	望魯台	仰韶～龍山文化早期										○		『考古与文物』1996年第1期
16	陝西	長安	客省庄	客省庄二期文化期		B			○							『灃西発掘報告』1962年
17	陝西	武功	游西庄	廟底溝二期文化期	○	A	○									『武功発掘報告』1988年
18	陝西	武功	趙家来	客省庄二期文化期		C										『武功発掘報告』1988年
19	陝西	綏徳	小官道	客省庄二期文化期												『考古与文物』1983年第5期

4．漢水上中流域

番号	省名	県名	遺跡名	時期	磨盤	分類	磨石	分類	砥石	分類	臼	分類	磨棒	杵	文献
1	陝西	安康	張家壩	仰韶文化期										○	『考古』1983年第6期
2	陝西	漢陰	阮家壩	李家村文化期	○	A	○						○		『陝南考古報告集』1994年
				李家村文化期	○	B									
				半坡類型	○	A									
3	陝西	西郷	何家湾	李家村文化期										○	『陝南考古報告集』1994年
				半坡類型早期	○ 赤色										
				半坡類型中期	○	A							○	○	
				半坡類型晩期	○	A							○		
				廟底溝類型	○	不							○		
4	陝西	西郷	李家村	李家村文化期	○	B							○		『陝南考古報告集』1994年
5	陝西	南鄭	龍崗寺	仰韶文化半坡類型期	○	A	○						○	○	『龍崗寺一新石器時代遺址発掘報告』1990年
				仰韶文化半坡類型期M		B	○		○				○		
6	陝西	紫陽	馬家営	李家村文化期	○	A									『陝南考古報告集』1994年
				李家村文化期	○	B									
				仰韶文化半坡類型期	○	A	○							○	
					○	B									
7	陝西	紫陽	白馬石	李家村文化期			○							○	『陝南考古報告集』1994年

5．長江流域

番号	省名	県名	遺跡名	時期	磨盤	分類	磨石	分類	砥石	分類	臼	分類	磨棒	杵	文献
1	湖南	黔陽	高廟	7400ＢＰ	○	A			○				○		『文物』2000年第4期
2	湖南	長沙	大塘	大溪文化早期併行					○？						『湖南考古輯刊』1989年第5輯
3	湖南	津市	欧家台	屈家嶺文化期		A			○	B					『考古』1990年第1期
4	湖南	澧県	丁家崗	大溪文化前期	○？	B			○ 両面						『湖南考古輯刊』1982年第1輯
5	湖北	麻城	栗山崗	石家河文化期					○？	A					『考古学報』1990年第4期
6	湖北	宜昌	中堡島	大溪文化期					○？						『考古学報』1987年第1期
				屈家嶺文化期	○	A			○C						『考古』1996年第9期
7	湖北	京山	朱家咀	石家河文化早期					○？	A					『考古』1964年第6期
8	湖北	洪湖	烏林磯	石家河文化期					○				○		『考古』1985年第5期
9	湖北	秭帰	柳林溪	城背溪文化近似					○C						『考古』2000年第8期
				早大溪文化期	○	D							○		『江漢考古』1994年第1期
10	湖北	長陽	桅杆坪	新石器時代					○？						『考古』1988年第6期
11	湖北	武穴	鼓山	屈家嶺文化期					○						『武穴鼓山－新石器時代墓地発
12	湖北	均県	朱家台	仰韶文化期	○ 赤色								○ 赤色		『考古学報』1989年第1期
13	湖北	枝江	関廟山	大溪文化期										○	『考古』1983年第1期
14	湖北	石家河	肖家屋背	石家河文化期					○						『肖家屋背』1999年
15	安徽	溪	石山子	6900ＢＰ							○	D		○	『考古』1992年第3期
16	安徽	黄山	蒋家山	新石器時代中後期					○						『考古』1995年第2期
17	安徽	望江	汪洋廟	薛家崗三期併行及び良渚文化期併行					○						『考古学報』1986年第1期
18	江蘇	常州	圩墩	馬家浜文化期										○木	『考古』1978年第4期
19	江蘇	張家港	徐家湾	崧沢文化期					○						『考古学報』1995年第3期
20	江蘇	常熟	銭底巷	崧沢文化期									○		『考古学報』1996年第4期
21	江蘇	武進	烏墩	崧沢文化期					○						『通古達今之路寧瀘高速公路（江蘇段）考古発掘報告集』
22	江蘇	海安	青墩	崧沢文化期					○						『考古学報』1983年第2期
23	南京	南京	北陰陽営	北陰陽営文化期	○	A								○	『北陰陽営』1993年
24	上海	青浦	福泉山	崧沢文化期					○						『考古学報』1990年第3期
25	上海	青浦	福泉山	崧沢文化期					○						『福泉山－新石器時代遺址発掘
26	上海	松江	広富林	新石器時代後期					○						『考古』1962年
27	浙江	杭州	水田畈	良渚文化期										○木	『考古学報』1960年第2期
28	浙江	呉興	銭山漾	良渚文化期？					○					○木	『考古学報』1960年第2期
29	浙江	嘉興	双橋	崧沢文化期							○ 土器				『浙江省文物考古所学刊』1993年
				良渚文化期							○ 土器				
30	浙江	象山	塔山	河姆渡文化期					○						『浙江省文物考古所学刊』1997

			新石器時代後期			○		○							年
31	浙江	余姚	鯀架山	良渚文化期併行				○							『考古』1997年第1期
32	浙江	余姚	河姆渡	河姆渡文化期										○木	『文物』1980年第5期
33	浙江	蕭山	跨湖橋	新石器時代早期									○木		『浙江省文物考古所学刊』1997

6．華南地域

番号	省名	県名	遺跡名	時期	磨盤	分類	磨石	分類	砥石	分類	臼	分類	磨棒	杵	文献
	福建	武平	古遺跡	新石器時代									○		『考古学報』1954年8冊
	福建	龍岩	古遺跡	新石器時代							○				『考古学報』1954年8冊
	江西	南昌	奉新山	新石器時代後期									○		『考古』1963年第1期
	江西	新余	拾年山	薛家崗三期併行					○？				○		『考古学報』1991年第3期
	江西	清江	筑衛城	新石器時代後期			○								『考古』1976年第6期
	四川	巫山	魏家梁子	2700－2000ＢＰ	○		○							○	『考古』1996年第8期
	四川	南部	涌泉壩	新石器時代										○	『考古』1983年第6期
	四川	南充	明家嘴	新石器時代										○	『考古』1983年第6期
	四川	閬中	藍家壩	新石器時代										○	『考古』1983年第6期
	広西	欽州	独料	新石器時代	○	不								○	『考古』1982年第1期
	広西	南寧	豹子頭	新石器時代後期									○	○	『考古』1975年第5期
	広西	横県	江口	新石器時代中期					○				○	○	『考古』2000年第1期
	広東	広州	菱塘崗	新石器時代	○ 砥石	A			○？						『考古学報』1960年第2期

蒸具出土遺跡一覧

[凡例]
1．中国新石器時代の黄河・長江流域の蒸具出土遺跡一覧である。
2．甑出土遺跡一覧、甗出土遺跡一覧の順で並べている。
3．甑出土遺跡一覧は、黄河下流域、黄河中流域、渭水流域、漢水上中流域、長江下流域、長江中流域の順で並べた。
4．甗出土遺跡一覧は、長江下流域、黄河下流域、黄河中流域の順で並べた。
5．甑出土遺跡一覧は、時期の後に甑の分類、さらに有孔型甑の場合は、蒸気孔位置の分類、蒸気孔形態の分類を記載した。
6．甗出土遺跡一覧は、時期の後に甗の分類、さらに結合型甗の場合は、煮沸部形態、スノコ支えの突帯の有無を記載した。
7．報告書に図や詳細な所見がない場合は、分類欄は空白にしている。
8．文献は、報告書名と出版年、または掲載雑誌名と出版年のみを記載した。

一．甑出土遺跡一覧

1．黄河下流域

大汶口文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	安徽	蒙城	尉遲寺	大汶口文化後期	有孔型	I	A1		『考古』1994年第1期
				大汶口文化期	有孔型	I	A1		『考古』1993年第11期
2	山東	曲阜	西夏侯	大汶口文化期	有孔型	I	A1		『考古学報』1964年第2期
				大汶口文化期	有孔型	I	A1		『考古』1965年第12期
3	山東	曲阜	店北頭	大汶口文化期	有孔型	I	A2		『考古』1965年第12期
4	山東	曲阜	南興埠	大汶口文化後期	有孔型	I	A1		『考古』1984年第12期
5	江蘇	淮安	青蓮崗	大汶口文化期	有孔型	I	A1		『考古学報』9冊
6	山東	兗州	六里井	大汶口文化中後期	有孔型	I	A1		『兗州六里井』1999年
7	山東	棗庄	建新	大汶口文化期	有孔型			耳下部不明	『棗庄建新』1996年

山東龍山文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	山東	曹県	辛冢集	山東龍山文化期	有孔型	I	A1		『考古』1980年第5期
2	山東	済寧	程子崖	山東龍山文化期	有孔型	I	A1		『文物』1991年第7期
					有孔型	III	—		
3	山東	兗州	西呉寺	山東龍山文化期	有孔型				『兗州西呉寺』1990年
					有孔型	III	—		

2．黄河中流域

裴李崗文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	河南	舞陽	賈湖	裴李崗文化期	有孔型	Ⅰ			『舞陽賈湖』1999年
					有孔型	Ⅱ異		甕棺に利用	
					有孔型				
2	河南	長葛	石固	裴李崗文化期	有孔型	Ⅰ			『華夏考古』1987年第1期
3	河南	密県	馬良溝	裴李崗文化期	有孔型	Ⅰ			『考古』1981年第3期
4	河南	密県	莪溝北崗	裴李崗文化期	有孔型	Ⅰ			『考古学集刊』1輯
5	河南	新鄭	裴李崗	裴李崗文化期	有孔型	Ⅰ		詳細不明	『考古学報』1984年第1期

仰韶文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	河南	汝州	中山寨	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ			『考古学報』1991年第1期
2	河南	駐馬店市	党楼	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ			『考古』1996年第5期
3	河南	鄭州市	大河村	仰韶文化期	有孔型	Ⅱ	C２		『鄭州大河村』2001年
				仰韶文化期	有孔型	Ⅱ	Ⅰ		『考古』1995年第6期
					有孔型	Ⅱ	A		
4	河南	登封	潁陽	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	B１		『考古』1995年第6期
5	河南	済源	長泉	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	F１		『黄河小浪底水庫考古報告（一）』1999年
6	河南	新安	麻峪	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	Ⅰ		『黄河小浪底水庫考古報告（一）』1999年
					有孔型	Ⅰ	C２		
7	河南	新安	槐林	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	B１		『黄河小浪底水庫考古報告（一）』1999年
					有孔型	Ⅱ	H’	土鈴の可能性	
8	河南	陝県	廟底溝	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	不整形		『廟底溝与三里橋』1959年
					有孔型	Ⅰ	B１		
					有孔型	Ⅰ	C		
9	河南	鄭州	西山	仰韶文化期	有孔型	Ⅱ	A１		『文物』1999年第7期
10	河南	羅山	李上湾	仰韶文化期	有孔型	（Ⅱ）	A		『華夏考古』2000年第3期
11	河北	磁県	下潘王	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ			『考古学報』1975年第1期
12	河北	平山	中賈壁	仰韶文化後期	有孔型	Ⅰ	Ⅰ		『考古』1993年第4期
13	河北	武安	超窯	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	H		『考古学報』1992年第3期
14	河北	永年	石北口	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	H’		『河北考古文集』1998年
					有孔型	Ⅰ	A１		
15	河北	容城	午方	仰韶文化後期	有孔型	Ⅰ	A１		『考古学集刊』5輯1987年

16	山西	垣曲	東関	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	B１	把手２	『文物』1986年第6期
17	山西	聞喜	南白石	仰韶文化期	有孔型				『考古』1990年第3期
18	山西	槐廓	東庄村	仰韶文化期	有孔型				『考古学報』1973年第1期
19	山西	河津	固鎮	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	B		『三晋考古（二）』1996年
20	山西	洪洞	耿壁	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	C２		『三晋考古（二）』1996年
21	山西	夏県	西陰村	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	BorC		『三晋考古（二）』1996年
					有孔型	Ⅰ	F２		
22	山西	垣曲	豊村	仰韶文化後期	有孔型	Ⅰ	F１		『考古学集刊』5輯1987年

龍山文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	河北	磁県	下潘王	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A１	把手２	『考古学報』1975年第1期
2	河北	崇礼	高家営子	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A１		『考古』1959年第7期
3	河北	永年	台口村	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A１	把手２	『考古』1962年第12期
4	河南	安陽	後岡1979	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	C		『考古学報』1985年第1期
5	河南	安陽	大寒村	龍山文化期	有孔型	Ⅱ？	B１		『考古学報』1990年第1期
6	河南	伊川	白川	龍山文化後期	有孔型	Ⅱ	D２		『中原文物』1982年第3期
					有孔型	Ⅱ	D２	圏足	
7	河南	禹州	瓦店	龍山文化期	有孔型	Ⅱ		圏足	『文物』1983年第3期
				龍山文化期	筒型			甕棺	『考古』2002年第2期
				龍山文化期	有孔型	Ⅱ	C１		『考古』2000年第2期
					有孔型	Ⅰ	A１		
8	河南	禹州	連桜	龍山文化後期	有孔型	Ⅰ	D２		『考古』1991年第2期
9	河南	永城	王油坊	龍山文化王油坊類型期	有孔型	Ⅰ	C１		『考古』1978年第1期
				龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A１		『考古学集刊』5輯1987年
					有孔型	Ⅱ	F		
10	河南	偃師	灰嘴	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	D２		『華夏考古』1990年第1期
11	河南	欒川	合峪	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A		『考古』1964年第3期
12	河南	恐義	寺院溝	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	C２orD２	圏足	『中原文物』1992年第4期
13	河南	輝県	孟庄	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	D１	圏足	『考古』2000年第3期
					有孔型	Ⅰ	D１		
14	河南	固始	平寨古城	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	H		『考古学報』2000年第3期
15	河南	恐義	里溝	龍山文化前期	有孔型	Ⅱ	A２	把手２	『考古』1995年第6期
16	河南	済源	苗店	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	BorC		『考古与文物』1990年第6期
17	河南	滎陽	河王	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	D２		『考古』1961年第2期
18	河南	滎陽	点軍台	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	C１		『中原文物』1982年第4期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
					有孔型	Ⅱ	A1		
19	河南	杞県	後段	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A		『豫東杞県発掘報告』2000年
20	河南	杞県	鹿台崗	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A1		『豫東杞県発掘報告』2000年
21	河南	済源	留庄	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A?		『豫東杞県発掘報告』2000年
22	河南	商丘	塢墻	龍山文化期	有孔型	Ⅱ			『考古』1983年第2期
23	河南	新安	西沃	廟底溝二期文化期	有孔型	Ⅱ			『黄河小浪底水庫考古報告（一）』1999年
				龍山文化後期	有孔型	Ⅱ	D2		
24	河南	淅川	黄楝樹	屈家嶺文化期	有孔型	Ⅰ	C2	圏足	『華夏考古』1990年第3期
				龍山文化期	有孔型	Ⅰ	G2	圏足	
25	河南	陝県	三里橋	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A1		『廟底溝与三里橋』1959年
26	河南	駐馬店	楊庄	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	D2		『考古』1995年第10
27	河南	鄭州	田王村	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	C2		『考古学報』1958年第3期
				龍山文化期	有孔型	Ⅱ			
28	河南	鄭州	牛砦	龍山文化期	有孔型	Ⅱ		側面孔は長方形	『考古学報』1958年第4期
29	河南	鄭州	馬庄	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	D2	圏足	『中原文物』1982年第4期
30	河南	鄭州	閻庄	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	BorC		『中原文物』1982年第3期
31	河南	鄭州	大河村	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A2	把手	『考古学報』1979年第3期
32	河南	鄭州	站馬屯	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A		『華夏考古』1987年第2期
					有孔型	Ⅱ	C2		
					有孔型	Ⅱ	A1		
33	河南	鄭州	二里崗	龍山文化期	有孔型	Ⅱ			『考古学報』8冊1954年
34	河南	鄧州	穰東	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	D?		『華夏考古』1999年第2期
35	河南	登封	王城崗	龍山文化期	有孔型	Ⅱ			『文物』1983年第3期
				龍山文化期	有孔型	Ⅱ	D2	圏足	『登封王城崗與陽城』1992年
					有孔型	Ⅱ	D	圏足	
					有孔型	Ⅱ	D2		
					有孔型	Ⅱ	D		
					有孔型	Ⅱ	D1	環把手2、圏足	
36	河南	泌陽	三所楼	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A		『考古』1965年第9期
37	河南	泌陽	荊樹墳	龍山文化期	有孔型	Ⅰ			『考古』1965年第9期
38	河南	登封	程窯	龍山文化後期	有孔型	Ⅱ			『中原文物』1982年第2期
39	河南	武陟	大司馬	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	C2		『考古』1994年第4期
40	河南	武陟	東石寺	龍山文化期	不明				『考古』1990年第3期
41	河南	密県	新砦	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A1		『考古』1981年第5期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
42	河南	孟県	西後津	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A	圏足	『中原文物』1984年第4期
43	河南	孟津	小潘溝	龍山文化後期	有孔型				『考古』1978年第4期
44	河南	湯陰	白営	龍山文化後期	有孔型	Ⅰ	A1		『考古学集刊』3輯1983年
				龍山文化後期	有孔型	Ⅱ	A1		『考古』1980年第3期
45	河南	洛陽	矬李	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	C2	圏足	『考古』1978年第1期
				龍山文化後期	有孔型	Ⅱ	C2		
46	河南	洛陽	西干溝	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	C2		『洛陽発掘報告』1989年
				龍山文化期	有孔型	Ⅱ	D?		
47	河南	洛陽	西呂廟	龍山文化中期	有孔型	Ⅱ		圏足	『中原文物』1982年第3期
				龍山文化後期	有孔型	Ⅱ	B1		
48	河南	洛陽	吉利東楊村	龍山文化中期	有孔型	Ⅰ	BorC		『考古』1983年第2期
49	河南	臨汝	北劉庄	龍山文化期	有孔型	Ⅰ			『華夏考古』1990年第2期
50	河南	臨汝	煤山	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	F2	圏足	『考古学報』1982年第4期
					有孔型	Ⅱ	H'		
					有孔型	Ⅱ			
				龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A1	圏足	『考古』1975年第5期
				龍山文化期	有孔型				『華夏考古』1991年第3期
51	河南	瘦右	間口	龍山文化前期	有孔型	Ⅰ			『華夏考古』1989年第4期
52	河南	商丘	黒堌堆	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A1		『考古』1981年第5期
53	江蘇	高郵	周邨墩	山東龍山文化期	有孔型	Ⅰ			『考古学報』1997年第4期
54	山西	夏県	東下馮	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A1	鬲	『考古学報』1983年第1期
55	山西	垣曲	東関	龍山文化前期	有孔型	Ⅱ	A1		『三晋考古（二）』1996年
					有孔型	Ⅱ	C		
					有孔型	Ⅱ	C2		
				龍山文化期	有孔型	Ⅱ			『文物』1986年第6期
56	山西	垣曲	龍王崖	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	C2	鬲・釜灶	『考古』1986年第2期
					有孔型	Ⅱ		鬲・釜灶	
57	山西	曲沃	東許	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A1		『三晋考古（二）』1996年
58	山西	曲沃	方城	龍山文化陶寺類型期	有孔型	Ⅰ	A1	鬲	『考古』1988年第4期
59	山西	定襄	西社村	龍山文化期	不明				『考古』1987年第11期
60	山西	長治	小神	龍山文化陶寺類型期	有孔型	Ⅰ	A1		『考古学報』1996年第1期
61	山西	太谷	白燕第一地点	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	H'		『文物』1989年第3期
					有孔型	Ⅰ	A1		
					有孔型				

62	山西	襄汾	陶寺	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A１	把手２、釜灶	『考古』1980年第1期
63	山西	洪洞	侯村	龍山文化陶寺類型期	有孔型	Ⅰ	A１		『三晋考古（二）』1996年
64	山西	翼城	南石	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A１		『三晋考古（二）』1996年
65	山西	汾陽	峪道河	龍山文化期	有孔型	Ⅰ	A１		『考古』1983年第11期
66	山西	汾陽	杏花村	客省庄二期文化期	有孔型	Ⅰ	A１		『晋中考古』1998年
67	山西	汾陽	宏寺	龍山文化後期	有孔型	Ⅰ	A１		『文物季刊』1996年第2期
68	山西	離石	喬家溝	客省庄二期文化期	有孔型	Ⅰ	A１		『晋中考古』1998年
69	山西	芮城	南礼教村	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A１		『考古』1964年第6期
70	山西	垣曲	豊村	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	C１		『考古学集刊』5輯1987年
					有孔型	Ⅱ	A		

３．渭水流域

仰韶文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	陝西	合陽	呉家営	仰韶文化史家類型期	有孔型	Ⅰ	B１		『考古与文物』1990年第6期
2	陝西	渭南	北劉	仰韶文化廟底溝期	有孔型	Ⅰ	C１orB１	灶	『考古』1982年第4期
3	陝西	風翔	董家庄	仰韶文化半坡類型後期	有孔型	Ⅰ	B１	灶	『考古』1991年第11期
4	陝西	西安	半坡	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	H		『西安半坡』1963年
					有孔型	Ⅰ	E１		
5	陝西	宝鶏	北首嶺	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	H		『宝鶏北首嶺』1983年
6	陝西	宝鶏	福臨堡	仰韶文化廟底溝期	有孔型	Ⅰ？	A１		『宝鶏福臨堡』1993年
				仰韶文化後期	有孔型	Ⅰ	A１	把手２	
					有孔型	Ⅰ	B１		
					有孔型	Ⅰ	C		
					有孔型	Ⅰ	C２		
					有孔型	Ⅰ	F1		
					有孔型	Ⅰ	F２	把手２	
					有孔型	Ⅰ	I		
7	陝西	扶風	案板	仰韶文化西王村類型期	有孔型	Ⅰ	A１	把手２	『扶風案板遺址発掘報告』2000年
					有孔型	Ⅰ	BorC	把手２	
					有孔型	Ⅰ	C２		
8	陝西	華陰	南城子	仰韶文化廟底溝類型期	有孔型	Ⅰ	A１	釜・灶	『考古』1984年第6期
9	陝西	眉県	白家村	仰韶文化期	有孔型	Ⅰ	C２	把手２	『考古与文物』1996年第6期
					有孔型	Ⅰ	B２	把手２	

10	陝西	臨潼	姜寨	仰韶文化半坡類型期	有孔型	I	A 1		『姜寨』1988年
					有孔型	I	B 1	甕蓋として利用	
					有孔型	I	C 1		
					有孔型	I	C 2		
					有孔型	I	H'		
				仰韶文化史家類型期	有孔型	I	A 1		
					有孔型	I	C 1		
					有孔型	I	C 2		
				仰韶文化後期	有孔型	I	A 1		
11	陝西	蔚県	四十里坡	仰韶文化期	有孔型	I	A 1		『考古与文物』1982年第4期

客省庄二期文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	陝西	商県	紫荊	客省庄二期文化期	有孔型				『考古与文物』1981年第3期
2	陝西	綏徳	小官道	客省庄二期文化期	有孔型	I	A 1	把手２	『考古与文物』1983年第5期
3	陝西	臨潼	康家	客省庄二期文化期	有孔型	I	A 1		『考古与文物』1992年第3期
				客省庄二期文化期	有孔型	I	A 1		『史前考古』1985年第1期
4	陝西	長武	将台山	客省庄二期文化期	有孔型	II	A 1		『考古』1992年第12期
5	陝西	麟游	蔡家河	客省庄二期文化期	有孔型	II	A 1	鼎足共伴	『考古与文物』2000年第6期
6	陝西	長安	客省庄	客省庄二期文化期	有孔型	II	A		『灃西発掘報告』1963年

４．漢水上中流域

李家村文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	陝西	西郷	阮家壩	李家村文化期	有孔型	I			『陝南考古報告』1994年

仰韶文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	陝西	安康	花園柏樹嶺	仰韶文化期	有孔型	I			『考古与文物』1980年第2期
2	陝西	西郷	阮家壩	仰韶文化期	有孔型	I	B 2		『陝南考古報告』1994年
3	陝西	南鄭	龍崗寺	仰韶文化期	有孔型	I			『龍崗寺』1990年
4	河南	淅川	下王崗	仰韶文化期	有孔型	I	B 2	罐共伴	『淅川下王崗』1989年
					有孔型	I	B 1	罐共伴	

屈家嶺文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	河南	淅川	下王崗	屈家嶺文化期	有孔型	I	D 2		『淅川下王崗』1989年

2	湖北	鄖県	青龍泉	屈家嶺文化期	有孔型	Ⅰ	D２	圏足	『青龍泉与大寺』1991年
					有孔型	Ⅰ	G２		

石家河文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	河南	淅川	下王崗	龍山文化期	有孔型	Ⅱ	A１	環把手２	『淅川下王崗』1989年
					有孔型	Ⅱ	A１	環把手２	
					筒型	－	－	把手２	
					筒型	－	－		
2	湖北	鄖県	青龍泉	石家河文化期	有孔型	Ⅰ	D２	圏足	『青龍泉与大寺』1991年
					有孔型	Ⅰ	H'	圏足	

５．長江下流域

馬家浜文化併行

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	江蘇	常州	圩墩	馬家浜文化期	有孔型	Ⅰ	H？	環把手２	『東南文化』1995年第4期
2	江蘇	毘山	綽墩	馬家浜文化期	有孔型	Ⅰ	B１		『東南文化』2000年第1期
3	浙江	粛山	跨湖橋	馬家浜文化期併行	有孔型	Ⅰ	A		『浙江省文物考古研究所学刊』1997年
4	浙江	余姚	河姆渡	河姆渡三層	有孔型	Ⅰ	A１	耳	『考古学報』1978年第1期

崧沢文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	安徽	肥西	古便	大汶口文化期併行	不明				『考古』1985年第7期
2	江蘇	常州	圩墩	崧沢文化期	有孔型	Ⅰ	B２		『考古』1978年第4期
				崧沢文化期	有孔型	Ⅰ	A１		『東南文化』2000年第1期
					有孔型	Ⅰ	H	把手4	
					有孔型	Ⅰ	B２		
3	江蘇	武進	烏墩	崧沢文化期	有孔型	Ⅰ	B１		『東南文化』1994年増刊
4	江蘇	丹陽	三城巷	崧沢文化中期	有孔型	Ⅰ	Ⅰ	把手２	『東南文化』1994年増刊
5	江蘇	丹陽	王家山	崧沢文化期	有孔型	Ⅰ	D１	把手２	『考古』1985年第5期
6	江蘇	呉県	草鞋山	崧沢文化期	筒型	－	－	把手２	『文物資料叢刊』3集1980年
7	浙江	余杭	呉家埠	崧沢文化期	筒型	－	－	蓋	『浙江省文物考古研究所学刊』1993年
8	浙江	桐郷	普安橋	崧沢～良渚文化期	有孔型	Ⅰ	H	把手２	『文物』1998年第4期
9	安徽	潜山	薛家崗	薛家崗文化期	有孔型	Ⅰ	C２	圏足	『考古学報』1982年第3期
					筒型	－	－	把手２	

					筒型	－	－	把手２・蓋	
10	安徽	望江	江洋廟	薛家崗文化期併行	筒型	－	－	把手２	『考古学報』1986年第1期
11	湖北	黄梅	陸墩	薛家崗文化期併行	有孔型	Ⅰ	Ａ１	圈足	『考古』1991年第6期
					有孔型	Ⅰ	Ｄ２		
					有孔型	Ⅰ	Ｄ２	圈足	
12	湖北	黄梅	窰墩	薛家崗文化期	有孔型	Ⅰ	Ａ１		『考古』1994年第6期

良渚文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	安徽	肥西	古便	良渚文化期併行	不明				『考古』1985年第7期
2	浙江	余杭	反山	良渚文化期	有孔型	Ⅰ	Ｈ	把手２	『文物』198198年第1期
3	浙江	余杭	呉家埠	良渚文化期	有孔型	Ⅰ	Ａ１	把手２	『浙江省文物考古研究所学刊』1993年
4	浙江	余杭	匯観山	良渚文化期	有孔型	Ⅰ	Ｄ２	把手２	『浙江省文物考古研究所学刊』1997年
5	浙江	余姚	河姆渡	河姆渡一層	有孔型	Ⅰ	Ａ１	環把手２	『考古学報』1978年第1期

６．長江中流域

大溪文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	湖北	黄岡	螺蛳山	大溪文化後期	有孔型	Ⅰ	Ａ１	圈足	『考古学報』1987年第3期
2	湖南	澧県	三元宮	大溪文化期	有孔型	Ⅰ	Ｂ１？	蓋	『考古学報』1979年第4期
3	湖北	公安	王家崗	大溪文化期	有孔型	Ⅰ	Ｂ１		『考古学報』1984年第2期
4	湖北	枝江	関廟山	大溪文化期	有孔型	Ⅰ	Ｄ２	圈足	『考古』1983年第2期
5	湖北	宜昌	中堡島	大溪文化期	有孔型	Ⅰ	Ｄ２	圈足	『考古学報』1987年第1期
6	湖南	安郷	劃城崗	大溪文化期	有孔型	Ⅲ	－		『考古学報』1983年第4期
7	湖南	華容	劉卜台	大溪文化期	有孔型	Ⅲ	－		『湖南考古輯刊』第5期1989年
8	湖北	江陵	毛家山	大溪文化期？	有孔型	Ⅲ	－		『考古』1977年第3期
9	湖南	湘潭	堆子嶺	大溪文化期	有孔型	Ⅰ	Ａ		『考古』2000年第1期

屈家嶺文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	湖南	安郷	劃城崗	屈家嶺文化前期	有孔型	Ⅰ	Ｂ１	圈足	『考古学報』1983年第4期
					有孔型	Ⅰ	Ｂ１	圈足	
					有孔型	Ⅰ	Ｃ２	圈足	
					有孔型	Ⅰ	異形		
2	湖南	臨澧	平陸	屈家嶺文化期	有孔型	Ⅰ	Ｄ２	圈足	『考古』1988年第3期

3	湖南	澧県	夢溪三元宮	屈家嶺文化期	有孔型	I		圈足	『考古学報』1979年第4期
					有孔型	I		圈足・蓋	
4	湖南	澧県	夢溪家港	屈家嶺文化期	有孔型	I	B 1	蓋	『文物』1972年第2期
5	湖北	安陸	余家崗	屈家嶺文化期	有孔型	I	A 1	圈足	『考古』1986年第7期
6	湖北	枝江	関廟山	屈家嶺文化期	有孔型	I	A 2	圈足	『考古』1983年第2期
					有孔型	I	D 2	圈足	
7	湖北	京山	屈家嶺	屈家嶺文化前期	有孔型	I	A	圈足	『考古学報』1992年第1期
				屈家嶺文化期	有孔型	I	A 1	圈足	『京山屈家嶺』1965年
					有孔型	I	D 2	圈足・蓋	
					有孔型	I	HorH'	圈足	
8	湖北	荊門	三百銭	屈家嶺文化期	有孔型	I	C 2	圈足	『考古』1992年第6期
9	湖北	宜昌	中堡島	屈家嶺文化期	有孔型	I	D 2	圈足	『考古学報』1987年第1期
10	湖北	天門	肖家屋脊	屈家嶺文化期	有孔型	I		圈足	『肖家屋脊』1999年
				屈家嶺文化期	有孔型	I	D	圈足	
					有孔型	I	D 2	圈足	
					有孔型	I	G 1	圈足	
11	湖北	荊州	陰湘城	屈家嶺文化期	有孔型	I	D 1		『考古』1998年第1期
12	湖北	新洲	香炉山南区	屈家嶺文化期	有孔型	I	H'		『江漢考古』1993年第1期

石家河文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
1	湖南	湘郷	岱子坪	石家河文化期	有孔型	I	H'		『湖南考古輯刊』第2期1984年
					有孔型	I	D 2	圈足	
2	湖南	臨澧	太山廟	石家河文化期	有孔型	I	D 2	圈足	『考古』1989年第10期
3	湖南	華容	車輪山	石家河文化期？	有孔型	II			『湖南考古輯刊』第2期1984年
					筒型	—	—		
4	湖北	麻城	栗山崗	石家河文化前期	有孔型	I	D 1	圈足	『考古学報』1990年第4期
					有孔型	I	D 2		
					有孔型	I		把手	
				石家河文化後期	有孔型	I	C 2		
5	湖北	安郷	劃城崗	石家河文化期	有孔型	I	D 2		『考古学報』1983年第4期
6	湖北	大悟	土城	石家河文化期	有孔型	I			『考古』1986年第7期
7	湖北	随州	西花園	石家河文化期	有孔型	I	D 2	圈足	『江漢考古』1991年第2期
					有孔型	I			
8	湖北	宜都	石板巷子	石家河文化期	有孔型			口縁部のみ残存	『考古』1985年第11期
9	湖北	羅田	廟山崗	石家河文化期	有孔型	I	D 2	圈足	『考古』1994年第9期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	位置	形態	備考	文献
					有孔型	I	A 1		
10	湖北	天門	羅家柏嶺	石家河文化期	有孔型	I	H'	圏足	『考古学報』1994年第2期
11	湖北	天門	譚家嶺	石家河文化期	有孔型	I	A 2	圏足	『文物』1990年第8期
12	湖北	天門	鄧家湾	石家河文化期	有孔型	I	A 1	圏足・突帯	『文物』1990年第8期
13	湖北	天門	肖家屋脊	石家河文化期	有孔型	I	D 1	圏足	『文物』1990年第8期
				石家河文化前期	有孔型	I	D 2	圏足	『肖家屋脊』1999年
					有孔型	I	G 1	圏足	
					筒型	—	—	把手	
				石家河文化後期	筒型	—	—		
14	湖北	宜昌	白廟	石家河文化期	筒型	—	—		『三峡考古之発現』1998年

二. 甗出土遺跡一覧

1. 長江下流域

崧沢文化期併行

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	煮沸部	スノコ支え	備考	文献
1	江蘇	張家港	徐家湾	崧沢文化期	一体型	—			『考古学報』1995年第3期
2	上海	青浦	金山墳	崧沢文化期末	一体型	—			『考古』1989年第7期
3	上海	青浦	崧沢	崧沢文化期	一体型	—			『考古』1992年第3期
				崧沢文化期	一体型	—			『崧沢』1987年
4	上海	青浦	福泉山	崧沢文化期	一体型	—			『考古学報』1990年第3期
				崧沢文化期	一体型	—			『福泉山』2000年
5	上海	松江	湯廟村	崧沢文化期	一体型	—		蓋付	『考古』1985年第7期
6	浙江	嘉興	双橋	崧沢文化期	一体型	—			『浙江省文物考古研究所学刊』1993年
7	浙江	嘉興	大汶	崧沢文化期	一体型	—			『文物』1991年第7期

良渚文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	煮沸部	スノコ支え	備考	文献
1	江蘇	句容	城頭山	良渚文化期	結合型	実足		蓋付	『考古』1985年第4期
2	江蘇	丹陽	王家山	良渚前期	一体型	—			『考古』1985年第5期
3	江蘇	丹陽	墩頭山	崧沢後期～良渚文化前期	一体型	—			『考古』1993年第8期
4	江蘇	丹陽	西溝居	良渚文化期	結合型	実足			『考古』1994年第5期

5	江蘇	武進	寺墩	良渚文化期	一体型	－			『東方文明之光』1996年
6	江蘇	呉江	龍南	崧沢～良渚文化期	一体型	－			『東南文化』1999年第3期
				良渚文化期	一体型	－		蓋付	
7	江蘇	毘山	綽墩	良渚文化期	一体型	－			『東南文化』2000年第1期
				良渚文化期	一体型	－		蓋付	『文物』1984年第2期
8	江蘇	毘山	少卿山	良渚文化期	一体型	－			『考古』2000年第4期
9	江蘇	蘇州	草鞋山	良渚文化期	一体型	－		蓋付	『東方文明之光』1996年
10	上海	青浦	福泉山	良渚文化期	一体型	－		蓋付	『福泉山』2000年
11	上海	金山	亭林	良渚文化期	一体型	－			『考古』2002年第10期
12	浙江	海寧	達沢廟	良渚文化期	一体型	－			『浙江省文物考古研究所学刊』1997年
13	浙江	嘉興	大墳	良渚文化期	一体型	－	孔有り	蓋付	『文物』1991年第7期
14	浙江	嘉興	雀幕橋	良渚文化期	一体型	－			『浙江省文物考古研究所学刊』1993年
15	浙江	杭県	良渚	良渚文化期	一体型	－			『東方文明之光』1996年

2．黄河下流域

大汶口文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	煮沸部	スノコ支え	備考	文献
1	山東	栖霞	楊家圈	大汶口文化後期	一体型	－	有		『史前研究』1984年第3期
2	山東	莱陽	于家店	大汶口文化後期	一体型	－	有		『膠東考古』2000年
3	山東	棗庄	建新	大汶口文化期	結合型	実足	有円孔		『棗庄建新』1996年
					一体型	－			
4	山東	勝州	西康留	大汶口文化期	結合型	不明	有		『考古』1995年第3期
5	山東	勝州	西公橋	大汶口文化中後期？	結合型	実足			『考古』2000年第10期
6	安徽	蒙城	尉遅寺	大汶口文化期	結合型	実足	無	内壁黒色	『蒙城尉遅寺』2001年

山東龍山文化期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	煮沸部	スノコ支え	備考	文献
1	山東	栖霞	楊家圈	山東龍山文化期	結合型	袋足	不明	水垢	『膠東考古』2000年
2	山東	平度	東岳石村	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1962年第10期
3	山東	莱陽	于家店	山東龍山文化期	結合型	袋足	不明		『膠東考古』2000年
4	山東	濰県	獅子行	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1984年第8期
5	山東	濰県	魯家口	山東龍山文化期	結合型	実足	無	把手	『考古学報』1985年第3期
6	山東	濰県	不明	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1980年第1期
7	山東	濰坊	姚官庄	山東龍山文化期	結合型				『考古』1963年第7期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	煮沸部	スノコ支え	備考	文献
				山東龍山文化期	結合型	実足	無		『文物資料叢刊』第5集1981年
8	山東	濰坊	范家庄	山東龍山文化期	結合型	実足	無		『考古』1989年第9期
9	山東	臨朐	西朱封	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『海岱考古』1989年
10	山東	寿光	火山埠	山東龍山文化期	結合型	実足	無		『海岱考古』1989年
					結合型	袋足	無		
11	山東	青州(益都)	鳳凰台	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『海岱考古』1989年
					結合型	実足	無		
12	山東	青州(益都)	桃園	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『海岱考古』1989年
13	山東	昌楽	各遺跡	山東龍山文化期	結合型				『考古』1987年第7期
14	山東	昌楽	魏家庄	山東龍山文化期	結合型	不明	無		『考古』1987年第7期
15	山東	昌楽	鄒家庄	山東龍山文化期	結合型	不明	無	把手	『考古』1987年第7期
					結合型	実足	無		
16	山東	広饒	西辛	山東龍山文化期	結合型	不明	不明		『考古』1985年第9期
17	山東	鄒平	丁公	山東龍山文化期	結合型	実足	無	把手	『考古』1992年第6期
					結合型	不明	無	把手	
18	山東	鄒平	蘆泉	山東龍山文化期	結合型				『華夏考古』1994年第3期
19	山東	鄒平	里六田？	山東龍山文化期	結合型				『華夏考古』1994年第3期
20	山東	淄博	晏子窩	山東龍山文化期	結合型	実足	無		『海岱考古』1989年
21	山東	臨淄	桐林田旺	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『臨淄文物資料』2002年
22	山東	済南	黄山店	山東龍山文化期	結合型				『華夏考古』2000年第2年
23	山東	済南	腊山	山東龍山文化期	結合型				『華夏考古』2000年第2期
24	山東	章丘	西河1997	山東龍山文化期	結合型		無		『考古』2000年第10期
25	山東	章丘	摩天嶺	山東龍山文化期	結合型	実足	無		『海岱考古』1989年
26	山東	茌平	尚庄	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古学報』1985年第4期
27	山東	茌平	南陳庄	山東龍山文化期	結合型	袋足	無	把手	『考古』1985年第4期
28	山東	陽谷	景陽崗	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1997年第5期
29	山東	菏沢	安邱個堆	山東龍山文化期	結合型	不明	不明		『文物』1987年第11期
					結合型	袋足	有		
30	山東	曹県	辛冢集	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1980年第3期
31	山東	胶県	三里河	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『胶県三里河』1988年
32	山東	諸城	呈子	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古学報』1980年第3期
33	山東	諸城	王家柏戈庄	山東龍山文化期	結合型	袋足	不明		『海岱考古』1989年
34	山東	諸城	石河頭	山東龍山文化期	結合型	袋足	不明		『海岱考古』1989年
35	山東	諸城	凉台	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『海岱考古』1989年

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	煮沸部	スノコ支え	備考	文献
36	山東	日照	東海峪	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1886年第8期
37	山東	日照	両城鎮	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1986年第8期
38	山東	日照	戔王城	山東龍山文化期	結合型	不明	無		『考古』1986年第8期
39	山東	呂県	杭頭	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1988年第12期
40	山東	呂南	化家村	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1989年第5期
41	山東	兗州	西呉寺	山東龍山文化期	結合型	袋足	無	把手	『兗州西呉寺』1990年
42	山東	曲阜	西夏侯	山東龍山文化期	結合型	不明	不明		『考古』1986年第3期
43	山東	済寧	程子崖	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『文物』1991年第7期
44	山東	鄒県	野店	山東龍山文化期	結合型	不明	無		『鄒県野店』1985年
45	山東	泗水	尹家城	山東龍山文化期	結合型	袋足	無	把手	『泗水尹家城』1990年
					結合型	実足	無		
				山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1985年第7期
46	山東	泗水	天斉廟	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『文物』1994年第12期
47	山東	臨沂	土城子	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1961年第11期
48	山東	臨沂	前城子	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1992年第10期
49	山東	棗庄	晒米城	山東龍山文化期	結合型	不明	不明		『考古』1984年第4期
50	山東	棗庄	建新	山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『棗庄建新』1996年
51	安徽	蒙城	尉遲寺	山東龍山文化期	結合型	不明	無		『考古』1994年第1期
				山東龍山文化期	結合型	袋足	無		『蒙城尉遲寺』2001年
52	安徽	渦陽	将固堆	山東龍山文化期	結合型	不明	無		『考古』1993年第11期

3．黄河中流域

龍山文化期併行

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	煮沸部	スノコ支え	備考	文献
1	河北	永年	楡林	龍山文化期	結合型	袋足	無		『河北考古文集』1998年
2	河北	邯鄲	潤溝村	龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1961年第4期
3	河北	磁県	下潘汪	龍山文化期	結合型	袋足	有		『考古学報』1975年第1期
4	河北	崇礼	石嘴子	龍山文化期	結合型	不明	不明	把手	『考古』1992年第2期
5	河北	内邱	小駅頭	龍山文化期	結合型	袋足	無		『河北考古文集』1998年
6	河北	滄県	陳圩	龍山文化期	結合型	不明	無		『河北考古文集』1998年
7	河北	容城	午方	龍山文化期	結合型	不明	有		『考古学集刊』1987年5輯
8	河北	来水	北封村	龍山文化期	結合型	不明	不明		『考古』1992年第10期
9	河南	安陽	後崗	龍山文化期	結合型	袋足	無	煤付着	『考古学報』1985年第1期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	煮沸部	スノコ支え	備考	文献
								腐朽粟有り	
10	河南	安陽	大寒村	龍山文化期	結合型				『考古学報』1990年第1期
11	河南	湯陰	白営	龍山文化期	結合型	袋足	無	総21点	『考古学集刊』1983年3輯
12	河南	濮陽	程庄	龍山文化期	結合型	袋足	無	器壁乳白色か淡黄色の水垢	『考古』1995年第5期
13	河南	淇県	王庄	龍山文化期	結合型	袋足	無	足部すす付着。袋足内白色水垢	『考古』1999年第5期
14	河南	永城	王油坊	龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1978年第1期
				龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古学集刊』1987年5輯
15	河南	永城	黒堌堆	龍山文化期	結合型	不明	無		『考古』1981年第5期
16	河南	杞県	鹿台崗	龍山文化期	結合型	不明	不明		『考古』1994年第8期
				龍山文化期	結合型	袋足	無		『豫東杞県発掘報告』2000年
17	河南	鹿邑	欒台	龍山文化期	結合型	袋足	無		『華夏』1989年1期
18	河南	商丘	塢墻	龍山文化期	結合型	不明	無	くびれ部外側に突帯。	『考古』1983年第2期
19	河南	淮陽	平糧台	龍山文化期	結合型	袋足	無		『文物』1983年第3期
20	河南	輝県	孟庄	龍山文化期	結合型	袋足	無	足部すす付着。袋足内白色水垢	『考古』2000年第3期
21	河南	輝県	豊城	龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1989年第3期
22	河南	新郷	洛絲潭	龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古』1985年第2期
23	河南	武陟	大司馬	龍山文化期	結合型	不明	不明		『考古』1994年第4期
24	河南	済源	苗店	龍山文化期	結合型	不明	有小		『考古与文物』1990年第6期
					結合型	袋足	無		
25	河南	新安	冢子坪	龍山文化期	結合型	袋足	不明		『三峡考古之発現』1998年
26	河南	新安	西沃	龍山文化期	結合型	不明	不明	把手	『三峡考古之発現』1998年
27	河南	滎陽	点軍台	龍山文化期	結合型	袋足	無		『中原文物』1982年第4期
28	河南	滎陽	河王	龍山文化期	結合型				『考古』1961年第2期
29	河南	鄭州	田王村	龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古学報』1958年第3期
30	河南	鄭州	馬庄	龍山文化期	結合型	袋足	有		『中原文物』1982年第4期
31	河南	鄭州	閻庄	龍山文化期	結合型	袋足	無		『中原文物』1982年第3期
32	河南	鄭州	大河村	龍山文化期	結合型	袋足			『考古学報』1979年第3期
33	河南	密県	新砦	龍山文化期	結合型				『考古』1981年第5期
34	河南	臨汝	煤山	龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古学報』1982年第4期
35	江蘇	興化	南蕩	龍山文化期	結合型	袋足	無		『文物』1995年第4期
36	江蘇	高郵	周邨墩	龍山文化期	結合型	袋足	無		『考古学報』1997年第4期
37	山西	汾陽	杏花村	客省庄二期文化期併行	結合型	不明	有孔	把手２	『晋中考古』1998年
					結合型	袋足	有		
38	山西	汾陽	孝義県など	龍山文化期	結合型	袋足	無		『文物』1989年第4期

番号	省名	県名	遺跡名	時期	分類	煮沸部	スノコ支え	備考	文献
39	山西	汾陽	峪道河	龍山文化期	結合型	不明	有	把手２	『考古』1983年第11期
40	山西	汾陽	宏寺	龍山文化期	結合型	袋足	有		
41	陝西	府谷	鄭剛峁	龍山文化期？	結合型	不明	不明		『考古与文物』2000年第6期
42	山西	天峰坪鎮	欧泥咀	龍山文化期併行	結合型	不明	有		『考古』1994年第12期
43	山西	五台	陽白	龍山文化期併行	結合型	鬲袋足	無	把手	『考古』1997年第4期
44	山西	太原	光社	龍山文化期併行	結合型	不明	有		『文物』1962年第4.5期
45	山西	定襄	西社村	龍山文化期併行	結合型	不明	有		『考古』1987年第11期
46	山西	離石	番家溝	客省庄二期文化期併行	結合型	袋足	有	把手２	『晋中考古』1998年
47	山西	忻州	游邀	龍山文化後期併行	結合型	袋足	有	把手	『考古』1989年第4期
48	山西	長治	小神	龍山文化期	結合型	袋足	無	把手２	『考古学報』1996年第1期
49	山西	翼城	感軍	龍山文化期	結合型				『考古』1980年第3期
50	山西	翼城	南石	龍山文化期	結合型	不明	有孔	把手	『三晋考古（二）』1996年
51	山西	垣曲	龍王崖	龍山文化期	結合型	不明	有		『考古』1985年第10期
52	山西	曲沃	東許	龍山文化期	結合型	袋足	有		『三晋考古（二）』1996年
53	山西	洪洞	侯村	龍山文化期	結合型	不明	有刻目		『三晋考古（二）』1996年
					結合型	不明	有孔	把手２	
					結合型	不明	有	把手２	
					結合型	袋足	有	把手２	
54	山西	夏県	東下憑	龍山文化後期	結合型	袋足	有	くびれ部ではなく、胴部に突帯がある。	『考古学報』1983年第1期
55	山西	襄汾	陶寺	龍山文化期	結合型	袋足	不明		『考古』1980年第1期